

岡ノ峯遺跡第2・3次発掘調査報告書

岡，峯

(Okanomine Site)

1985年3月

長野県下高井郡
野沢温泉村教育委員会

岡ノ峯遺跡第2・3次発掘調査報告書

岡ノ峯

(Okanomine Site)

1985年3月

長野県下高井郡
野沢温泉村教育委員会



石棺墓址群



8号石棺墓址



土製耳飾(8号石棺墓址内出土)

アサヒグラフ編集部提供



土製耳飾(C地区出土)

アサヒグラフ編集部提供

序

岡ノ峰遺跡は、千曲川にそそぐ湯沢川と赤滻川とに狭まれた丘状地で、古くより遺物が発見されており本村の遺跡中最も有名であります。ほとんどが水田となっておりその一部が往時の地形を残しておりそれが畑であったため比較的搅乱されていないとの推定のもとに、野沢温泉村史編さん事業の一貫として、昭和41年に発掘し縄文中期の堅穴式住居跡や土・石器類が出土しております。昭和50年にその地へ土地所有者のご理解を頂いて（土地賃貸借契約）現在の復原住居（坂詰秀一先生の指導）が完成されております。

岡ノ峰を含むこの地一帯は西に傾斜した扇状地であり、然も野沢地区の穀倉地帯でもあります。古くからの小さな、不定形な水田であるために以前より基盤整備の計画がなされておりました。

昭和56年から年次計画で下方から、県営は場整備が初まったのを機会に、村の埋蔵文化財指定である岡ノ峰遺跡を、昭和58年、59年の2ヶ年にわたり、関係者と協議の結果、施工前に記録保存のために緊急発掘調査を行うことになり、事業主体である北信土地改良事務所と委託契約により野沢温泉村教育委員会が実施したものであります。

調査は、日本考古学協会員の金井汲次先生を団長に、調査主任塙原長則、調査員田川幸生、池田実男の各氏にお願いするとともに、村の歴史研究家上野正氏、奈良大学の学生及び地域の多数の皆様方のご協力を頂いて実施しました。

今回の調査により石棺墓10基や土製滑車形耳飾等多くの土・石器類を発掘し、野沢地区の縄文時代からの生活や文化を解明するうえに極めて貴重な資料を得ることができました。

発掘した石棺墓のうち3基を復元、2基は復元住居の隣りに、1基は公民館のロビーに、他の出土品とともに展示し公開しておりますのでごらんください。

調査は2ヶ年にわたり、しかも炎熱下の調査になりましたが、ご協力くださった多くの方々に心から感謝を申し上げるとともに、このような立派な報告書を作成してくださった調査団の先生方に厚くお礼を申し上げますとともに、考古学界に大きく寄与することをご期待いたします。

昭和60年3月

野沢温泉村教育委員会

教育長 井川 英雄

本文目次

序	
第1章はじめに	1
第1節発掘調査に至る経過	1
第2節調査団の編成	1
第3節発掘調査の経過	3
第2章遺跡の立地と環境	8
第1節自然・環境	8
第2節歴史的背景と環境	9
第3章第2次(昭和58年)発掘調査	12
第1節遺構	12
1 土壙群	12
2 A地区の遺構	17
3 足跡状遺構	23
第2節遺物	24
1 土器	24
2 石器	34
第3節むすび	36
第4章第3次(昭和59年)発掘調査	37
第1節A地区的調査	37
1 調査の概要	37
2 遺構	38
3 遺物	41
第2節B地区	45
1 調査の概要	45
2 遺構	45
(1) 石棺墓址群	45

3 遺 物	54
4 埋 蔽	55
5 土 墳	56
第3節 C地区	57
1 調査の概要	57
2 遺 構	57
3 遺 物	60
第4節 E地区	62
1 調査の概要	62
2 遺 構	62
3 遺 物	62
第5節 D・F地区	64
1 D地区	64
2 F地区	64
第6節 土器・土製品	65
1 土 器	65
2 土製品	182
(1) 土製耳飾・耳栓	182
(2) 土偶・スタンプ状土製品	185
第7節 石棺墓址の復原と保存	193
第8節 むすび	194

表 目 次

第1表 周辺遺跡表	10
第2表 石器・石製品表	61
第3表 岡ノ峰遺跡の土器編年	81

挿図目次

- | | |
|----------------|-------------------|
| 第1図 復原住居 | 第17図 炉址遺構 |
| 第2図 岡ノ峰周辺遺跡分布図 | 第18図 玉類・石器実測図 |
| 第3図 第3次発掘調査地全景 | 第19図 埋甕 |
| 第4図 土塙群 | 第20図 石棺墓址群全体図 |
| 第5図 土塙群実測図 | 第21図 石棺墓址1・2号 |
| 第6図 土塙実測図 | 第22図 C地区図 |
| 第7図 7号土壤 | 第23図 E地区図 |
| 第8図の1 A地点調査図 | 第24図 加曾利B式土器図 |
| 〃 2 B地点調査図 | 第25図 " |
| 〃 3 " | 第26図 大洞A式土器図 |
| 〃 C地点調査図 | 第27図 土器拓影図・土器写真 |
| 第9図 足跡実測図 | 第28図 埋甕実測図 |
| 第10図 復原土器 | 第29図 土器底部拓影図 |
| 第11図 土器拓影図 | 第30図 土器(加曾利I式)実測図 |
| 第12図 石器実測図 | 第31図 須恵器拓影図 |
| 第13図 第2次調査図 | 第32図 土製耳栓図 |
| 第14図 第3次調査地全景 | 第33図 土製耳飾図 |
| 第15図 A地区図 | 第34図 土偶片実測図 |
| 第16図 立石状遺構 | 第35図 石棺墓復原 |

図版目次

- | | |
|--------------|------------------|
| 図版一 1 立石状遺構 | 2 6・9号 " |
| 2 炉址遺構 | 図版五 1 7号 " |
| 図版二 1 埋甕 | 2 8号 " |
| 2 1・2号石棺墓址 | 図版六 1 集石遺構(C地区) |
| 図版三 1 3・7号 " | 図版七 1 石築 |
| 2 4号 " | 図版八 1 深鉢・浅鉢・注口土器 |
| 図版四 1 5号 " | |

第1章 はじめに

第1節 発掘調査に至る経過

温泉とスキービー観光の一方で、小規模経営と家族労働に支えられ細々と受け継がれてきた農業は基盤整備の立ち遅れが目立っていた。数年前、村内的一部地区で基盤整備事業が行なわれ、その有利性、高率性を目のあたりに見た村民は、県営ほ場整備事業に同意した。

野沢温泉地区県営ほ場整備事業は、昭和56年から始まり総事業計画面積94haに対し昭和59年度までに約32haが完了することになる。

昭和58・59年度対象地域の中央に村の文化財として指定された復原住居を含む岡ノ峰遺跡があり、この付近の小川や畦畔、水田から古くより土器や石器が表面採集されており、村内でも重要な遺跡として保護してきた。文化財保護の立場から発掘調査による記録保存の必要性が生まれた。調査に至る概略は次のとおりである。

- 昭和57年8月 北信土地改良事務所から長野県教育委員会へ遺跡保護について協議
昭和57年8月26日 事業主体者の北信土地改良事務所、県教育委員会文化課、野沢温泉村役場農林課、野沢温泉村教育委員会の関係者により現地の視察と協議を行い、昭和58年度ほ場整備事業に先立ち、1,400m²以上を発掘して記録保存することに決定した。
昭和58年2月 北信土地改良事務所の事業年度割の都合から、発掘調査区域が2ヶ年に亘るため継続事業とし昭和58・59年度それぞれ700m²以上を調査することに協議決定した。
昭和58年4月15日 北信土地改良事務所から発掘調査を受託した村教育委員会は、第二次岡ノ峰遺跡発掘調査団を組織して発掘調査事業を行なった。
昭和58年10月20日 昭和59年度予定区域について前述の関係者で現地において協議を行う。
昭和59年5月14日 北信土地改良事務所から昭和59年度事業の受託をし第三次発掘調査事業を行なった。

この発掘調査は、県営ほ場整備事業に伴うため発掘調査経費の72.5%を事業主体者の北信土地改良事務所が負担し、残る27.5%の内の50%を文化庁、15%を県教委文化課35%を村が負担することで調査と記録保存を実施したが発掘事業の一部と石棺墓移築事業は、村の単独事業となった。

第2節 発掘調査団の編成

調査責任者 井川 英雄 野沢温泉村教育委員会 教育長

調査団長 金井 次次 日本考古学協会会員 長野県文化財保護指導委員

・調査主任 桐原 長則 日本考古学協会員
調査員 田川 幸生〃
〃 池田 実男 中野市文化財保護協力員
調査補助員 上野 正 郷土史研究家
〃 酒井 健次 奈良大学学生
〃 山口 昌直〃
作業員 富井たま・富井村子・富井秀子・富井やへ子・富井つね・河野都子・河野ミエ子・片桐律子・山根かの子・岡口節子・島田智子・河野百合子・富井すみ子・河野とく・市川まさ子・岡口勝子・久保田とめ・加納弘子・片塙重子・片桐まや子・島田君子・島田和衛・鈴木良孝・當田ちよ・塚原十四子・佐藤すい・中村さき・富井百江・竹井洋子・小出たけ子・鈴木といし・望月節子・莉和松代・野崎照代・佐藤範子・南雲めぐ美・久保田弘子・水井ふじ子・河野和子・内田つる・久保田妙子・池田けさ子・森 稲子・森 和・飯塚 市・中村より子・松村栄子・小林節子・河野重子・山室徳子・金崎美千代・上野公子・島田静子・富井いづみ・池田ひさい・田中まさみ・酒井麻由美・塚原美穂子・阿藤仁子・栗原よしみ・松野千枝子



第1図 復原住居

協力者 青木 豊 (国学院大学博物館学芸員)

池田 亮一 (国学院大学大学院修了生)

内川 隆志 (〃 学生)

堀田希一 (アサヒグラフ編集部)

朝日航洋株式会社

事務局 萩原勝義教育次長

島田博文係長

第3節 発掘調査の経過・日誌

岡ノ峰遺跡は古くから遺物の出土・採集することで知られており、昭和41年村史編さん事業の一環として、坂詣秀一（現立正大学教授）氏の調査により住居跡が発掘された事から縄文中・後期の遺跡として位置づけられてきた。しかしこの住居跡が発掘された付近以外は水田であり、かなり搅乱されたことが想像され、遺構検出は相当難しいものとなることが予想された。

第2次調査（昭和58年7月25日—昭和58年8月23日）

7月25日 調査団による現地打合せを行い調査の具体的な進め方について協議する。

調査区分の設定、測量基本線の設定、グリットの設定等について調査団長からお話を聞き、作業を明日から開始することを確認する。

7月26日 調査団長以下調査員・人夫・事務局が参集し調査団の結団式と調査の成功と安全を祈願して礼拝を行う。統いて調査方法の説明をした後、発掘作業を開始する。

まず予定地内の草の刈り払いを行い測量用基本線を設定しグリットの設定を行った。

統いてミニバックホーで耕土を除き1グリットに2～3人の作業員が入り掘り下げていく方法である。以下現地調査について略記する。

7月27日 A地区B～C8から足跡発見、黒曜石片、佐野式土器片出土。

7月28日 B10～G10の拡大掘り下げを行うE11で焼土確認。

7月29日 バックホーによる表土除去に併行して発掘を継続。出土品=キセル、磨製石斧、石鎌

7月30日 昨日のキセルの近くで古銭発見（年代不明）打製石斧1、石鎌2

7月31日 出土した土器の水洗い=雨で現場を休む。

↓

8月1日

8月2日 E11で勾玉出土、近くに土器片群あり。

8月3日 B11～I11を中心掘り下げ拡大を続ける。磨製、打製石斧各1、石鎌1に加えて瓜型文土器片、佐野I式片などを出土する。A21～D23にかけて溝状遺構を確認。B11

の位置測量を行う。

- 8月4日 C12とC13から凹石、D12とF13から石鐵を発掘。平板及びレベル測量を行う。新たにC地区にトレンチを入れる。
- 8月5日 C地区のトレンチを下げていくと、土壤が点在している。
- 8月6日 C地区のグリットを改めて設定し土壤の発掘と測量を行う。土壤が10ヶ程あることを確認する。さらに下げるとき140cmも深くなっている。7号土壤で20cm角位の土器片出土。11号土壤のふちで石やり出土。
- 8月9日 A地区の掘り下げと測量を続ける。溝状造構が3つあり平板測量を行う。
- 8月10日 清掃を行い写真撮影をする。発掘は今日までとし明日から測量を行う。
- 8月11日 平板およびレベルにより、地形、縦横断測量を行う。
- 8月23日 この間15日～19日までおよび22日は、お盆休暇と雨天により現場を休む。
- 9月2日 発掘調査の終了後出土遺物の水洗いと乾燥を行い注記を行った。
- 9月22日
- 2月13日 中野市民プール管理棟において、調査団員の手により整理・分類を行い、土器の接合復元をし石膏埋めを行った。又土器の編年別分類に従って実測を行い拓本をとった。
- 3月15日 石器の実測を行い墨入れを行った。

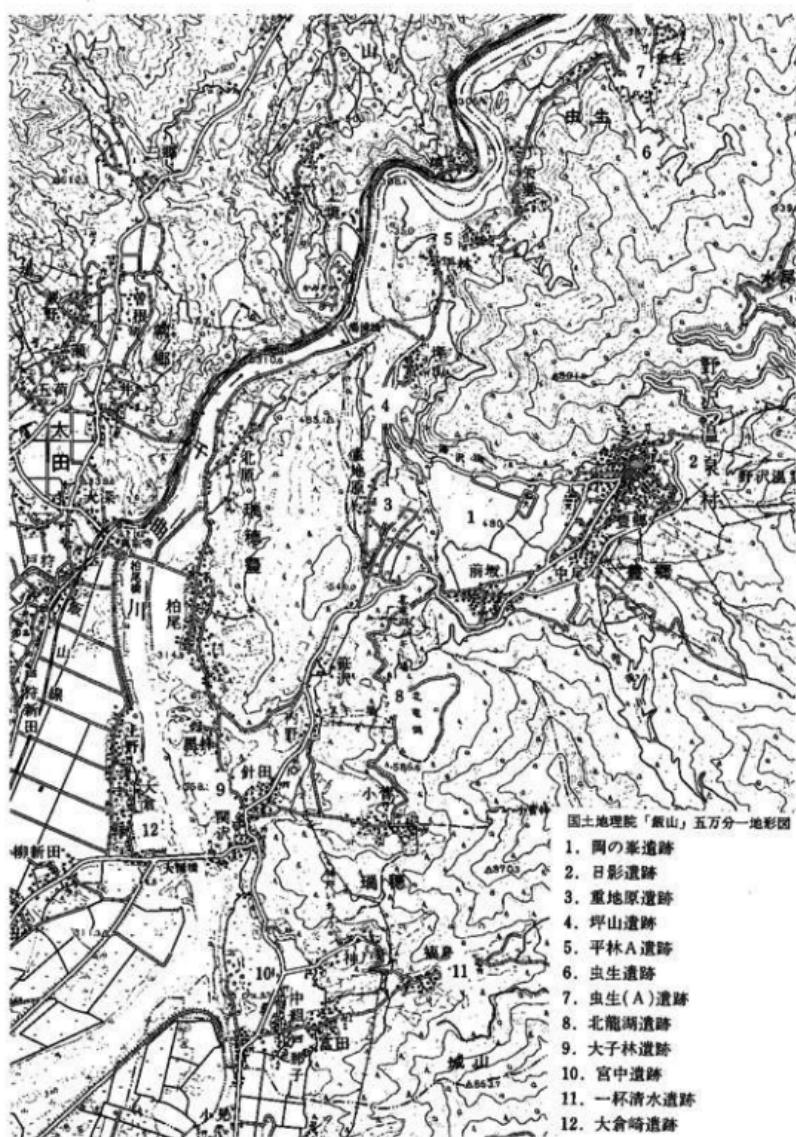
第3次調査（昭和59年5月14日～昭和59年7月12日）

- 5月14日 現場に天幕を張り、発掘資材の搬入等を行い、午後から調査団による発掘調査の打ち合わせを行う。
作業員を多くして短期間で終了できるように手配すること。
地形測量を発掘と併行して行うこと。60年1月中旬に報告書の原稿をまとめる等を決定する。
現場の発掘調査は明日から行うこと等を作業員と連絡をとる。
- 5月15日 団長以下作業員、事務局が参集し調査団の結団式を行い調査の成功と安全を祈願して札拝を行う。今年新たに加わった作業員がいるので調査方法について説明を行う。午前中は天幕の張り増しを行い作業員の休憩所作りと測量基本線の設定・グリットの設定等を行い発掘開始に備え、午後からミニバックホーの表土はぎと手掘り作業を行う。石鐵10・古鏡1・鉄鉗の玉1・鉄器1が出土し、調査団長以下一同二次発掘調査に較べ遺物の数が多いので緊張する。
- 5月16日 作業員をさらに増し基本線上に入れたトレンチを掘り広げる。
- 5月17日 夕方A・B9で敷石群が2ヶ所ある事を発見し敷石住居かとの疑いを持つ。

- 5月18日 午後A・D9で畦畔の中からカメ1ヶがミニバックホーの爪にかかりこわれて発見。A地区で多量の土器と凹石が出土。
- 5月19日 朝、全員で発掘本部と休憩所の天幕を田の中へ移動する。風が強く天幕の中に居れない状態を防止する為。A地区で圓み石の炉跡発掘、他にも炉あとと思えるものあるが特定できず。年代がズレて重複しているのか。東寄りのD地区で掘るが遺物なく中止。
- 5月20日 A地区炉を中心に拡大掘り下げ、B地区墓埴らしきもので敷石群が4ヶ所と新たに圓み石があり石組棺ではないかとの見方が強まり位置測量を始める。C地区で土器が多く出土している。
- 5月21日 新たに今回の発掘では一番北寄りのE地区へ入り掘り始める。BC地区とも拡大と掘り下げを行う。各地区で毎日多数の石鎚が出土している。
- 5月22日 B・F、8で6ヶ目の敷石群が発掘される。
- 5月23日 A・B・C地区で平板による遺物の出土状況をとらえる。7ヶ目の石棺墓（2ヶ目の圓み石群）掘り当てる。
- 5月24日 5号墓の平面測量、縦横20cmピッチに糸をはり、石の配置について実測を行う。
- 5月25日 A・B・C地区的測量と拡張を行う。中学2年生が現地学習にきて発掘の応援をいただく。
- 5月26日 5号墓の測量を終わる。A・B地区的壁を取り初める。
- 5月27日 4号墓の測量を行う。B地区で大正12年の1錢貨とクルミの実各1ヶを出土。
- 5月28日 A地区的土層測量。7号墓掘り下げる圓み石の中の土は別に確保しておく。
- 5月29日 7号の測量初める。8号の掘り下げと測量を行う。
- 5月30日 Bの壁とり拡張。7号墓の土をフルって、玉1ヶを発見。4時すぎ8号墓から耳飾り2ヶが枕石と共に出土。B・C・E地区的測量を引き続き行う。
- 5月31日 7、8号墓の土をふるうが他には遺物はなし。北信土地改の近藤氏現場で出土状況等視察される。発掘期間の延長と経費の増額等について協議を行う。
午後、土地改から文化課と電話による協議の結果、経費の増額もやむを得ないとの連絡がある。
- 6月1日 埋蔵の内部の掘り下げを行う。
- 6月2日 県文化課小林孚指導主事へ電話で出土遺跡等について説明し事業費の増額についてお願いする。しばらくして県の補助等含め1,500,000円の増額を認められる。北信土地改良区、村農林課とも協議の結果、増額分の72.5%の負担を了承される。
- 6月3日 A・B地区平板測量。国学院大学の青木先生と石棺墓について電話で指導を受ける。
- 6月4日 C地区畔とり、B地区平板測量。
- 6月5日 C地区掘り下げ。B地区石棺2号の掘り下げ試し掘りを行うが下部は自然石であった。
県の文化課から、課長・係長が現地視察。

- 6月6日 C地区掘り下げ。土器多数の中に土瓶のふたと思しきもの出土。村内に温泉探査にきていたヘリコプターに空中撮影を依頼しカメラを預ける。
- 6月7日 北信土地改良区から所長、同下水内支所長以下随行員現場視察。
- 6月8日 A地区掘り下げ。C地区測量。
↓
6月10日
- 6月11日 文化庁から岡本調査官が現場視察。村議会総務社会委員会が現地視察。
A地区から原始勾玉1ヶと石錐1ヶ出土。
- 6月12日 C地区から耳栓2ヶ耳飾り完形品1ヶ破片3ヶ出土。
- 6月13日 C地区から耳栓3ヶ耳飾りの完形品（かえるのすかしばり）1ヶと破片1ヶ出土。
- 6月14日 A・C・E地区で掘り下げ及び測量。B地区で甕の断面測量。
- 6月15日 B地区的埋甕付近で底のない甕の5~7cm位のリング状に近いもの出土。
- 6月16日 C地区ではほぼ完形に近い（注口とふちが欠落）注口土甕出土。A地区でヒスイ玉出土。
E地区の掘り下げをしてきたが出土品が少なく赤黒の混り土があり攪乱のあとがあるため今日で中止とする。
- 6月17日 A地区で硬玉1ヶ磨石斧3ヶ、ミニ盃を出土。
- 6月18日 C地区で耳栓2ヶ、A地区で耳栓1ヶ出土。国学院大学の青木先生から院生と学生を派遣する旨の電話連絡あり。
- 6月19日 出土遺物を教委事務局（公民館）へ運搬。この日までに水洗い注記の終った石器類は、打石斧25、磨石斧27、石棒6、石刀1、石皿2、四石30、すり石7であり他に出土土器の袋の中にも多数の石器あり。出土土器は、魚の木箱で約80個である。
- 6月20日 C地区的平板測量を行う。8号棺測量。1、2号棺測量。
↓
6月22日
- 6月23日 6月24日、6月26日は雨で休み。
- 6月25日 C地区的拡張を行う。
- 6月27日 C地区的地形測量と一部拡張を行う。
↓
7月2日 2日には国学院大学の池田院生と内川学生が現場到着し石棺墓の移転復原の下見を行い、資材の調達を行う。
- 7月3日 移転復原のための現場作業。インサルパックの型取りと掘り上げを行い、ファイター1~5で固定する。材料不足で5号7号の2基を掘り上げ、7号を固定した。
- 7月5日 材料の不足分は、後日調達し3基の移転復原を行った。
- 7月12日 この間7月6日と8日は雨で休み、11日までC地区的地形測量を行う。
12日は、現場事務所の撤収、搬出を行い、発掘調査の現場作業を終了する。

(島田博文)



第2図 岡ノ峰および周辺遺跡分布図

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 自然・環境

岡ノ峰遺跡のある野沢温泉村は、長野県の北端に位置し、日本でも有数の、又世界的にも他に類のない豪雪地帯であり温泉とスキーリゾートのある観光地である。

村の北西部は千曲川を境に飯山市と下水内郡栄村に接し、村内で最も標高が低く310mから290mである。東部は明石から高倉山を経て上ノ平にいたる尾根を境に栄村に接している。南部は上ノ平の主峰毛無山(1649.8m)から南西に走る尾根で下高井郡木島平村に接し、西部は小菅山を含む尾根から重地原の西を経て千曲川までを境に飯山市に接している。

東西約8.9km南北約6.7kmで面積58.41km²の91%が山林・原野で占められている。わずかな平坦地は、千曲川の河岸段丘と毛無山麓の通称野沢沖と呼ばれる岡ノ峰遺跡を含む扇状地である。

岡ノ峰遺跡は村の南西部に位置し、毛無山麓の西北方へ傾斜する扇状地の下方中央の湯沢川と赤滝川に挟まれた標高は450mから470mの所で扇状地の中でも一段と高く周囲を見渡せる部分を持つ比較的平坦な所である。陽あたりがよく水量は豊富であり、現在付近一帯は水田耕作地で古くから本村の穀倉地帯だった。(島田博文)



第2図 第3次発掘調査地全景

第2節 歴史的背景と環境

野沢温泉村の現時点における歴史の開幕は、縄文時代早期（約9,000年前）からひととくことができる。数次にわたる発掘調査や、長年に及ぶ表面採取によって、縄文時代の各期にわたっていることが判明している。岡ノ峰遺跡を中心として、村内各所に遺跡が点在し、山紫水明のこの地域は、縄文中・後・晚期の宝庫で、縄文人ののはなばなしの舞台となっていたものごとくである。

次の弥生・古墳時代には空白がみられるが、古代も後半の平安時代に及ぶと、住居址1戸（虫生遺跡）の発掘が知られ岡ノ峰・前坂・平林・七ヶ巻遺跡等からは土師・須恵器、灰釉等の出土品がある。この地域の農耕の開始は古代後半と推定してよいのではないか。

第2図にみると千曲川沿いのいわゆる市川谷に遺跡の分布が濃密で遺物（第1表参照）の量はきわめて多く、内容も多彩である。

以上の考古学関係の概要をのべると、岡ノ峰・日影・坪山遺跡等から出土した遺物を刊本として紹介した最初は「下高井郡誌」である。その後、神田五六氏は「信濃」に“下高井の石器”として岡ノ峰・重地原遺跡等の遺物を報告されている。昭和27年7月末神田五六・永峰光一氏と筆者は「信濃史料・考古篇」の資料採訪を行い、その結果18遺跡を採録した。この頃小野勝年氏は、下高井郡下の遺跡調査を実施し「下高井」にまとめられた。

昭和39・41年には坂詣秀一氏が村史編纂事業の一環として岡ノ峰・二座・日影・平林・蕨平の5遺跡の発掘調査を行い、その成果は「野沢温泉村史」に報告されている。

B地区

C地区



中世には志久見・樺山または春近領志久見郷と称され、中野氏の支配に属していたが、のちに市河氏領になった。市河文書には湯山と呼ばれたこともあったが、「野沢」の初出は武田信玄が、弘治3年(1557)に市川藤若へあてた書状で、上杉谦信が要害の野沢城を攻めあぐねた史実である。昭和58年田川幸生氏と筆者は、これらの城館跡を調査した。

志久見郷は山が深く、古巣山として知られ、松平忠輝領の頃から鷹狩が盛行し、忠輝移封後は天領となって、巣鷹山の本拠は野沢に移った。
(金井汲次)

- | | | |
|-------------------------|------------------------|------------------------|
| 1 下高井郡役所 | 下高井郡誌 大正11年 | 2 神田五六 信濃II-11・III-2・9 |
| 3 信濃史料刊行会 信濃史料考古篇 昭和31年 | 4 長野県教委 下高井 昭和28年 | |
| 5 野沢温泉村 野沢温泉村史 昭和49年 | 6 長野県教委 長野県の中世城館 昭和58年 | |

第1表 周辺遺跡表(長野県史より)

野沢温泉村・坂山市

番号	番号	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物	文獻	備考
1	17	岡の峯# (7)	豊郷・岡の峯	肩尖	(奥)中期堅穴住居2 中期土器、佐野式、石器、打石斧、 磨石、磨石斧、石錐、石神、石剣 (昭39、41年発掘)	Ch66 #126 #148 #149	野沢温泉村 教委 #151
2	18	日影# (6)	"	山腹	(奥)加曾利E式、磨石斧、石匙、石刀 (昭40年発掘)	Ch79 #118	"
	19	中尾南原# (8)	" 中尾	台地	(奥)加曾利B式、磨石斧、石錐		
	20	浜入#	" "	"	(奥)石錐、石錐		
3	21	重地原# (13)	" 重地原	山麓	(奥)加曾利E式、後期土器、石錐、打石 斧、磨石斧、石匙		
4	15	坪山#	坪山	台地	(先)尖頭器1		
5	9	平林A# (4)	平林	台地	(奥)土原式、阿玉台式、曾利I~N式、 石錐、打石斧、磨石、石皿、磨石 斧、石錐、石錐、土偶	Ch127	
	10	" B# (4)	"	"	(平)土師器		
11		平林浦町# (4)	"	"	(奥)磨石斧		
12		西浦#	" 西浦	"	(奥)土器 (昭40年発掘)		
13		古屋敷#	" 古屋敷	"	(奥)打石斧、磨石斧		
14		朝上#	朝上 "	段丘	(奥)中期土器		

6	7	虫生A #	虫生	山麓	(純)磨石斧 (平)堅穴住居1 土師器、須恵器、鐵劍(無股形)1 (昭41年発掘)	Cb124# Fb125#	野沢温泉村 教委
7	8	虫生B遺跡 #	虫生	山麓	(純)山形押型文土器 (昭41年発掘)	Cb124# Fb125#	野沢温泉村 教委
8	77	北龍湖 #	# 小菅	山腹	(先)細石刃核、剝片 (純)燃条文土器、山形・精円押型文土器 加曾利E式、石錐、磨石斧、打石斧、 磨石、石核石器		
9	81	太子林 #	# 太子林	段丘	(先)ナイフ形石器、局部磨製石斧、石刃、 剝片 (純)有尾式、勝坂式、加曾利E式、石錐、 磨石斧、石皿 (昭55年発掘)		飯山市教委
10	83	7020 宮中 #	# 宮中	#	(先)ナイフ形石器、細石刃 (純)中期堅穴住居、後期木石棺状遺構、 配石遺構 勝坂式、加曾利E式、石錐、石核、 打石斧、磨石斧、石錐、磨石、石 核、瑪瑙、鈴、玉 (弥)箱清水式、打石斧、太形蛤刃石斧 (平)土師器、須恵器 (昭54年発掘)	Cb180 Cb183 # 184	飯山市教委
11	92	一升清水 #	#	#	(純)中期土器、石錐		
12	66	大倉崎1#	# 大倉崎	#	(先)石刀 (純)前期堅穴住居2、墓石1 南大原式、上原式、下島式、下島式 直線式、中期切頭型式、加曾利E 式、石錐、四石、石皿、磨石斧、 石點、石錐 (弥)箱清水式 (平)土師器 (昭45・46年発掘) (平)土師器	Cb159	飯山北高校
	67	# II #	# #				

第3章 第2次（昭和58年）発掘調査

第1節 遺構

1 土壙群

C地区において、大小・深浅のある土壙群の検出をみたが、その概要は下記のとおりである。

1号土壙 A～C-11グリッドにおいて検出された、二連状凹地をもつ土壙である。西側に位置するものをA土壙、東側に位置するものをB土壙とした。A土壙は長径約1.25m、短径約0.8mの楕円形で、深さは約1.2mであった。B土壙は直径約0.9mのほぼ円形であり、深さは約1.4mでA土壙よりも深いものであった。

A・B土壙は共に底部がふくらみ、上部がつばむフラスコ状を呈している。地形的には鞍部付近に立地しており、狩猟のための落とし穴ではないかと考えられる。なお土壙内部からは、縄文中期の土器片が数点検出された。

2号土壙 B～C-9～10グリッドにおいて検出された、ほぼ円形の土壙である。直径約2.1m、深さは約0.7mであった。土壙内部からは縄文前期の土器片と人頭大の石、小石が数点検出された。土器片・石は土壙の中心から西へかけて集中していたが性格は不明である。

3号土壙 B-8～9グリッドにおいて検出された、楕円形の土壙である。長径約1m、短径約0.8mで、ややフラスコ状を呈している。土器片は検出されなかったが、土壙内の北半分に握り拳大の石が数点散在していた。性格は不明である。

4号土壙 A-7グリッドにおいて検出された、ほぼ円形の土壙である。直径は約0.8mで、深さは約0.5mであった。土壙中央には、2個の石が重なっていた。上になっている石は30×20cmの長方形の石で、下になっている石は20×10cmのやや丸みを帯びた細長い石であった。土壙内から検出された石としては大きなものであったが、その性格は不明である。

5号土壙 A～B-5～6グリッドにおいて検出された土壙で、直径約2mのほぼ円形を呈している。深さは約0.8mで、土壙の中央部には5個の石積みがあった。5個の石のうち最大のものは、一辺約20cmの四角い石で、最小のものは握り拳大の石であった。

土壙内の東側には長さ約1.6m、幅約0.4mにわたって溝となっていた。また、この溝の北端部には、約40×10cmの細長い落ち込みがあった。さらに西側には、直径30cm前後の落ち込みが3カ所確認された。土器片は検出されず、性格も不明である。

6号土壙 D-4グリッドにおいて検出された、ほぼ楕円形を呈する土壙である。長径約0.9m、短径約0.6m。深さは約0.2mと浅い土壙であった。土壙内の中央部からは、縄文中期（北陸系）の土器片が半個体出土した。その他、土壙内からは握り拳大の石が数点検出された。これらのことから、土壙墓と推定される。

7号土壙 D-4グリッドにおいて検出された土壙で、直径約0.9mの円形土壙と、長さが約0.4m、幅約0.15mの長方形土壙が組み合わされた鍵穴型の土壙である。深さは最深部で約0.8mを測った。円形土壙内からは、縄文中期後半の曾利III式土器が出土した。この土器片は約20×15cmの大きな破片であった。また、土壙内からは、一辺約20cmの四角い石や握り拳大の石が数点検出された。しかし、性格は不明である。

8号土壙 C～D-5～6グリッドより検出された、直径約2.3mと大型の円形土壙である。深さは約1mで、土壙内の中央からやや南寄りの東西一直線上に、5個の石が並んでいた。

東側の石から述べると、一番目の石は一辺約20cmの三角形をしていた。約10cmほどの間隔を置いて二番目の石は約20cmの四角いものであった。それから約20cmの間隔を置いて、長さ約37cm、幅約18cmの細長い石があり、その下に長さ約25cm、幅約15cmの石があった。最後の一一番西側の石は、一辺が約10cmの三角形をした石であったが、前述の重なりあった石と壁の間に挟まれた状態であった。これら5個の石は、初め積み重なった状態であったものが、崩れたのではないかと思われるが性格は不明である。なお、土壙内から土器片は検出されなかった。

9号土壙 9号土壙、10号土壙及び11号土壙は重複しあって、D～F-3～5グリッドにおいて検出された。しかし、どの土壙が初めにつくられたものか断定するに至っていない。9号土壙は、直径約1.8m、深さは約1mである。土壙内の中央に、長さ約60cm、幅約15cm、高さ約30cmの盛り上りがあったが、性格は不明である。土器片はみられず、石も検出されなかった。

10号土壙 直径約2.2m、深さ約0.8mと9号土壙よりも浅いが、大型の円形土壙である。土壙内から土器片、石は検出されず性格は不明である。

11号土壙 長径約1.1m、短径約0.7mのほぼ楕円形を呈する土壙である。土壙内から土器片石は検出されず性格は不明である。

12号土壙 12号土壙及び13号土壙は重複しており、C～D-7～8グリッドにおいて検出された。直径は約1.4mで、深さは約0.8mである。土壙内から、土器片、石は検出されず性格は不明である。なお、底部の東側は約15cmほど壁に掘り込まれている。

13号土壙 D-7～8グリッドにあり、長径約2.7m、短径約2mの楕円形を呈した土壙である。深さは約0.7mで、段状に深くなっている。土壙の中央部には、長さ約1.2m、最大幅約30cmの溝状の落ち込みが確認された。しかし、土器片、石は検出されず性格は不明である。

検出された土壙群のうち、1号土壙はフラスコ状を呈しており、狩猟用の落とし穴とみられる。県内で落とし穴土壙は、数例報告されているが高水地方では初めての検出例である。

1号土壙 の大きさや深さから、どのような種類の獣を狩猟していたのか、またどのように獣を穴へ追い込んだのかという狩猟方法、さらには、集落と狩猟の場としての位置関係、立地条件、他の土壙との位置関係などが問題となる。

昭和58年の発掘調査（第2次調査）では、これらの問題を解明する資料を得ることはできなかつたが、今後の課題として究明されなければならない。1号土壙の他に、3号・4号・7号の各

土壠も、フラスコ状を呈していたが、深さから落とし穴と断定することはできなかった。

9号～13号土壠のように重複している土壠は、形も掘り込みも複雑で、何度も掘り返されたのではないかと思われる。しかしその土壠が先に掘られたのか判定するには至らなかった。

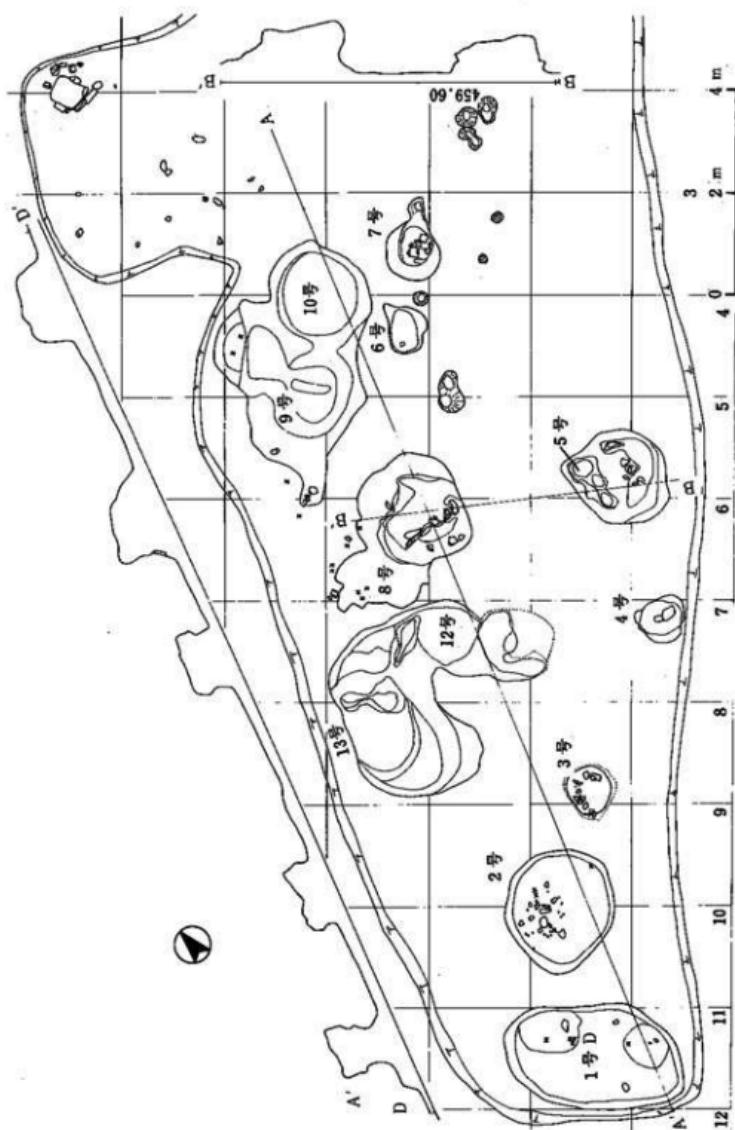
C地区から検出された土壠群は、保存状態が良好で、はっきりと残っていた。しかし遺物は極めて少なく、落とし穴とみられる1号土壠、土壠墓とされる6号土壠を除いて、その性格を断定することができなかつたのは非常に残念であった。

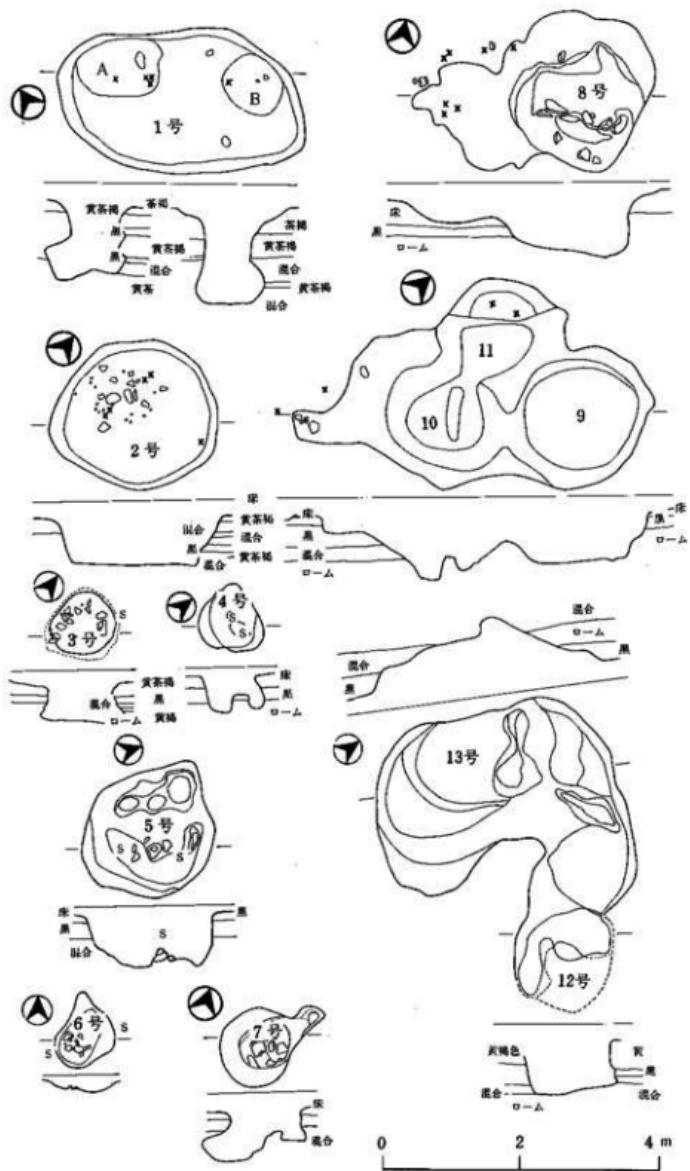
(酒井健次・山口昌直)



第4図 土壠群

第5図 土壌耕深測定図





第6図 土壤実測図



第7図 7号土壤

2 A地区の遺構

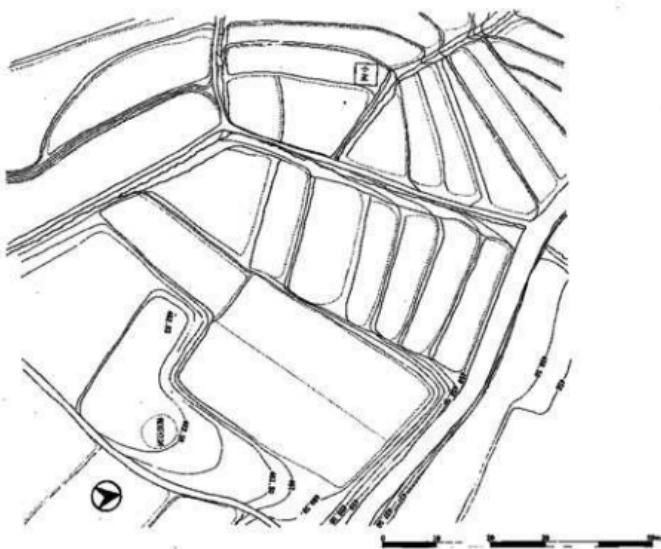
A地区における溝状遺構等は3ヶ所(第8図の1)を検出したが、開田の削平で擾乱されていた。

(1) 1号地区(第8図の2)においては約80m²の範囲に磨滅した縄文土器片が比較的多量に包含し石鏃、黒曜石片等の遺物を検出し、焼土群2ヵ所のほか焼石なども所在した。下層(第8図の2)も同様であったが遺構は明確にすることはできなかった。

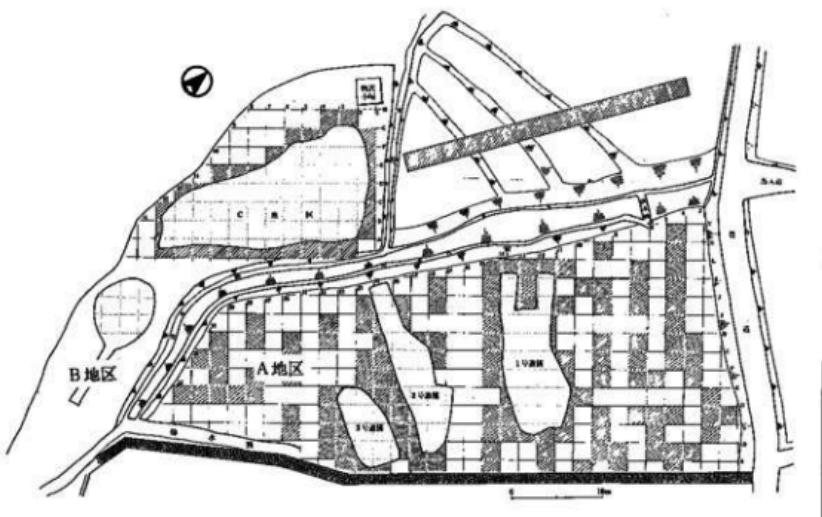
(2) 2号地の約60m²の地帶では溝状遺構(第8図の5・6)が検出され、1号遺構はE19Gを中心幅1.7~1m、約20m、2号は、B22Gを中心にして幅2~0.2m、長さ9mで両者は平行で、東側部分は未調査でさらに延長が予想される。深さはローム面を20cm程くいこんでその間を遺物を包含した黒土が充填していた。遺構は現在田造成前のものと考えられる。遺物は土器片(主に加曾利E式)打製石斧片、剥片(チップ)、青磁片、古銭、煙管片などが混在し、土器片は破面が磨滅し移動したと考えられる。

これらのことを勘案して(1)1号遺構は道路址の可能性があり、等高線に走っているのもこの考えを補強する。(2)中世の小規模な堀切状の遺構と考えた時、並列して設置された点から有利である。(3)水田造成中に人為的、或いは無意識的にできた遺構なのか、今後検討を要する課題である。

(3) 3号地区的約45m²には縄文土器片・石屑・小砾等(第8図の2)を検出したが遺構は存在しなかった。
(池田実男)

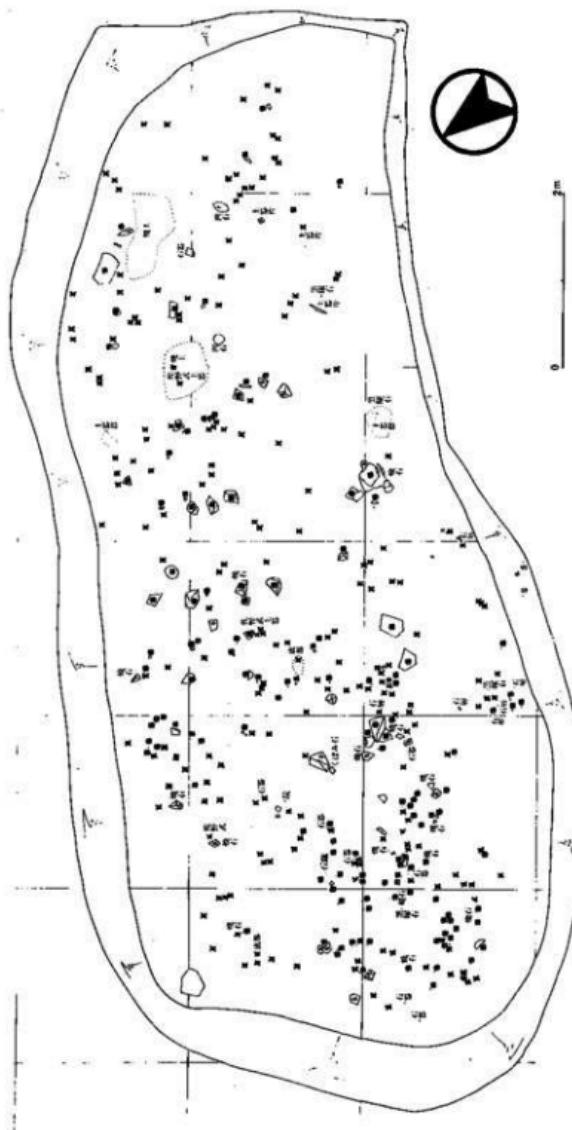


第8図の1 地形図



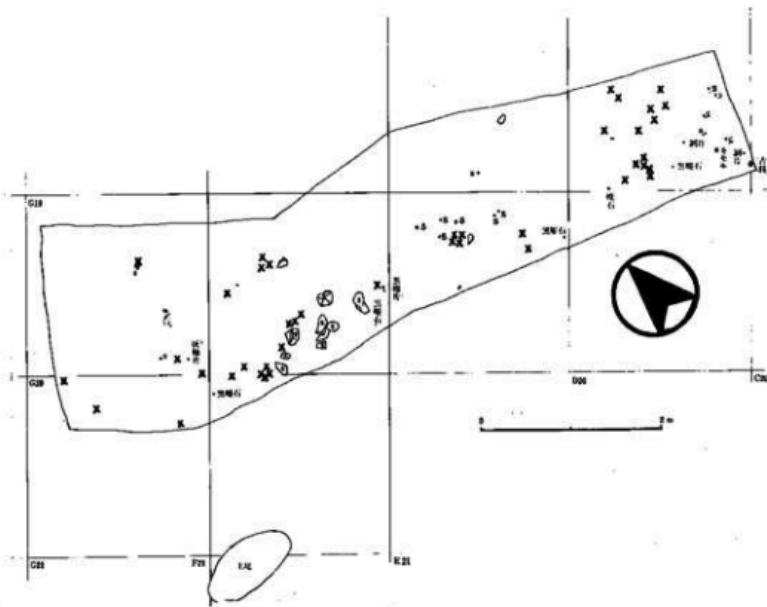
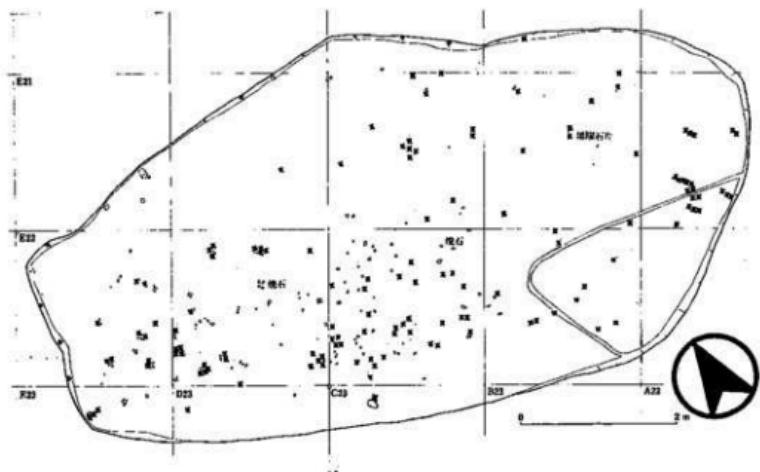
第8図の2 発掘調査範囲図

第8の3 A地点断面図



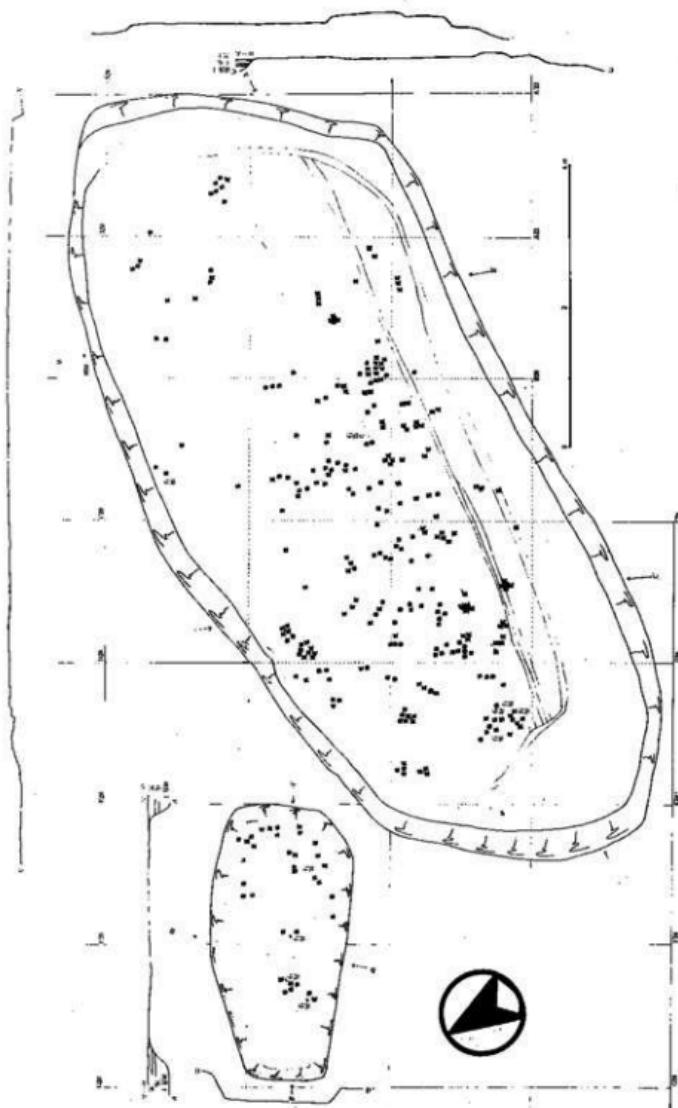
第3の4 B地点調査図





第8図の5 B地点調査図

第8図の6 C地点調査図

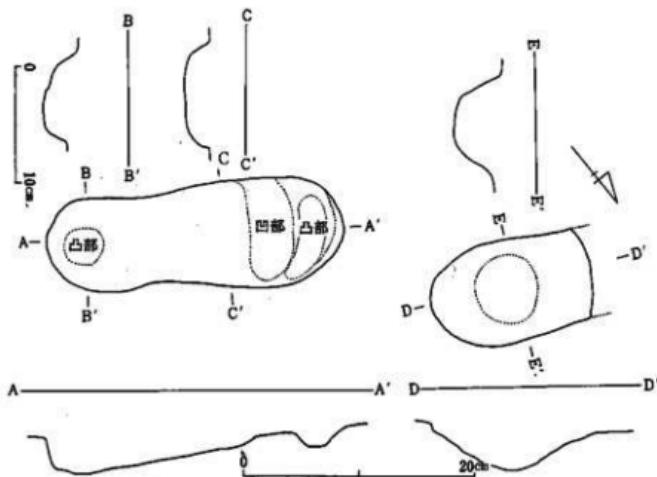


3 足跡状遺構

人間の足跡とみられる遺構検出の位置はグリットB8～C8で、北方に向ってゆるい傾斜をなす高台状の位置であった。検出された地層は表土（耕作土）・黒褐色土層・黑色土層（遺物包含層）の下、赤褐色土層であって、地表下約50cmのところである。足跡状遺構が良好な状態で検出できたのも強度の赤褐色土層に食い込んでいたからである。検出された足跡は2個であった。

- (1) 左足 長さ25.5cm最大幅9.4cmである。爪先が地面に食い込み、扁平足状の足跡である。
 - (2) 右足 踵の部分が地面に2.8cmほど食い込んでいるため、爪先は確認できなかった。踵の部分の長さ14.2cmの足跡である。
 - (3) 両足の関係、2つの足跡をみると内股状をなしている。この状態だけからみると、女性的である。しかし左足の爪先と右足の踵が極度に地中に食い込んでいる状態からすると、異なった角度から考えねばならない、それは、ぬかるみにはまつた状態であるからであって、おそらく足跡状遺構が良好な状態で検出できたのも、天候不順により地面が柔らかく不安定の状態下とみたい。
- 2つの足跡のうち左足からみると、長さ25.5cmと意外に長い足跡である。このことからすると、年齢的には成人に達したものとみてよいであろう。
- 最近の野尻湖の発掘調査や、更埴方面の調査で人間の足跡らしいものの発見を聞くが、明確なものではないようである。その点、当遺跡の足跡は、非常に良好な状態での検出であった。
- 遺跡の出土遺物等からして、縄文時代と考えてよいのであるが、この時代のどの期に属するかの断定は困難である。

(田川幸生)



第9図 足跡実測図

第2節 遺 物

1 土 器

岡ノ峰遺跡は野沢盆地の中核部に占地する好条件に恵まれ、縄文式時代以降の各時期の土器が確認され、その概要を略記する。なお、今後の検討によって訂正される部分のある事をおことわりしておく。

第Ⅰ群土器

縄文（以下略）早期の土器である。（第11図1）

A地区E12、遺物集中地点より1片検出された、椭円押型文土器の破片である、長野県信濃町塞ノ神遺跡、更埴市池尻遺跡、岐阜県九合洞穴出土土器と類似し押型文土器の終末期の所産である。

第Ⅱ群土器

前期、前半の土器である。A地区E12、を中心に検出された。（第11図12～21・第11図22～35）
(A類)花積下層式併行土器(第11図10)、(1)復元されたものは、4単位の山形突起口縁をもつ砲弾形の丸底土器で、繊維痕が多く結束のない羽状縄文が施され、菱形状の部分も見られる。(高さ34.2cm口径20.3cm器厚0.8cm)長野県長門町六反田遺跡出土品に類型が存在する。(2)(第11図2～8)また繊維痕少量で口唇部に範押しされ、口縁部に無文帶があり、胴部上に一周する隆帯上に範押しされ、羽状縄文が縦位に施文される土器片、また(3)(第11図12～13)茅野市神ノ木遺跡(神ノ木式)で確認された、口縁部に2連の爪形文があり、下は3段の縄(L $\{ R \} \frac{L}{R}$)の文様の土器で胎土の繊維痕は少量含まれている。(B類)また(1)(第11図26・54・59)繊維痕を含む赤褐色の沈線文土器片、(2)(第11図34・35)LR縄文で環付縄の土器片、(3)(第11図9・10・31)ワラビ手状ループ文土器片、(4)(第11図10・17・20)結束状羽状縄文土器片、(5)(第11図26～54・59)縄文地文に竹管平行文の土器片など関山式に分類される土器も発見されている。

第Ⅲ群土器

前期終末諸磧C式土器である。(第11図36)

(1)C地区8号土壙の一100cmより検出された底部を欠損する土器(口径13cm)に代表される土器で、口縁部に貝殻状の文様が2対で3分割しており、その間を縦位の隆線上を狭い竹管で押圧した爪形文で、頸部と胴部に一周する。その間は三角形状に竹管による隆起線で描き、胴下半は半円形斜状に描いている、(2)その他、4片程、前期末の小破片が確認されている。(第11図41)

第Ⅳ群土器（中期初頭から前葉）

(A類)梨久保式土器である。(第11図60)

(1)口縁部の破片で斜格子状の沈線の土器片、(2)口縁部に刻み目をもち、下に凹状の隆帯をもち上を爪形文で施文する土器片、

(B類)(1)五領ヶ台II式併行と思われる、前記の文様の簡略化した土器片(第11図100)、(2)頸部に

握り拳状の突起をもつ土器片などである。(第11図94)

(C類) 北陸文化圏の土器(岡ノ峰遺跡も含まれる)、(1)燃糸文を地文として、結節文をもち、半截竹管でB字状、交差状に施した胴部をもち、口縁部は欠損するが、頸部に橋状把手が2段あり、隆帯と連結している。土器片(第11図80・83~85)、(2)燃糸の太い土器片(第11図63・64・83)、(3)箆押された隆帯をもち細かい燃糸文の土器、(4)蓮華文をもつ小形土器の破片(第11図37)、(5)隆線の両側に半隆起線を並行させる土器片は、胴部の地文は繩文である。(第11図88)

(6)足指状の突起を口縁にもつ土器片(第11図87)、(7)隆起線に囲まれた内側を突刺文がめぐる土器片(第11図90・91)、(8)文様の各所に削りとり半肉彫の手法のみられる土器片などであり(第11図39)、これらは新道式併行と思われる土器片である。

第V群土器(中期後葉の土器)

(A類) 曾利式併行土器である。

(1)隆起線の間に綾杉状の沈線のあるもの(曾利II式期)(第11図103~105) (2)厚手の土器で(器厚1~1.5cm)渦巻状の太い隆帯を棒状工具で連続に押した施文をもち、区画内は八字状、一字状に太い沈刻文を刻むもの(曾利4式期)(第11図109~113)、(3)断面T字状で口唇に直線の沈線を中心綾杉状の沈線のあるもの(第11図116)、(4)太い隆帯を円形にめぐらせたもの(第11図108)、(5)ソーメン状の半截竹管文の土器片。

(B類) 加曾利E式の影響のつよい土器である。(1)地文に繩文を使用し隆帯上箆押して円形文を施すもの(加曾利EII式期)(第11図98)、(2)渦巻状隆線(第11図120)、(3)渦巻施文の口縁部の突起のあるもの(加曾利E式期III式期)(第11図119)、(4)U字状の隆帯が2重で渦巻と接続し間を細沈線でうめるもの(加曾利E式期)(第11図118)、(5)細沈線の土器片(第11図131)、(6)口縁部から胴部をめぐる沈線間にあらい繩文を施したもの、(第11図162) (7)太い繩文を施し幅広く磨消している厚手の土器(第11図163・164)。以上が加曾利EV式期、これらは単純な器形をとるものが多く、IV式頃は大木式の影響も強く認められる。

第VI群土器(後期第一期の土器)(第11図132~143)

(A類) 地理的関係から、新潟県の影響下にあつたらしく、三十稻場式が見られ、(1)爪形状のもの3片(所属時期が古いかかもしれない)(2)爪形D字文のもの(3)平行に並ぶもの、(4)交互に施されたものなどで関東の堀ノ内式土器は僅かの出土である。(第11図144・146・156)

第VII群土器(第2期の土器)

(A類) 加曾利B式と思われる。(1)沈線と繩文の土器。(2)口縁部に刺突文が施された土器片などである。(B類)(1)繩文を地文として蛇行沈線のあるもの、(第11図149~151)(加曾利BII式期)、また(2)沈線と繩文の加曾利BI式の土器片も確認されている。(第11図169)

第VIII群土器(晚期の土器)

(1)晚期前葉 大洞BC式併行土器片(第11図173など)、(2)大洞CI式(佐野I式)期の塗彩され朱の付着する土器片、鉢形土器と思われ、新潟県薄生遺跡(妙高高原町)に出土例がある。(第11図174)

この外にも塗彩された土器が数点見られ、この期の土器片は僅かであるが無文の粗製土器片50%、半精製土器30%、精製土器20%の割合の出土量である。(3)安行3D式に見られるB突起(イボ状突起口縁)も1片確認された。(第11図176)

第IX群土器 (土師器)

(1)国分期の内黒高台付の皿形土器の破片が確認された。

第X群土器 (須恵器)

形状不明の須恵器の破片が確認された。

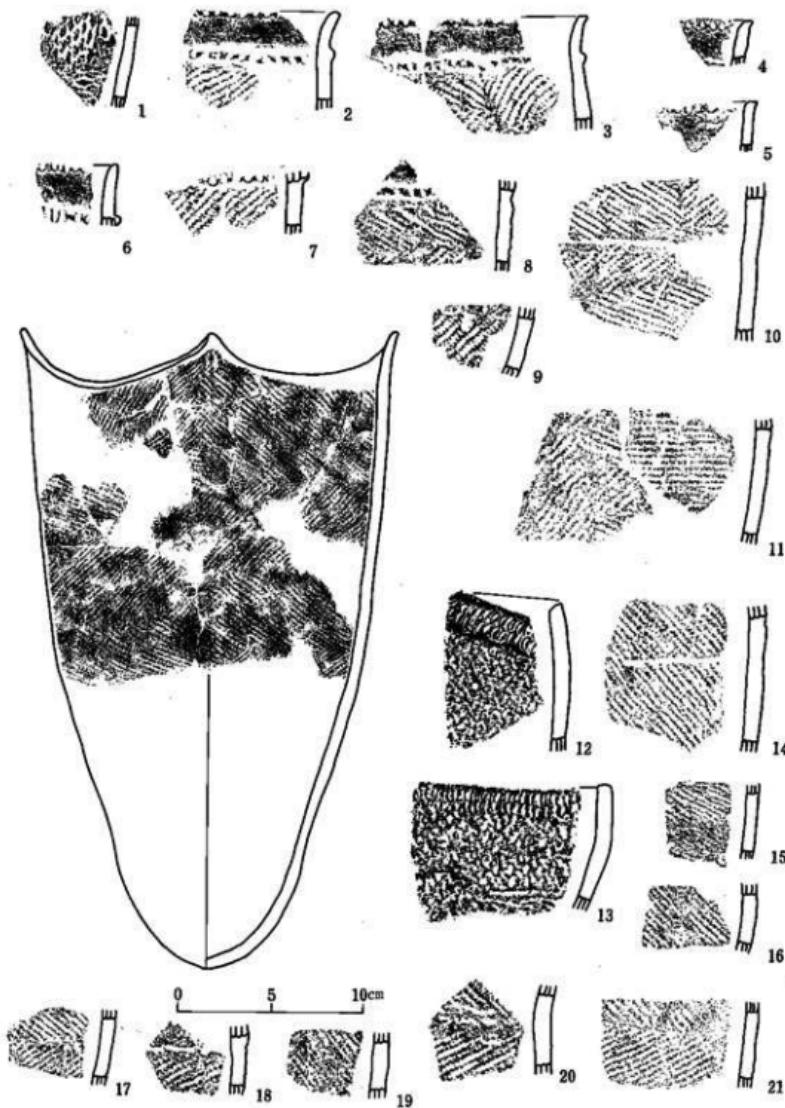
第XI群土器

青磁の小破片、白磁の高台部の小破片が確認された。その他は近世～現代の陶磁の破片である。

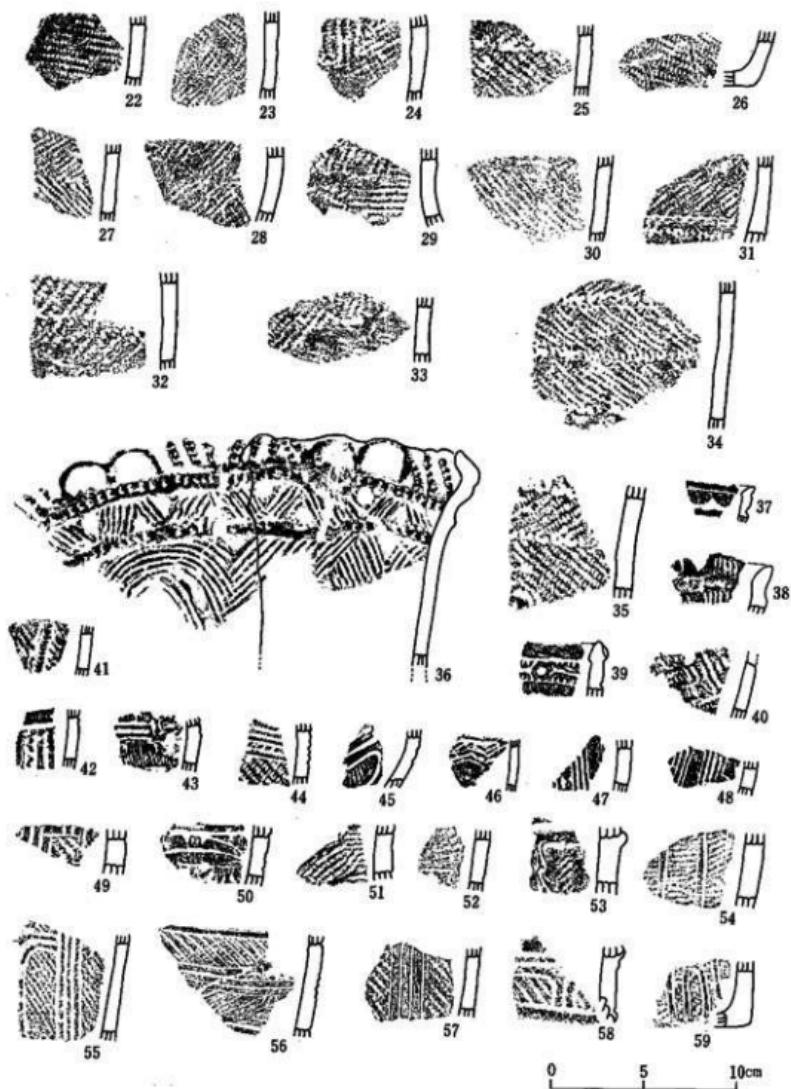
(榎原長則)



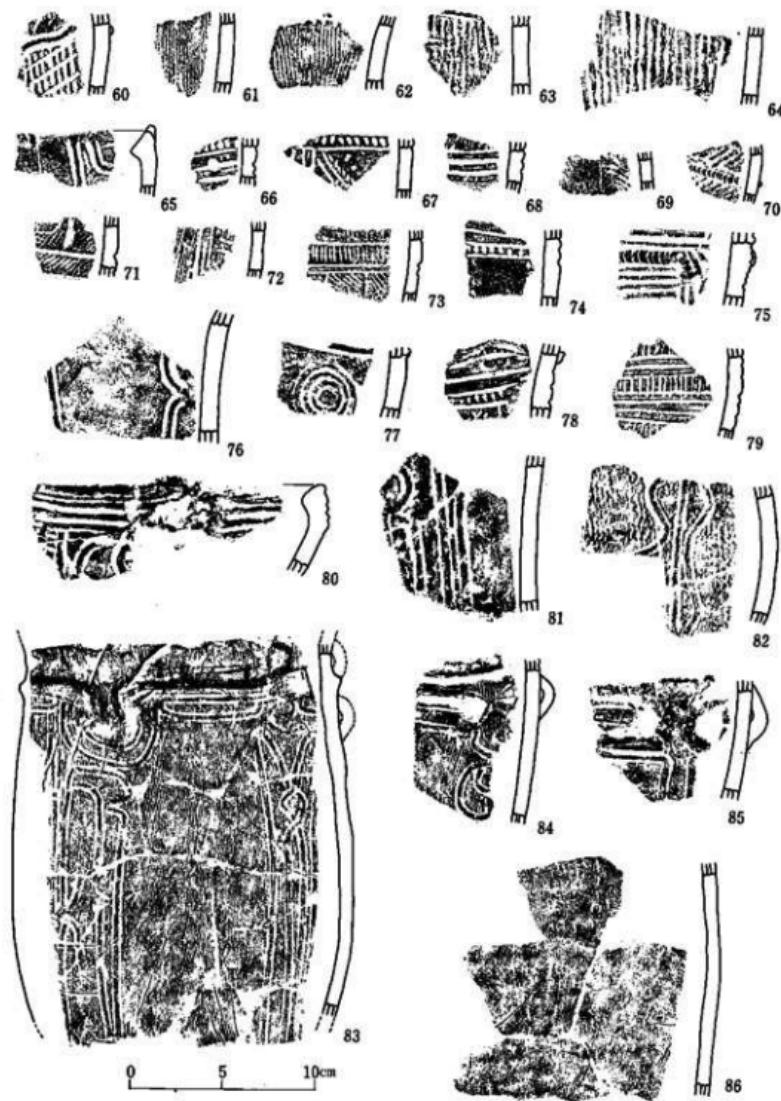
第10図 複原土器



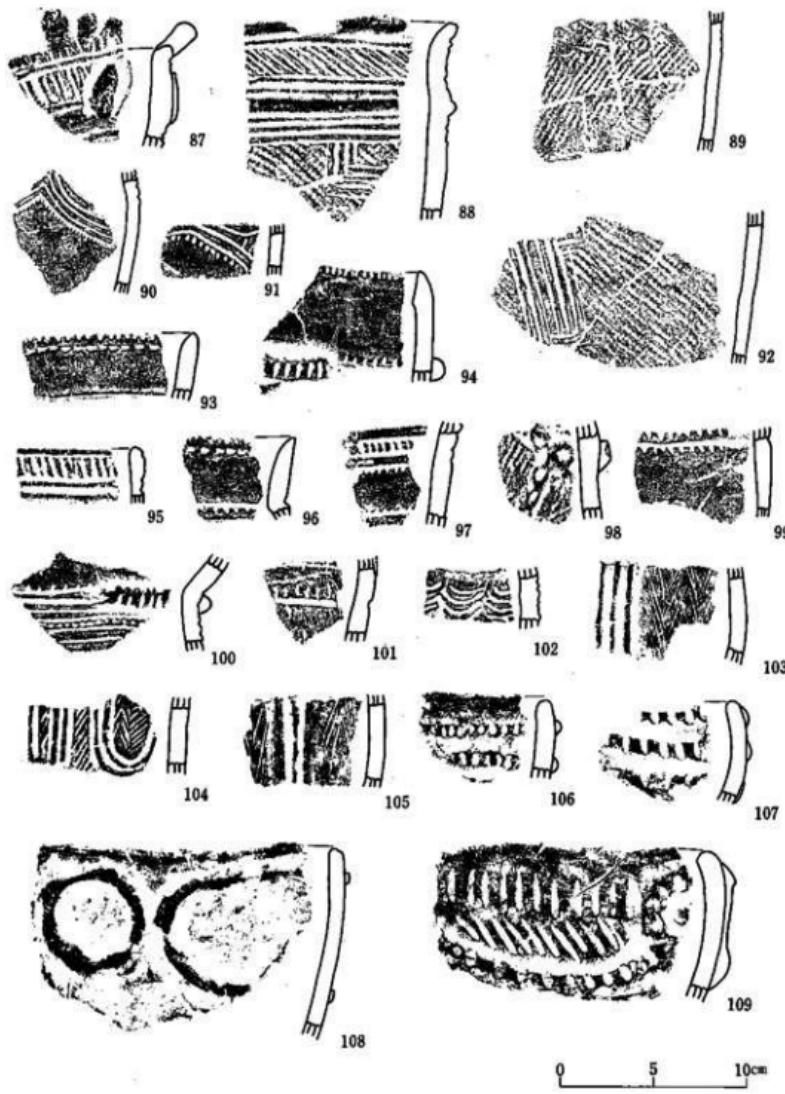
第11図の1 土器拓影図



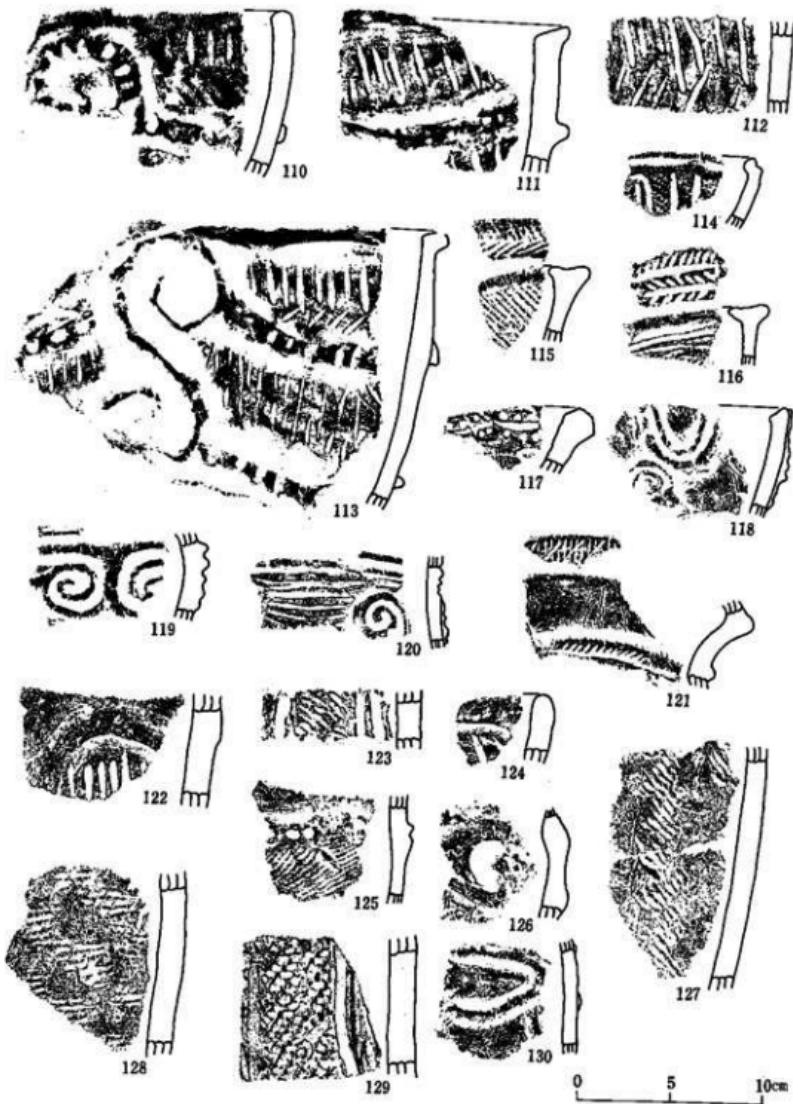
第II図の2 土器拓影図



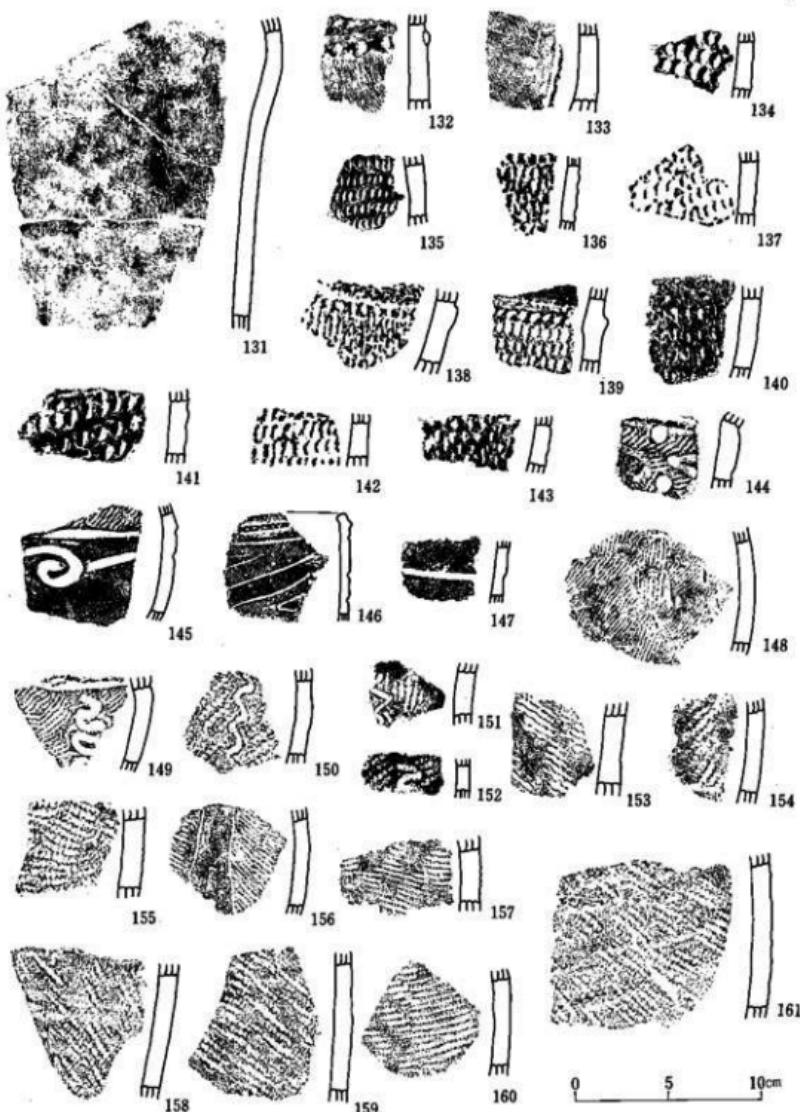
第II図の3 土器拓影図



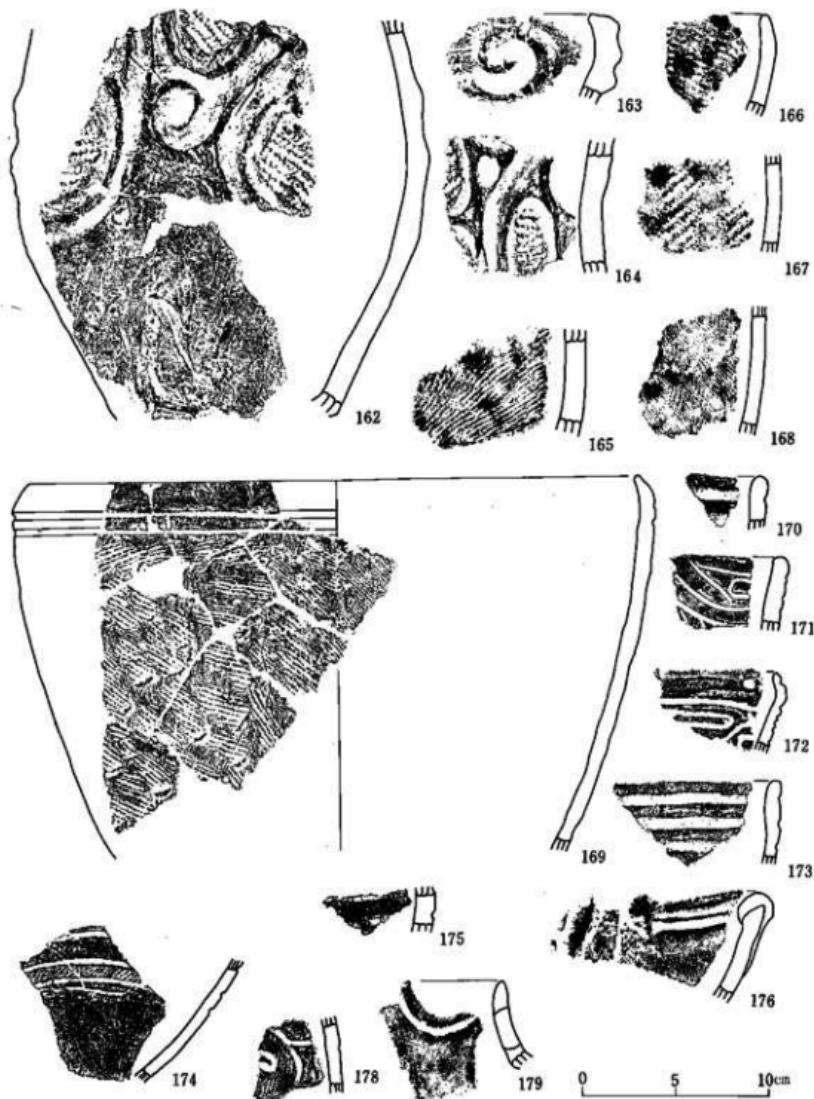
第11図の4 土器拓影図



第11図の5 土器拓影図



第II図の6 土器拓影図



第II図の7 土器拓影図

2 石器

A地区出土石器（第12図1～32）

- (1) 垂玉(1) 1点出土する。長さ2.5cm勾玉状をなす。両端を欠くがその両端部に小孔をもつ滑石製である。縄文前期のものか。尚、当遺跡から硬玉製の不整形有孔タイプの垂玉が出土している。
- (2) 磨製石斧 (14・15・22) 4点出土しているが、14・15は小形のもので頭部を欠く刃部のみである。14は粘板岩・16は蛇糸文岩である。22と他の1点は中形の石斧で、頭部のみの砂岩と蛇糸文岩である。
- (3) 打製石斧 (16～22・23～25・27) 不良品を含めると、10点ほどである。頁岩、砂岩質のものである。いずれも刃部を主にした破片である。27は楕円状の周辺に刃部を持ち、他の打製石斧とは異なる。
- (4) 石鎌 (2～12) 11点出土したが、いずれも無柄鎌である。当遺跡からは以前に有柄鎌も出土しているが、今回は無柄鎌のみである。黒曜石製3点、角岩5点、粘板岩3点である。
- (5) 石棒 (28) 1点出土する。径2.5cm、長さ5.5cmのもので、両端を欠く。小形の砂岩質でやや粗雑である。縄文時代後期のものか。
- (6) 凹石 (32) 2点出土する。楕円状の細長い安山岩の河原石を利用している。表裏に各2個並べた凹みをもっている。
- (7) 楕円状磨石 (30・31) 2点出土する。径6cm前後のたまご形の磨石である。表面はつるつるしている河原石である。自然石とは明らかに異なる。
- (8) 棒状磨石 (29) 2点出土する。硬砂岩質の磨石で破片の一部である。

以上、石器は(9)種類に及ぶが石鎌を除きいずれも破片である。また遺物は、いずれも縄文時代の遺産である。

(田川幸生)

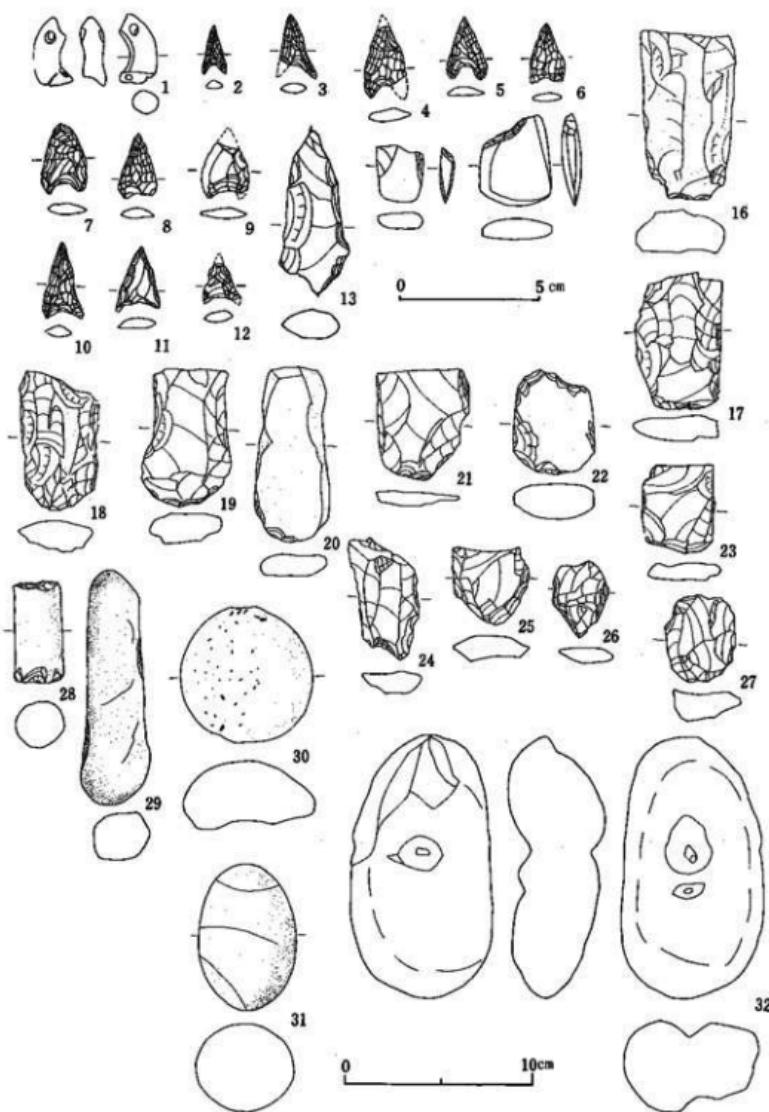
C地区出土石器

- (1) 打製石斧 粗雑石が多く石斧とみられるもの3点だけである。あとは石屑である。頁岩、砂岩質のものである。26は石斧というよりは、尖部をもつ破片である。
- (2) 凹石 2点出土する。1点は表裏に各2穴をもつ。1点は片面に1穴をもつものである。
- (3) 石鎌 角岩の無柄鎌である。
- (4) 軽石状石 9号土壙より出土する。何らかに使用したものとみられ、くの字形の平板状をしている。軽石を利用している。
- (5) 石槍 (13) 基部が欠損しているもので、粘板岩である。

以上C地区は、極めて石器は少ない。

A地区とは対照的な性格のちがいがあるとみられる。石器はいずれも縄文時代の所産である。

(田川幸生)



第12図 石器実測図

第3節 むすび

岡ノ峰遺跡からは古くより遺物の採集がなされ、広く知られている遺跡である。昭和39年・41年に坂詰秀一氏（現立正大学教授）が発掘を担当され、その成果は「野沢温泉村史」に記録されている。発掘した住居址（縄文中期後葉）には復元家屋が1戸建立されている。

今回は圃場整備事業施工前に記録保存のための緊急発掘調査を7月26日から8月13日まで実施した。発掘場所は復原住居の西北方向にあたる下段の所で、中・近世に開田されたと推定される棚田状の所であった。発掘グリッドは245（約980m²）に及び、開田時の地層攪乱によって住居址の検出はなかったが、先述の如き遺構、遺物の検出をみた。

遺構は土塙墓1、土塙13（このうち数個の土塙は落しづと推定）柱状ピット18、溝状遺構3、足あと2、足あととは女性のものと思われ、ローム面から検出した。

遺物は縄文土器片（早～晩期）多量、土師器片少量（国分期）、須恵器片少量（平安時代末）、打石斧11、磨製石斧4、打製石斧13、磨石4、石棒1、石槍1、四石4、石棒1、垂玉（滑石製）1。中世後期の青磁片、白磁片の小片、砥石等と近世と推定するキセル1点、鉄製馬蹄1点は近代のものと思われる。

今回の発掘調査によって上古代から近代に及ぶ好資料を得、本村の開拓史を考究するうえで極めて意義あるものであった。

炎暑きびしいなかを連日のように発掘調査にあたられ、上記の如き成果をあげてくださった調査団員ならびに調査協力の方々に対し心からお礼を申し上げる次第である。（金井汲次）



第13図 第2次調査団

第4章 第3次（昭和59年）発掘調査

概要

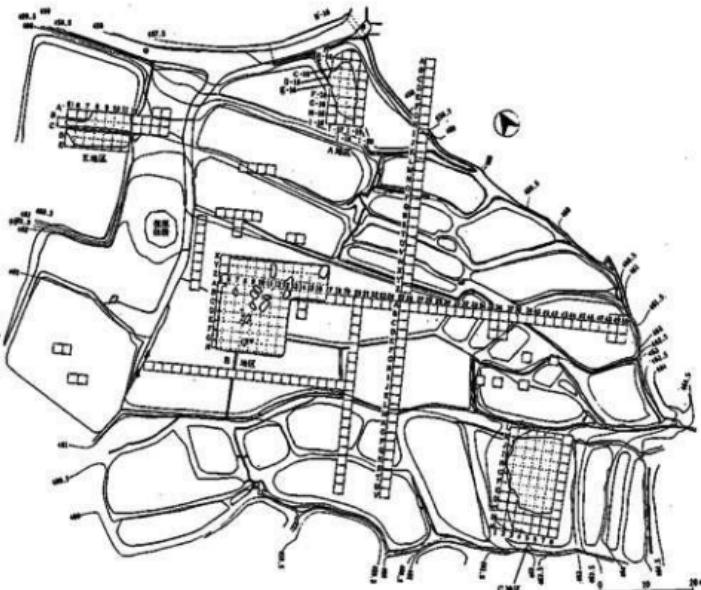
「岡ノ峯」と小字地名が示すように、野沢扇状地の中央部や下寄りに舌状台地が形成され、遠くから眺めると小高い稜線が続き、その先端に復原住居がそびえるように建っている。

第3次の調査区域は復原住居の東・南・西の範囲にあたり、東南に展開する馬の背状の鞍部が大部分である。いずれも水田耕作地で、往昔に開田され、櫛田状の小さな水田である。最近の機械化耕作に適さない状態のため田直しが行われ、包含層は擾乱されている。地形・表探資料の濃淡・古⽼の伝承等を勘案して、A・B・C・D・E・Fの6地区にわけ、トレンチ・グリットを設定して発掘調査を5月14日から7月12日まで実施し、次に述べるが如き成果をあげることができた。（島田博文）

第1節 A地区の調査

1 調査の概要

復原住居から東方へ約70cmの地点にグリットを設定し約120m²の範囲にわたって、発掘調査を



実施した。西に台地状(B地区)の稜線がはしり、東南はゆるやかな扇状地形をなし、その接点の凹地状の場所で、現況は小さな棚状の水田である。凹地沿えに南から北へ小さな清流がはしっており、北側には農道が東から西へ通じている。開田によって土層は擾乱され、また小川の氾濫によって小礫・砂等の流入のあともみられた。D-18を中心として、周囲80mにわたって遺構・遺物を検出することができた。

2 遺構

(1) 炉跡遺構(第17図)

地区内の南の位置で、大小の河原石の平面を上にした、石圓い炉である。南と西側の河原石は比較的大きく、東と北側の河原石は比較的小さい。特に注意を引くのは、西側の平石2枚が、火の使用のため焼けただれ、2つに大きく割れている。炉内の焼土は3層から成っていた。第1層は10cmほどで、ごく自然の炭火物で、土器片も混入していた。だが第2層は炭火物の下に、土器片をまばらに数き、炉下部を保護している。ところが炉下部をさらに掘り下げたところ、石錐3点・玉類3点・石錐1点の出土をみた。単なる炉跡ではなく、この遺構は、同地区内の他の遺構よりも30cm以上の高所にあることである。

(2) 立石状遺構(第16図)

炉跡遺構の北約10m付近に位置する。この河原石は、滑らかな自然の河原石である。長さ64cm、最大幅27cmの角丸三角柱状で、頭部はまるく、下部は尖状である。北面に頭部に向けて横たわっていた。この柱状石の尖端部にさぐりを入れてみると、ピット状遺構が存在した。図は発掘状態を示し、写真はその復元状態である。図の内側のP₁に、この角丸三角柱状石の先端部が入り、点線内に柱状石がうまく挿入する。外側のP₂は立石する際に補助的に掘り広げたものか。このような事例は、当遺跡の第1次調査にもみられ、近例では山ノ内町伊勢宮でも確認されている。

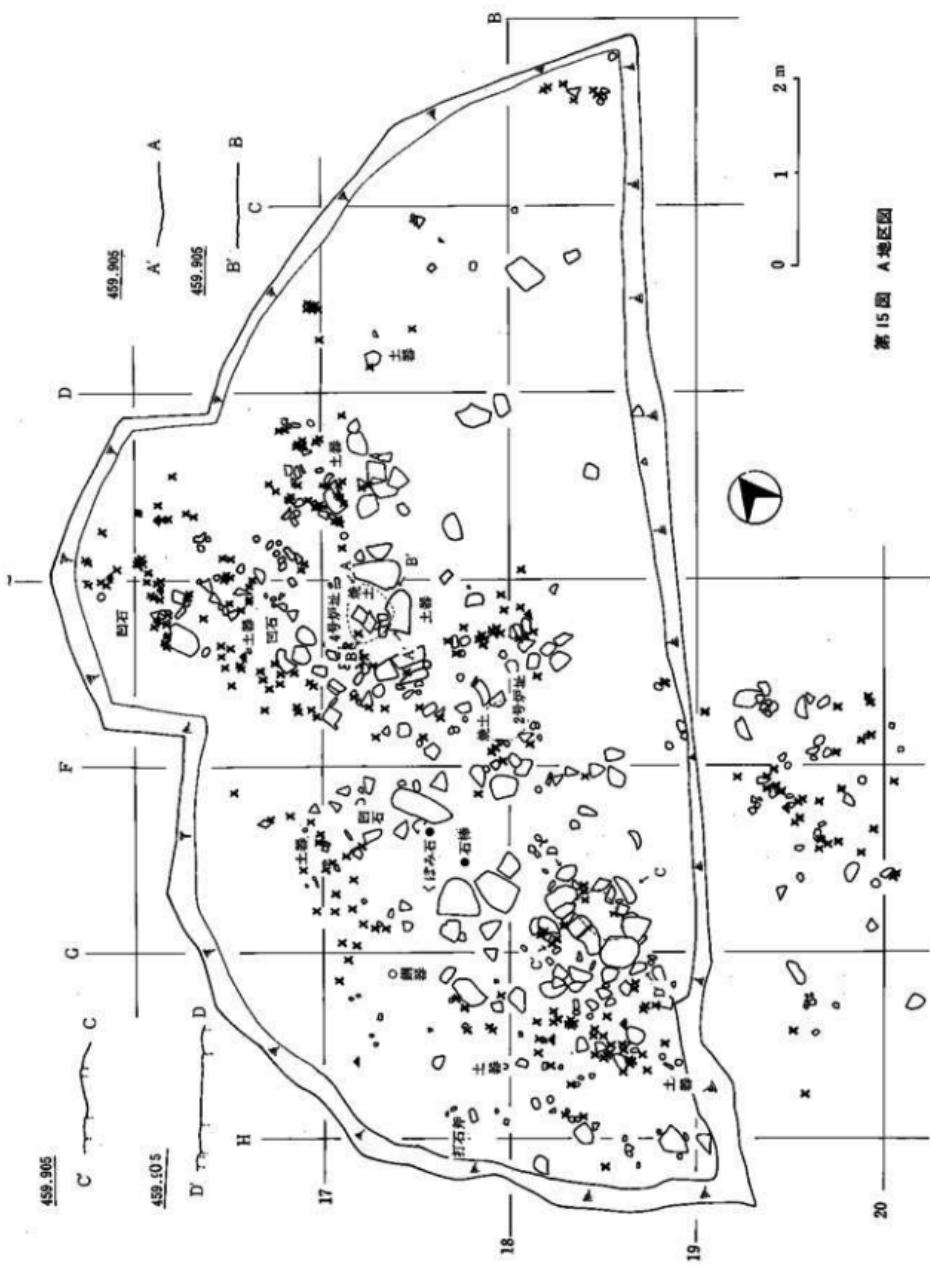
(3) 配石遺構(第15図)

A地区全体をみると、いくつかの河原石を集めた配石がみられる。しかしいずれもが、決定的な見方ができない。その中でも炉跡と立石との間に配石は、特に大きな石を中心としたものである。また、立石の東北の焼土のまわりの配石もある。そのほか数か所にわたって、集石状の遺構が見受けられる。

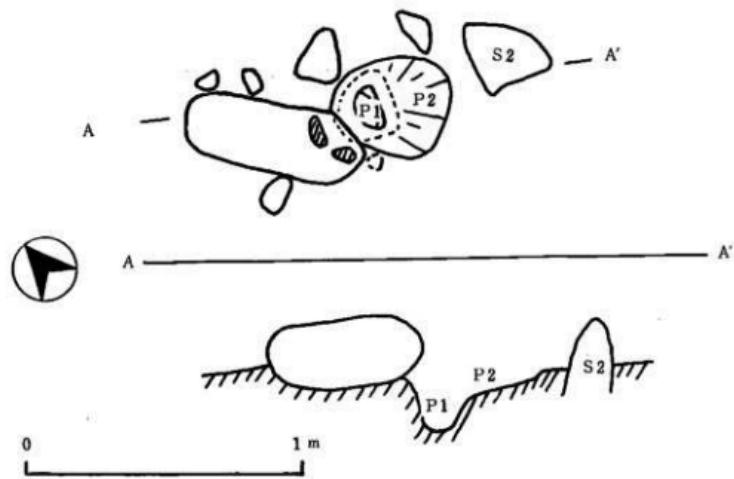
(4) 焼土遺構(第15図)

立石遺構の東側に焼土遺構(九形の点線内)がみられる。しかし焼土はうすく、まわりの圓いも不明であり、炉跡とはなり得なかった。

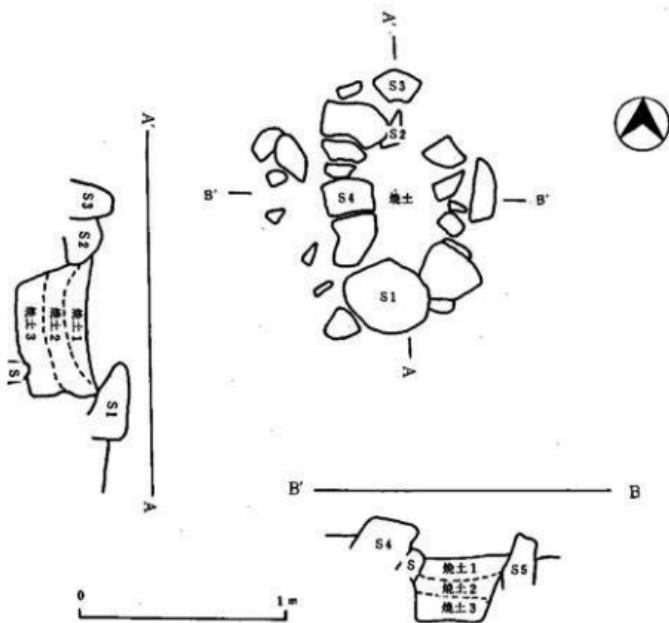
以上主な遺構について概説したが、遺跡全体に土器片が散布していたが、以後述べる石器はこれらの遺構付近から出土した。特に玉類や石錐の出土した炉跡は、特に注目してよいであろう。立石、配石、焼土等と総合的にみた場合、かなり祭祀性の強い遺構とみたい。(田川幸生)



第15圖 A 地區圖



第16図 立石状造構実測図



第17図 炉址造構実測図

3 遺 物

(1) 土器・土製品については第4章第6節において一括詳説する。

(2) 石器・石製品

この地区からは、20種にのぼる石器の出土をみた。以下それらについて述べる。

1) 玉類 (2~5)

2はだ円平板状で、中央のやや上に小穴をもつ小玉である。3は15年ぐらい前、当村の鈴木秀行氏が、A地区水路付近で採集された硬石製小玉である。4も硬玉製で、平板状の中央やや上に小穴がある。5は緑と白の色が混入した蛇紋岩様の美しい、勾玉状のかざり玉である。3を除きいずれもA地区炉跡内第3層より出土した。

2) 磨製石斧

20点を数えるが、完形品はない。その内訳は、ほぼ完形品4点・頭部のみ4点・頭部から胴部6点・胴部のみ1点・胴部から刃部2点・刃部のみ3点である。緑色系統の石器が多く、蛇紋岩はそのうち12点を数える。他は砂岩質のものである。比較的大きいのは、推定15cmぐらいの5点、10cm前後のもの13点、5cm前後のミニは2点である。特異なものに上下両刃の石斧(10)がある。中央断面をみても、長だ円形である。刃部は使用痕がある、砂岩質の灰緑色を地に青黒色の斑点がある。

3) 打製石斧

24点の出土をみた。形態分類により述べてみることにする。

①短骨形 9点出土したが、このうち完形品は5点で、長さ10cm程の比較的小形品と、7cmほどの小形品である。灰白色の砂岩質のものである。

また上半部ほど欠くものの4点がある。残部が7cm~11cmで、前者同様、灰褐色の砂岩質のものである。1点は平板状だが、他は比較的部厚く中央断面が2cmほどとなる。

②楔形 完形品は5点で、長さ10cm前後である。粘岩・砂岩・粘板岩等と種類が多い。

上半部を欠くもの2点、下半部を欠くもの4点で、いずれも%程度を欠く。長さは7~9cmほどであること、砂岩質の灰褐色であることなど共通点である。

短冊形と同様に、中央断面が1cm程の平板状のものと、2cm程のだ円状のものとがある。

③分鋼形 完形品2点は13cm前後で、他の石器に比べて比較的大きい。他の3点は上半部または下半部を欠く。一つは半板状だが、他の2点は部厚い石器である。硬砂岩質のもの、灰黒色や灰褐色の砂岩質など多様な石材である。

4) 石 棒

5点出土したが、いずれも破片で、頭部4点・胴部1点である。いずれも磨製品であるが、粒子の荒い石質のため、表面は滑らかでないが、現存部の長さと(破片部の径)と色彩などは次のようなである。

①10.5cm (3.2×2.8) 灰褐色 しづい感じ

②9.0cm (2.4×2.0) うす緑色

③6.5cm (2.8×3.0) 褐色

④6.5cm (1.2×1.0) 灰褐色、河原の自然石利用

5) (約)16cm (半円状である) 緑色をなす。通称サンバ石といわれる庭石用と同質である。

石棒を再利用した多孔形凹石で、平面に5個、円面に3個の凹部をもつ。

6) 十字形石錘 (6)

磨製品で、だ円形の褐色の砂岩である。中央部に十字に切りこみ美しさを加えている。炉跡内第3層から玉類と共に出土したもので、実用品というよりは、祭把品とみたい。長さ4.5m、最大幅1.5cmである。

7) 石刀 (8)

7.6cmの中央部だけの残片である。灰黒色をなす粘板状の磨製品である。

8) 河原石石器 (7)

小形の磨製品斧状をなすが河原石である。褐色をなし、上下の先端部に使用痕をもち、欠けた状態である。

9) 石鎌

106点出土したが、このうち無柄鎌は12点、有柄鎌91点、不明3点である。黒よう石は17点、あとは粘板岩等である。このうち3点が炉跡の第3層からである。

10) 凹石

22個の多数の出土をみた。凹部の数と位置からすると6種類にのぼる。表に1凹のもの5個・表に1凹裏に2凹のもの6個・表に2凹のもの2個・表に2凹裏に1凹のもの4個・表に2凹裏に2凹のもの7個・表に2凹裏に1凹のもの1個である。いずれも河原石利用であるが凹部の少ないものはほど偏平のだ円形で、長径8cmぐらいである。多凹石ほど長だ円の偏平で、長径12cm前後である。

11) 小形石皿

凹石と類似するが、河原石利用の石皿である。2点出土したが、いずれも破片部である。皿部が径7cm・深さ2cmのものと、径3cm・深さ1cmであった。

12) 砕石

2点出土した。(9)は三角柱状で、三面に磨いた跡があり、中央部のみを残す硬砂岩の砾石である。他の1点は、へん平なだ円状の長さ10cm・径8×5の河原石である。

13) 石櫛形石器(1)

長さ13cm・径9cmである。上下共にまるく磨かれている。下半部の断面は円形だが、上部はだ円状をなしている。河原石の粒子の荒いものを利用しているためか、空間に褐色のそぶが付着している。

14) 球形磨石

9個出土しているが、人工により磨石となっている。球形または卵形をしている。径6cm前後のものが多いが、8cm前後のものもある。

15) 大形球形石

4点出土した。小さいもので径8cm、大きいのは径15cmとなる。小さいのは誕生時の人頭大で、大きいのは幼児の頭大である。人工により河原石を磨いてつるつるにしている。そのうちのひとつに、凹石状の凹部がみられる。

16) 柱状河原石すり石

5点出土した。四角または三角の柱状をなした細長い河原石で、こすったりしたすり石である。このうちのひとつに、2本のみぞ状のすった部分がみられる。

17) 軽石

18) 石鎌

2点の出土をした。有柄の石鎌を大きくした感じで、長さ3.5cm・4.3cmの粘板岩である。

19) 石鍬

1点の出土であるが、尖部2cmの粘板岩である。

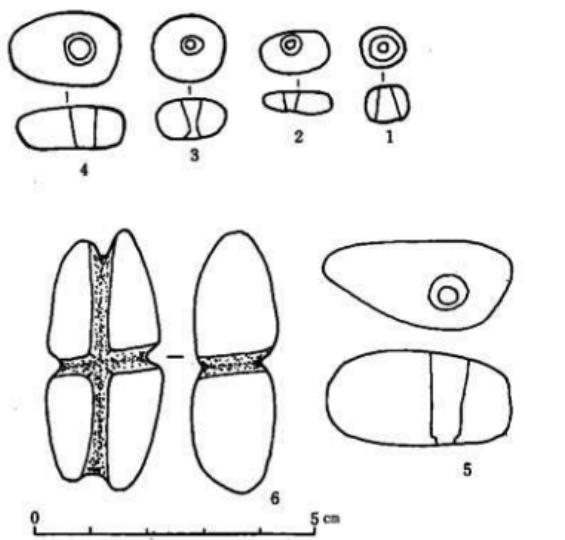
20) 敲打石

円または柱状で手でぎるとほどよい感じの自然の河原石である。先端部が、打石のための使用痕がある。7点を数える。

偏平だ円状の軽石である。長さ9cm・幅4.5cmである。何かに使用したとみられ、まわりが円滑である。

以上19種の石器は多種多様であって、実用品もかなりみられるが、非実用品と、使用不明の石器もかなりある。遺構と石器など総合的関係においてみなければならないが、かなりの祭祀的な関係品も多い。

(田川幸生)



第18図 玉類・石器実測図

第2節 B地区

1 調査概要

B地区は復原住居のすぐ東隣の水田地帯で、馬の背状に東へ続く台地状地形に立地している。開田時の削平によって棚田が造成されたため、地層はいちじるしく擾乱され、遺物の表面採量の多いのはこのためであろう。今回のB地区的調査の中心となった水田は、数年前に、田植・稲刈の大規模機械の導入のために田直しを行い地形も変貌した。東へ100余mの地点において、西へ緩傾斜する扇状地と接し、扇頂から直に西へ流下した小川は、ここで南北二条にわかれて小さな谷状地形の凹地を流下していく。

復原住居の南へ10mの線から東へ長さ100m、幅2mの基点となるトレンチを設定し、この基点にもとづいてグリットを設けて発掘調査を開始した。A—8地点において敷石状遺構を2基検出し、これを中心に拡張すると石棺墓址8基、土壙1基等を発掘した。5・7・8号は側壁がほぼ完形で検出し、村賣をもって保存措置を講じて、公民館に1基、復原住居の西隣に2基保存した。遺物は繩文土器片・埋甕・玉・石器類のほか8号石棺墓址からは土製滑車形耳飾2箇が頭部近くから並列して検出した。(第20図)

(島田博文)

2 遺構

(1) 石棺墓址群

石棺墓址群は、復原住居の所在する東方の台頂部にあたるB地区から検出された。南北約18m、東西14m、面積約250m²の範囲内に、10基分の石棺墓址状遺構が検出され、所在した水田は、2回の面積拡大の造成工事で、削平をうけており、確認されたのは10基分で、側壁石まで残存していたのは、3基だけで、残りは底部の敷石のみ残存し、8号の周囲には、配石状や、土壙状の遺構もみられた。構築の石材は、安山岩の川原石、平整な自然石で、蓋石の有無は確認できなかつたが、水田の畦畔に多数の平整石が、積まれていたので、可能性は考えられている。また前述の理由から、撤去された可能性の遺構の存在が、考慮される。5・7・8号の復原作業の過程の所見によれば、耕土下の黄色土、(ローム層)は割に厚く(1m以上)堆積していた。

① 1・2号址 まず発掘初日の耕土撤去作業で、検出された。即ち水田の耕作土12~15cmの直下の床土層に敷石が残存していた。1号~4号は、ほぼ同一レベルの検出である。

1号 抜去された石が多く規模形態は不明である。敷石間から石錆が1点検出されている。

2号 敷石部はほぼ残存し側壁石の抜去された個所には、黒土が充填していた。敷石の長径185cm、横幅径70cmで、敷石は大小36個使用し側壁石の抜去痕は13ヶ所で他に5ヶ所が、確認できた。側壁石裏を含めた長辺径は210cm、幅は100cm程であり、1・2号は並列していた。

② 3号址 2号の斜め西方約1m離れて、同方向に3号が所在し、敷石の復原径170m、幅

は北側部分で 80 cm、南側の端部で 25 cm の三角形状を呈することから、抜去された石も予想される。復原外径は、長辺 2.2 m、幅 1 m と考察される。

③ 4 号址 2 号より西方 3 m の地点に 4 号が 2 号とは、ほぼ直角の方位で所在した。残存敷石大小 36 個、側壁の痕跡 19 ケ所で、敷石部の長辺径 180 cm、幅 60 cm で、復原外径は、長辺 210 cm、幅 85 cm である。

4 号の西端より、約 1 m 南方に大小 (15~25 cm) の 5 個の平盤石がみられたが、石棺墓として認定するに至らなかった。

④ 5 号址 4 号から南方約 4.5 m 離れて同方向の 5 号が所在する。側壁石は、東方部分が $\frac{1}{2}$ 程抜去され、失われていた。敷石部は完全する。敷石の長辺 160 cm、幅 45 cm、復原長辺 200 cm、幅 75 cm 程である。敷石は大小 41 個、側壁石現在 10 個、予察合計 17~18 個である。4 号との敷石のレベル差はマイナス 28 cm で、側壁の深さは、40 cm である。

遺物は精査したが、検出されていない。5 号の西方長辺端より 50 cm の線上に埋甕が埋設され、その北方にも底部の欠損した埋甕を配していた。

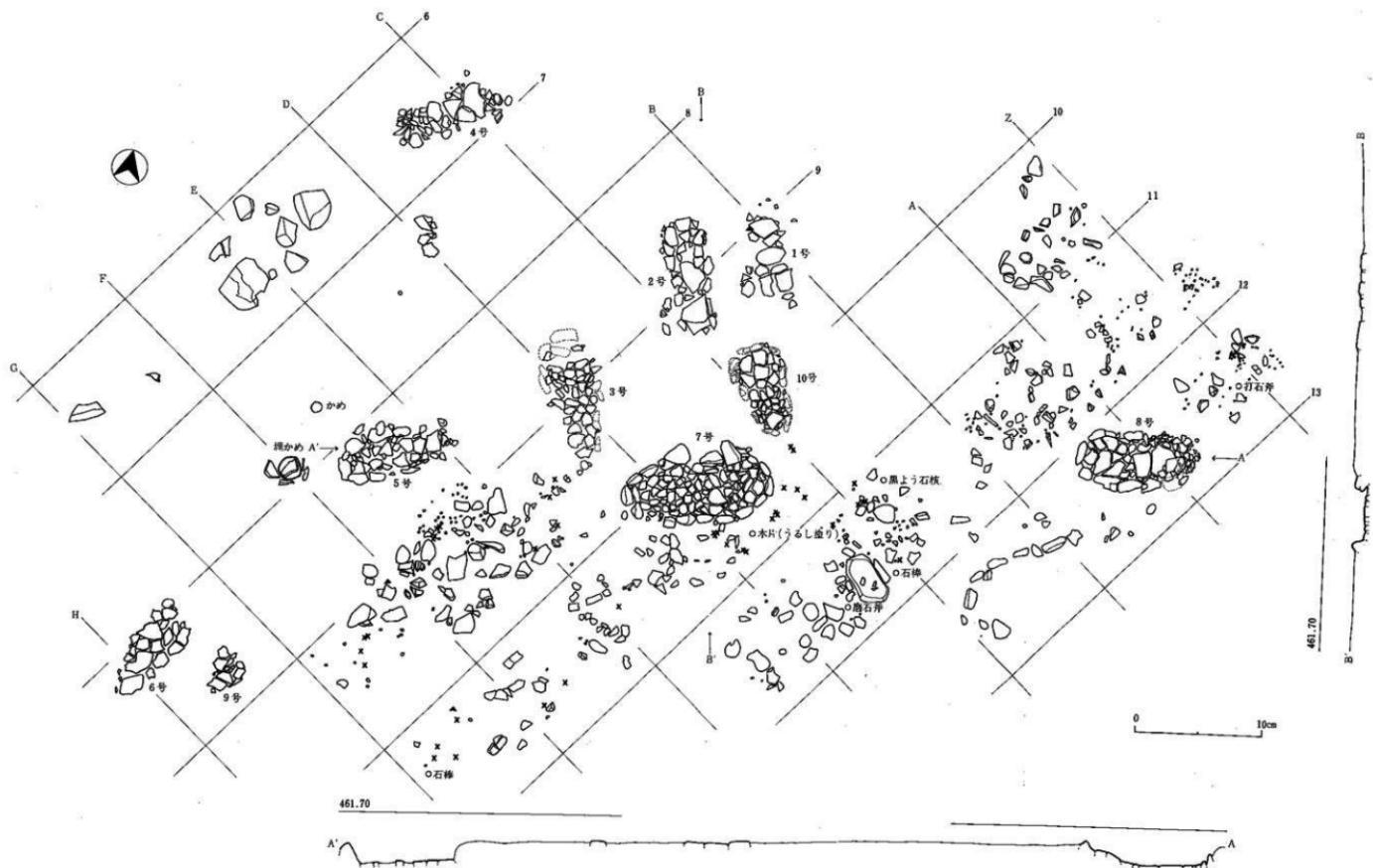
⑤ 6・9 号址 5 号の南方 4 m の位置に所在し、前述してきた 2・3 号より約 8 cm 低いレベルに並存し、9 号の北辺は畦畔で、側壁の石と思われるもの 1 個が残存していたが、破壊が著しいので原形の復原は困難である。

6 号は長辺残存部 160 cm、同幅径 70 cm で、長辺部に欠失があり復原は困難である。この小群は他の 2 極の方向性より、特異な存在である。

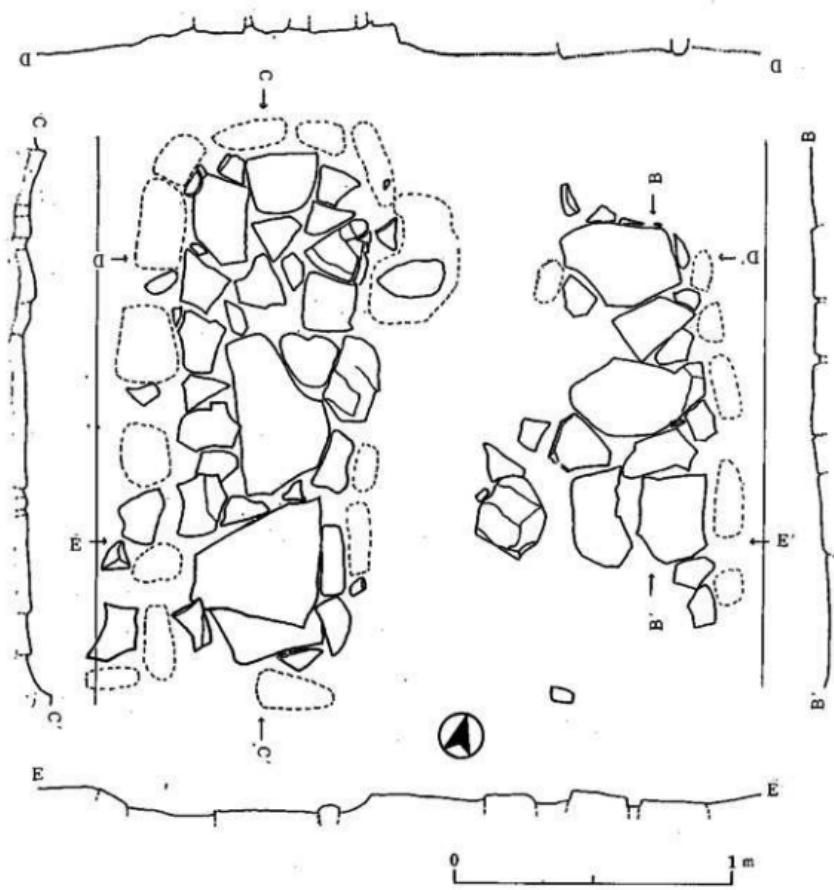
⑥ 7 号址 群の中央部分に所在し、この群中最大の規模を有する。敷石の長辺 210 cm、幅 80 cm で、長辺円形を呈す。側壁石までの長辺径は 250 cm 弱、幅は 115 cm である。3 号敷石面と 7 号敷石面のレベル差は 36 cm あり、側壁の高さは、約 40 cm である。側壁石は 17 個 (1 個欠落) 敷石は、約 80 個の石を使用して構築され、胸部付近と思われる個所より丸玉が、検出された。

⑦ 10 号址 8 号の復原移転作業を行なう段階になって発見された遺構で、従って全景写真には撮っていない。7 号の東北方の端部と、隣接して検出されたもので、側壁石の抜去された痕跡が、きわめて明瞭に看取された。側壁石の使用法は、尖った部分を下方に埋めて上端を平坦に据える手法が 5・7・8 号にみられるが、この 10 号も同じ様な痕がみられた。敷石長辺 80 cm、幅は北方の広い部分が 60 cm 強、南方狭い部分が 30 cm で、側壁石を含めた長辺径 150 cm、幅径それぞれ 90 cm、50 cm である。敷石に 35 個、側壁に 13 個程の石を使用して構築されていた。副葬品は検出されていない。

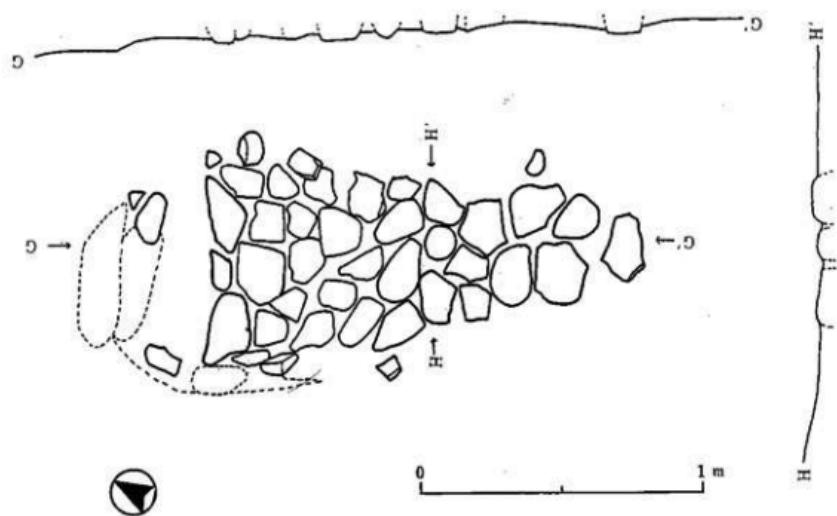
⑧ 8 号址 7 号の東方 4.7 m 程離れて所在し、敷石の長辺径 180 cm、幅径 70 cm、深さ 70 cm で、側壁を含めた長辺径は約 200 cm、幅径 90 cm で、2 号の敷石面と 8 号の敷石面のレベル差は 65 cm であり、東方部分の敷石は 1 部内側に倒れたり、失われて、やや原形を損なっていた。敷石は、40 数個の石で、側壁は約 16 個の石で構築されていたと思われる。また長辺西壁よりに、 $23 \times 18 \times 5$ cm の平石 (枕石) が、据えられ、そばより 2 個の土製滑車形耳飾が、検出された。



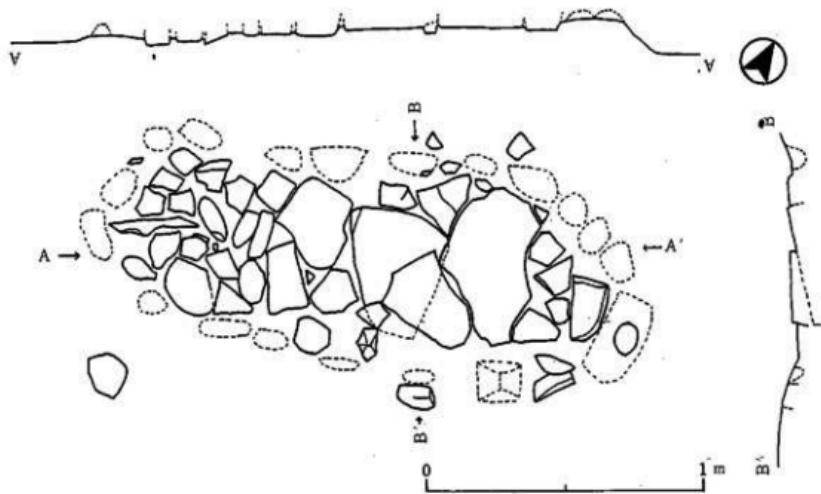
第20図 石棺墓址群全体図



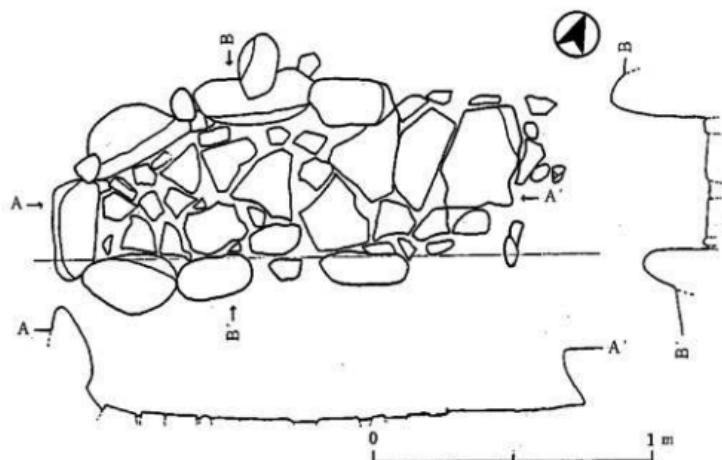
第21図の2 石棺墓址1・2号



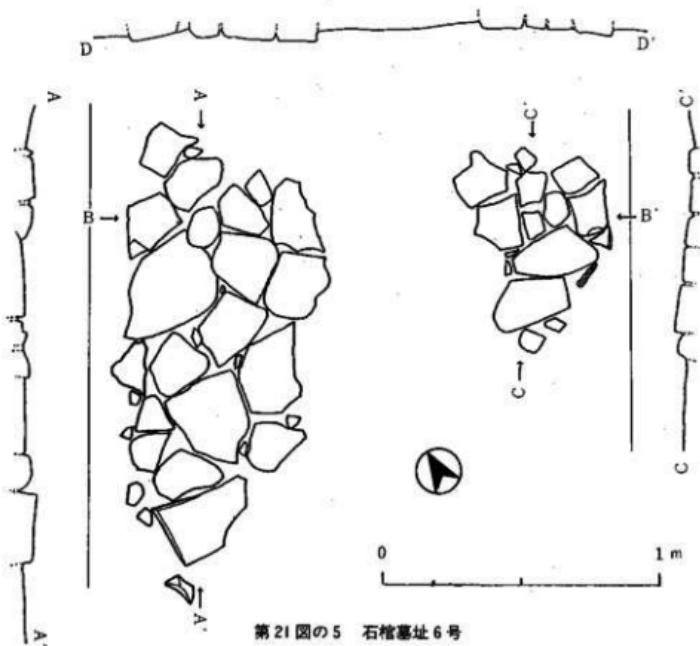
第21図の2 石棺墓址3号



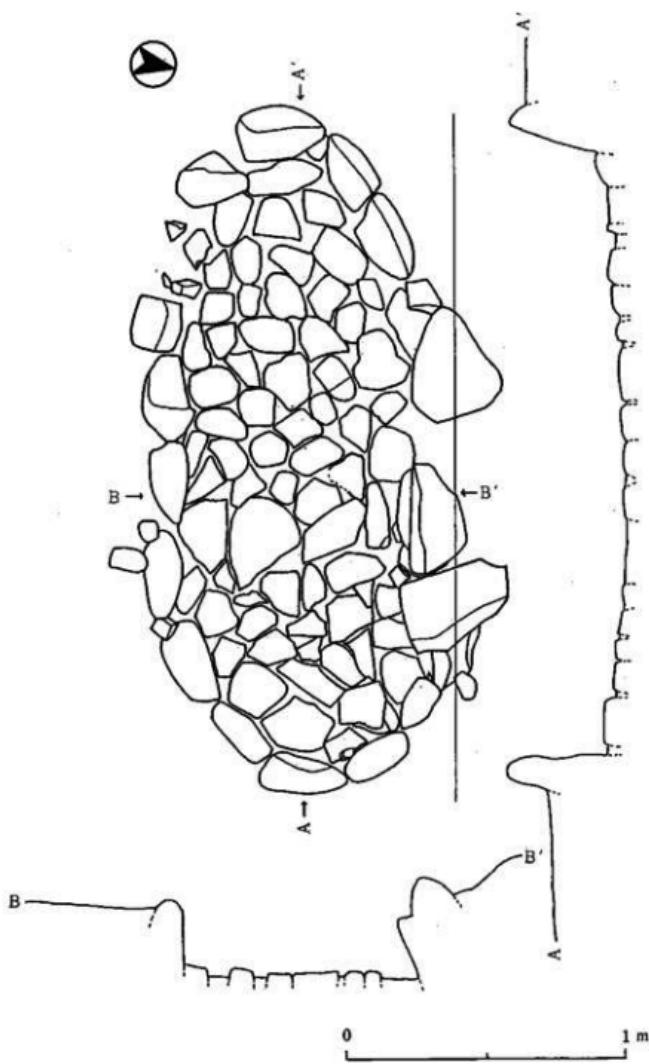
第21図の3 石棺墓址4号



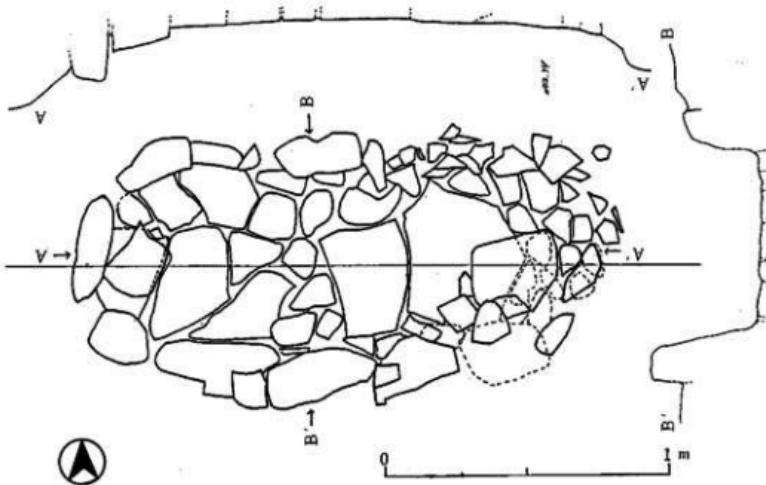
第21図の4 石棺墓址5号



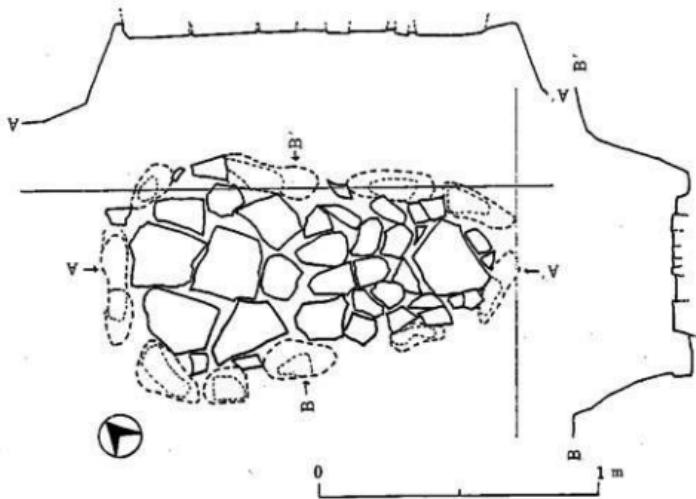
第21図の5 石棺墓址6号



第21図の6 石棺墓址 7号



第21図の7 石棺墓址 8号



第21図の8 石棺墓址 10号

3 遺物

7号石棺墓の丸玉、硬玉製で、丸玉状を呈し直径は0.9cm弱である。穿孔面の直径は、0.5cm貫通部は0.2cm程の片面からの穿孔である。

(2) 8号石棺墓の土製耳飾 8号石棺墓副葬の土製耳飾(A)は、墓壇内、頭位方向に向って左側より(着装位は右側)完形で検出され、外側の最大径6.4cm、外内径6.1cm、内径4.8cm、厚さ2.2cmの環状(リング状)の耳飾で、黒褐色を呈し、器面はやや荒れている。内側全面に赤彩が残り、外側の耳朶着装面は平滑にくびれている。内側の文様は、大洞B式の魚眼状文や、玉抱き三叉文に祖型を求める入組風(非連鎖状)三叉文と、T字状文に三叉文を組合せた2対の文様を4分割させている。後者のT字文は、石川県の八日市新保式にみられる文様で、佐野II式期の粗大工学文に変化してゆく文様と考えられる。

(B)は副葬位置右側に、破損して検出されたもので、最大外径6.2cm、外内径5.9cm、内径4.8cm、厚さ1.9cmの法量で、同じく黒褐色の色調で、内面は赤彩のあとが認められる。表面側の文様は、三叉文の先端が連結し、平行する沈線が、連結部を結び、3分割の鎖状の文様である。

この連結三叉文は、先の八日市新保式とも密接な関係があると考えられるが、勿論、この連結三叉は遅古の様式であるといえる。この様にABの耳飾にみられる文様は、亀ヶ岡式文化圏の第2・第3次伝播圏と考えられる信越国境北より地帯の晩期前葉の特色ある文様と考えられ、岡ノ峰遺跡に於ける大洞式B・新式併行の時期に相当すると思われる。

考察

- 並列したり、直角の線上に隣接したりで、夫婦、親子などの相関関係が、予察される埋葬小群が存在すること。(1号・2号)(6号・9号)(7号・10号)
- 墓壇の規模から、伸展葬が考えられる。敷石長辺約130cm~210cmで、小児から、大人までの身長に合致する。
- 選ばれた場所に墓域を作る。この場所は、丘頂部の乾燥し掘削しやすいローム層を選定している。
- 頭位方向性 8号石棺墓の土製耳飾の検出位置から、頭位は西方向と考えられ、4、5、7号も同一方向の頭位と考えられる。この中から、敷石の形状について観察すると、3号、10号の如く三角形状のものが、みられるが、5、7、8号の形状の観察から、積極的な相関関係が、認められないで、2、3、6、10号の頭位方向は不明である。
- 6号、9号を除けば、頭位方向性の2分極化が顕著である。4、5、7、8号は主軸が西→東方向。1・2・3・10号の主軸は、北→南方向で、6・9号は主軸方向が、やや東にふれているが、後者の分類と考えられる。
- 墓壇の位置と大きさ、前述の如く7号石棺墓は、群の中央部に位置し最大の規模を有し副葬品も丸玉が検出されるなど、葬者の生前に於ける社会的地位が、顕現されていると考えられる。また10号石棺墓を陪葬としているなど、首長的が性格が強く感じられる。

- 7) 8号には大形の部類に入る土製耳飾が検出された。この様な大形品の耳朶着装では、はげしい労働部門の活動は、不適当となってくる。この場合は、着装の難易も問題になってくるが、葬者が、生前特定の人物であった可能性が強い。
- 8) 5号は2個の埋甕を伴って、検出され、ほぼ完存の埋甕は、口縁部に3条の沈線をもつこの地方の後期末から存在する普遍的な甕であり、佐野式土器の特長ある甕として注目されてきた。従ってこれらと同一時期の所産であり、また、埋甕の遺存人骨が、幼児骨例が多いところから、この場合もその範疇にあると考えられ、7・8号とも方向性が一致するから、この墓域を構築した社会の主要な女性の墓とも考えられる。
- 9) 後晩期は、遺構や遺物からみて呪術の盛行する世界であったとされている。宮中遺跡⁽¹⁾（堀之内Ⅱ式期主体）の石棺墓には、敷石のものと、敷かれないと存在する。岡ノ峰の場合は全部敷かれていたと考えられそれだけ晩期に向って規制の概念が、強まった結果だと考えられる。
- 10) その他、C地区での耳飾の出土のあり方が、住居址とは考え難いので、8号墓の耳飾との相関関係や、後晩期の社会の復原の好資料と考えられる。

この様な集団墓が、成立してくる背景には、狩猟・採集の生活が極めて安定していたと考えられる。岡ノ峰遺跡は野沢盆地の中央に位置し、周囲は山々によって隔離した領域にある。だがその奥には重疊たる三国山脈に連なる山々や、流量豊かな河川は、四季折々に資源を提供してくれ、自然の恵みが、全国有数の豪雪地帯の縄文晩期の文化をはぐくんだと考えられる。

（植原長則）

参考文献

- 高橋桂 宮中遺跡発掘調査 一石棺状遺構を中心として一 高井第53号 昭55
 百瀬長秀 土製耳飾に関する諸問題 一その最盛期の諸相を中心に一 信濃31-4 昭54
 武藤雄六 「大花遺跡」長野県史 考古資料編、主要遺跡 中南信 昭58

4 埋甕

発掘を進めていると5号石棺址の西1.2mの所に埋甕が出現した。ちょうど田と田の畦がこの甕の部分でS字に曲る中央部分であり、上下の田の落差は18cmあり畦は上の田から17cm高く畦幅は約50cmである。

掘り下げる直径約35cmで、ひび割れしているがほぼ完形に近いものであるが、口縁は甕の内と外に散乱していた。甕の周を囲むように東西南北の三方から平らな石で保護されていたように思われる。しかも北側にも平石があったことが考えられるが畦の下端だったために田作りの際に除かれたものと思われる。なお、復元した甕から推測すると遺構の中の甕は畦の地表下5cmの場所に口縁が位置し周囲全体を平石に囲まれて埋設され、ふたに平石（安山岩）が使われたものと推定される。

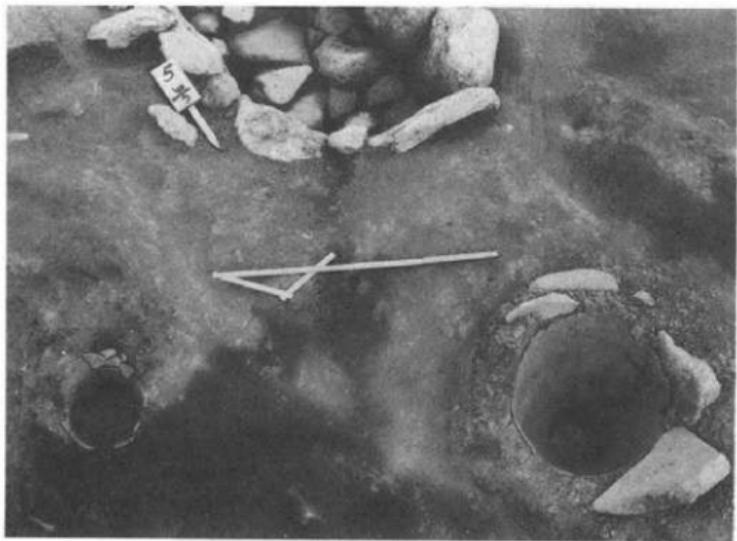
この甕とは別にもう一個埋甕かと思われる高さ5~10cmのリング状に底のないものが5号石棺の頭位と前述の埋甕から二等辺で結ぶあたりの北側に確認された。この甕の上部は擾乱された形跡が強く破片さえも近くになかった。

高さ58cm、口縁の直径45cmと大きなものである。底は平らで外径10cm内径7cmの安定した平面を持っている。口縁の半分と胴の20%を欠損しているがほぼ完全な形で復元できた。

口縁の外側下1.5、3.5、5.5cmの所に深さ0.5~1mm、幅約1cmの3条の沈線をめぐらしているほかは文様は認められない。いちばん下の沈線の中程に補修孔と思われる径6mmの穴が5cmの間をおいて2ヶ認められる。また甕の内外には、煮炊きに使われた際に残されたと思われる炭化物が数ヶ所ある。大洞B式の比較的粗製の土器である。
(島田博文)

5 土 壤

石棺墓址群の8号址北西5mに平安時代の土壤(第20図)を検出した。長径1.8m、短径1.2mの隅丸方形プランのもので深さは25~30cm、壙内の底部からは国分期の壺を主体とした土師器片12点と礫3点の出土があった。土壤の性格は不明である。
(島田博文)



第19図 埋甕

第3節 C地区

1 調査の概要

C地区は野沢層状地の展開するほぼ中央部、岡ノ峰復原住居の南東おおよそ90m離れた水田にあって標高は約463mの地点で、この水田北側には灌漑用の堰が流れている。北西へ傾斜する場所を削平して開田したため土層は東南面において攪乱されていた。

かつてこの水田の所有者がたまたま、翡翠の勾玉・石鐵その他石器類を採取したことがあると聞いている場所である。調査区はC地区とし、約300m²余に2×2mのグリッドを設定。特に遺構・遺物の出土状態から約140mについて精査し、予想外の成果をあげた。(池田実男)

2 遺構

C地区の所在する地形は、野沢盆地の傾斜面と、丘状部の接点に所在する、水田地帯である。発掘面積は、約160m²で、発掘時の所見によれば、水田の耕土は浅く、耕盤上にも、石が累々し、農耕作業に支障があったことが窺かがわかった。(第22図)C地区で考察の対象とする石は、黄色土上に直接、或いは、黒色土(火山灰土)の間層において所在する石で、少なくとも、水田造成後には、移動していないと思われる集石を対象として考えている。黒色土の深さは、耕盤以下で、東(C₁グリット)と西(C₇グリット)のレベル差は、40cm以上で、西側では、石の間に黒土が充填して堆積していた。これは、傾斜面との相乗作用も考えられるが、そればかりではなく、人為的な面も観察された。ここより検出された土器片は、草創期末と思われる、表裏糊文土器から、中期中葉までに該当せしめられるものは僅かで、中期後半より、晚期後葉までの土器が、連続して系統的に検出され、その資料は、北信の後晩期の編年に欠くことのできないものばかりである。(土器の項参照)これらは、中期以前の土器が、やや下層から検出された外は、後晩期の土器の層準は明確に欠けていた。C地区全体から土器片が、検出されたが、後晩期の土器が、集中して検出されたのは、D₅グリット付近で、それは、土製耳飾の最多出土地点と一致している。また完形土器は堰之内II式期の往口土器、蓋形土器、三山の把手の加曾利B₂式の深鉢、大洞B式の浅鉢などが出土している。土製品では、耳栓、耳飾、完形11個、破片25個が、A₄～C₇グリット、H₅～F₆グリットを結ぶ範囲から確認され、特に集中して検出されたのは、B₆・B₈グリット、C₄・C₆・C₇グリット、D₆・D₇グリット、E₃・E₄・E₅グリット、F₅・F₆グリットの約60m²の範囲からである。また炭片、人骨片(焼骨)などが検出されている。石製品は爪形刃部の局部磨製石斧破片、磨石斧、凹石、砥石、石皿、多数の石皿などである。

集石状遺構群について

さきに触れたように、C地区からは、集石状の遺構群が検出された。B地区やE地区と違って、C地区は、自然の石も多数散在する傾斜面に位置するので、或いは隔離的な面も考えなければいけ

ないが前述の如き多量の遺物の検出から、無視できない側面をもっている。

多量の石は、長径 15 cm～120 cm の範囲の石で、特に長径 50 cm 前後の石が、最多数を占める。集石第1層では、D₄グリットの径 1 m 程の石を中心とした、集石（第22図）E₂グリット F₄グリットの環状の集石などが注目され、第2層では、B₂～D₄グリットにかけての列状の集石、E₃、F₂グリットを中心とした2群の集石と環列状の集石が注目される。（第22図）最終的段階と、発掘の過程での所見によれば、（第22図）この集石群には、いくつかの類型を見出すことができた。

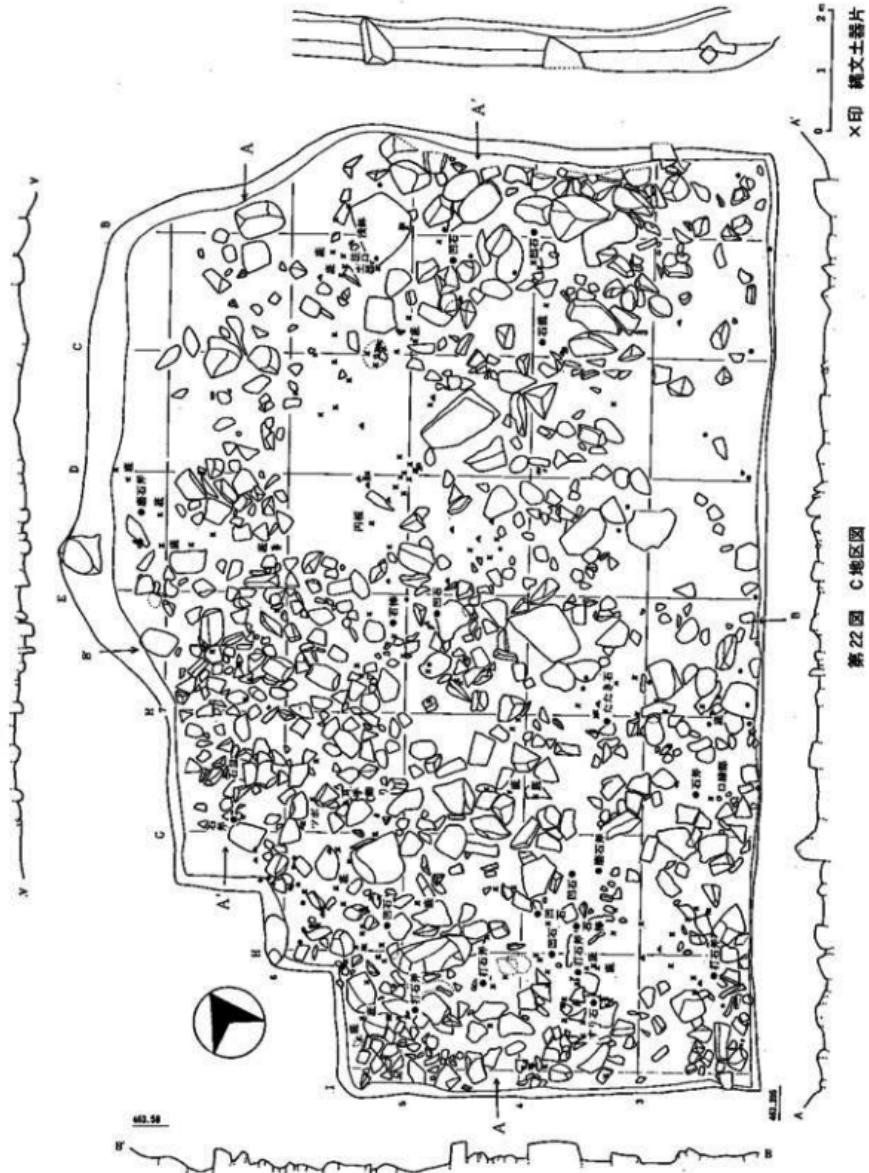
- (1) 長径 20～50 cm の石の 20～30 個で、長軸 2 m、短軸 1 m の梢円の形態をなすもので、黒土上にあり、中に黒土が充填しているもので、遺構の所在するグリットは、①A₃、②A₄、③B₃、④D₃、⑤D₃～E₆、⑥E₆、⑦E₇～F₈、⑧F₄～G₄、⑨G₄～H₄～H₆グリット。
- (2) 列環状を呈する集石で、配石遺構に入ると思われるもの、⑩B₄～B₄～C₄、⑪C₃～D₃、⑫C₄～E₆、⑬E₆～E₆、⑭E₇～F₇、⑮F₃～F₃～F₄～G₃、⑯G₄～F₅～F₆～G₅、⑰G₆～G₇～H₂～H₃グリットに所在し
(A) 形状が長梢円形⑪～⑭、⑯～⑰～⑱～⑲円形⑮～⑯～⑰である。例えば、⑪は、長梢円形で、長軸、外径 2 m、内径 1 m、短軸外径 1 m、内径 20 cm で、⑭は、長軸外径 2.4 m 内径 1.5 m、短軸 1 m、内径約 50 cm で、⑯は、円形状で、直径 1.5 m、内径 70 cm である。これらの集配石状遺構の方位は、東西方向が多く、次に南北方向である。これらの中には、単に列環状のものから、その中に石のみられるものも含まれている。そして群中のC₃～D₃グリットに空間部が存在する、ここは、土製耳飾の最多出土地点と一致している。

現在、配石、集石に関してまだ定説化されていないけれど、各地の類例は、着実に増加しつつあり、それに伴って研究、考察されている。それらを大別すると、(1) 墓であることを基本とする説 (2) 山岳や石自体の崇拝を内容とする、祭祀を本質とする説に分れている。この大別に従うとすると、岡ノ峰の遺跡の場合は、(1)の類型に包括され、これを裏付けるものとして、多数の耳飾の出土、埋納土器の検出、焼骨の存在などで、単に石で囲んだものから、上に石を並べたものなどが、葬送儀礼のうちに入り、やや大きな石を中心にして集石した遺構は、また宗教的儀礼の何かを示しているのだろう。また同一遺跡でありながら、B 地区の石棺墓遺構との墓制の違いをどう解釈すべきか、時期的な差とすると、C 地区の墓址的な集石は、時期が極めて接近していると考えられるからである。だが、残念ながら、中期末以前の土器片は除くとしても、後期から、晚期後葉まで、連続とする出土土器や、後期末から晚期の耳飾の分析を通じて、今後さらに時期差や、同一時期に於ける、形態の違いなど、検討を加えなければならないと考えている。

（擅原長則）

参考文献

- (1) 永峯光一先生教示
- (2) 阿部義平 配石 繩文文化の研究 9 繩文人の精神文化 雄山閣 昭 58



3 遺 物

C地区の石器・石製品について総点数は307点である。それぞれの石器について概要を報告したい。(第2表)

石鎌 貝岩を主として、チャート・綠閃岩・黒曜石その他の石質のものがみられる。有柄黒曜石製17個他は82個で黒曜石の割合は17%である。無柄は黒曜石13個他は23個で黒曜石の比率は36%で有柄に比べて無柄は約2倍である。有柄無柄の总数は135個である。

打石斧 貝岩・硬砂岩が主で、短冊形破片3個・完形6個・分離形破片7個完形なし・撥形破片なし完形5個で总数は21個である。破片ではあるが中の1点は、刃部両面とも磨かれている半磨製の打石斧である。

磨製石斧 破片14個完形2個で、その中に破片ではあるが小形ノミ形石斧が1個ある。

石錐 1個は、下部がやや中凹で、上部は鍔頭形を呈しており中央部に帯状の凹がある。最長部は5.8cm最大幅4cm厚さは、2.7cmである。他の1点は卵形で最長部は6.1cm・最高部3.4cmで卵形である。

凹石 大きなもので長さ13cm・幅10cm厚さ6cm尤も小さいもので長さ6cm・5.8cm厚さ3.7cmの河原石で握拳大以上のものがほとんどあり、表面に凹のあるもの24個・表裏に凹のあるもの42個で、いづれも1~2コの凹をついている。凹の径は3cm以内・深さは1cm以内である。总数は66個である。

石棒 大小5本で、完形は1本だけである。他は破片で、完形の1本は一番小さく細いもので全長が6.5cm、先端部寄りで最大幅1.5cmである。

台付石皿 舟形を呈しており約2分の1が残存するのみ、すり凹の最深部は、1.1cmである。すりくぼんでいる欠如部分での最大幅は、16.5cmである。舟形の先端部の高さは7.8cm幅は16cmで、皿部の厚さは5cmである。底部には径約3cmの凸起部2ヶ所がみられる。これが石皿の台部で石質は安山岩である。

すり石 大小7個あり大きなものは、径10cmものが2個ある。小さなものは径2.5cmで他の石は、いづれも握拳以下のものである。

敲打石 15個あるが1番大きなもので最長16.5cm最大径6cmである。完形は5個で他はいづれも欠けている。

多孔石 下部の最長部25cm最大幅15cm厚さは10.5cm・上部の最長部19cm最大幅15cmの橢円形の安山岩で、下部に14ヶ所の凹穴がある。又上部にも22ヶ所の凹穴がみられる。

砥石 いづれの石も磨り減らされていて一部は欠如していた。

磨小石 4個のうち2個は綠閃岩で、1個は一辺の長さが約3cmの角まるの三角形を呈して居り、最厚部0.7cmである。他の1個は蛤形で最長部5.1cm最大幅3.2cm、最厚部1.7cmで乳白色で、一部茶褐色の斑模様がみられる。他の2個は小さく径1.5cm厚さ0.5cmではば円形である。

円盤状小形石製品は径2.8cm最厚部で1.1cmで鍔頭形の円形石製品である。(池田実男)

第2表 石器・石製品表

種別		地区	A地区	B地区	C地区	E地区	表採	合計	摘要
石 鐵	有柄	チャート他	71	48	81	1	3	212	石鐵總計 303点 A地区97 E地区 8
		黒曜石	14	1	17			32	
	無柄	チャート他	9	7	23	7	4	50	B地区56 表採 8
		黒曜石	3		13		1	17	C地区 134
打石斧	短曲形	破片	4	2	3	12		21	
		完形	5	2	6	3		16	
	分銅形	破片		1	7	7		15	
		完形	2	1				3	
	撥形	破片	6	1		5		12	
		完形	5		5	2		12	
磨石斧	完形	6	1	2	4			13	片刃石斧 1
	破片	19		14	3			36	小形ノミ形 6
石錘			2	11	15		1	29	
尖頭器	細形	2	3	2				7	
	籠形	5	5	2	1	1	1	14	
石 凹 石 石 す り 敲 多 砾 輕 磨 円盤状	刀	1						1	
	錐		1	2				3	十字切込み 1
	石	23	7	66	7			103	表に孔35 表裏に孔68
	棒	5	1	5				11	自然石 4
	皿	2		1	1			4	台付石皿1 小形石皿1
	石	15	1	17	8			41	小形すり石 7
	打石	7		15				22	
	孔			1				1	
	石	2	1	4				7	
	石	1		1				2	
小型石製品				4				4	
				1				1	

第4節 E地区の調査

1 調査の概要

E地区は、復原住居のすぐ北側に位置する水田で、今回の調査区の中で最も西側にあたっている。復元住居から北側へ急傾斜している地形を平坦に開墾したところで、復元住居の地表面からは、最高で約2mほど下がっている。E地区的東側には、耕作用の道があり、北側は約1.5mほど下って農道となっている。(第14図)

この水田に2m×2mのグリッドを46カ所設定し、総面積約120m²を調査した。

層序は、第1層に厚さ約20cmの耕作土があり、第2層は厚さ約15cmの床土である。第3層は、約10cmほどの礫や土器片を含む黒色土層で、厚さは約50cm以上である。第3層には、厚さ約40cmの黄茶褐色の粘土層、また厚さ約10cmの黒色黄褐色の混合層が混っていた。これにより、E地区は以前、畑であったものが水田に転地されたのではないかと思われる。

2 遺構

E地区において検出された遺構は、C-D-7-12グリッドにかけて集中して確認された、落ち込みだけであった。落ち込みの深さは、いずれも5-10cm前後で、あまり深くなかった。

C-11グリッドにおいて検出された落ち込みは、幅約0.3m、長さ約2mの溝状を呈したものであった。C-12グリッドからも、幅約0.2m、長さ約1.2mの溝状の落ち込みが確認されている。これらの溝状の落ち込みは、数回にわたって掘られたらしく複雑な形をしている。

C-9グリッドからは、長径約1m、短径約0.6mの楕円形を呈する落ち込みが見つかり、この落ち込みから約5cmほど離れたところでは、長径約1m、短径約0.5mのやはり楕円形を呈する落ち込みが確認された。この落ち込みと溝状の落ち込みからは、土器片が集中的に出土した。

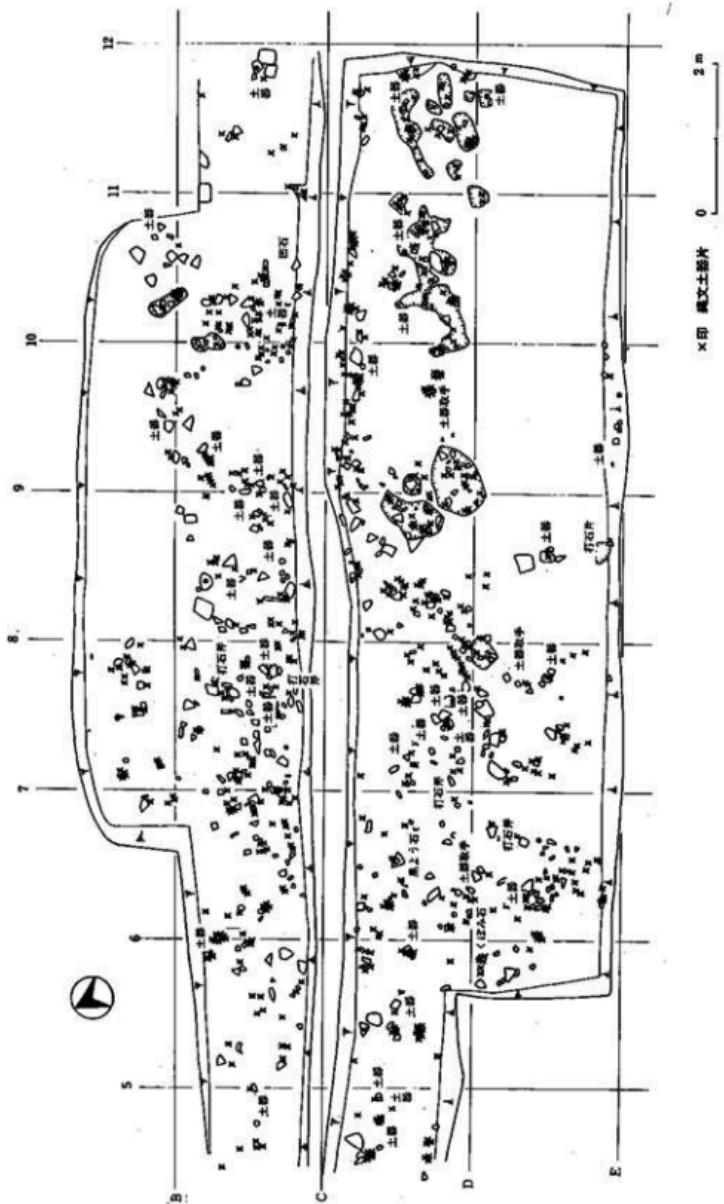
さらに、C-9、C-11、D-8、D-11の各グリッドからは、直径0.3m前後のピット状をした落ち込みが確認された。このピット状の落ち込みから、土器は數点出土したのみであった。

E地区において検出された落ち込みは、その性格を断定するまでには至らず、住居址や土壙と結びつく可能性も少なかった。柱穴・炉址等の確実な遺構を検出するために、遺物を取り除いてさらに精査したが、いずれも検出することはできなかった。

3 遺物

(1) 土器・土製品

E地区において検出された土器片は、縄文時代中期から後期にかけてのもので、その総数は約800点であった。その中でも中期後半の曾利式のものが多く出土した。完形のものは1点も検出されず破片ばかりであったが、底部がそのまま出土したり、比較的大きな破片も多かった。また取手の破片もわりと多く出土した。



(2) 石器

E地区から検出された石器は合計60点で、A地区の217点、C地区の305点と比較しても少ないものであり、今回の調査区ではB地区の92点に統いて、最も石器の検出が少なかった。

石器の種類は、石鎚が有茎のもの1点、無茎が7点の合計8点であった。材質は黒曜石製のものは1点もなく、玄武岩質のものが5点、頁岩質のものが1点、チャート質のものが2点である。

打製石斧は29点検出され、短冊型のものが15点で、完形は3点であった。分銅型のものは14点検出され、半数が完形であった。石材は頁岩・硬砂岩・玄武岩質である。

磨製石斧は7点が検出された。そのうち3点が完形で、小型ノミ型のものや小型両刃状のものも含んでいる。材質は、硬砂岩・閃綠岩質のものが使用されている。

その他の石器としては、石皿・円盤状小型石製品・石槍が各1点ずつ検出されている。敲打石・石棒・石錐は、他の地区から出土したがE地区においては検出されなかった。特に石錐はB地区から10点、C地区から15点出土しているが、E地区からは1点も検出されなかった。

(3) 骨片

B-6グリッドの地表下約60cmから、土器片・礫に混在して、骨片が数点検出された。これらの骨片は、獸骨のものとみられる。

E地区は、前述したように復原住居から北側へ急傾斜している地形を平坦に切り開いたところで、復原住居の地表面からは、最高で約2mの段差がある。このため発掘を始める前から、かなり擾乱されているのではないかと予想された。発掘を開始してみると、残念ながら予想通り擾乱がひどく、土器片が多数出土するにもかかわらず、1個体に復原できるものもなかった。

復原住居は、第1次調査で検出された住居址を復原したものである。当時の調査では、この住居址から、E地区より出土したものと同じ曾利I~V式の土器片が多数出土している。E地区はこの住居址に隣接していることからも、住居址と同じ時代のものと考えられる。

(酒井健次・山口昌直)

第5節 D・F地区

1 D地区

岡ノ峰遺跡復原住居北東約70mの段状の水田跡で、かつて遺物の出土が伝えられているため 2×10 mのグリッドを設定精査した。遺構を検出することが出来なかったが、石器製造過程の石屑数点の出土にとどまった。

2 F地区

岡ノ峰遺跡復原住居の西側約27m離れた水田で、この地点に 2×4 mのグリッドを設定し、更にその西4m離れた地点にも同じく 2×4 mのグリッドを設定精査したが、遺構の検出はみられなかった。遺物には縄文土器細片数点と石屑数点の出土をみたのみであった。(池田実男)

第6節 土器・土製品

1 土器

昭和59年度の第3次、岡ノ峰遺跡の緊急発掘調査に於いて出土した土器は、復原された土器数点を含む、整理箱(40×60×10 cm)約80箱に及び、内容は、草創期土器から、弥生期を除いた、須恵・土師器に及び、1片ずつ、皆見、摘出するにも、數日間を要した。從ってここに呈示した土器は、その中より点検出した一部であって、この裏には、細片で呈示できないもの、無文土器の膨大な量が、分析整理されずに存在する。ここで報告書作製までの与えられた時間が極めて短期間のために、調査者の不明な点に合せて、先学諸氏の点検を得る機会にも恵まず、提示した資料が、精製、粗製などと偏在した呈示も感じられるが、地域の研究者として今後、さらに分析研究を進めてゆくために煩雑と思われる資料も呈示した。

これらの土器群が、集中的に検出されたのは、A・C・Eの3地区で、その他のグリットからは、散発的な検出で、耕作中のローリングのため、磨滅した土器が多かった。遺構との関連でとらえられた土器は、B地区の埋甕だけで、A地区でも、1時期の住居址としては、検証されず、後・晩期の土器が、混在し、壇之内I式期の土器が注目された。C地区は多くの集石の間から、土製耳飾その他と、混在状態で、層位的には、中期土器と後晩期土器との大別しか確認されていない。E地点は、中期後半の土器を主体に出土し、後期前半が続き、以後は少量の検出にとどまる。從って、ここでは、他地域の編年を借用して、岡ノ峰遺跡の土器と対比させ、変遷・特色の概要を記したいと思う。長野県でも北部、新潟県境に近い位置にある本遺跡の中期後半から晩期までの資料が北信濃の地域の縄文時代の研究に一石を投じ、光明を与えてくれればと願っている。

第Ⅰ期 (草創期)

第1群 表裏縄文土器 (C 1)

C地区集石群の下層より1片だけ出土した。黒褐色の色調の堅緻な焼成の土器で、器厚は0.6 cm
外面は縦位、内面は横位に施文されている。

第Ⅱ期 (早期)

第1群 押形文土器 (細久保式併行塞ノ神式)

第3章第3節(第2次・58年)参照

第2群 早期後半 条痕文土器群、(C 2~5)

4片の検出にとどまるが、同一個体の破片で、厚手で焼成の脆い黄褐色の土器で、外面に条痕文、格条体圧痕文が押圧され、内面にも条痕文のみられるものである。

第Ⅲ期 前期前半の土器群

第1群 花横下層式併行 関山式土器

第3章第3節(第2次58年)参照

第Ⅳ期 前期後半の土器群

第1群 諸磯C式 (下島式)

第3章第3節 (第2次・58年) 参照

第V期 中期前葉～中葉の土器群

北陸文化圏の土器で、地域的には、新潟県上越地方と関連の強い土器群で、千曲川下流地帯も含まれるが、量的には少量である。第3章第3節(第2次・58年)参照

第VI期 中期後半の土器群、

第1群 曾利式併行土器

岡ノ峰遺跡で検出量の多い土器群で、昭和49年の第一次発掘の際、検出された住居址(復原住居)⁽¹⁾は、調査時の所見によれば、曾利III-V式期の土器が併出し、該期の複炉を伴なった形態をしており、曾利I式～V式の土器が多く検出されている。今回の調査に於いても、この復原住居の北方、E地区よりもっともまとまって出土した。

〔第1類土器〕 曾利I式併行土器、(A 1～10・C 22・23 E₁～E₅ 1～24、48、107、108) E₁～E₅図に代表される土器で、胸部は、樽形状を呈し上半部が外反する器形の曾利式土器で、焼成は堅緻である。口縁部は無文帶で、頸部に渦巻文を基線とし半截竹管による横位の深い3条の隆起線で、割し、胴部以下は継位の施文となり、胴部には3連の渦巻文を配している。

〔第2類土器〕 (A 6 C 32・33、E 36・40・42、52～63 131・132)

太い隆帯をめぐらせた上に刻目を入れた土器で、隆帯内に繩文を施し隆帯の縁を沈線をめぐらせてている。これは、北陸の串田新式に多用される文様で、曾利II式期より後続の形式にもみられる。

〔第3類土器〕 (E 43、155、156)

曾利II III式期の所産で、渦巻文がくづれ、文様間に綾杉状の細い沈線を充填する。器形は、曾利系だが、文様はローカル色の強いものである。

〔第4類土器〕 (E 25～34 35、39、151～154 C 16)

曾利IV-V式期の八字状、綾杉状、雨だれ状の太い沈線の土器で、隆帯の渦巻は簡略化する。また円形の隆帯を作ることもあって厚手の在地色の強い土器である。

〔第5類土器〕 (E 46、47)

加曾利E1式期頃の所産で、内折した口縁に横位に弧状などの沈線をめぐらせ繩文帯もみられるもの。

〔第6類土器〕 1種 (C 24、E 67)

加曾利E2・3式期の土器で胴部の直上部と外反部の接点に施文される文様で、繩文地文に、交差点状に沈線を組合せた文様の土器。

(2種) (C 64、65) 繩文地文、縦の沈線間に波状の沈線のみられるもの。

〔第7類土器〕 (A 11、12 C 25～27、30、E 44)

加曾利E4式期の繩文地文を幅広く弧状に磨消し縁が、やや盛りあがった土器。

その他 E 157~186 は主に加曾利E式の影響をうけた土器片である。

第Ⅶ期 後期

後期前葉土器

第1群土器、称名式併行土器 (A 18~45、C 70~76、E 187~196)

後期の初頭に位置づけられる、称名寺式土器は、県下では瀬戸市の大安寺式と併行関係にあり、岡ノ峰遺跡は、その称名寺式土器の分布圏の北辺に位置すると思われる。検出したものは、鉤状文とJ字状文などの土器片で、全容を知る資料は得られていない。ここに注出したものは、その2式期に相当すると思われ、1部は、三十稻場式土器と共に存すると考えられる。器形は、ほぼ直立するものと、胴部でくびれて上半部が外反するものの2種がみられる。

第2群土器 堀之内式併行土器(A 46~95、98~128 C 100~150、266~273、275~277 E 197~239 255~274)

岡ノ峰遺跡の堀之内式併行土器は基本的には、関東西部地域の堀之内式土器と軌をひとつにするが、山ノ内町夜間瀬、伊勢宮遺跡よりさらに分布圏の北辺に所在するため、地理的関係上、東北地方と関連する土器や、越後の三十稻場式との交流もみられるが、堀之内1式併行の土器は、先行の称名寺併行土器の流れの中に成立したことが、理解される。堀之内1式は、地文に必ず、縄文を用いその上に沈線で藤手状、S字状、溝巻状の文様をもつとされ、2式は沈線が細かく鋭利で、幾何学的構図の文様で、先に文様を描いて縄文を充填する手法がみられ、口縁部に細い紐線と8字状の貼付がなされている。関東地方とは、基本的には、一致するが、地方色の濃い土器群であり、同じ様式の流れにあるので、堀之内式併行土器として掲示した。

第1類土器 (C 148 E 203~205)

大形の複形土器の破片で、口縁形態が、大きな波状口縁で、波頂部が円形で、頂部が水平或いは円く凹み、その下から大きな橋状把手のみられる、破片があり、これらは、称名寺式から堀之内1式期にかけての地方色豊かな土器と思われる。

第2類土器 (C 107、108、112、114、115、117)

突起口縁や波状口縁を呈する土器で、C 114は口唇が刺突整形によって8字形を呈した2段突起で、円形刺突を、突起部につけ、沈線の基線として、突起の基部に平行の浅い沈線もみられるが、一見、フクロウ状の文様に見える。福島県の綱取2式との関係の認められる土器で、C 116の口唇形態の土器も同種であると考えられる。またC 108の土器の突起は、C 114の後続する形式と考えられ前2者は1式に後者は縄文施文法により2式に相当しよう。

第3類土器 (E 206~217)

胴部が直し頭部で大きく外反した器形の土器で口縁部の内折部分に多くみられる溝巻文、「八状」「C」状の文様で、溝巻文のモチーフから生れたものと思われ得。これらは、S字状文に変化(A 104、107)してゆくと考えられる。また胴部が、幾何学状の文様のみられるものは、(C 213、224、225) 山の内町夜間瀬・伊勢宮遺跡の同種土器に比べて、沈線が太く、簡略化された印象を

うける。但しC字状（円弧文）八字重ね（矢羽根状）のものは縄文施文が、先に描かれているが、2式に該当すると思われる。腕骨文に類した文様（C 206～210）も岡ノ峰遺跡の特色ある文様と思われる。以上の土器は、すべて粗製土器に含まれる。精製土器のA 114、115の土器も、同期の所産と思われる。

第4類土器 (E 258～269 272、273)

太い沈線で曲線を描く土器も壺之内式に併行すると思われる。E 272 の小形壺形土器に代表されるもので、縄文施文のものは、沈線文様後に充填されている。E 260 261 263 の文様は、加曾利B式の前段階を思わせる。

第5類土器 8字のみられる土器(A 46、47、52～56、57、58、76、94、C 113、128～135)

主に精製土器に使用される文様で、提示した資料の多くは、2式併行とみられるが、C 134 の精製土器（口縁直径約14cm）は1式相当と思われ、小波状の内側の口唇にも8字文がみられる。

また内面に縁帶文のものもみられる（C 128、141、A 55）8字文を結ぶ凸帯の紐線文は、1条から3条までみられ、刻み目の文様は、鏡情を呈するもの（C 128～132など）縄状を呈する（A 61、63、64、67、68など）が見られるが、後者は後出的とみられる。

第6類土器、(A 98～100、102、106、109、110)

A 98 の土器にみられる如く、口縁部が、つよく外反する器形の粗製大形深鉢で、赤褐色の焼成堅緻な土器である、口縁部に無文帶がみられ、2条の沈線間に列点文があり、文様のモチーフは、宮城県の南境式に類似し胴部には、縄文施文がみられる。この様な施文は小形の土器にもみられ、2式の粗製土器の文様と推定される。

第7類土器 (C 188、121、125、A 52、55、56、59、60、64、67、68、117～120、125)

沈線の構図が幾何学的文様のもので、精製土器の胴部の文様である。充填する縄文は後より施文されている。2式期の所産と思われ、この精製土器群にも炭化物の附着が多く認められる。

第8類土器 (C 266～273、275、276)

C 266 の土器は、注口部のついた破片もみられ、(C 523) 2本単位の沈線で弧状、平行に描いている。C 270 の文様は扇状の沈線、半円状の沈線で、文様帶の間は縄文施文している。これらは群馬県矢太神沼遺跡出土土器と同種の文様で、1式に伴うものと思われる。

第9類土器 (C 277)

外面無文の精製土器で、口縁部の把手はソロバン玉状を呈し、さらに上と横に小さな球状の突起を附し口縁部へ曲線の隆線で連結し穿孔が、3ヶ所みられる。その隆線の交差点にも球状の突起を附し、隆起線が横位にのびて、上下を沈線が平行している、2式に行するものと思われる。

C 523 の注口土器は、器形の球状を呈し、低い台部を附着させている。注口部と把手は、やや離れて附着し、把手の先端は外反して尖ると思われるが、基部より折損している。注口部もやや上向きに附着されるが、これも基部で折損して、形状は定かでない。上半部は沈線による横帶文が2段にめぐり、縄文を充填して把手の部分で合致している、2式期の所産と思われる。

後期第2群土器 小結

ここに提示した第2群土器は、ほとんど壠之内2式土器で、岡ノ峰遺跡の壠之内併行土器は、2式に主体性があることは明かである。1式段階の福島県や、群馬県の影響のみられる土器が注出されたが、これらは、称名寺式後半段階の土器や、新潟県の三十稻葉式土器と組成、共存していると考えられる。2式段階で、完全に関東西部地域の壠之内式の傘下に組み込まれたと考察されるのである。

後期第3群土器 (A 129、130、136、156、180~185、C 58~69、E 241~254)

三十稻葉式土器とみられるものを本群とした。長岡市閑原町三十稻葉遺跡を標式として後期初頭、越後、信濃川沿岸を中心に分布する。地方色の濃い土器群で、平口縁、波状の大小深鉢、浅鉢、甕、瓶形土器、王冠状蓋、を組成し、頸部には小橋状把手がみられ、施文は、刺突、凹瘤無文、磨消繩文がみられ、頸部の凸帯に連点、刻目文があり、範状工具による、花弁、爪形の刺突文がみられるとしている。長野県北端の本遺跡はもとより、山ノ内町・伊勢宮遺跡、高山村坪井遺跡など、善光寺平全般の該期の遺跡に伴出し、遠くは松本方面まで及んでいる。

提示したものは、直上した胴部に口縁部が、外反する器形のものが多く、平口縁で、小橋状把手(A 181、182、184、C 67、68、E 254)が附着する。中には口縁部に凹みのある凸瘤がみられる土器(A 68、E 245)もあるが、多くは、口縁部の無文帯を横位の凸帯で区分し、凸帯上は、連点刻目文をつけ、胴部は、各種の刺突文を施文する。この刻目文は、中期後半の北陸の串田新式の土器の後続と考えられないだろうか。

施文具は、範状のものと棒状のものがみられる。

第1類土器 刺突文のみられる土器には、

1種、爪形状のもの (A 169~180、C 68、E 254)

2種、連点状のもの (A 156~158、162~164、E 244、247、248)

3種、帯状施文のもの (E 249、253)

がみられ、岡ノ峰遺跡には、花弁状のものが検出されず、時期的に追求できそうである。

第2類土器 細沈線の土器

この地域では、中期後半の曾利式併行や、加曾利E式土器から細沈線の土器がみられるが、三十稻場式にも齒齒状工具による細沈線文の土器が伴出する。

1種、平行の沈線文 (A 129~135、183)

2種、曲線や斜状に引いた土器 (C 77~82、E 83~92) がみられ、口縁部に無文帯をもつものが、三十稻場式の特長である。

第3類土器 繩文施文土器

頸部無文帯の下の連点文をもつ凸帯をつけ、胴部に繩文を施文するもの (A 141) も三十稻場式に属すると思われる。

岡ノ峰遺跡からは、壠之内1式土器の影響のみられる三十稻場式土器は、当然のことながら検

出されなかった。

第4群土器

次の後期中葉に位置されるのは、加曾利B式土器である。加曾利B式土器は、千葉県加曾利貝塚、B地点発掘の特徴的な土器を標準として命名され、現在3形式に細分されている。岡ノ峯遺跡は、この関東東部より距離的に隔たり、無文の深鉢の存在など土器組成に違いがみられ直接的には、関東西部地区の影響をうけた土器がみられる。それは、精製土器のあり方に明確に現われている。ここでは、堀之内2式からスムースな変遷をたどり、B₁式とその伝統上にあるB₂式併行土器を第4群土器とし、東海地方の影響の土器や、中部山地のローカル色の強まるB₃式、高井東式（曾谷式併行）を第6群として考えることにした。

第1類土器 深鉢形で耳状把手の口縁の下に附せられる文様の変遷から

1種 逆「の」字形 (C 187、188)

2種 「S」字形 (C 183~185、258)

以上はB₁式段階に附けられる文様で縄文帯の施文も縄文施文を先に行い、沈線を描いている。

3種 「川」字形 (E 176、177、179、180、219)

4種 「()」字形 (172~174、178、181、182)

以上が、B₂式段階の文様と思われ、縄文帯の施文も、沈線間に後に行っている。なお、C 194の耳状口縁は、粗製の深鉢に附されたもので、B₂式段階の逆S字状の口唇形態から、簡略化された、土着の土器の文様と考えられる。

第3類土器 平行線刻目文土器

外反し口縁部が僅かに内折する鉢形土器などの上半部に附される文様で、縄文地文に3~5条の平行沈線をつくり、

1種 切断状 (C 190、191、193、208~212、A 206)

2種 連続状 (C 152、213、224、226)

がみられ、1種のC 193は、内折した口唇上と内折の段状部に列点文をめぐらせ、5条の平行沈線を内面にめぐらせた精製土器で、C 224は、口唇部に8字文が残り、外面は無文で切断の上、平行線を描いて、内面の沈線は2条みられる。C 209の土器は、逆「の」字状に類する粘土類を貼付しており、以上の第3類土器はB₁式併行土器と考えられる。

第4類土器 (C 218、219、221)

半精製の深鉢形土器の外面上端の口縁にみられる文様で、三角連續文がみられる。C 221は縄文無文地に沈線が4条平行し、口縁上に三角文を作り、胴部には斜状の線がみられ、口縁の内折はゆるく、段部に列点を施文し、下の沈線は3条である。(C 218、219)は同体と思われる浅鉢形の精製土器の破片である。以上はB₁式に併行するものと思われる。

第5類土器 (C 195、196、200、A 233、その他)

内面装飾を発達させた土器で、内面は、口唇の刻み目、段部に列点文がめぐり、下に3~5条

の沈線文がみられ、中には 7 条に達するものがある。C 200 は浅鉢形の精製土器で、口縁部に 2ヶ所、内部より穿孔した個所があり、復原すると、4ヶ所の対の穿孔とみられ、従って、文様も 4 単位に施されていたと思われるが、下半部は破損のため不明である。外面は無文で、口唇に、「縄状」に刻み目を入れ、下は 2 本の平行沈線により、隆起状に盛りあがりをみせ、下は曲線状の沈線を施し文様区画外は、縄文を後から施している。

加曾利 B 式は、内面文様帯の変遷から、第 3 段階の変化が認められる。(1) 口縁内側に 12 条の沈線、(2) 内面装飾帯の発達、(3) 内面装飾帯の退化である。

第 6 類土器 (A 220~228, 240, C 243)

細沈線による、紐組状の文様の小形精製土器で、口縁に 8 字状に印刻された、突起 (A 222, 227)などがみられる。文様には、(a) 縄状のもの、(b) 紐組状のもの、(c) 2 本単位の曲線などがみられる。A 240 の土器は、平面が C 字状の膨みのある異形の双口注口土器で雪国の中核を連想させるような器形をしている。胴部には注口の基部が、残存し上半分部は失われている。

文様は、同体と思われる破片を含めて、渦巻状、曲線状、紐組状がみられる。

この土器は B₁ 式に併行するものと思われ、同種のものは、高山村坪井遺跡から検出されている。

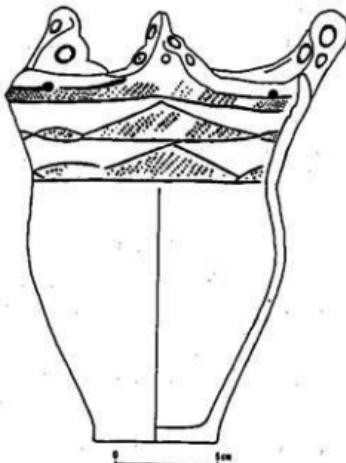
第 7 類土器 (第 27 図) 3 単位の耳状把手で口縁部に縄文施文のもの、

C 地区 7 グリットから検出されたもの

で、口縁は、堀之内 2 式からの伝統の三山の耳状把手の精製深鉢で、耳状把手をもち、これは第 1 類土器と相似する。耳状把手の口唇には、左右 2 個の穴がみられ、頂部下は、内部から穿孔されている。耳状把手の下には、三角形状の区画文が 2 段にみられ、これは縄文施文が先に行われて、沈線と、無文帯を磨消している。三山の中間には、円形刺突がみられ、文様は、くびれ部上の上半部に限られ、内部には、痕跡状に 2 条の沈線が、みられる。耳状把手と内折の形状や、文様は B₁ 式の後半の姿相を示しているが、胴部がくびれ、下半部がはる器形は、B₂ 式段階を示しており、岡ノ峰遺跡の地理的な位置が反映していると思われる。

第 8 類土器 (C 166, 167)

深鉢形の器形で、C 166 は口唇に斜状に



第 24 図 加曾利 B 式土器図

刻みを入れ、外内は縄文地文に 5 条の平行沈線に上下に蛇行線がみられる。内面は 2 条の凹部に

つくられ、間は隆起帯になっている。C 167 は、低い波状口縁につけられた文様である。B₂式の所産と思われる。

第9類土器 (A 208、C 170、171、235、235、236)

連続刺突文のみられる土器で、粗製の深鉢形土器である。A 208 は口縁部の内面に連続刺突文⁽⁴⁾がみられ、外面は、縄文帯がみられる。他は連続刺突文の類で、三十稻場式の系譜上の土器と考えられ千曲川水系、穂高町離山遺跡、伊那谷方面にも検出されている。

第10類土器 (C 244、245)

波状口縁の円い土器で、おそらく五山の破片だろう。下部位の破損の形状から、下部は、器形が、或る程度直上していたものと思われる。文様は、口縁に添った沈線間に縄文を施文し下に無文部を作っている、切損部に沈線がみられるが、以下不明である。口縁の形状から、B₁式からB₂式に該当せしめるのが妥当と思われる。

第5群土器 (C 211)

新潟県の三仏生式の影響とみられる半精製の直上する深鉢形土器で、内面は無文、外面は右傾の斜縄文に口縁に添った沈線が2条みられる。拓図には図示していないが、向かって左側の口唇の形が、肥厚して、御飯の杓子状の三仏生式独特の形態をなしており、その影響下の土器と思われる。

第4群、第5群、小結

以上みてきたように、後期中葉の岡ノ峰遺跡は、精製の小形土器は、関東西部地域の影響下にあり、粗製の土器は、地方色豊かな多くは無文或いは、縄文施文の土器を組成すると思われるが岡ノ峰遺跡では、中期後半から晩期までの複合遺跡のため、その片鱗を知るのみで、全貌を知るには、更に研究の進展が望まれる。

後期後葉土器

第6群土器

高井東式、安行式併行土器

この段階になると、岡ノ峰遺跡でも、矢羽根状沈線の土器が主流となり、後半は、東海方面の影響のみられる、凸瘤の粗製土器が多く組成するようである。これは南佐久郡の中ノ沢式土器や、新潟県妙高高原町の藤生遺跡の土器組成と似て、この期の東海方面からの影響が大きかったことを裏付けている。これを深鉢の把手の変遷からみると、

第1段階 把手口縁がもっとも発達する。(A 255、256) A 255 は、円頂部から3段にくびれ、下に隆帯を弧線に組合せている。(A 256) は、この退化形と思われる。

第2段階 いわゆる扇状の把手となる段階で、(C 263、265) 両者は平行する太い沈線がみられる点が注目され、C 265 は、加曾利B₁式の耳状の把手の退化形と考えられる。

第3段階 山形状の口縁になる段階で、(C 246、250、259、290、299、307、C 250) は口縁に添った凸帯上に連続刺突が加えられ、下に沈線がみられる、C 250 は無文であるが、この段階

順に変遷してゆくものと考えている。C 290 の稻妻状の蛇行沈線は萍生遺跡にもみられる。

第1類 斜行沈線のみられるもの

1種 矢羽根沈線は、太い線で描かれている (C 315、319、A 245、246、248、251) これは、体部の文様として描かれている。

2種 矢羽根状沈線の施文が、不規則な斜行を示めるもの (C 308、309) これは平口縁の文様として描かれている。

3種 斜格子状に描かれたものには(A)太い(B)細いの2種類の沈線がある(A) (C 291、293~295) C 295 は、口縁部がやや外反する器形の深鉢で、頭部に横走の沈線が1条みられ、体部は不規則な斜格子状の沈線がみられる。これに反して C 294 の如く整った斜格子文もみられる。

(B) (C 288、289、292) 細いものは口縁部近くに施文され、乱れた文様である。後出的な要素を含んでいる。

4種 鋭く横に流れる交互斜行沈線、(C 250、303、310~312、318、321、323~325)

この中にはC 303 の如く口縁の深鉢で、口縁部に3条の沈線文のみられるもの、C 310~312 は平口縁の深鉢形土器で口縁下に幅広い四線をつくり隆起線文状を呈し、その下の体部に施文されている。

5種 口縁部に凸瘤がみられ、下の沈線も不規則のもの、(A)太い(B)細い沈線。

(A) C 302、304、これらは、口縁下の隆起帶上に付加されている。

(B) C 301、ゆるい波状の小形の深鉢形土器で、口縁部に等間隔に凸瘤が付せられ、斜走の細い沈線のみられるもの。

6種 帯繩文に斜行沈線のみられるもの、(C 313、314) 平口縁の深鉢の 313 は太い沈線、314 は無文帯を挟んで2帯のLR繩文を施文し下に斜行沈線が施文されている。

7種 口唇部に竪おさえの刺み目がみられる小形深鉢に施文された矢羽根状沈線。

8種 沈線が並行し弧状に流れるように施文されたもの (C 287、296、328)

C 287 は2連の凹みのある突起口縁の土器で、C 296 は口縁下の横走沈線下より施文されている。C 328 は平口縁の深鉢で、細い沈線で、3条による不規則な弧線を描いている。

9種 斜行(矢羽根状) 沈線に他の文様の組合されたもの (C 297)

矢羽根状沈線の下に2条の沈線がみられ、下に横走の蛇行沈線がみられる。

10種 (C 326) は、台付鉢?の台付部にみられる斜行沈線である。

11種 (C 242) 大形の口縁部が大きく外反する深鉢の破片で頭部に沈線1条が1周し下に不規則の沈線が僅かみられて以下は不明である。この土器の内側口唇に低い凸瘤が等間隔に附せられている。

12種 (第25図) A地区出土の完形土器

五山の波状口縁で、胴部でくびれて大きく外反し上からみると朝顔の花弁を呈している。口唇は、やや内側に傾斜している、内部には炭化物が附着し、外面底部には、2次焼成の赤褐色の部

分もみられる。文様は口縁と平行する沈線の間に縄文帯、胴上半部は、縄文施文様、沈線で、孤状に囲んだ、浮雲状の施文である。胴部のくびれ部は縄文を筋のある連結文で1周している。下腹部は矢羽根状沈線が1周する。この土器の器形は、加曾利B₂式の伝統にあり、矢羽根状沈線も同様だが、胴上半に附せられた文様に、この土器の特色がある。即ち、新潟県・元屋敷遺跡出土深鉢の入組帶縄文土器にもこの文様が見られ、新潟県方面からの影響下に造形された土器と考えられる。この土器の様な、特異な例はさておき、矢羽根沈線及び、それに類する文様をもつ土器は、県内の大花遺跡(富士見町)、上の段遺跡(茅野市)、離山遺跡(高町)、女鳥羽川遺跡(松本市)や、新潟県薄生遺跡と同じ内容をもっており、該期文化の北辺の位置を示める文化相に注目される。

第2類 口唇に棒状工具で截痕状に刻まれ、縄文施文のもの

A種 (A 241) 復原口径33cmの深鉢で、内外面に炭化物が附着している。口縁に2条の沈線が平行し、全面にRL・LRの縄文を施した土器。

B種 (A 247) これも内外炭化物の附着する土器で、頸部の2条の沈線間に截痕状に刻まれ、口縁部はLR縄文施文する。これらは安行併行期の所産と考えられる。

第3類 (A 257の1、C 279)

五山(推定)の波状口縁の破片で、波頂部分に隆起線による三角がみられ。頂点は、円形の凸瘤、左右の交点は、棒状の凸瘤を附加し、口唇は肥厚して、内面は段状を呈している、C 279も該期の土器と思われる。

第4類 (C 329) 口頸部で内折する鉢形土器で、口縁部は小波状を呈す。屈折部に沈線が1条みられ、その上に、2個の凸瘤が並んでいる。器形は加曾利B式以来の伝統の器形に瘤のついた高井東式以降、晚期直前の土器と思われる。

第5種 (A 257の2)

把手の破片で、円形の頂部をなし沈線によって2重円となっている。白形耳飾に似たモチーフで安行1、2式に併行すると思われる。

この外、多くの後期と思われる無文土器の破片が、存在する、時間的な制約から、詳細な分析



第25図 加曾利B式土器図

是不可能であった。1片の土器片でも歴史を語る貴重な資料たる観点にたって、保存を図ってあるので、次の機会に譲りたい。

第Ⅷ期 晩期

信越国境地帯の晩期の研究の集大成は一応、昭和42年発刊の「佐野」によってなされ、この地域の特色ある文化相が論及されたのである。そして佐野遺跡は、後期の遺物を含まず、ほぼ大洞BC式後半段階以降、大洞C₁式、大洞C₂式の期間に限定された遺跡のため、該期文化の究明に好資料を提供することとなった。それ以前の佐野式土器成立までのこの地方の文化相は、資料の希薄性から、不明の点が多くあった。幸いこの度の岡ノ峰遺跡の調査では、この前段階と思われる土器を検出する事ができた。また佐野1式の特徴ある文様の縫の手文の土器が1片も発見されなかったので、大洞C₁・C₂式併行期の、該期が、欠けることになった。

第1群 大洞B式併行期

1類 (C 330~353)

甕形土器の口縁部外面に沈線の施文されたもので、C 330の如く下に斜行沈線をもつ後期末の伝統の土器（水峯1967）と考えられ、晩期前葉の土着の土器と考えられる。断面形は(1)尖端の円いもの(C 346、347) (2)内面が肥厚して先端が尖るもの(C 339、343、344) (3)口唇が平のもの(C 348、350、352)などで沈線は2~3条で、稀に4条のものもある。これは、口縁部の文様帶として採用され、範状工具で幅広に沈線が、描出される特色をもっている。13地区5号石棺墓状遺構の南側検出の埋甕も同種と考えられる。

2類 (C 327)

同じく甕形土器で、沈線に三叉文のみられるもので、復原口径は32.5cm、内外面に炭化物が附着する、口縁部は内側に肥厚し口縁外側に棒状の上部が刻まれた凸瘤をもち、それを基点として、左右に4条の沈線が派出して三叉文状に沈線で描いて1対している。右部分に2条の沈線を挟んで、三叉文が、上下に相対している、岡ノ峰遺跡が、確実に晩期に入った頃の所産と考えられる。

3類 結節繩文の土器

(A) (C 49~57) 白褐色の色調の深鉢胴部に結節繩文の(綾格文)⁽⁴⁾のみられるもので、岡ノ峰遺跡の如く、中期後半の土器がみられる遺跡では、下伊那郡の例もあるので、一応、躊躇したが、奥羽南半から新潟地方の遺跡からは、次の撚糸文の土器と一緒に顕著にみられるので、ここに掲げた。

(B) (C 474) 口縁部に複数の結節繩文が2条みられ、胎土焼成は、Aと同種で、下は、LR繩文施文され、系体は同一と考えられ、新潟県地方からの搬入品と考えられる。

4類 撥糸文

(A) 撥糸文が密に施文されたもの (A 145~149、151、C 85、89~91、94~97)

検出されたものは、破片のみでA 148に沈線が1条みられるほかは、他の施文がみられないが、胎土焼成から、後期に該当するのでは、と考えられる。

(B) 撤糸文が、粗に施文されたもの (A 141~143, C 86, 87, 92, 93, 98)

垂直や斜状に施文されるもので、A 141, C 98 の如く凸瘤のみられるものがある。

(C) 撤糸文が網目状に施文されたもの (C 99)

これも 3 類Bと同じ所産と考えられる。

4 類 凸帯文の土器 (C 384~390, 396, 448~470, 473, A 258, 262, 667)

東海地方に文化の核があるとみられる凸帯文 (吉胡晚期旧A式) は前掲の凸帯文の系譜上にあり、南信地方はもとより、北信の後晩期の遺跡からも伴出し、佐野遺跡、薄生遺跡からも多量に検出されているから、晩期前葉までの保守性の強い粗製土器と思われる。

1種 嵌入されたもの 刻まれた、凸帯の下の縄文地文上に沈線が矢羽状にみられる。(C 386, 516) C 461 は、波状口縁になるらしい赤彩され、口縁下にB突起がつけられ、下に沈線状のものがみえる。

2種 口唇上に平行してつけられたB突起がみられるもの (C 449, 445, 465)

3種 B突起が、口縁下外面につけられるもの (C 458, 459, 460, 461, A 262) C 461, 464 は、壺の破片で、他は深鉢形(變形)土器の破片である。

4種 半精製の土器で、口縁にB突起が、直角に2連して附加され、間の外面に凸起がつけられた土器で、口縁部にLR縄文帯をつくり、沈線間に右組の三叉文を連結させ、以下無文の深鉢形土器であり、この地域のB突起と施文のあり方を知る好資料である。

5種 (A 258, 667)

共に精製の土器で、口縁外面にB突起が附加され、口唇は内傾している。A 667 には、三叉文がみられないが、A 258 は、3 叉文が、各所で入組み、LRの縄文帯がみられる。これらは、大花段階の土器と思われる。

5 類 (A 281)

撤入品と思われる小形深鉢方土器で、口唇に刻みが加えられ、その下の外面に玉抱き三叉文がみられる。これは富山平野にみられる勝木原や、安行III a 式に類例がみられ、源流は、大洞B式の玉抱三叉文に求められるものである。C 360 の浅鉢の口縁の文様や、C 403 の壺上半部の文様も該期の土着の土器の文様と考えられる。

第II群安行III式系土器、(A 259, 260, C 355, 359, 365, 366, 379, 181~383, 476, 485, 486, 488~491, 495, 498)

1類、(C 379~381, 383) ほぼ丸底の器形の精製土器である赤彩の痕が認められる。複雑に入組んだ沈線と三叉文が彫削され、帯状の列点文が附されている。列点文の土器は、北陸の該期の遺跡にみられるが、これは、安行III C式に比定されよう。

2類 (C 355) 楕円形をした丸底の鉢形土器で口唇には、B突起の退化したものが附加され、長辺部に2孔が、穿孔されている。外面には赤彩が残っている。

6 類 その他の三叉文 (A 279, 398)

A 279は、壺形土器の口頭部の文様で、平行沈線文、列点文に三叉文で構成され、沈線文に三叉文が、相対して施文されている。

C 398は、小形の鉢形の土器で、口縁に突起をもっている、下に枝分れした三叉文と沈線のみられる土器である。これらは、大洞B式段階の土器と思われる。

3類 (C 379、386、381)

丸底或いはそれに近い器形の土器で C 379は内部の器面が、不調整で、壺形土器かも知れないいづれも細かな繩文と列点文のみられる土器である。

4類 (C 488、489、490、494、485、495)

円形の列点文の土器で繩文と沈線文で、構成されるものが多いが、破片のため、不明確な点が多い。

5類 (C 486、487、492、493、496~498)

沈線と刺突文で飾られた土器で、C 487は口縁部下に隆線文状となる幅広い凹線をつくり下に尖刺列点文がみられる。これは第6群、4種のC 312の土器に類似する点が注目され、C 492、493の内面に2条の凹線のもつ土器とともに、土着の要素が、大きくみられる土器と思われる。

6類 (C 358、359、365、382、431)

えぐりとり(彫去)の手法の三叉文のみられる土器で、C 358は、深鉢形土器の口縁に3点の刻みをつけた突起をつけ、下にえぐりとりの手法の三叉文を配している。359は、低い波状口縁の下に平行する沈線から弧線を入組ました空間にえぐりとりの三叉文を配している。C 382は、外面無文で、口縁内面にえぐりとりの三叉文を配し、周囲の隆帯上は、繩文を施文し、凸瘤を配している。類例の少ない土器だが、一応ここに掲げた。C 365は、壺形土器の口縁部破片で、繩文地文上にえぐりとりの三叉文を沈線とともに集約させた、特異な文様である。このように、C 431の連結三叉文の土器も同じ手法で、安行IIIa式に通じている。

7類、入組三叉文とそれに類するもの (C 354、356、361、369、375、421、426)

C 354にみられる入組三叉文は、安行IIIa式にみられる文様で、富士見町、大花遺跡の土器もこれに類する、繩文地文の壺形土器の口縁部の文様帶として、採用されている。三叉文を幅広く、彫去するC 356も同種で、これは、口縁上に突起がみられる。以下のC 361~363、366、372、374、377などは、同種と考えられ、この期の岡ノ峰遺跡の特色である文様と考えられている。

8種 C 414は、台付鉢の台部の文様で、三分割に連弧文が描かれ、間に三叉文が、沈刻されている。このモチーフは、安行III 6式にみられるものである。

第3群 連結三叉文土器

1種 (C 420、431、441、526)

C 526は半球状の壺形土器で、黄褐色、黒褐色の色調を呈し、口径 19.5 cm、高さ 8.4 cmの法量で、土着の土器と考えられるもので、口唇は内面に傾斜し、一方の口縁内側にC字形の隆起線の中に1孔が、穿たれている。文様帶は、口縁部に集約され、沈線は三叉文帶も数えて4条で、上か

ら2条に三叉文を配し、1周、10組が連結して左組に描かれ、1～2条間と3～4条間に、荒い繊維で、作られた縄の原体で施文されている。

(B) 入組連結三叉文 (C 389, 393, 396, 399, 415, 418, 429)

C 415, 418、にみられた文様で、壇形土器や、深鉢形土器の口縁部文様帶として描かれる。縄文地文に2条の三叉文が、上下に組んで、施文され、間に沈線を斜状に入れている。三叉文の組み方が、両者で違いをみせているが構図の意識は同一と考えられ、これらの土器に、C 396のB突起や、C 389の如く突帯文が、みられるのが注目される。またC 418は台付鉢の台付部のくびれに見られる、入組連結三叉文である。この連結三叉文は、前代まで充填装飾に用いられた三叉文が、独立の文様として使用されたものである。この様にこの連結三叉文の土器は、亀ヶ岡文化圏のうち、第2次の伝播圏の岡ノ峰遺跡の地理的環境や、佐野I式土器には、みられない文様なので、大洞B式併行の新段階か、B・C式古の段階に担当するものと思われる。

小結 晩期第I群、第II群の土器は、長野県北部高水地方から一部新潟県に分布する。佐野式土器の前段階の土器群であって、ほぼ大洞B式に平行すると思われ、特に後半段階には、確実に並行する。そしてこの時期に、石棺墓遺構群が形成されたと考えられる。岡ノ峰遺跡は、長野県内とはいえ、あまりにも北辺の地にあるので、今後は新潟県方面的調査を合せて、該期の究明に、焦点をあててゆくことが望まれる。

第4群 大洞BC式併行土器

大洞BC式の指標は、羊齒状文の多用にある。岡ノ峰遺跡にも僅か数片の破片が検出された。

1類 (C 511) 陽刻された羊齒状文の土器で、黄褐色の色調を呈する。東北地方では、羊齒状文は、口縁部文様帶として使用される例が多いが、本例は、壺の肩部に施文されている。

2類 (C 512) 挿入された土器の2溝に附せられた截痕で、これは羊齒状文に伴うものから、羊齒状文として分類されている。

3類 (A 277 C 400) 平行沈線の間に沈刻による列点文と沈線文による羊齒状文の土器で、佐野式にみられる。連鎖状三叉文に至る過程の文様と思われる。C 400も挿入された羊齒状文の土器と思われる。

次の2種形の土器は、現段階では、所属時期が不明だが、便宜的にここに掲げておく。

4類 (A 273, 284, C 419, 505, 509)

1類 C 284は、口唇上が刻まれた、精製の鉢形土器の破片で、平行沈線から、孤線文が分かれている。C 419も同種と思われる。

2種 (A 273, C 505, 509) A 273は、縄文地文上平行線を引き、交互の鍵状の沈線がみられ、これは、佐野2式の標式施文の鍵の手文に変化してゆく文様と思われる。

5種 C 412は、類例に乏しく、異質の土器で、なお破片のため全容をつめにくいが、大形で厚手の粗製土器の口縁部付近の破片で、帯状の沈線文の間は厚く赤彩されている。

6種 雲形文に類するもの (A 267、270、C 442) 沈線による雲形文様が描かれるもので、A 267は、撤入された壺形土器の破片で、口縁にはB突起と凸帯がみられ、凸帯上は列点が附せられている。

次の段階の佐野⁽⁷⁾ I・II式、(大洞C₁ C₂式)に明かに刻当せしめられる土器は、検出されていない。

第5群 大洞A式併行土器

第1類 工字文土器

1種 列点文とえぐりとりによる工字文土器 (C 475、477~484、497、506)

平行沈線に工字状のえぐりとりがみられ、工字の上や、沈線間に列点文を配している。この手法は、蛙或いは人の意匠文の土製耳飾(第33図)の施文に一脈通じるものがあり、土着的要素が多分に認められるところから、晩期後業に位置づけて良いか、判断しがたい面を持っている。砂粒の多い黄褐色の色調のやや脆弱な土器である。

2種 (A 278) 壺形土器の上半部の破片で、赤褐、白褐の色調の土器で、工字状部分は沈線によって、陽刻され、列点文がみられる。

3種、いわゆる粗大な工字文(C 499~501、504、507、508)の土器で、粗製の深鉢形土器の口縁部につけられた文様で、他の文様はみられない。C 504は、三叉状に沈刻された、粗大な工字文である。

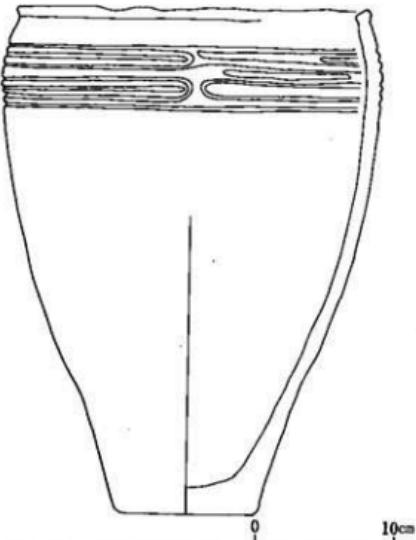
第2類 横円状文(眼鏡状文)(A 280、C 502、503、524、525)

1種 A 280、C 503、外反する器形の大形の深鉢形の土器で、口唇は幅広(2cm)つくられ、A 280には、沈刻がみられる。口縁下に長横円文、下に沈線が平行し網文帶もみられる。これは工字文に通ずる点を持っている。

2種 (C 525)は眼鏡状文が単独に用いられる例で、台付鉢の底部外面に1周して、眼鏡状文が、浮文状に附加されている。台付部の高さは約3cmで、上部の鉢の形状は不明である。

(C 524)は小形の台付鉢の破片で、台部に1対の穿孔がみられる。

3種 (第20図) 变形(深鉢)形の粗製土器で、復原口径25cm、高さ約37cm、底径10cmの法量で、底部より外反してたちあがり、内外に炭化物が、附着し黒褐~赤褐色を呈する土器で、



第26図 大洞A式土器図

口唇は、平だが、不整な口縁形態である。口縁部にみられる平行沈線は、梢円状に沈刻したり、線がとぎれたりの施文で、半梢円の文様もみられる。大洞A式段階の土器と思われるが、更に検討を要するようと思われる。

第IV期 平安時代 須恵器、土師器

1種 第31図 1~5は、A・B地区より検出された須恵器の破片で、大形から中形の甕頸部破片と、5は壺形破片で、他に無文の長頸壺の破片もある。1、2には、自然釉がみられる胎土焼成は良好である。外面の文様は2が格子目文で、他は疊目文である。内面は、2は敲目痕、4が凹凸がある。5は還元焰が及ばず茶褐色を呈し、疊目文は深く施文され、肩に3条の沈線が横走している。

2種 土師器 図示していないが、国分期の内黒坏の破片が検出されている。

これは、弥生時代から古墳時代を過ぎてから野沢盆地の開拓が始まったことを示す資料で、以後の歴史は現代まで連続している。

土器 総括

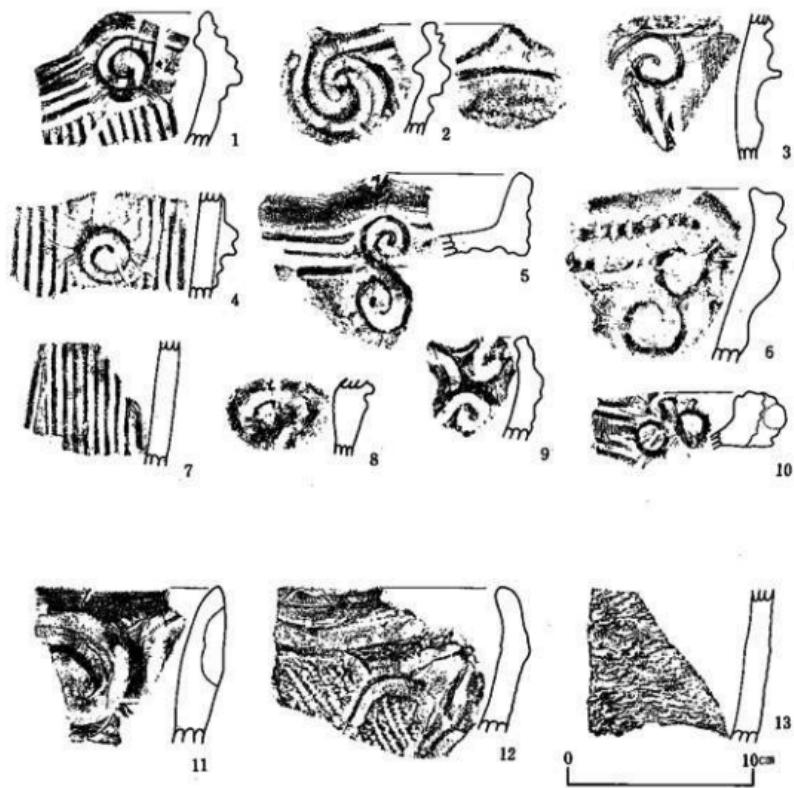
以上のように今回の緊急発掘によって考古学上に占める岡ノ峰遺跡の全貌が、ほぼ明かになった。他と隔絶したかにみえる野沢盆地の中にも大古より変らぬ人々の営みがあったのである。特に主体となる土器群は、中期後半の段階から後期全般、晚期初頭と後葉の初め頃のもので、中期後半の土器は、諏訪地方を中心とした曾利式土器の影響のみられるもので、分布圏からみて、他の形式の土器との関係を更に究明しなければならない側面を持っている。後期初頭は、称名寺式土器の文化圏に含まれ、堀之内I式期は、関東・東北方面からの影響が複雑に入り乱れている。堀之内II式期からは、関東西部地域からの影響が主流を占めて、新潟県方面的影響は僅かである。これは加曾利B式段階、全般に通じている。後期末葉になると、関東西部地区の影響に合せて東海方面からの影響が、この長野県北辺の地まで浸透し、粗製土器に晚期まで影響を残している。後期最末と晚期初頭はまた複雑で、関東西部地域の影響と東北地方の影響が輻輳としている。これは、土製耳飾の文様形態にも現われており、確実に龜ヶ岡文化圏に包括されるのは、大洞B式の後半段階に入ってからと思われる。この段階の土器は、更に慎重に検討を加えなければならないが、長野県の晚期初頭の一形式として提唱してよい内容をもっていると確信している。次の北信に分布圏をもつ佐野式土器の影響の土器はみられず、その前段の土器と後続する土器が見出される。これはまた今後のこの地域の晚期の究明に一視点を加えたことになる。この様に長野県では、遺跡の希薄から研究の遅れている後期から晚期にかけての好資料を提供する事となった。今後は時間的制約から今回分析できなかった、大多数の無文土器や、嵌入された土器などについて、さらに研究を深めたいと願っている。

追記 筆者が岡ノ峰遺跡の遺物を初めて見たのは、昭和28年長野県教委より発刊された「下高井」の執筆のため小野勝年博士（元竜谷大学教授、上伊那郡小野出身）と共に、当村の小学校を訪れた際で、爾来三十年になる、往時をかえりみて、感慨無量であり、一言記して跋とする。

（擅原長則）

第3表 岡ノ峯遺跡の土器編年

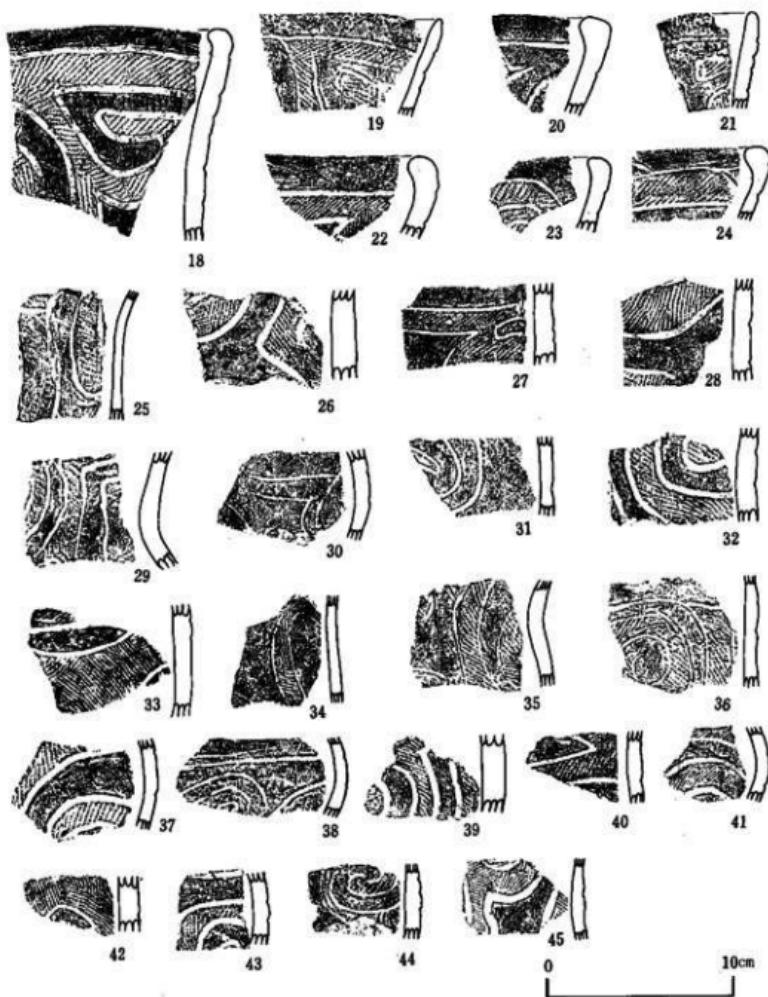
第I期	縄文時代 (草創期末)	
	第1群 表裏縄文土器	
第II期	(早期)	
	第1群 押形文土器	細久保式
	第2群 条痕文土器	子母口式
第III期	(前期前半)	
	第1群 花積下層式併行	
	第2群 開山式 //	
第IV期	(前期末葉)	
	第1群 下島式	諸磯C式
第V期	(中期前半)	
	第1群 北陸文化圓土器 1	新崎式
	第2群 // 2	長者ヶ原式
第VI期	(中期後半)	
	第1群 曽利式併行土器	
	第2群 加曾利E式併行土器	
第VII期	(後期)	
	第1群 称名寺式併行土器	大安寺式
	第2群 堀之内式併行土器	綱取2式、南境式
	第3群 三十稻場式土器	
	第4群 加曾利B式併行土器	宝ヶ峯式
	第5群 三仏生式土器	
	第6群 高井東式、安行I・II式併行土器	新地1・2・3式
第VIII期	(晚期)	
	第1群 大洞B式併行土器	八日市新保式
	第2群 安行III式土器	
	第3群 連結三叉文土器	
	第4群 大洞B(新)式土器	(佐野I式、佐野II式)
	第5群 大洞A式 併行土器	
		水1式
		水2式
第IX期	(平安時代)	
	第1群 須恵・土師器	



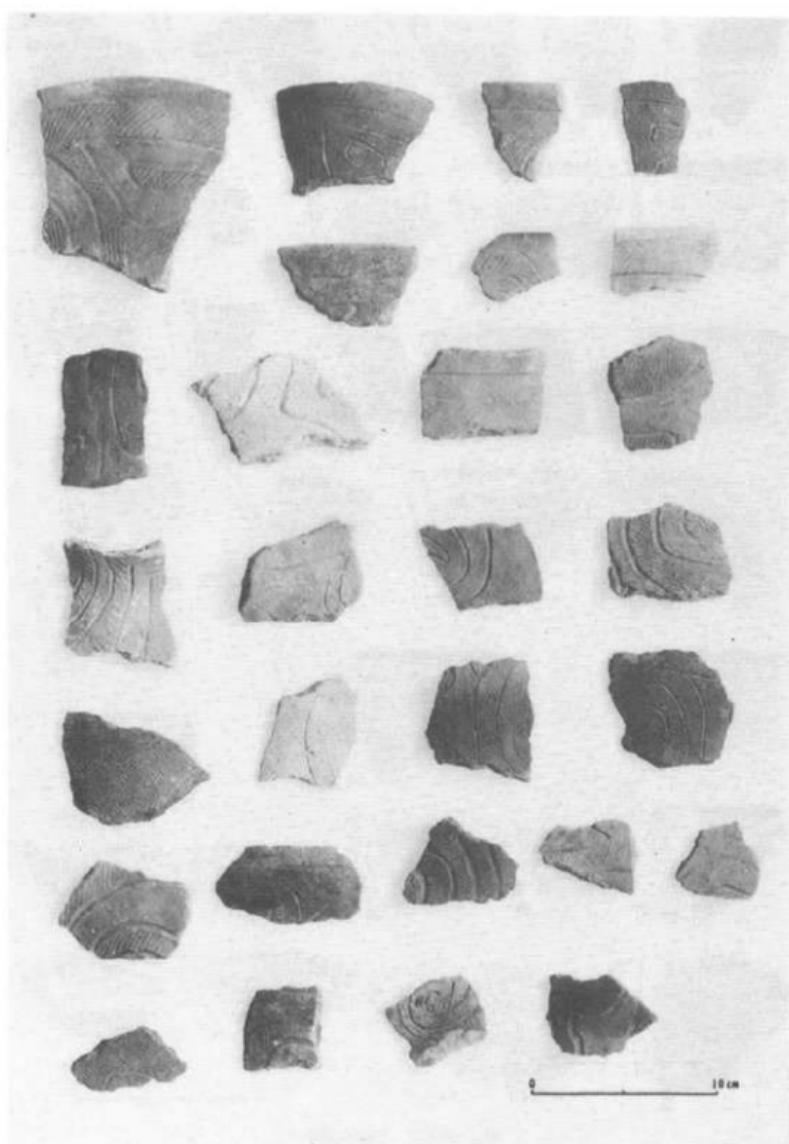
第27図のI 土器拓影図(A)



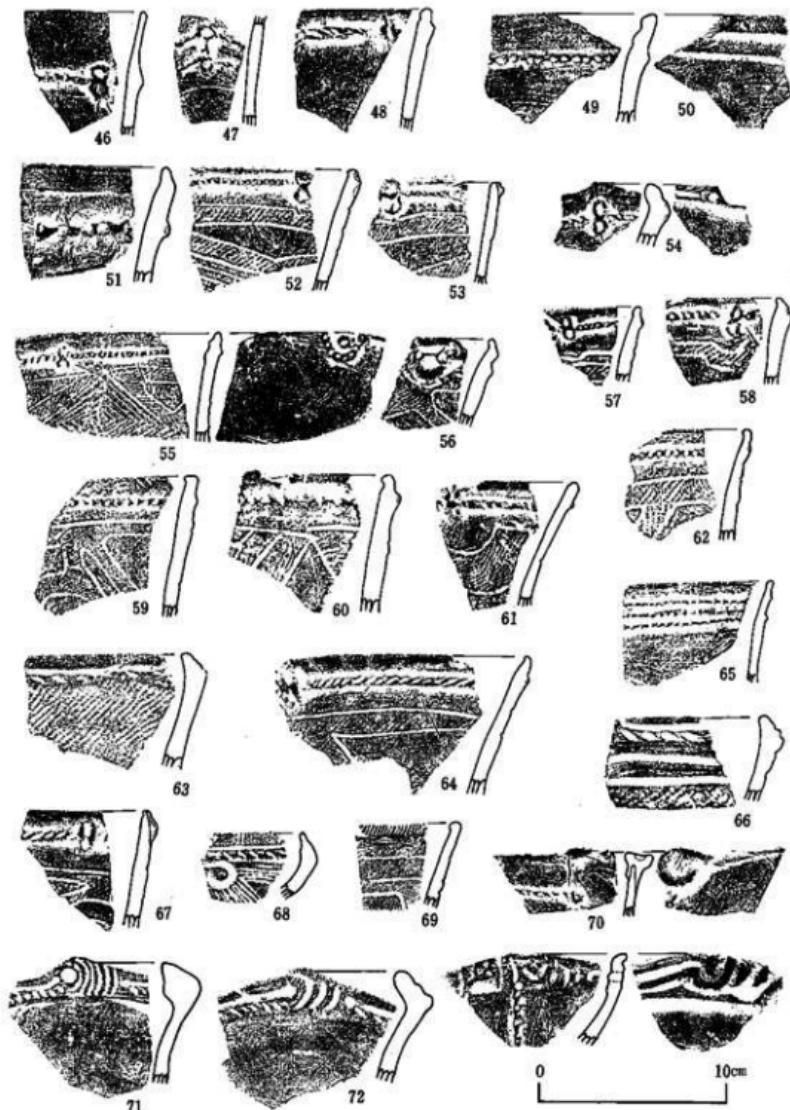
第27図の2 土器写真(A)



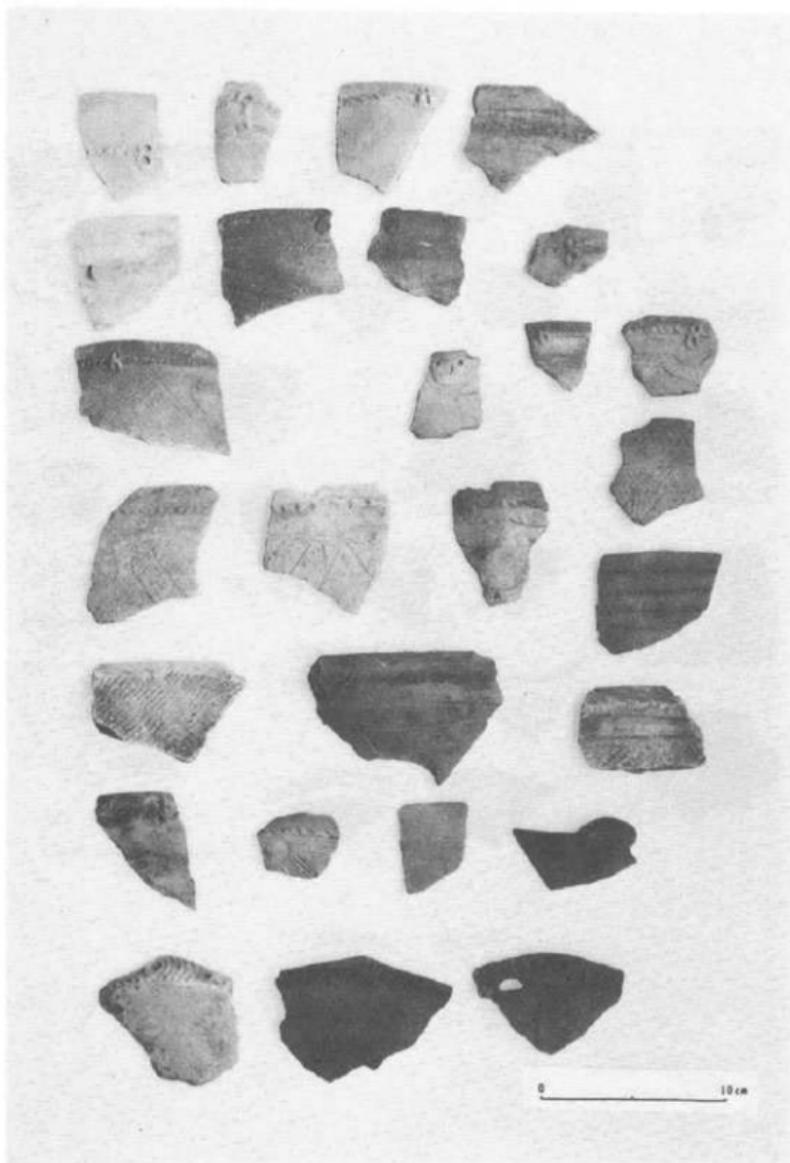
第27図の3 土器拓影図(A)



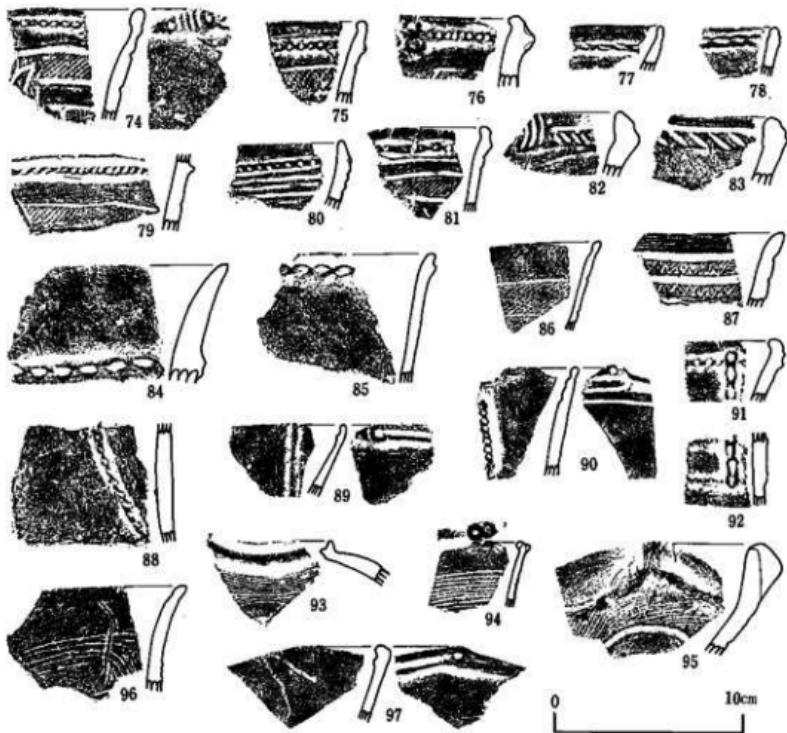
第27図の4 土器写真(A)



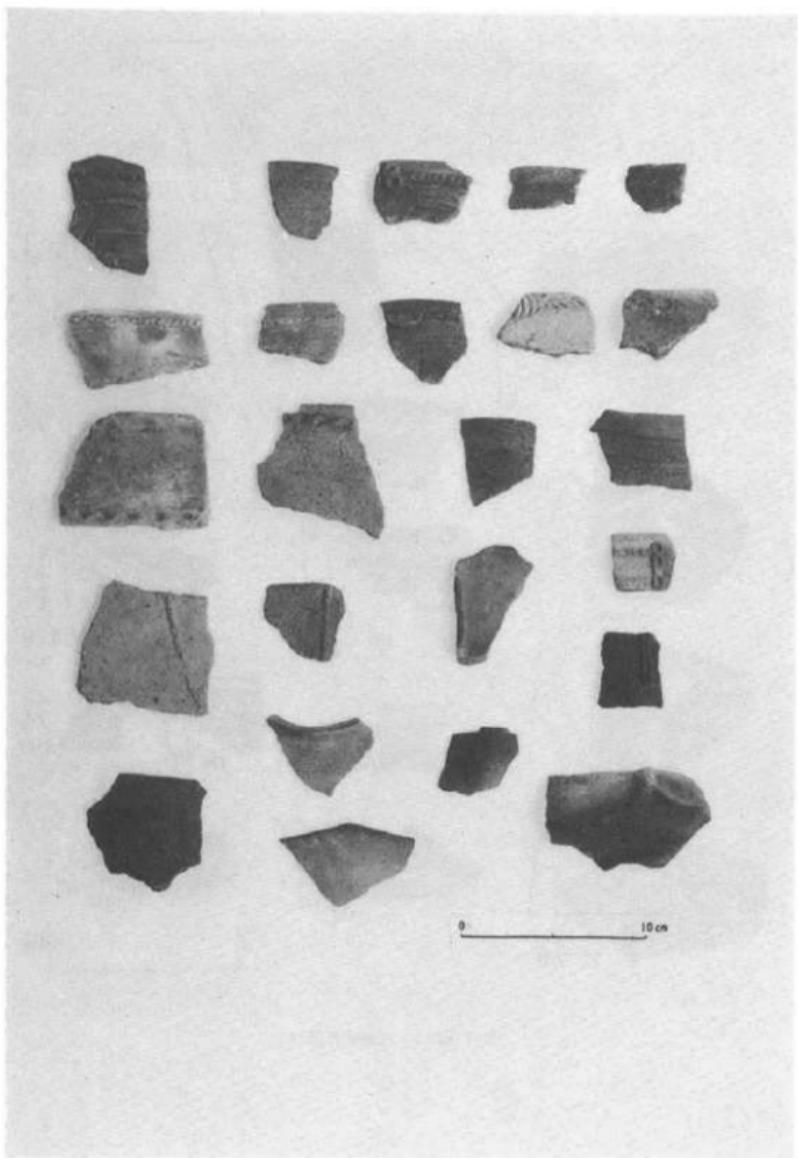
第27図の5 土器拓影図(A)



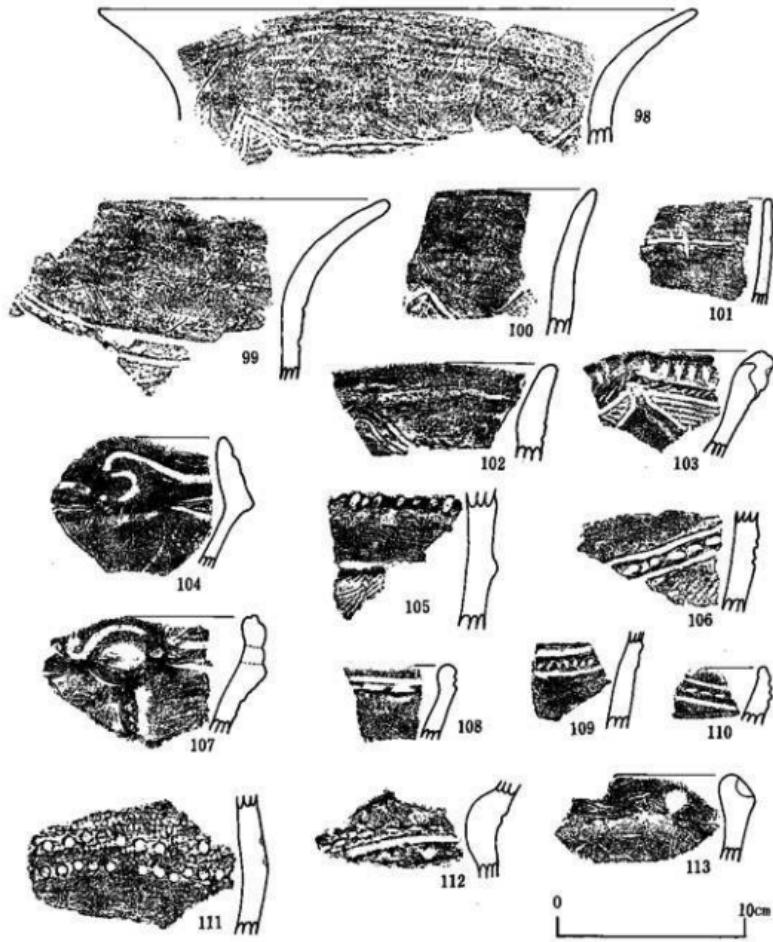
第27図の6 土器写真(A)



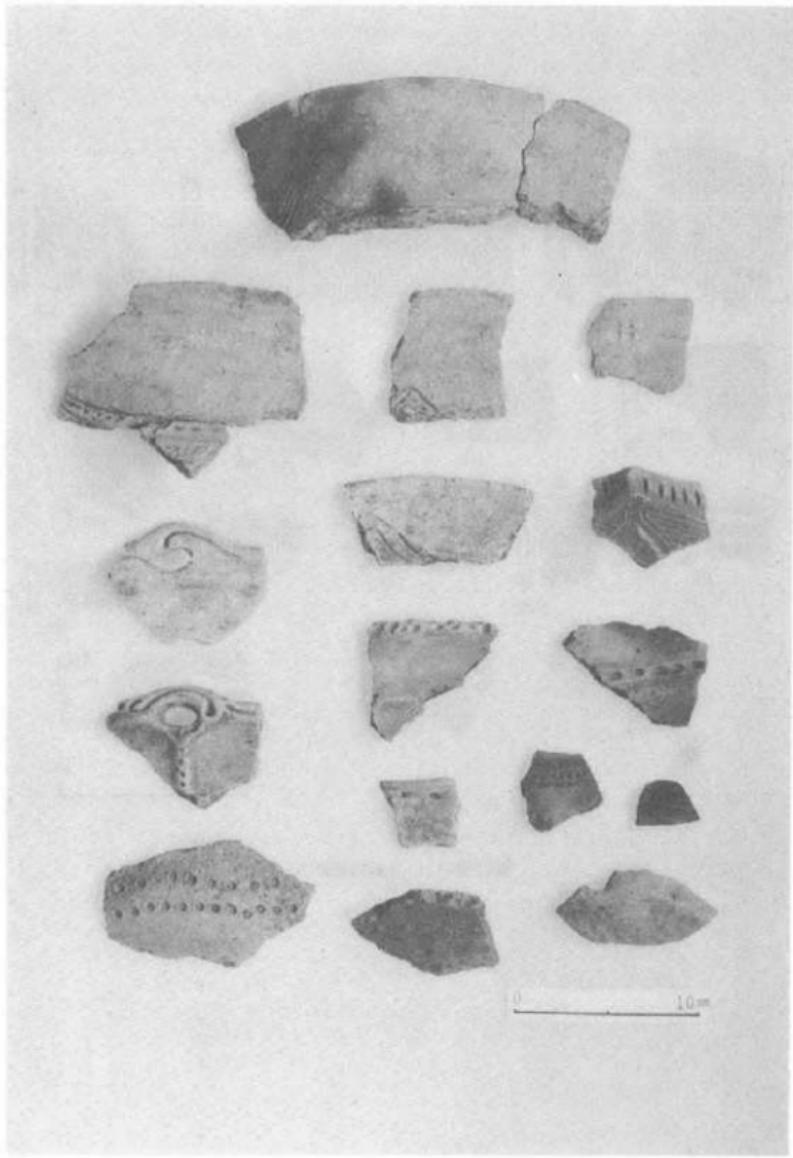
第27図の7 土器拓影図(A)



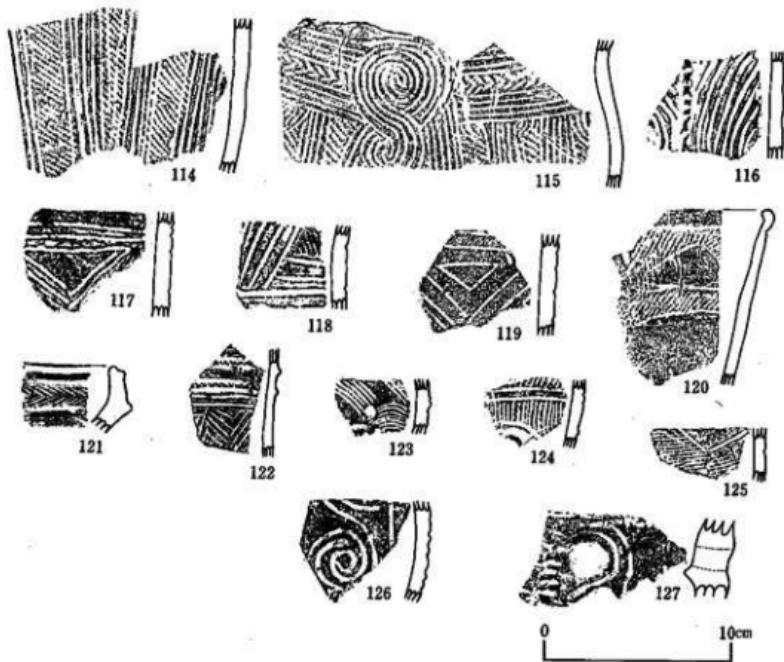
第27図の8 土器写真(A)



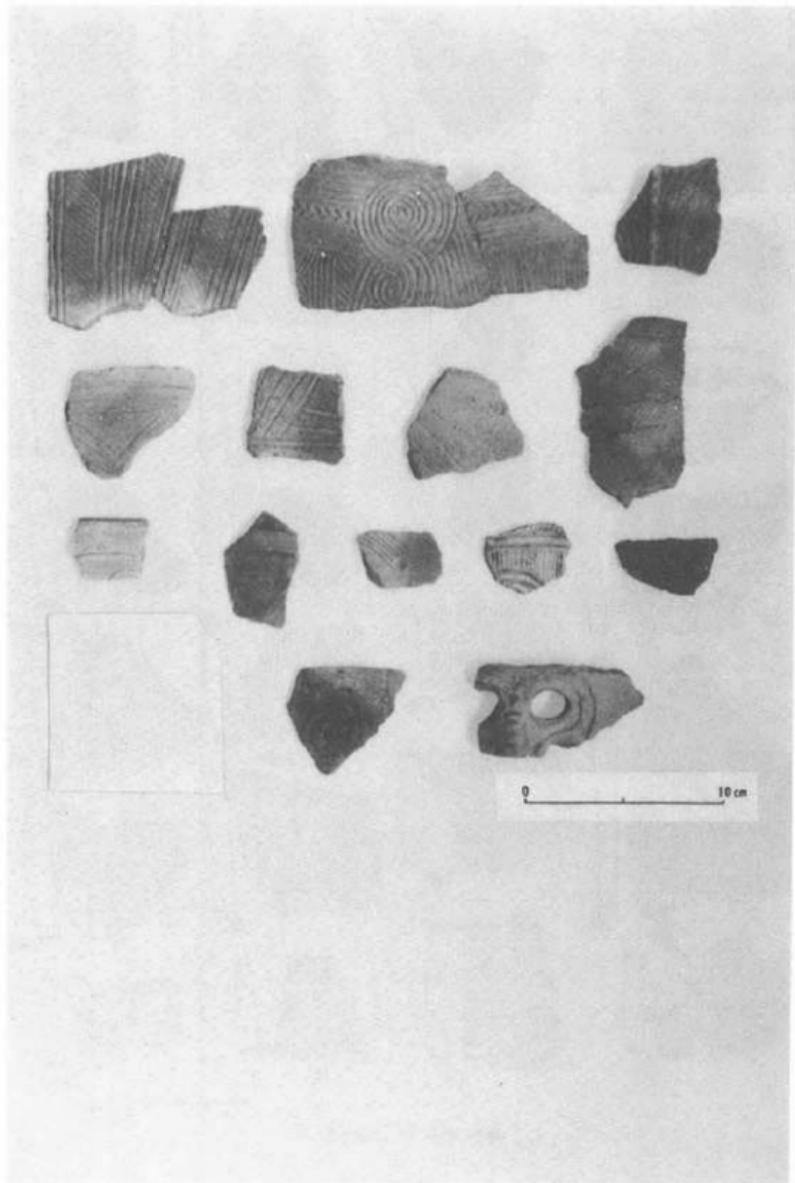
第27図の9 土器拓影図(A)



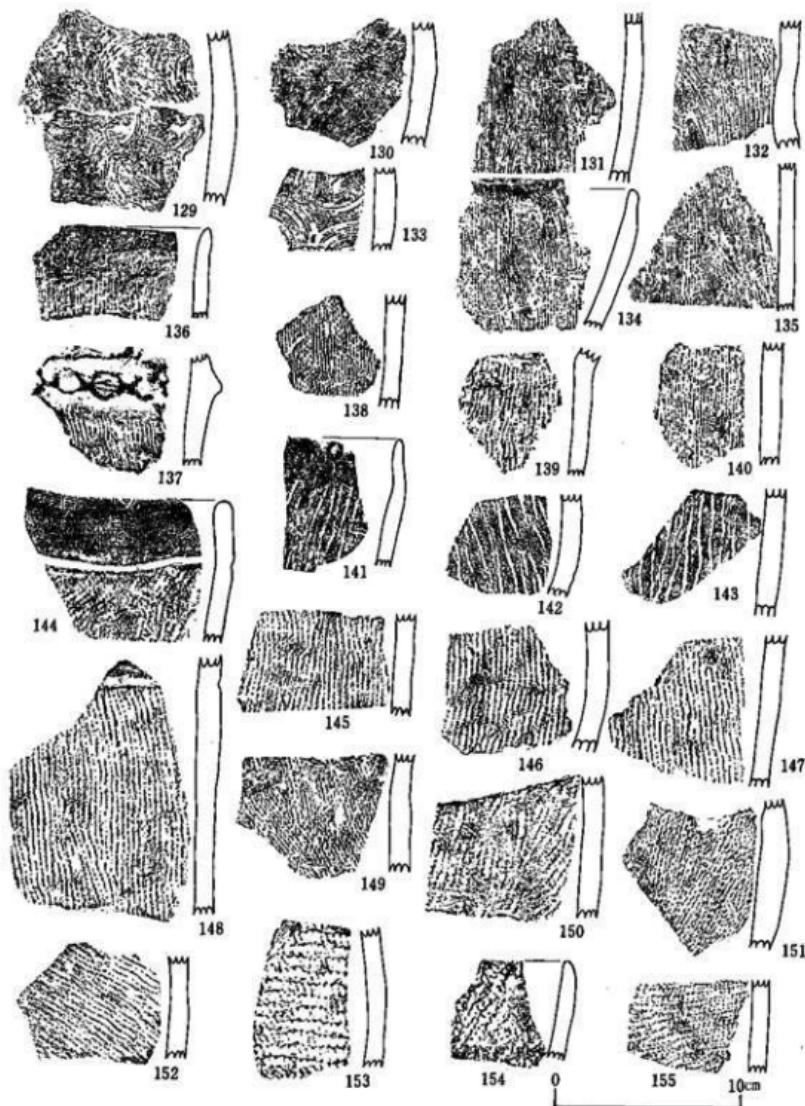
第27図の10 土器写真(A)



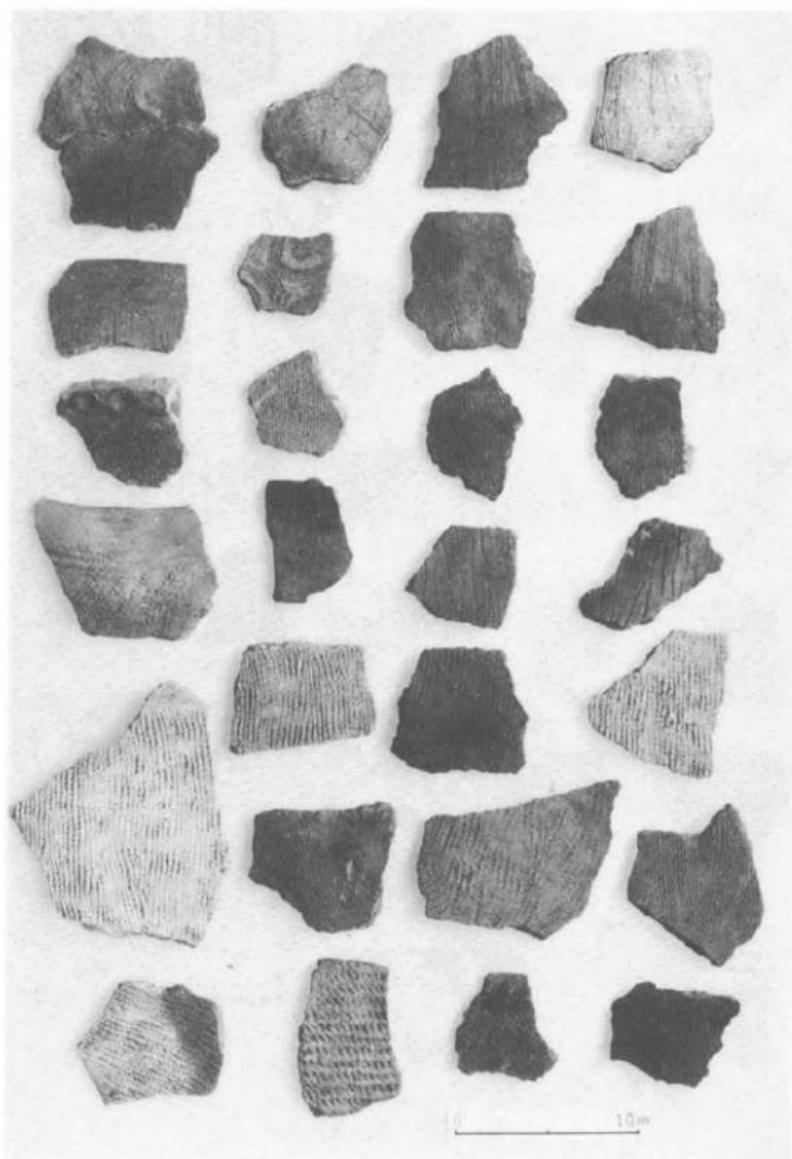
第27図のII 土器拓影図(A)



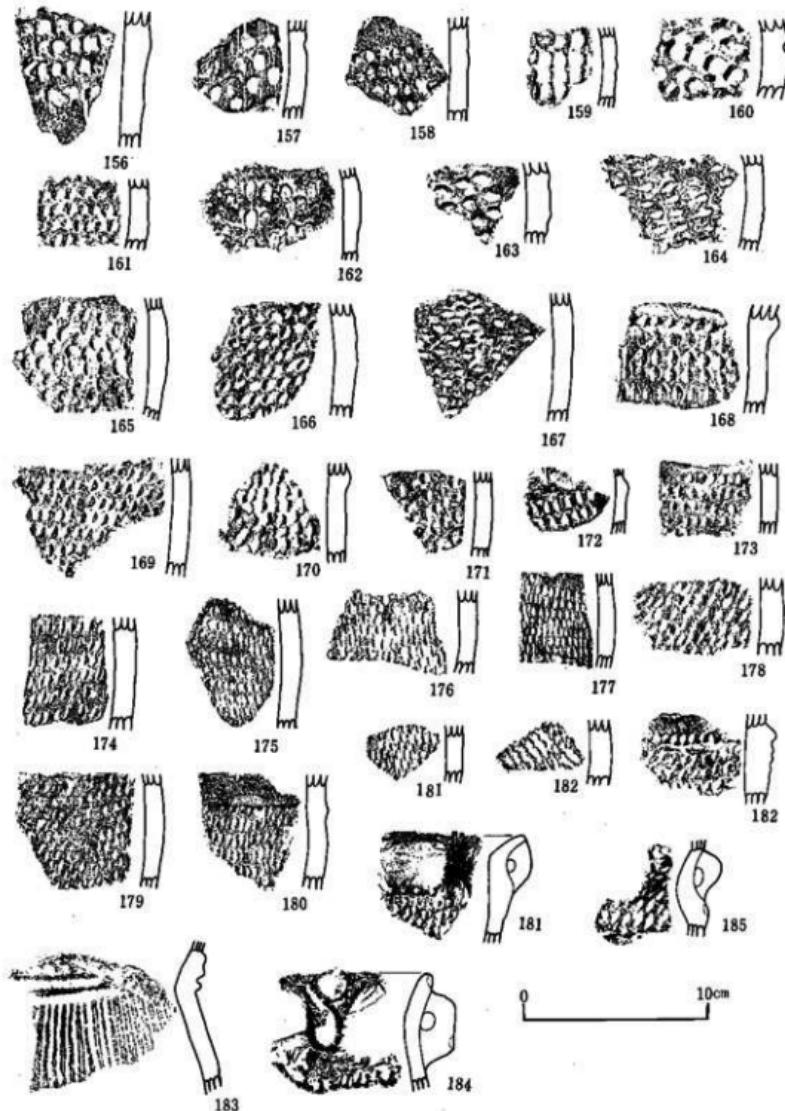
第27図の12 土器写真(A)



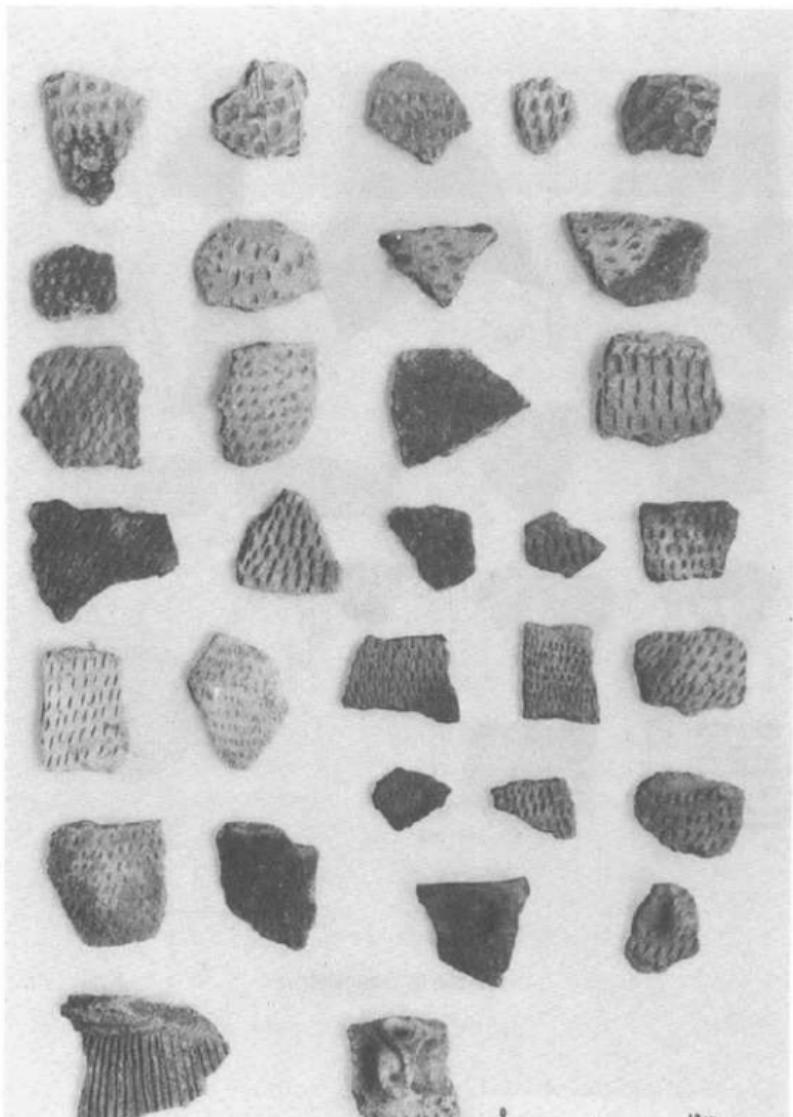
第27図の13 土器拓影(A)



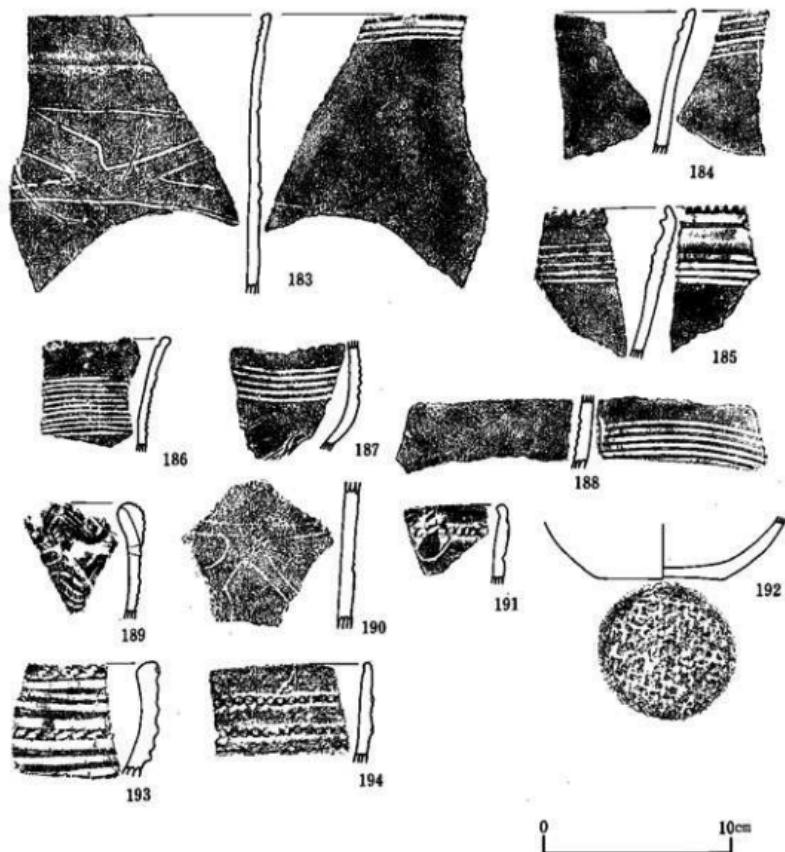
第27図の14 土器写真(A)



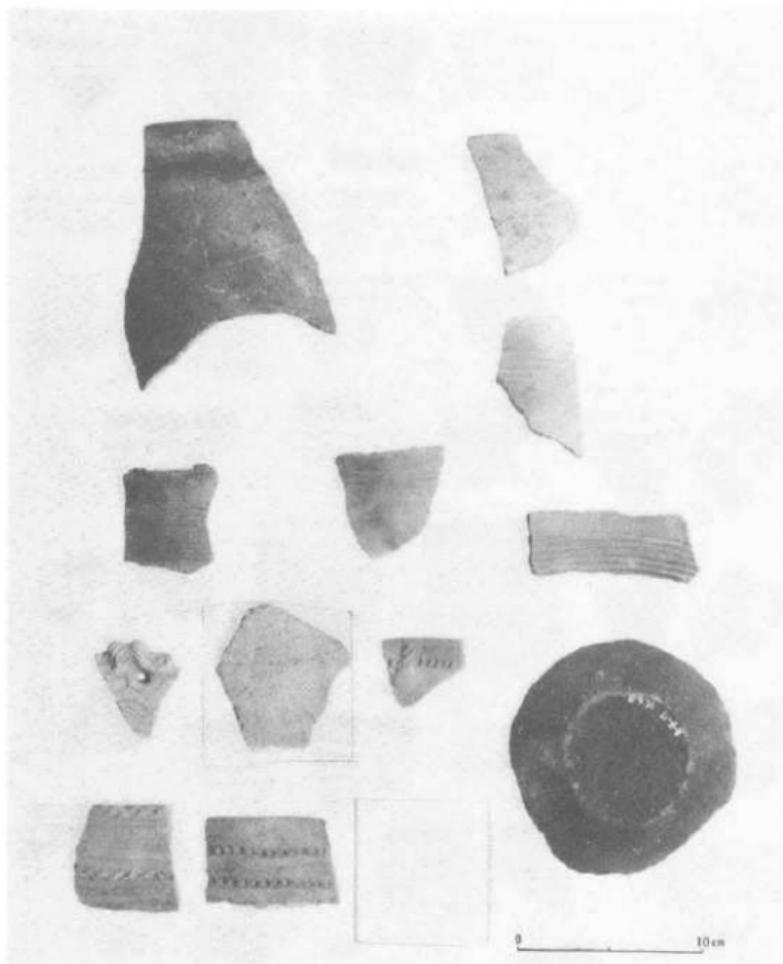
第27図の15 土器拓影図(A)



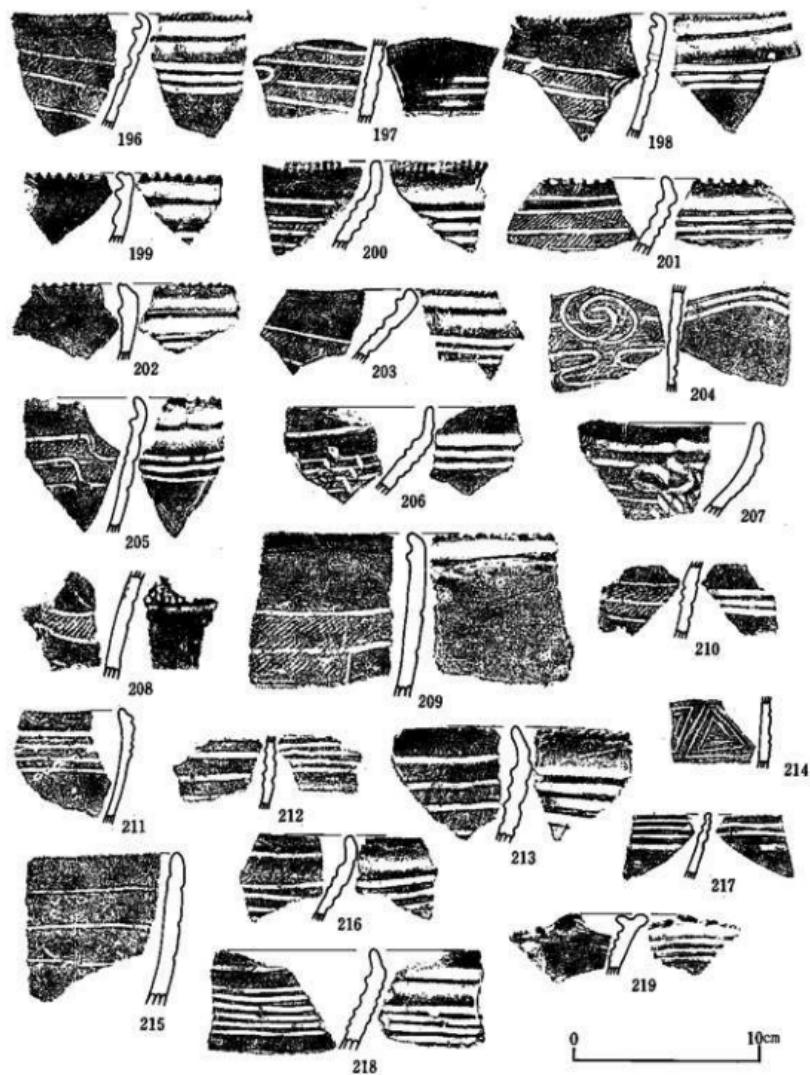
第27図の16 土器写真(A)



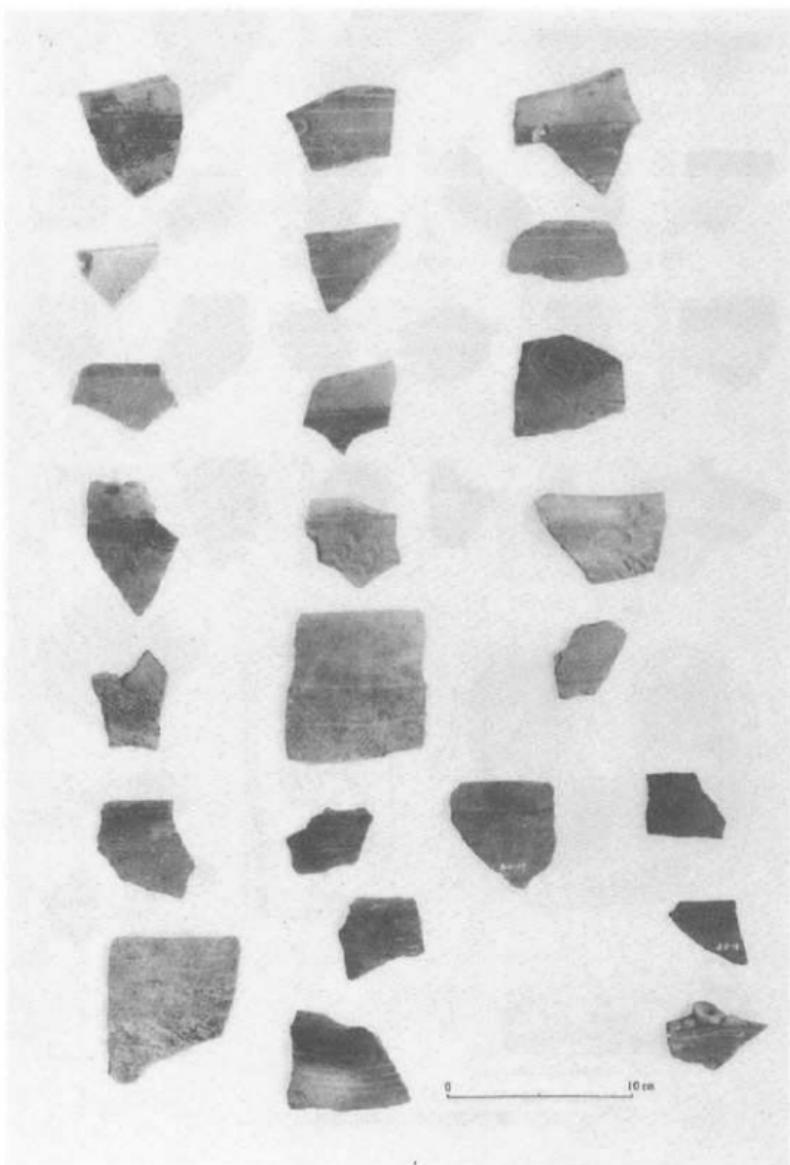
第27図の17 土器拓影図(A)



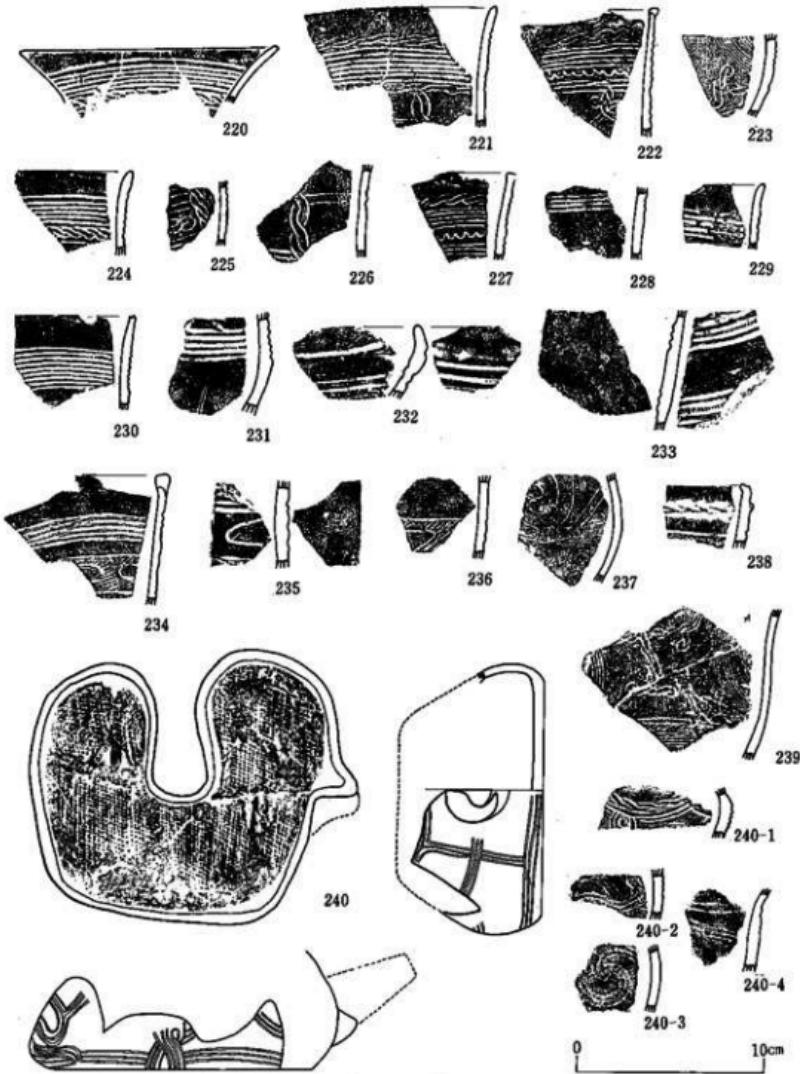
第27図の18 土器写真(A)



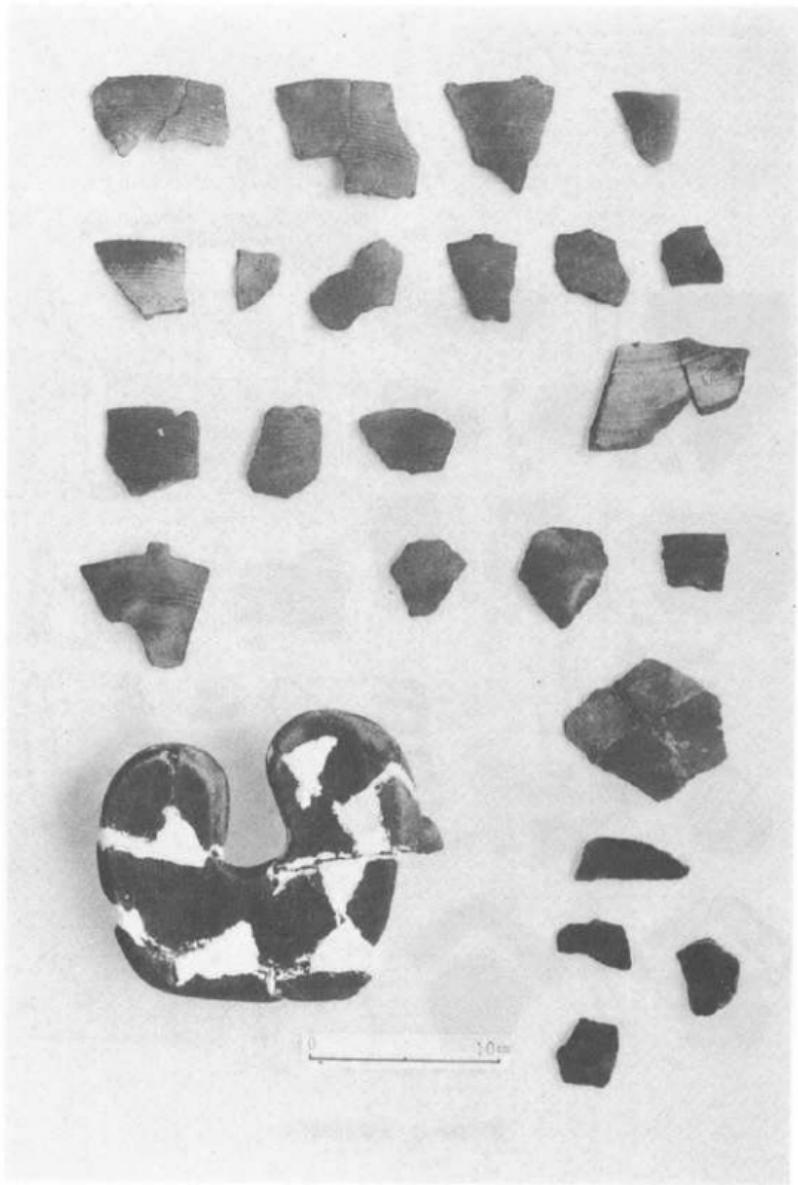
第27図の19 土器拓影図(A)



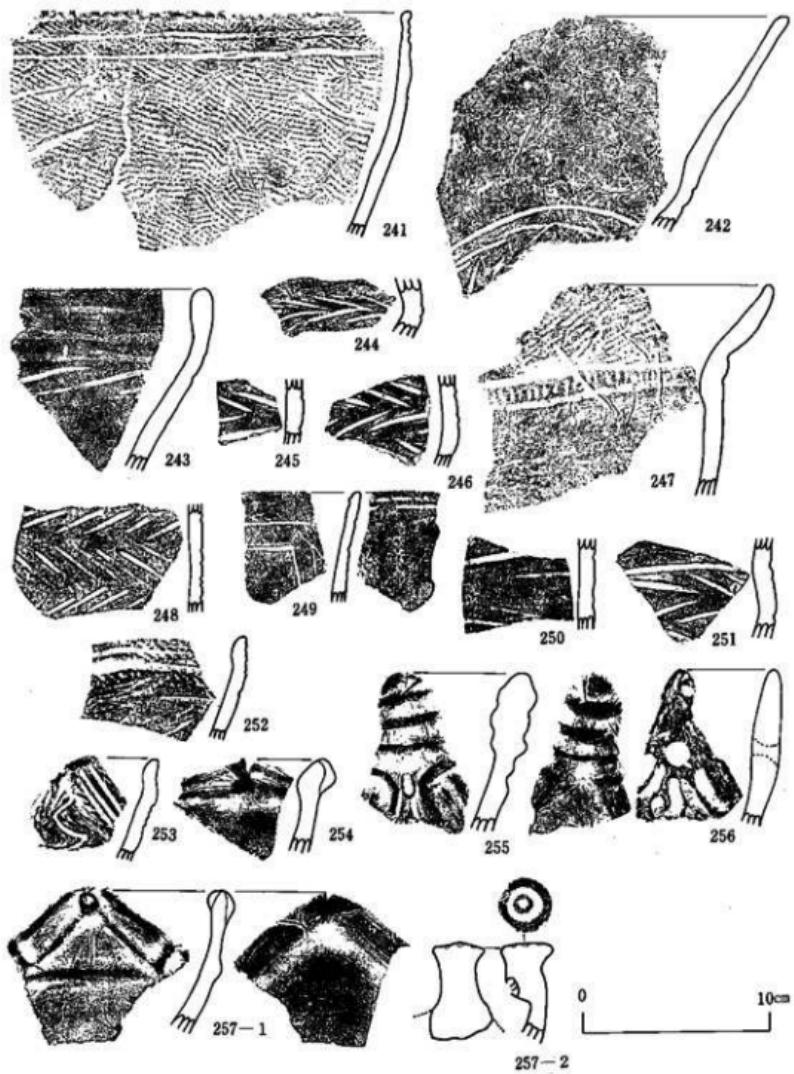
第27図の20 土器写真(A)



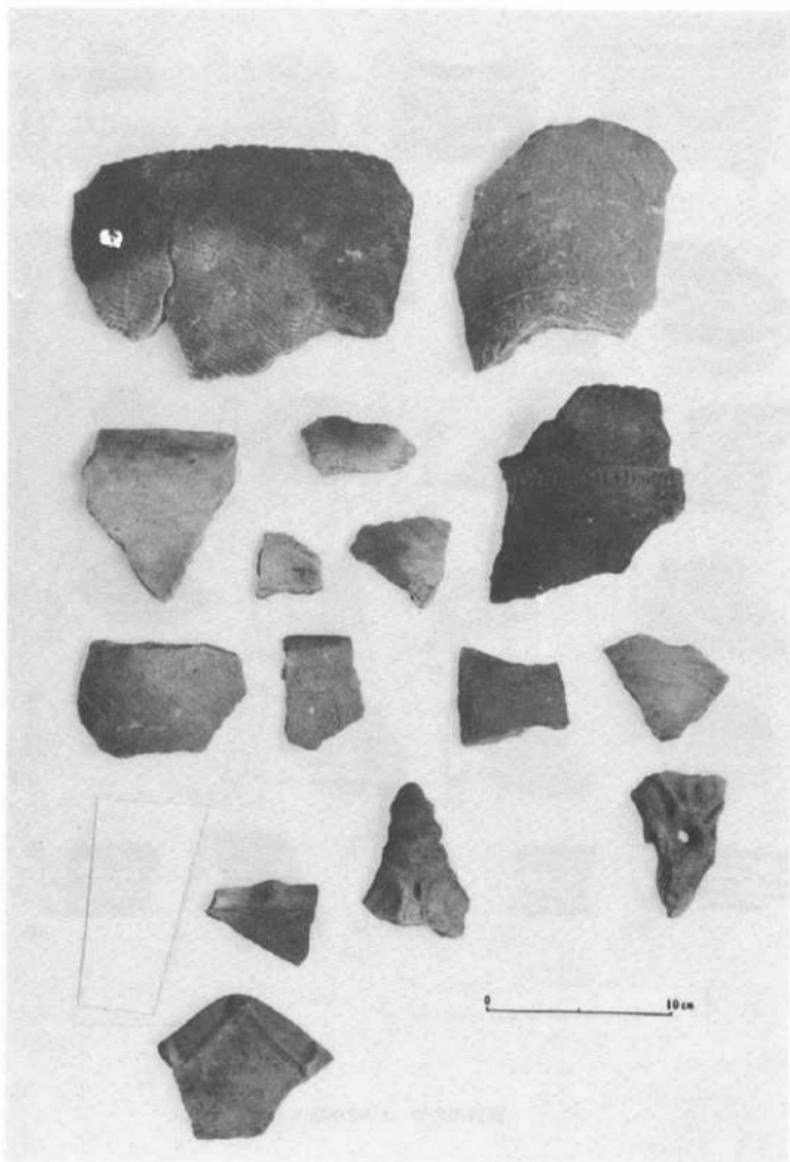
第27図の21 土器拓影図(A)



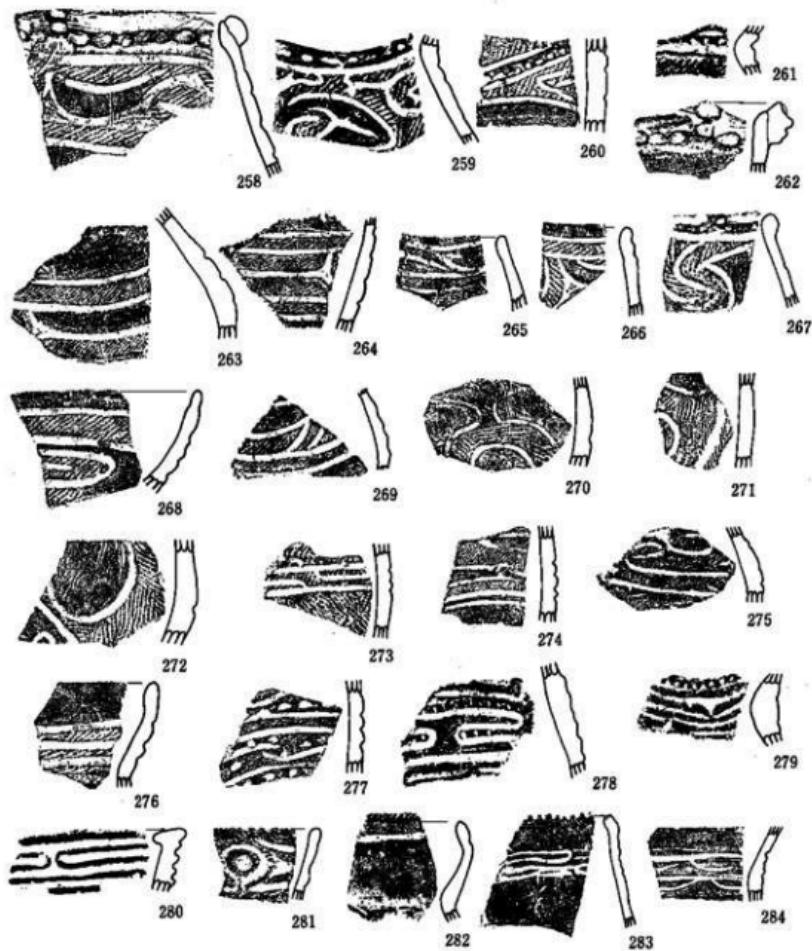
第27図の22 土器写真(A)



第27図の23 土器拓影図(A)

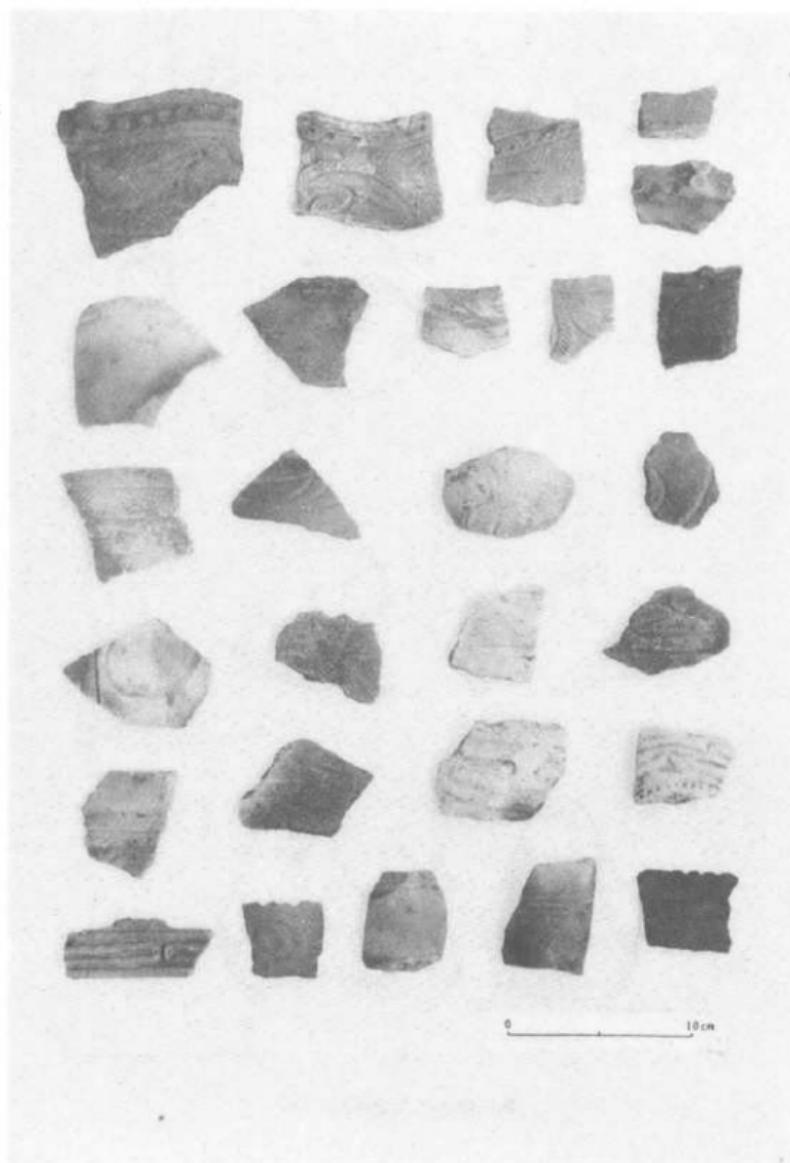


第27図の24 土器写真(A)

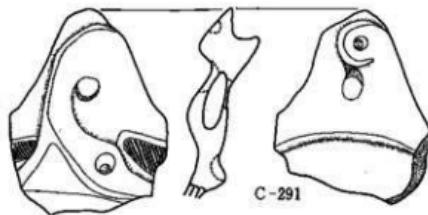
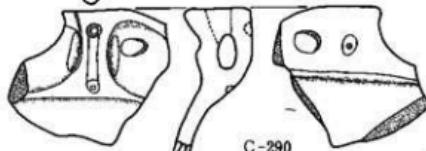
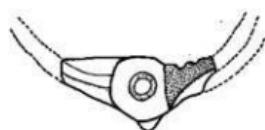
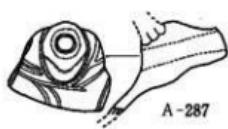
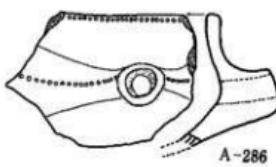
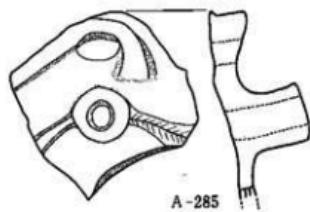


0 10cm

第27図の25 土器拓影図(A)

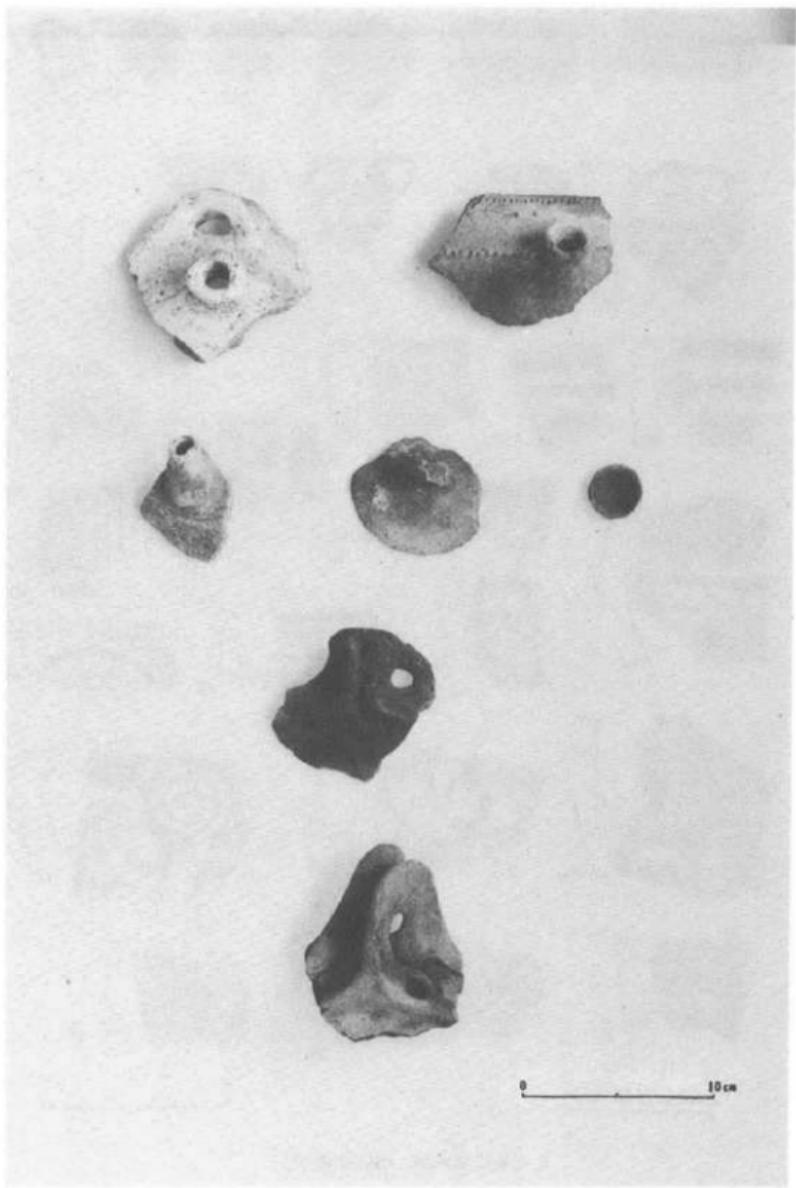


第27図の26 土器写真(A)



0 10cm

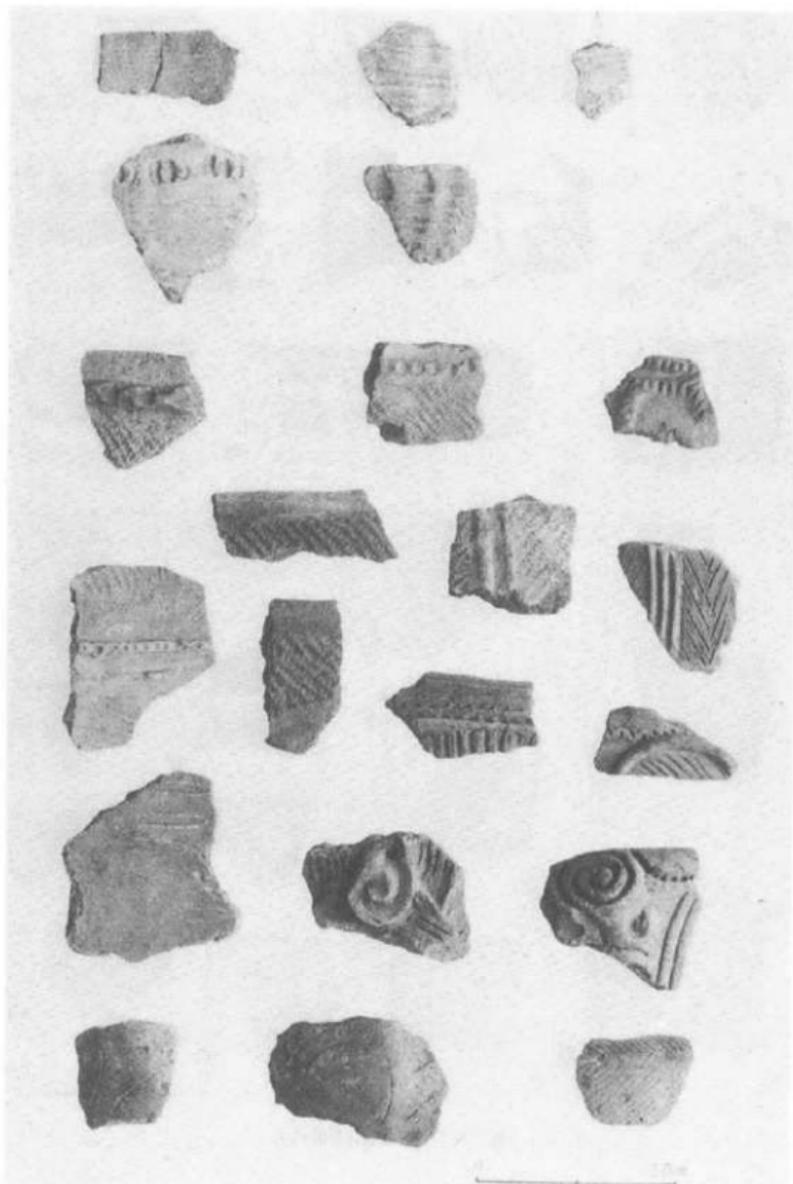
第27図の27 土器実測図 (A)



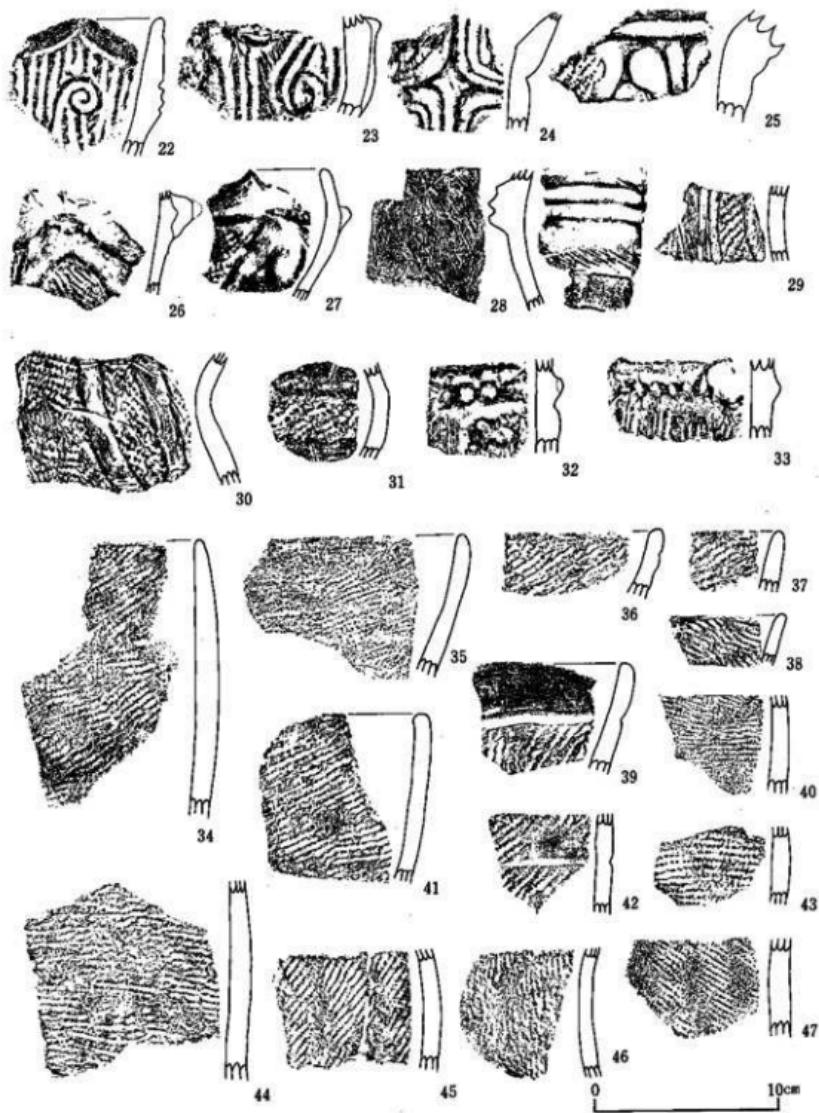
第27図の28 土器写真(A)



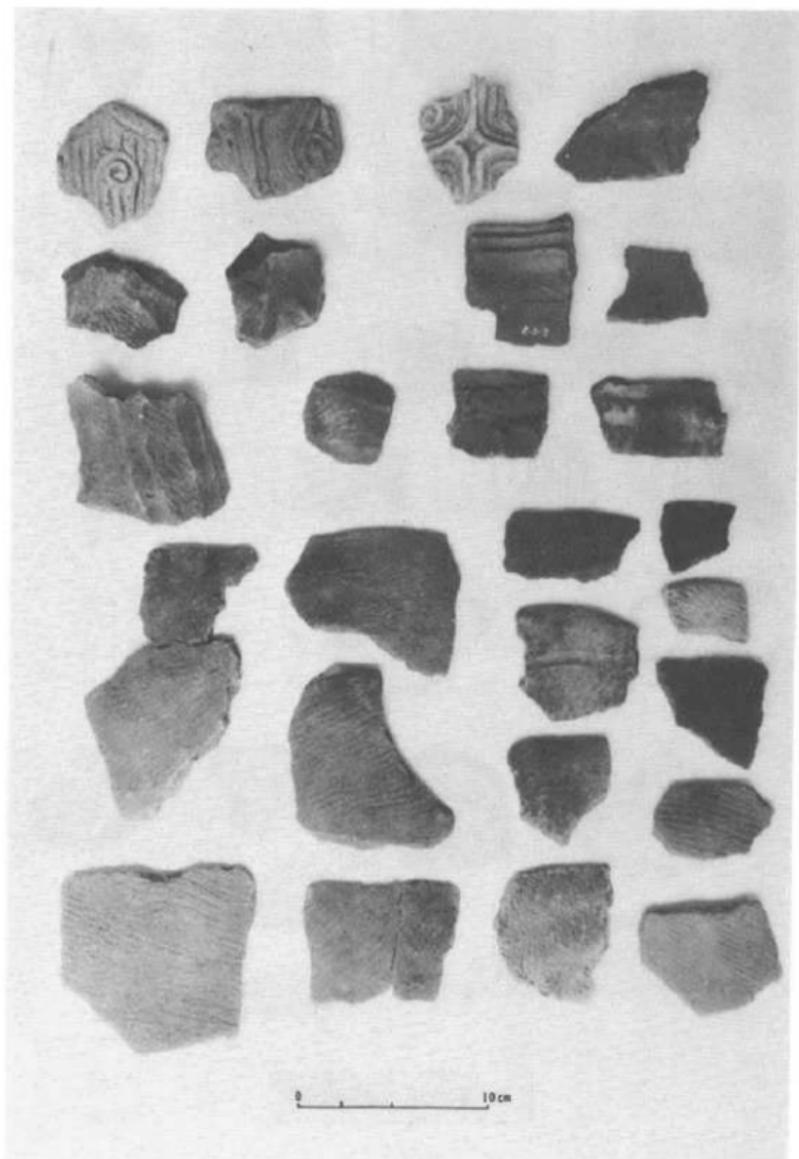
第27図の29 土器拓影図(C)



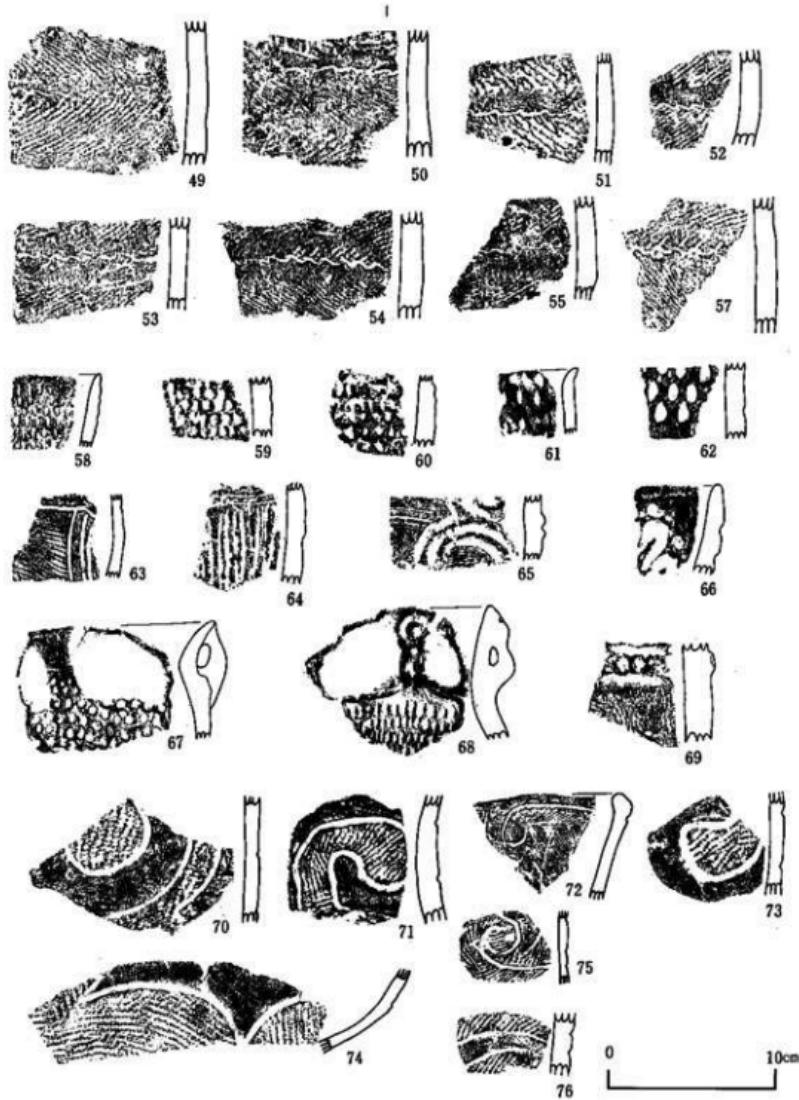
第27図の30 土器写真(c)



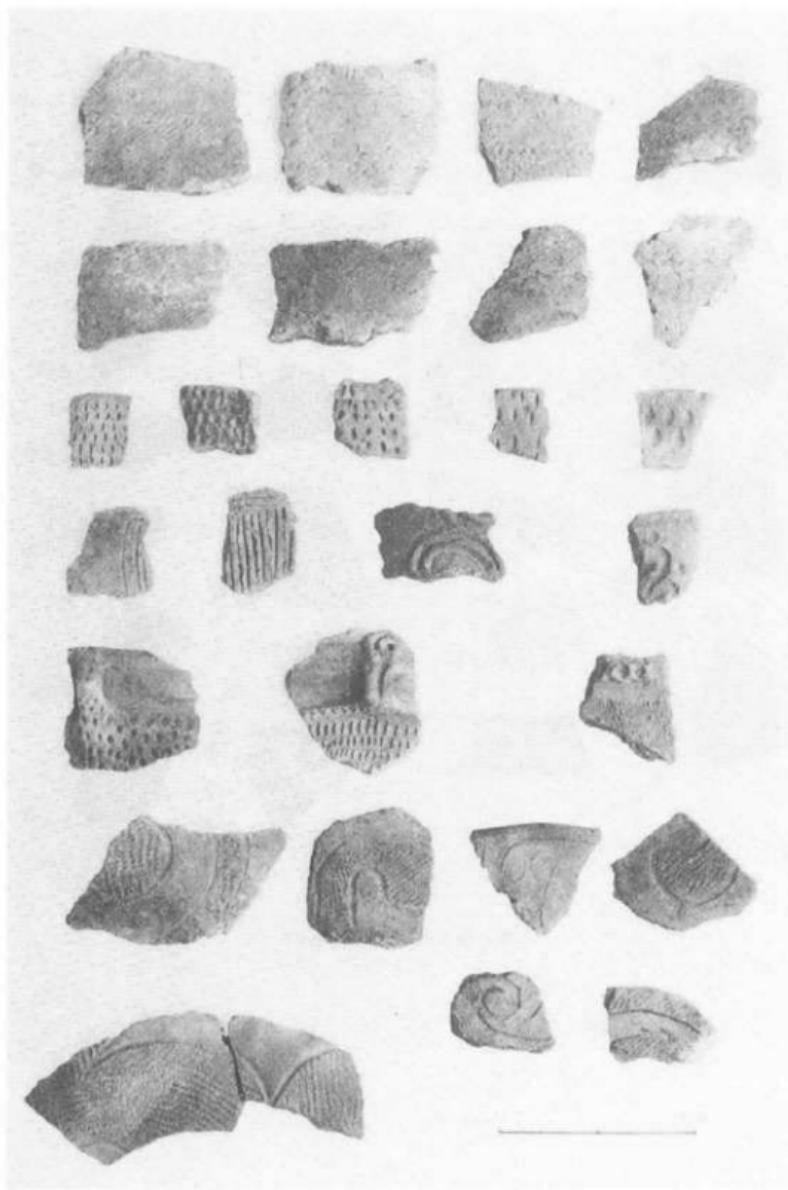
第27図の31 土器拓影図(C)



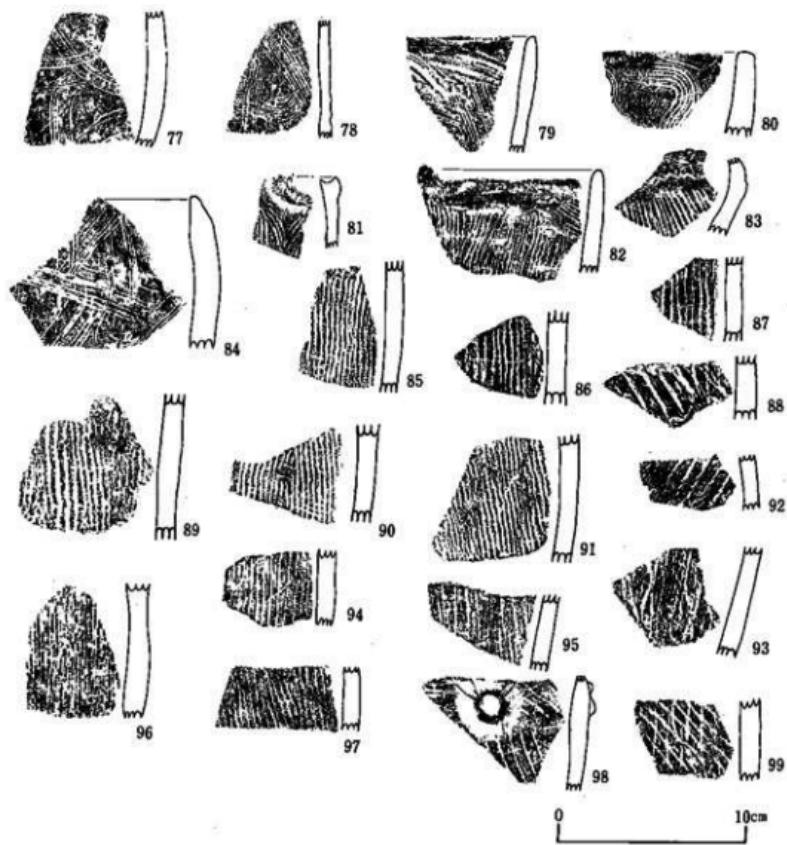
第27図の32 土器写真(C)



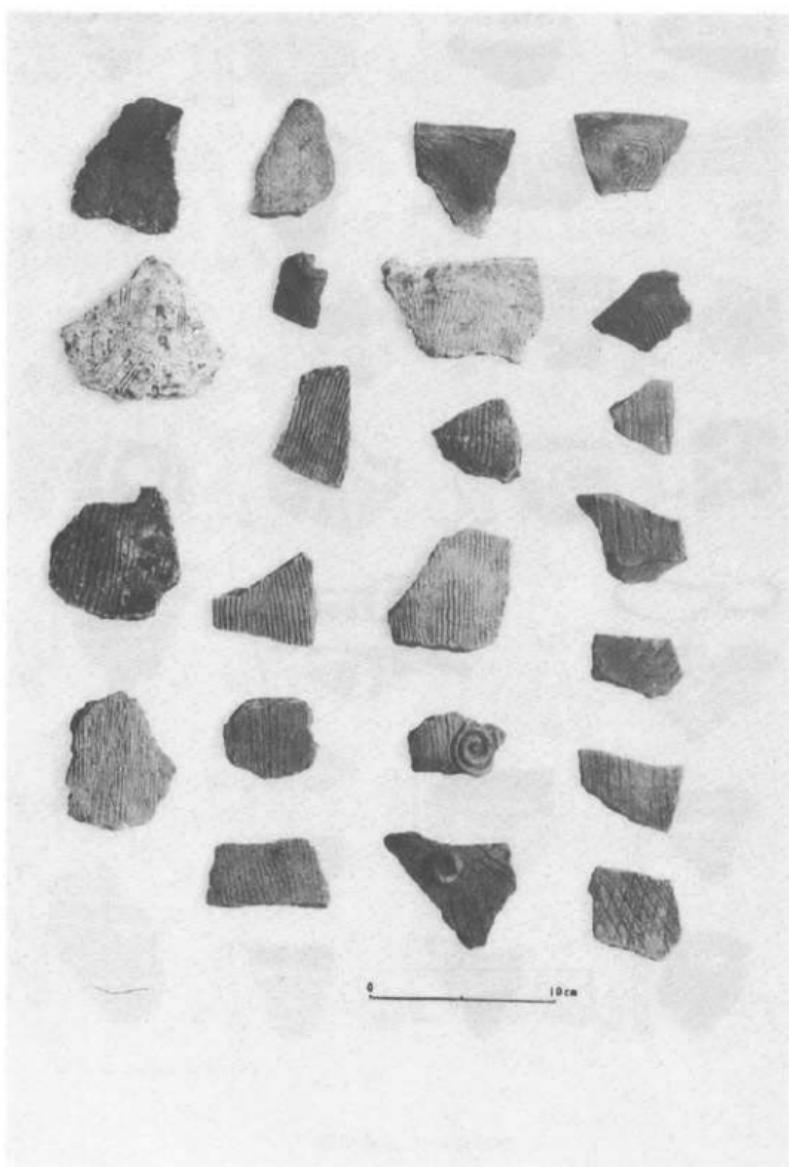
第27図の33 土器拓影図(C)



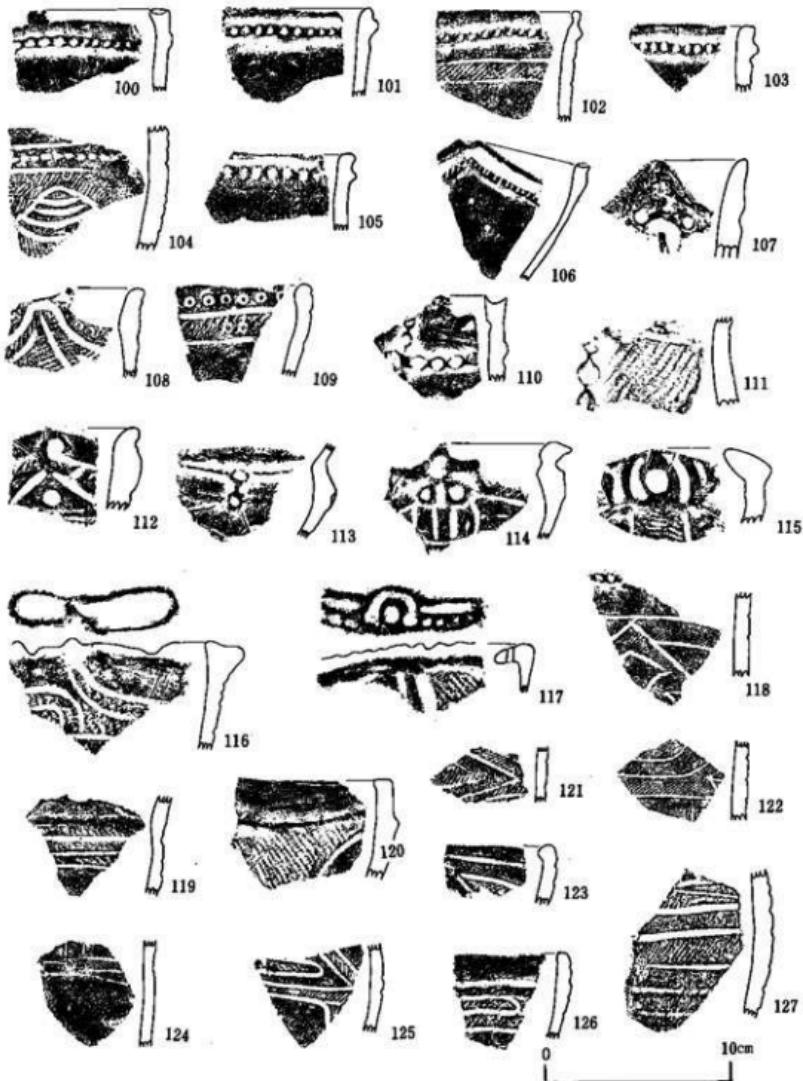
第27図の34 土器写真(c)



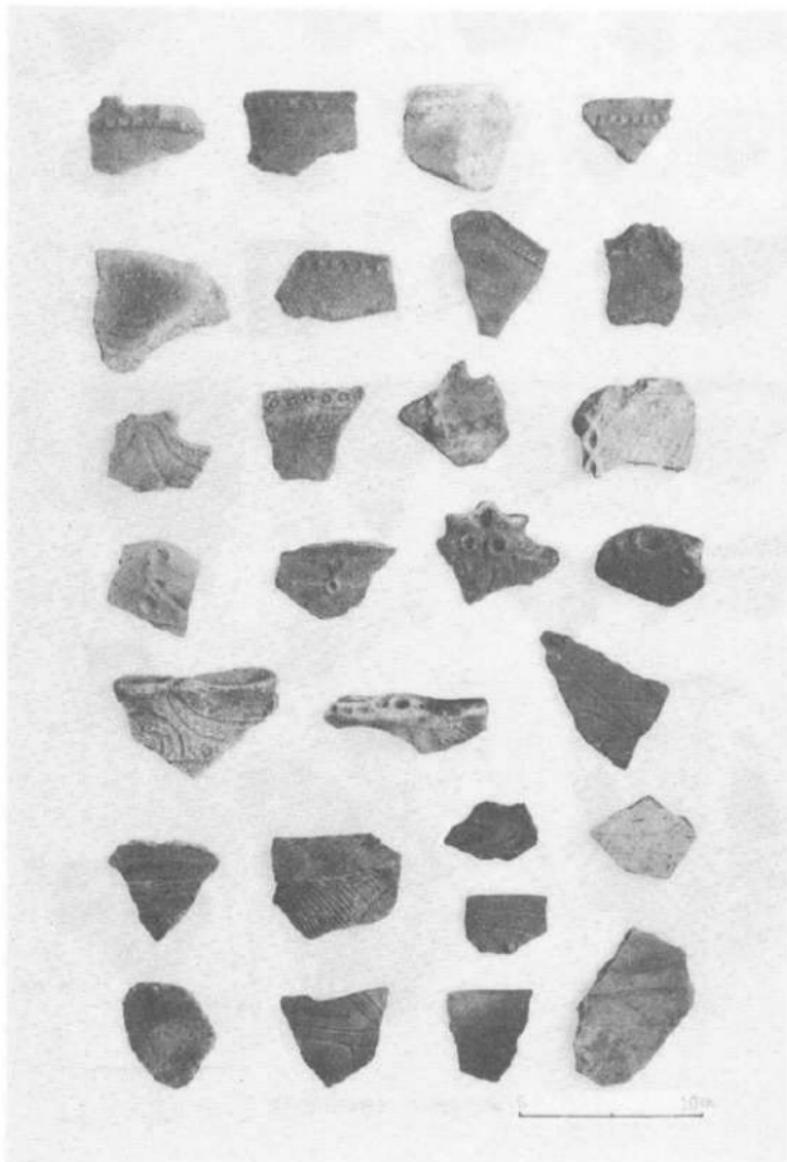
第27図の35 土器拓影図(C)



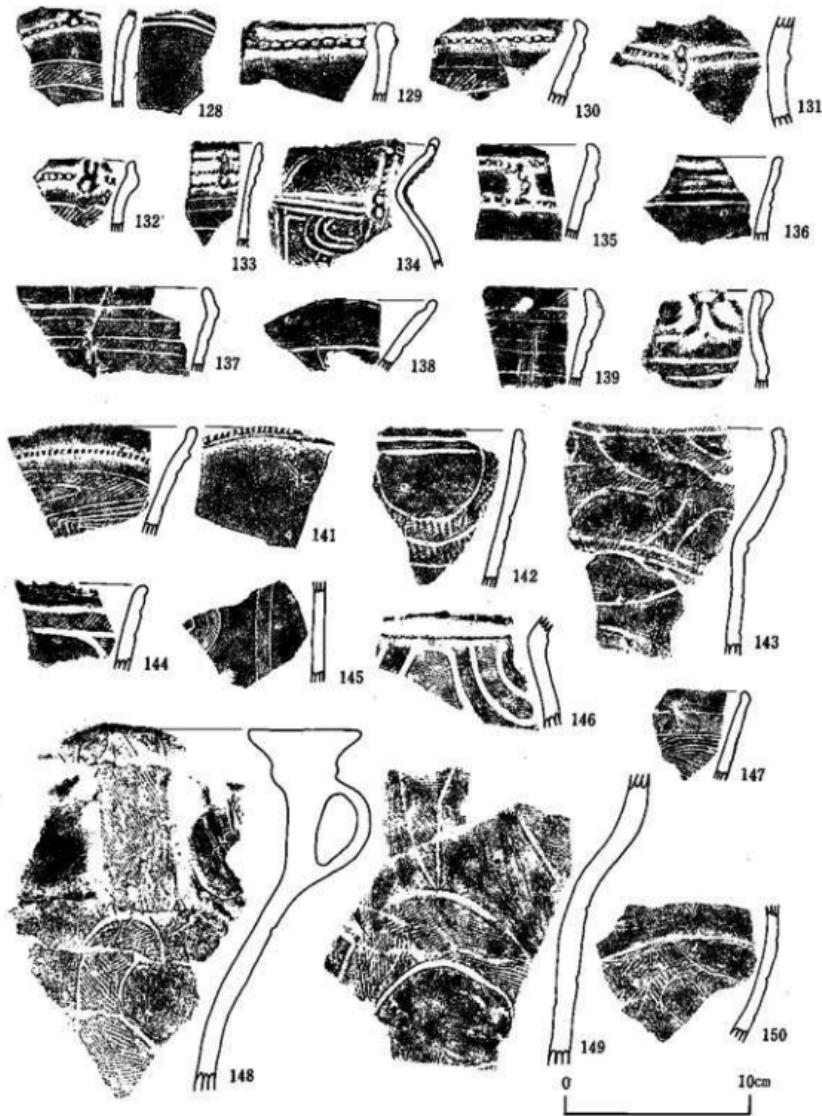
第27図の36 土器写真(C)



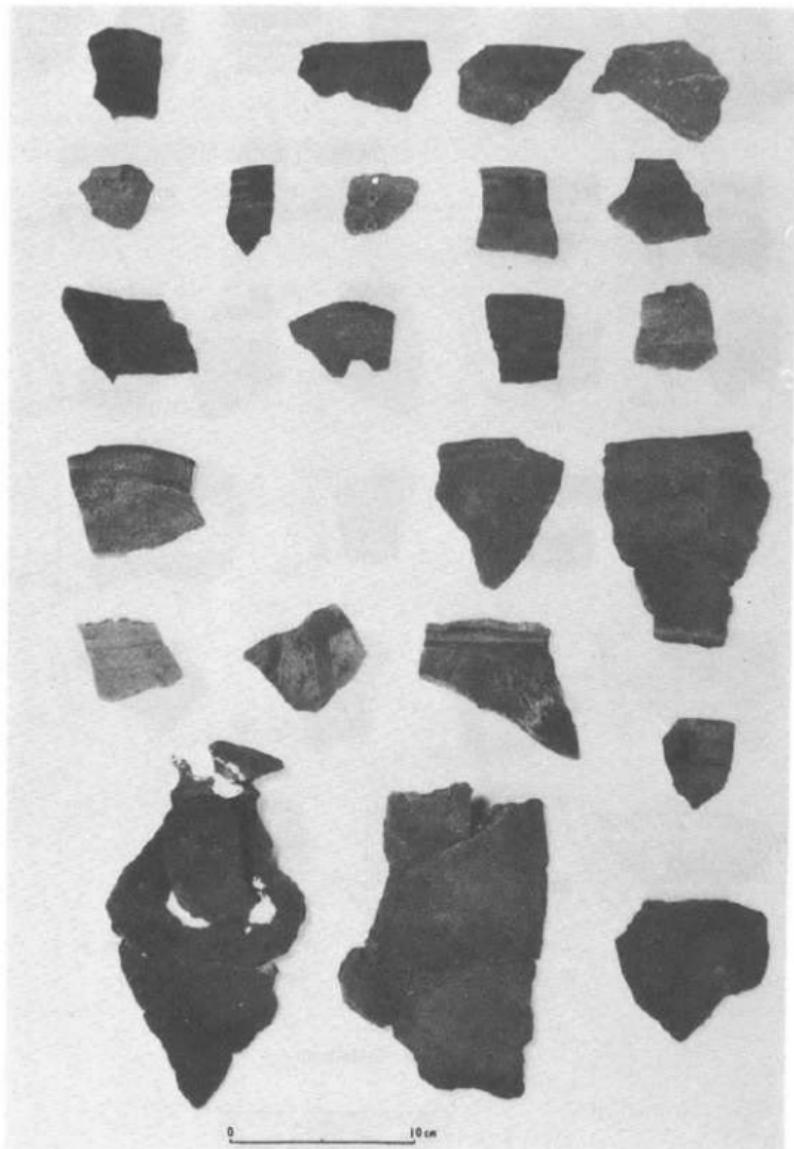
第27図の37 土器拓影図(C)



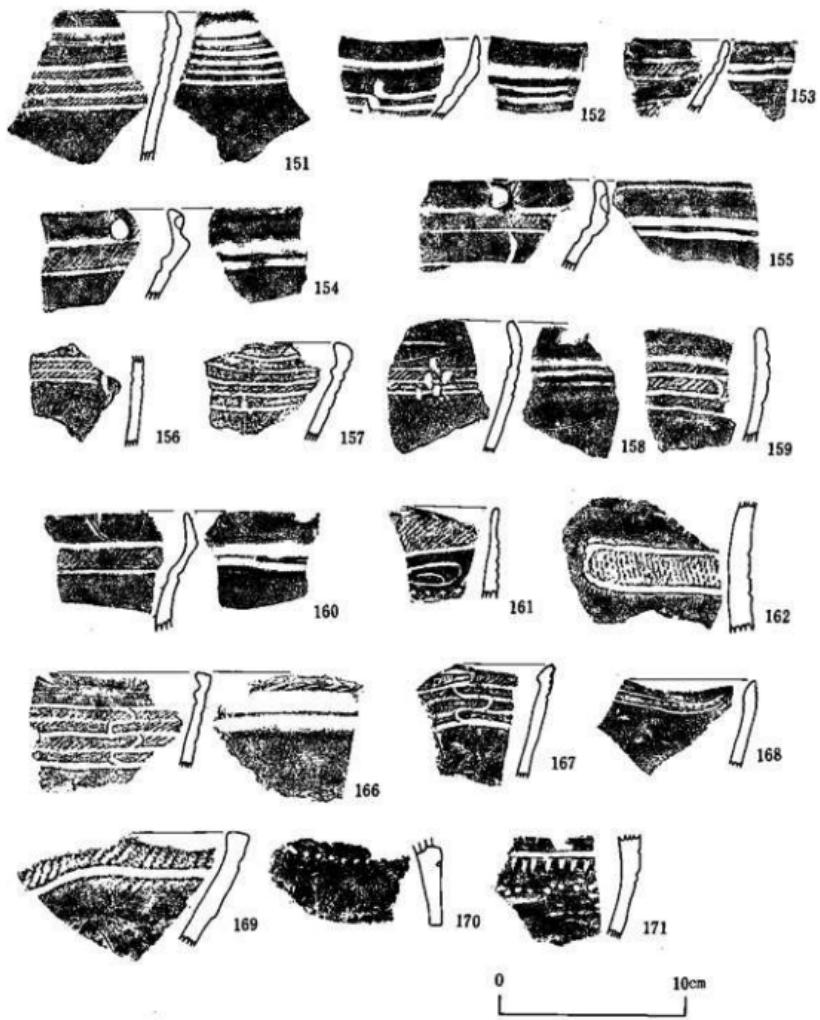
第27図の38 土器写真(c)



第27図の39 土器拓影図(C)



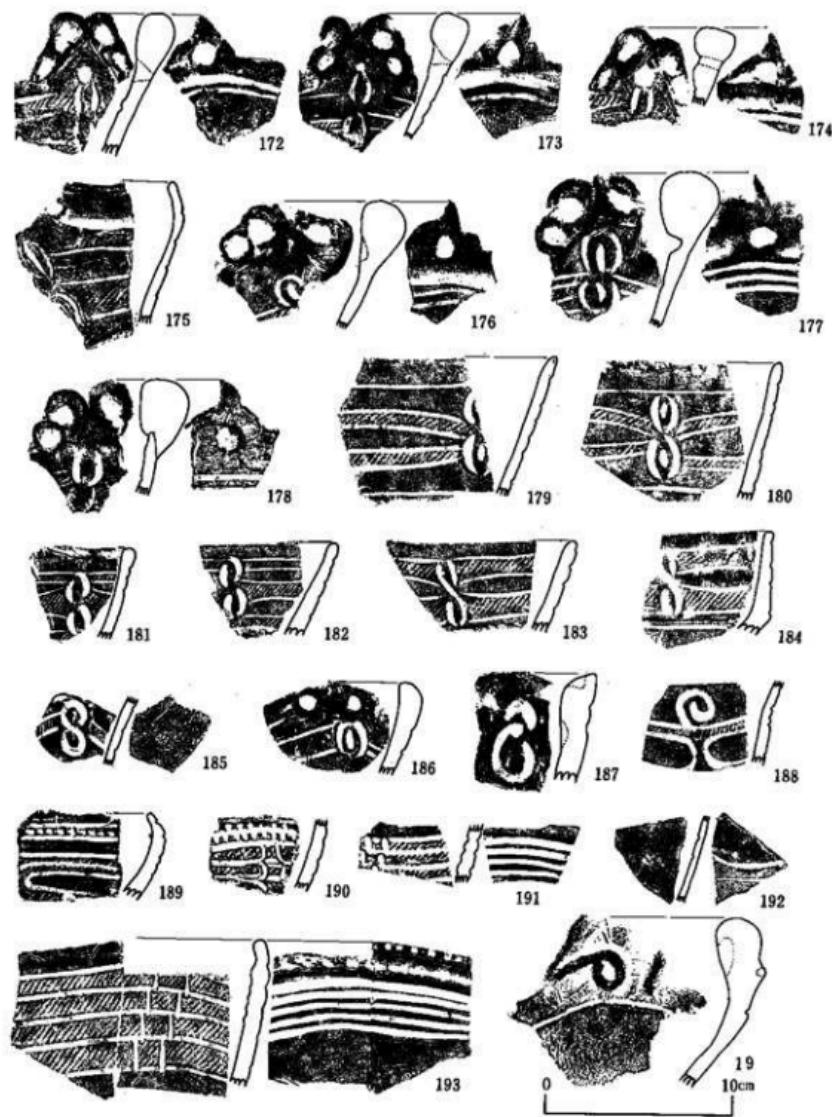
第27図の40 土器写真(c)



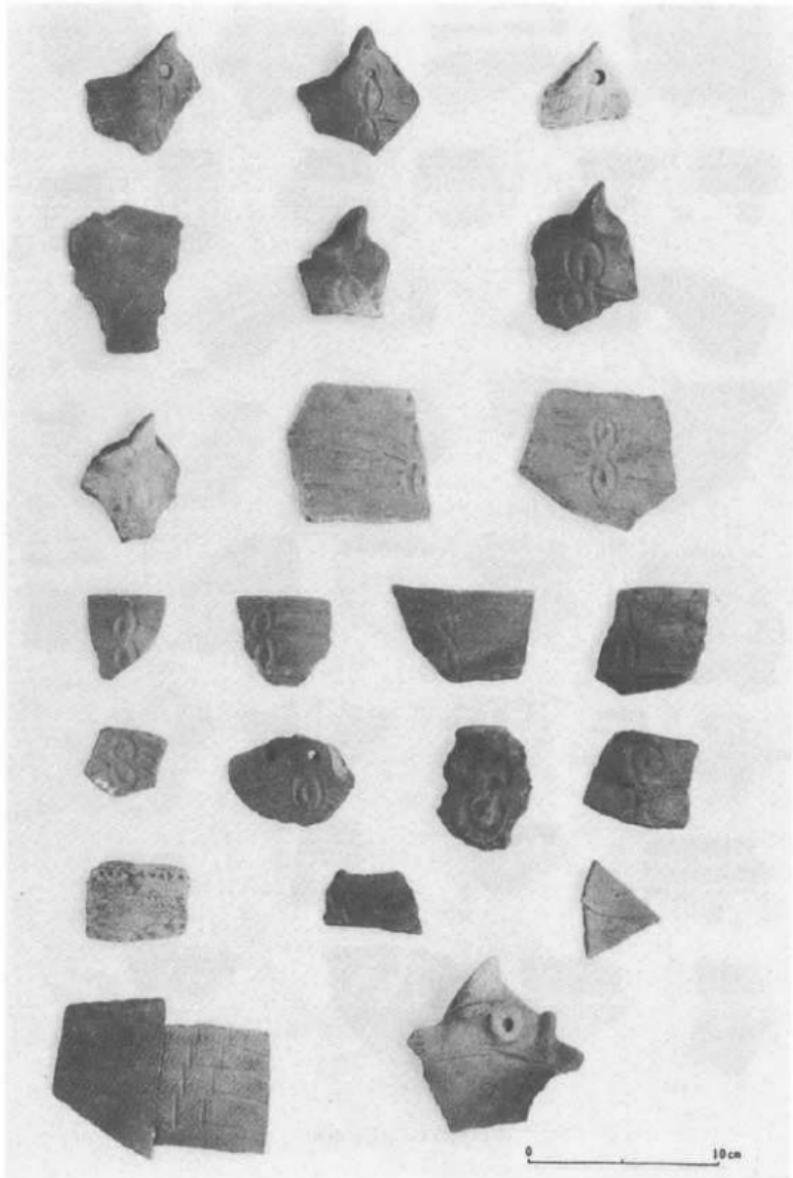
第27図の41 土器拓影図(C)



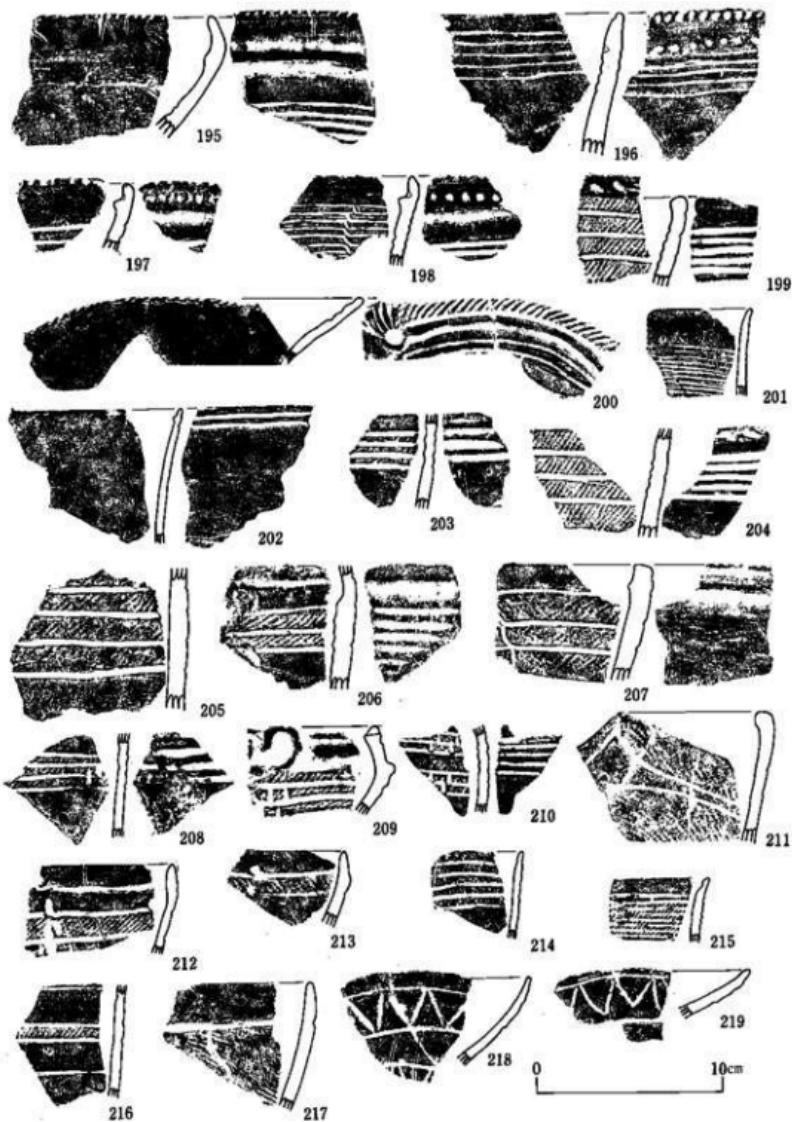
第27図の42 土器写真(c)



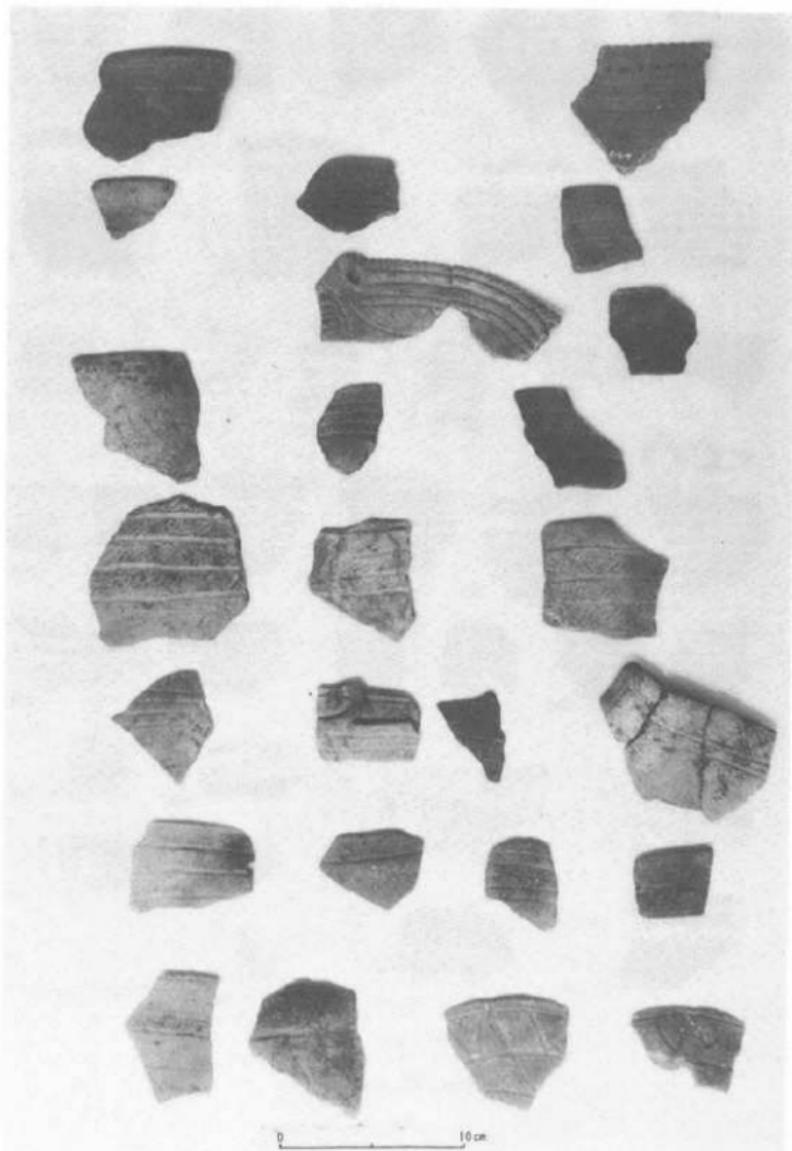
第27図の43 土器拓影図(C)



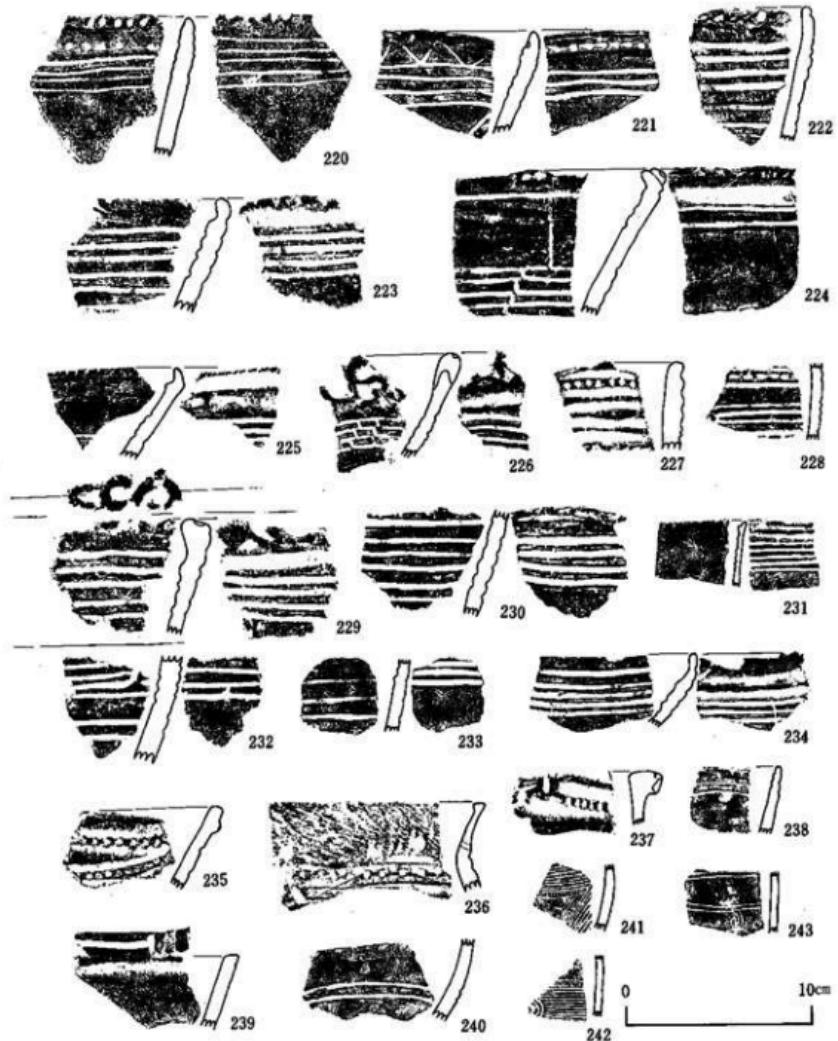
第27図の44 土器写真(C)



第27図の45 土器拓影図(C)



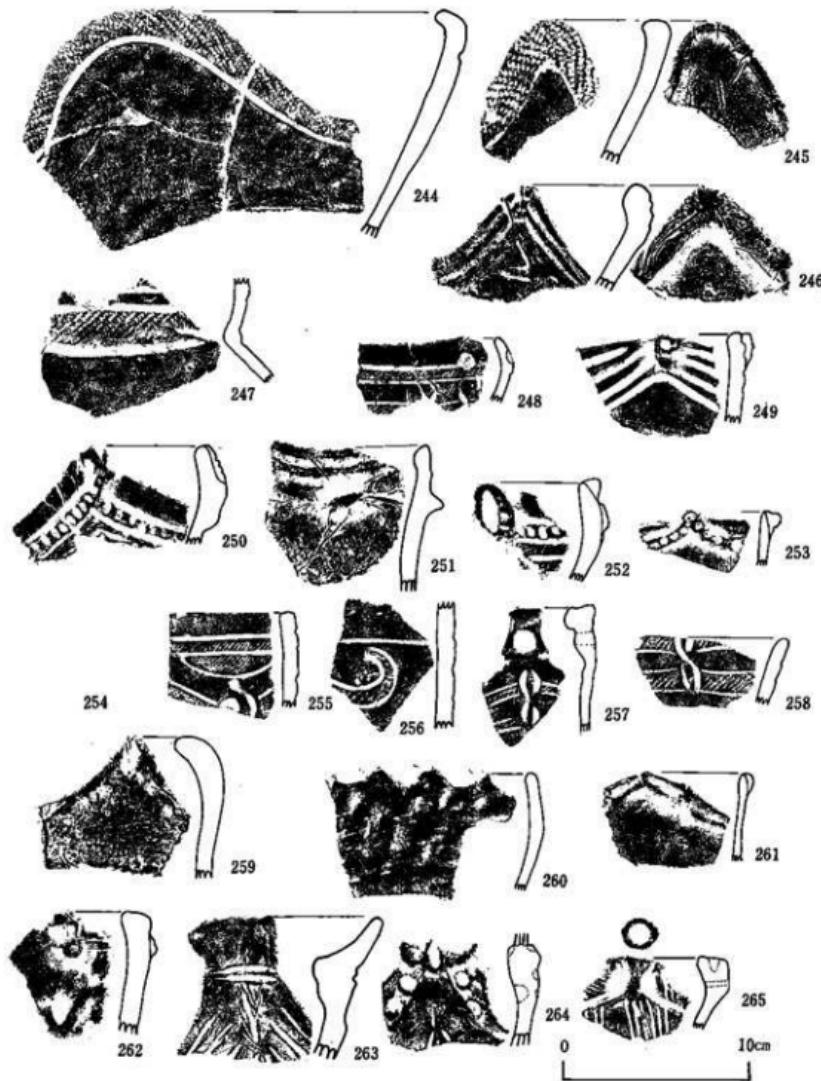
第27図の46 土器写真(C)



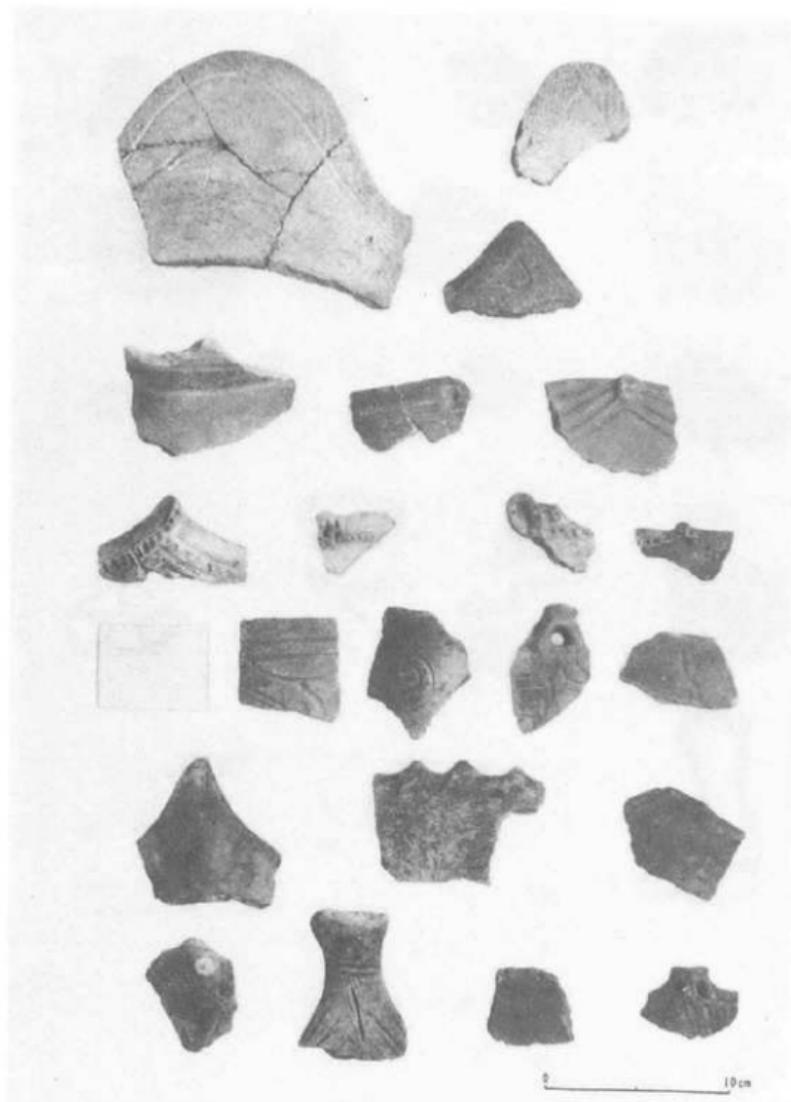
第27図の47 土器写真(C)



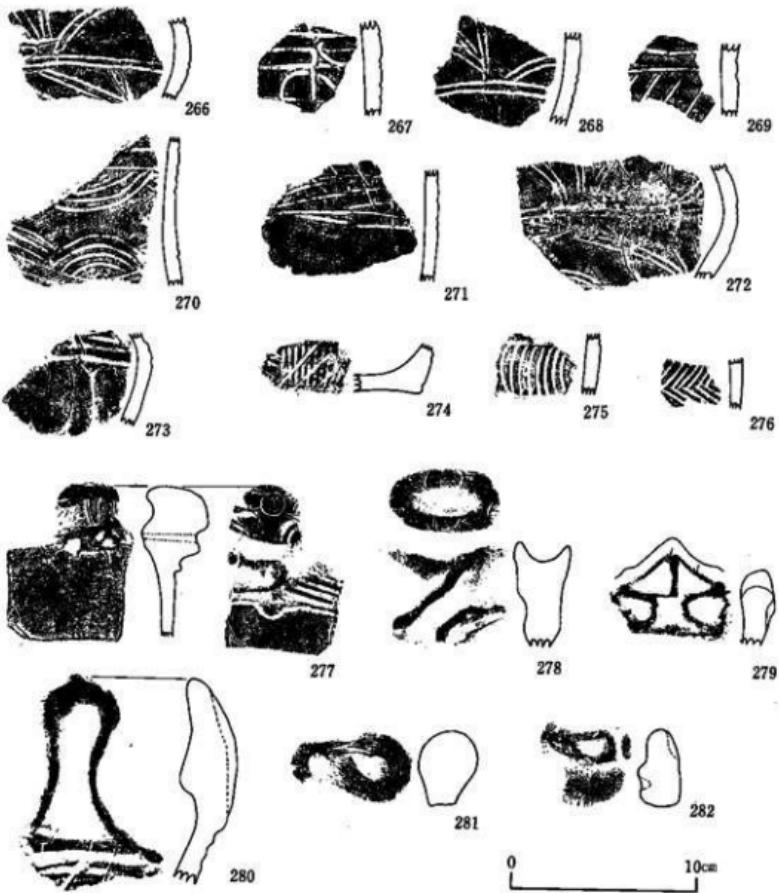
第27図の48 土器写真(C)



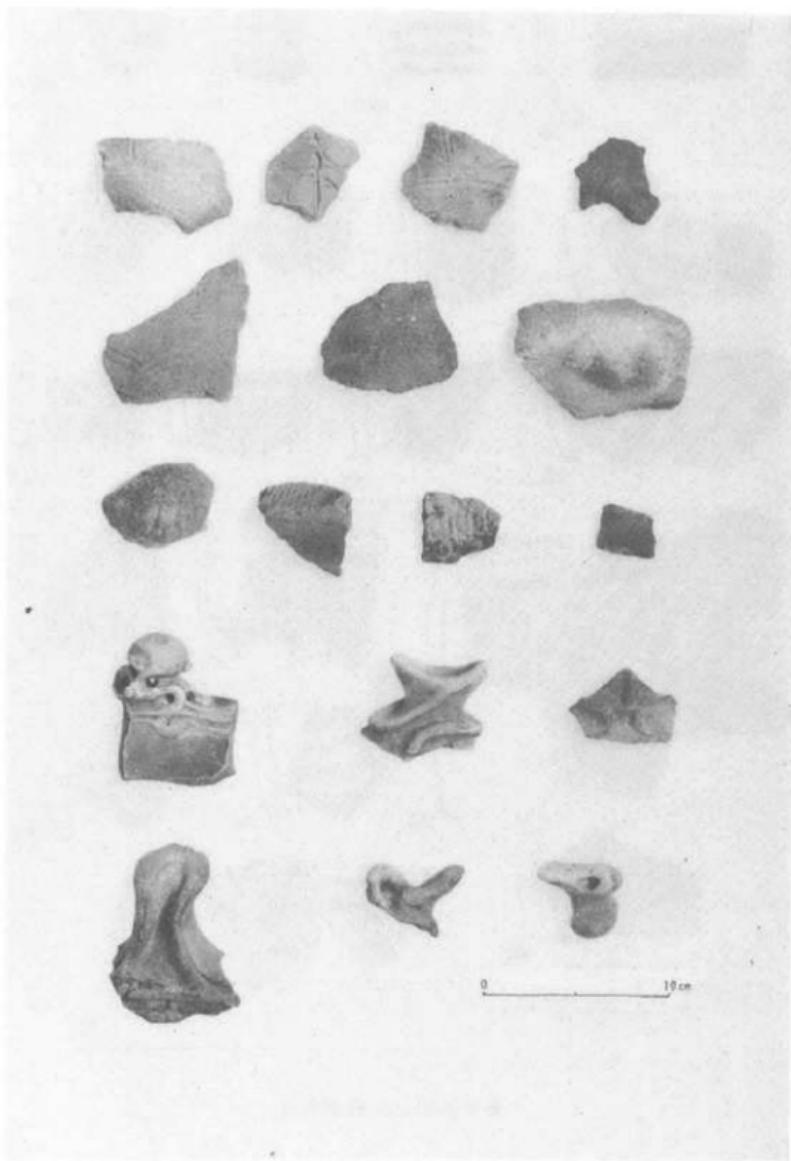
第27図の49 土器拓影図(C)



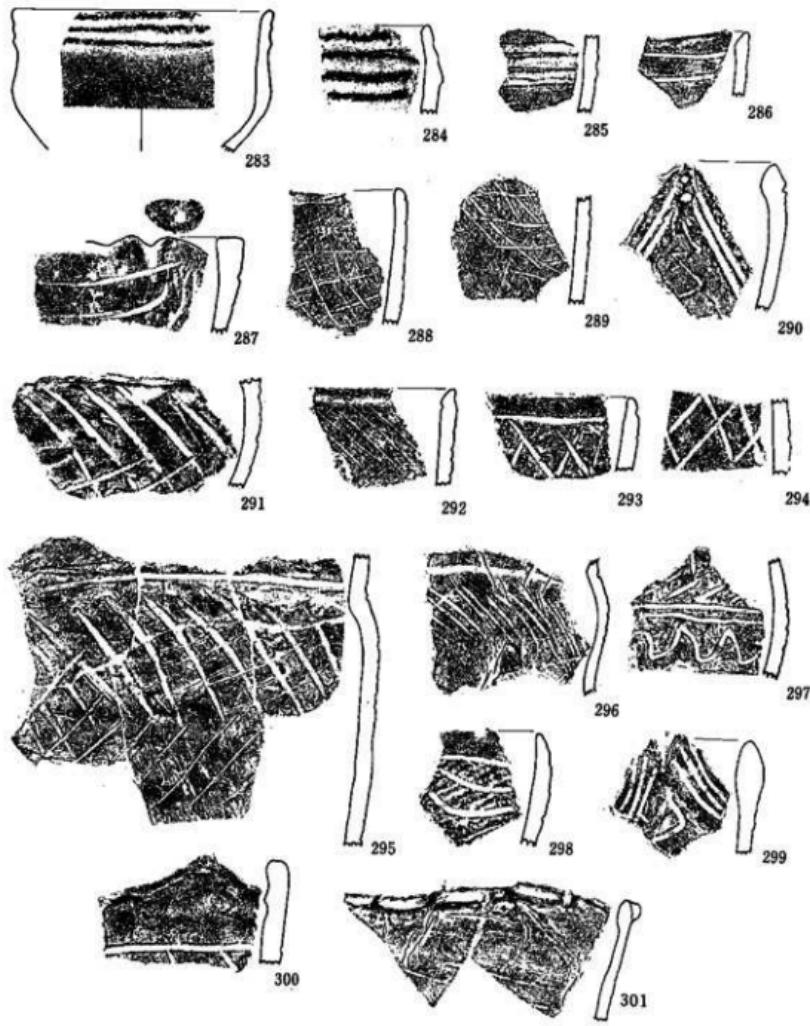
第27図の50 土器写真(C)



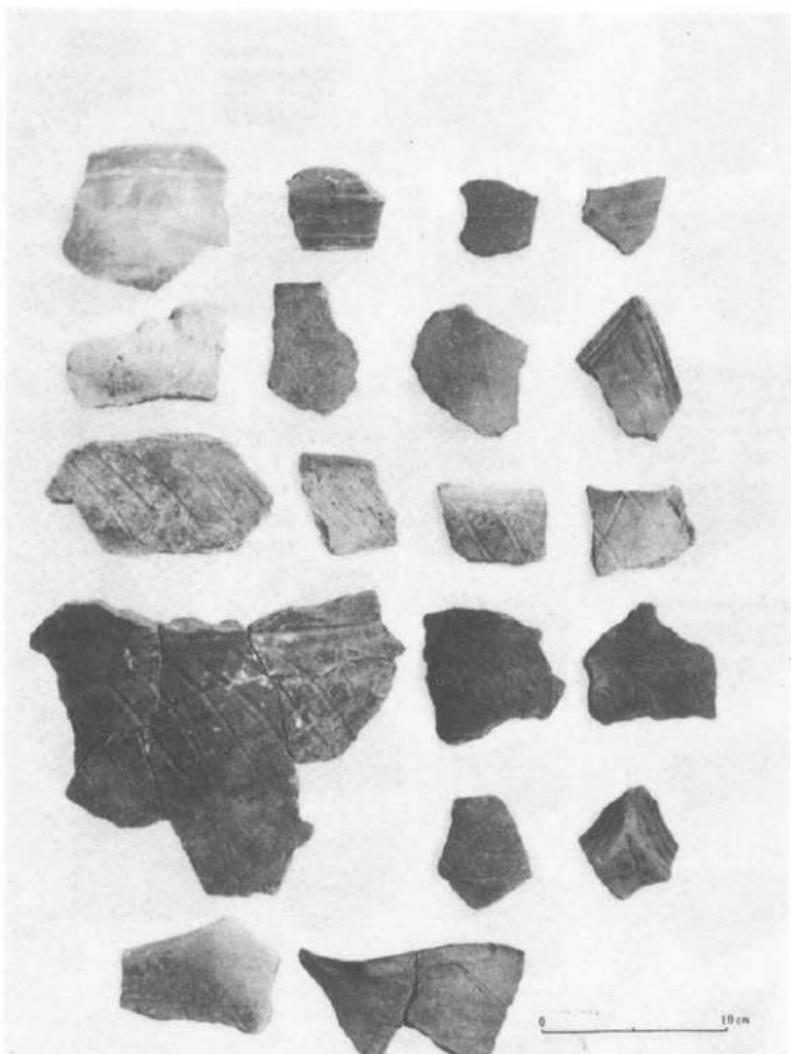
第27図の51 土器拓影図(C)



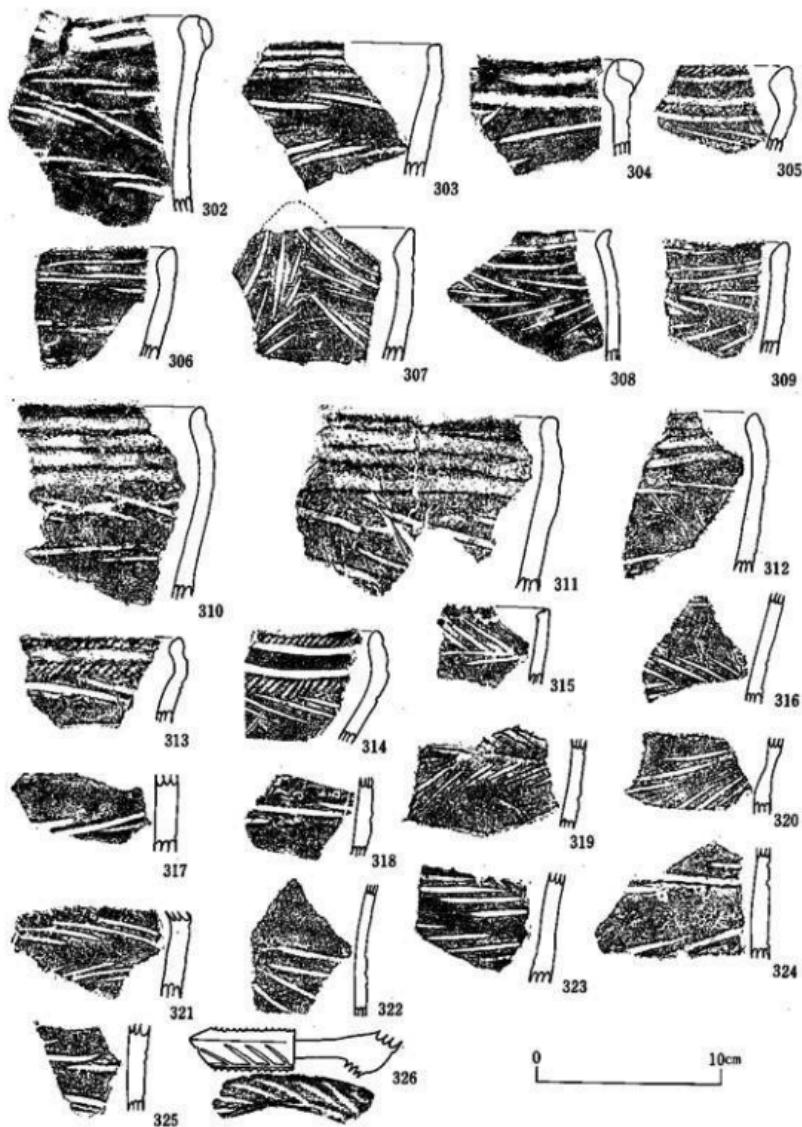
第27図の52 土器写真(C)



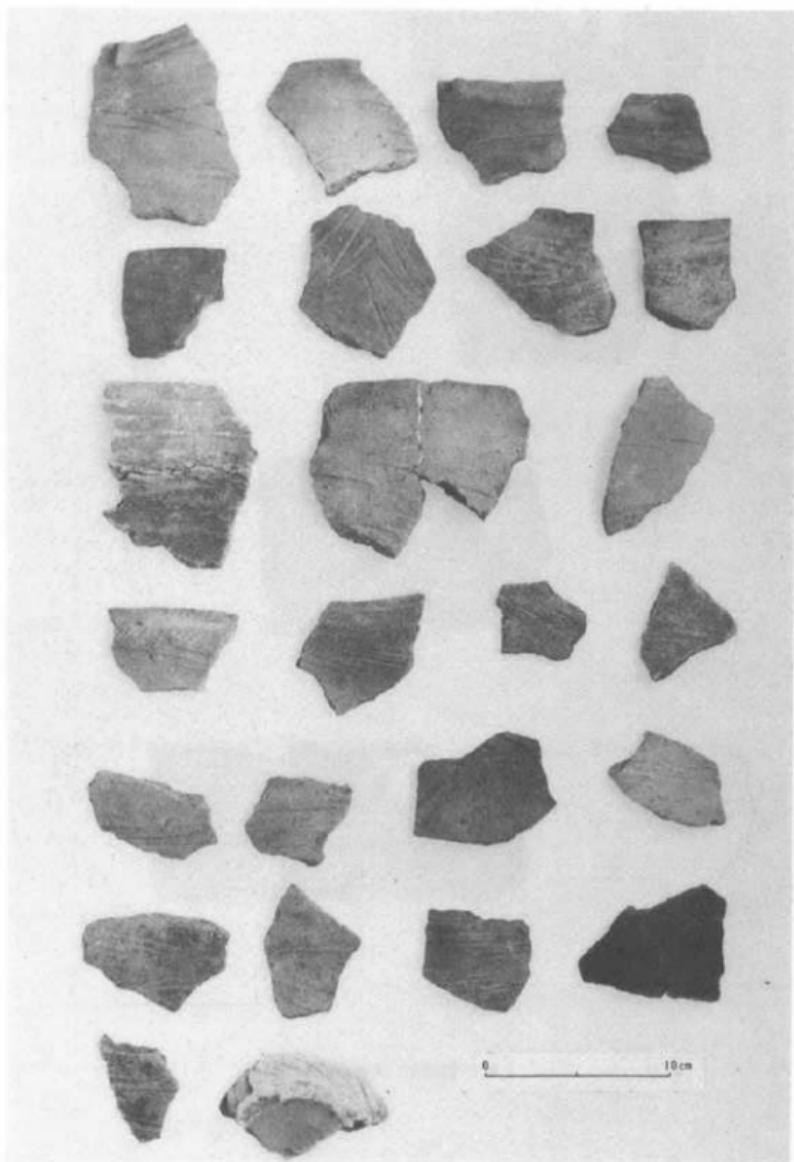
第27図の53 土器拓影図(C)



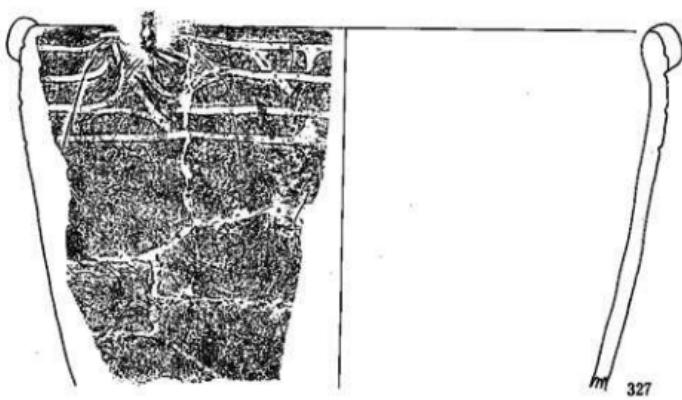
第27図の54 土器拓影図(C)



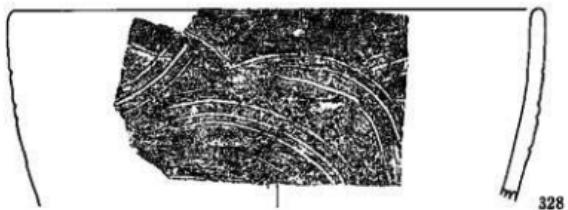
第27図の55 土器拓影図(C)



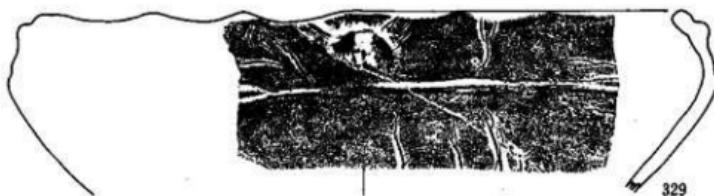
第27図の56 土器拓影図(C)



327



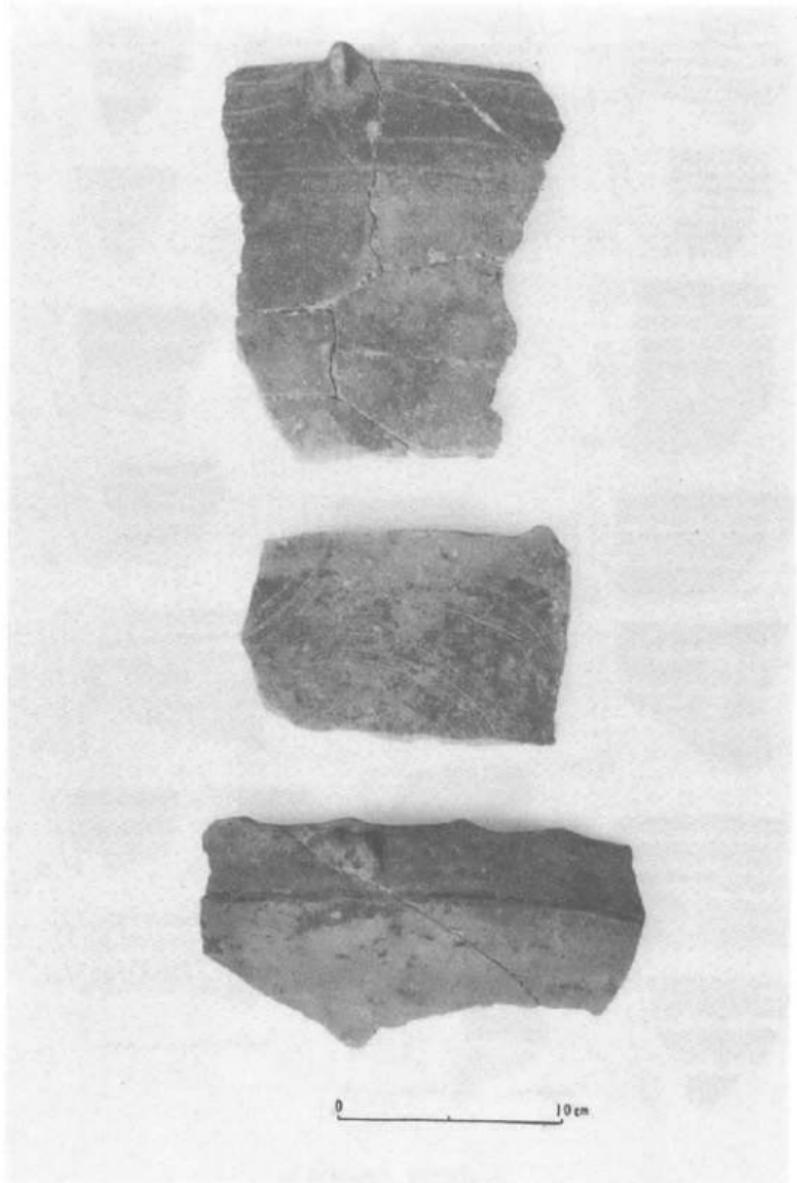
328



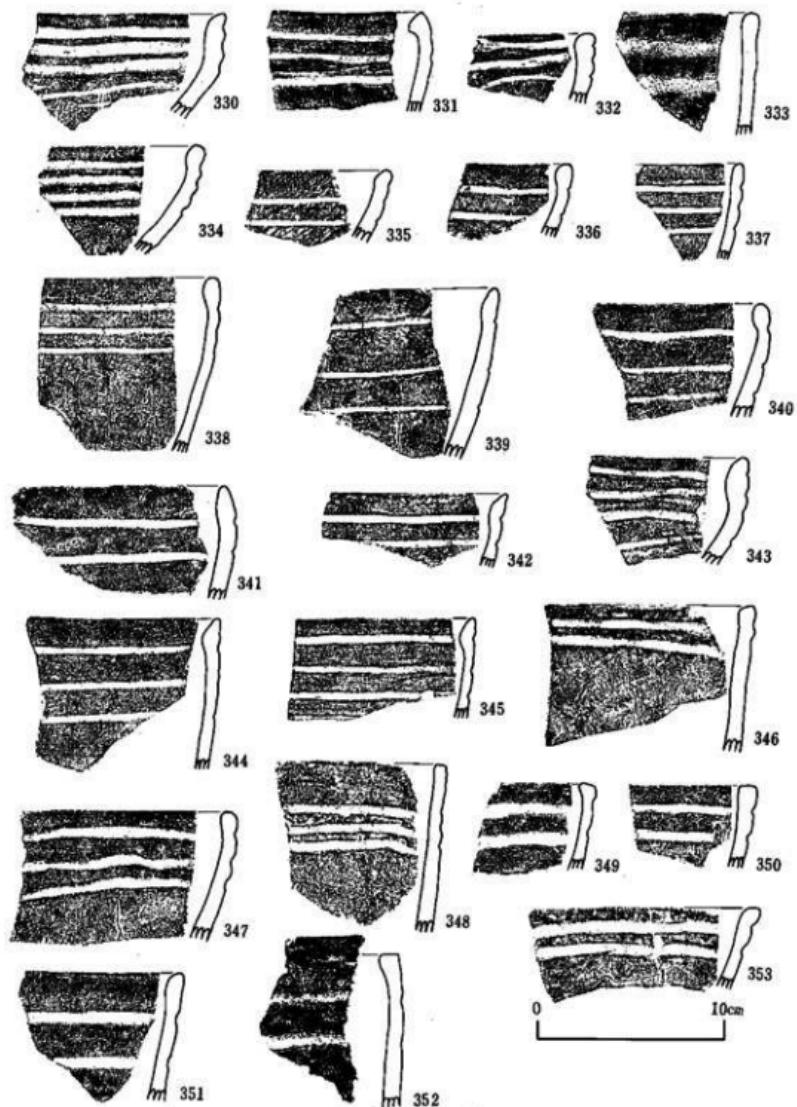
329

0 10cm

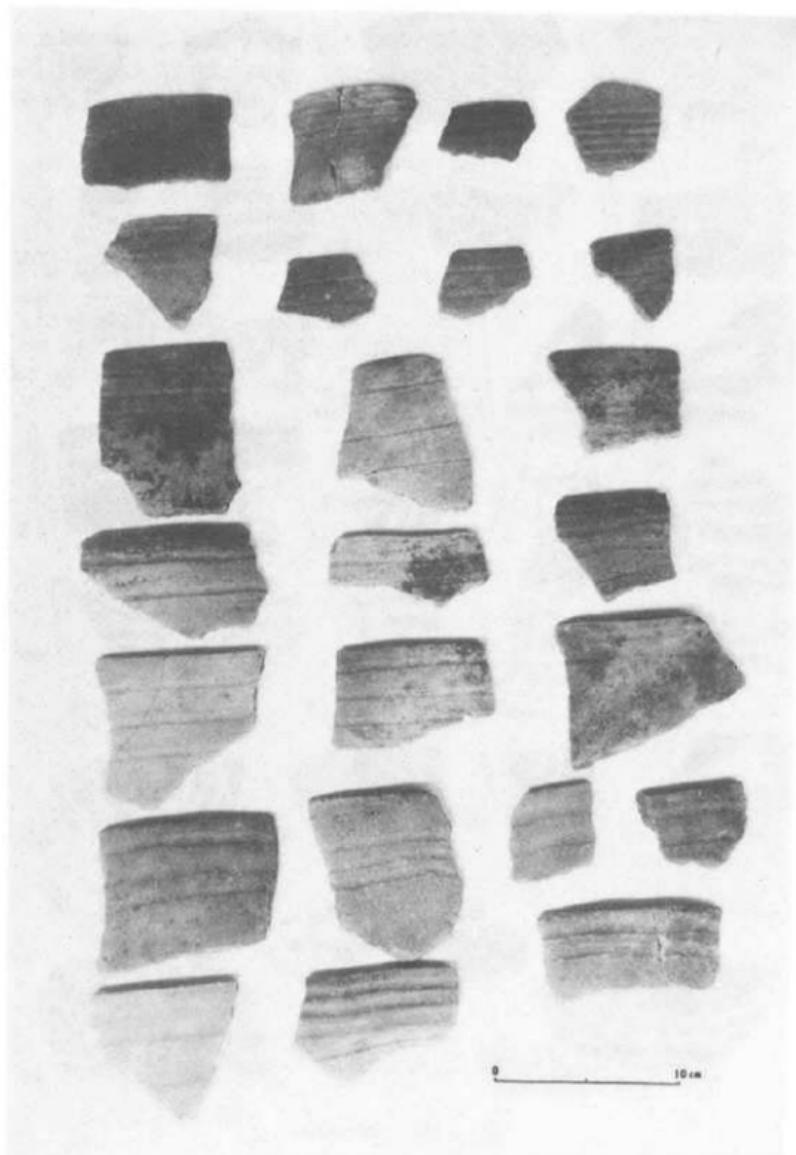
第27図の57 土器拓影図(C)



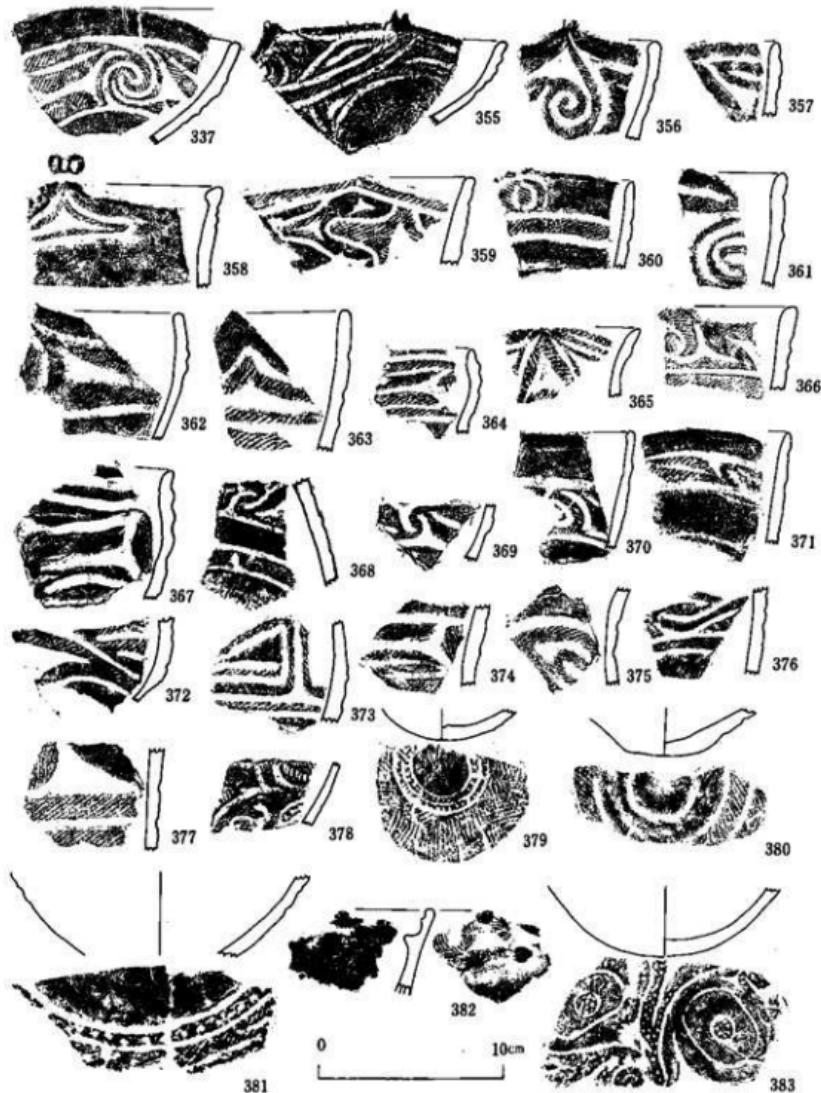
第 27 図の 58 土器写真(C)



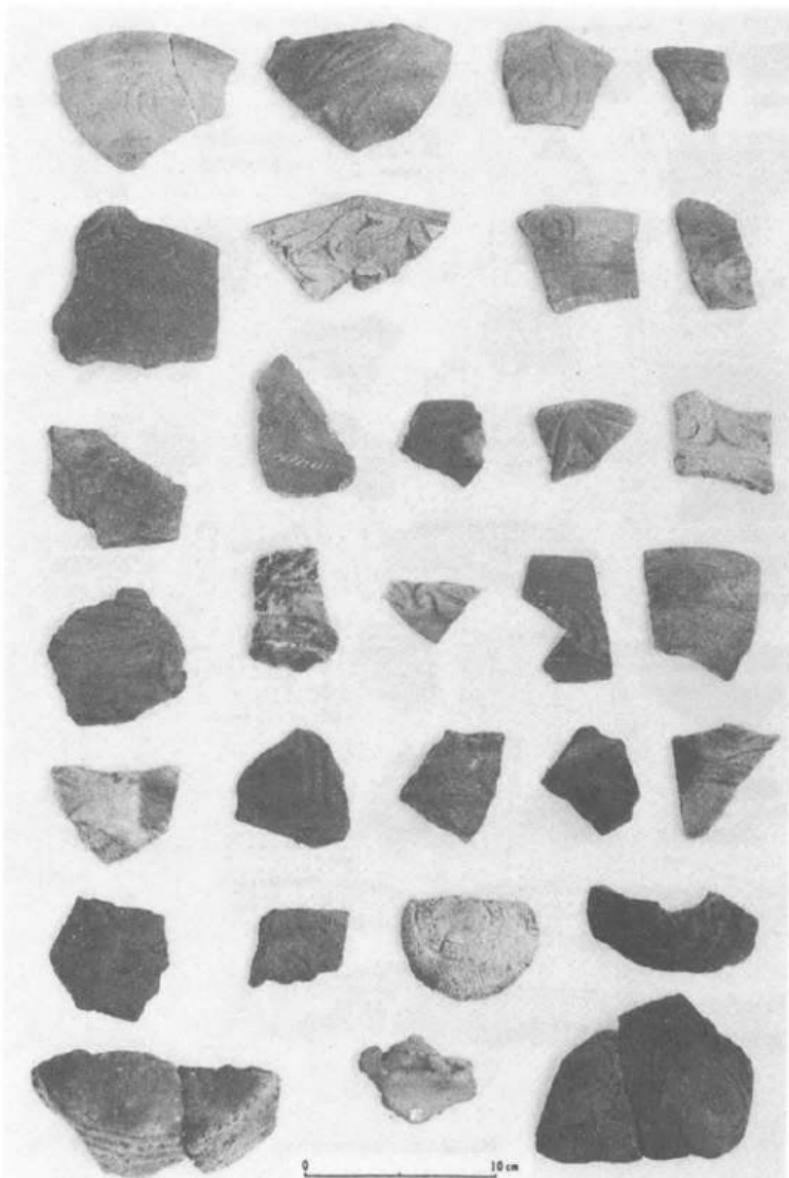
第27図の59 土器拓影図(C)



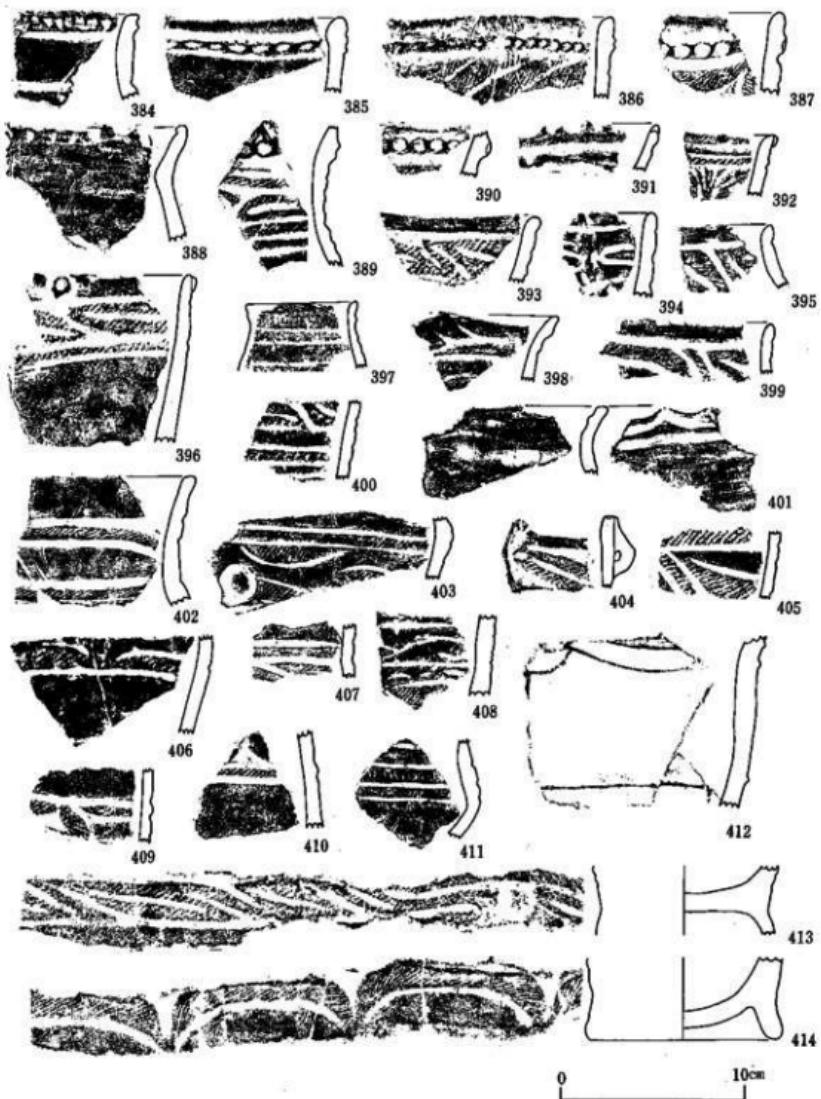
第27図の60 土器写真(C)



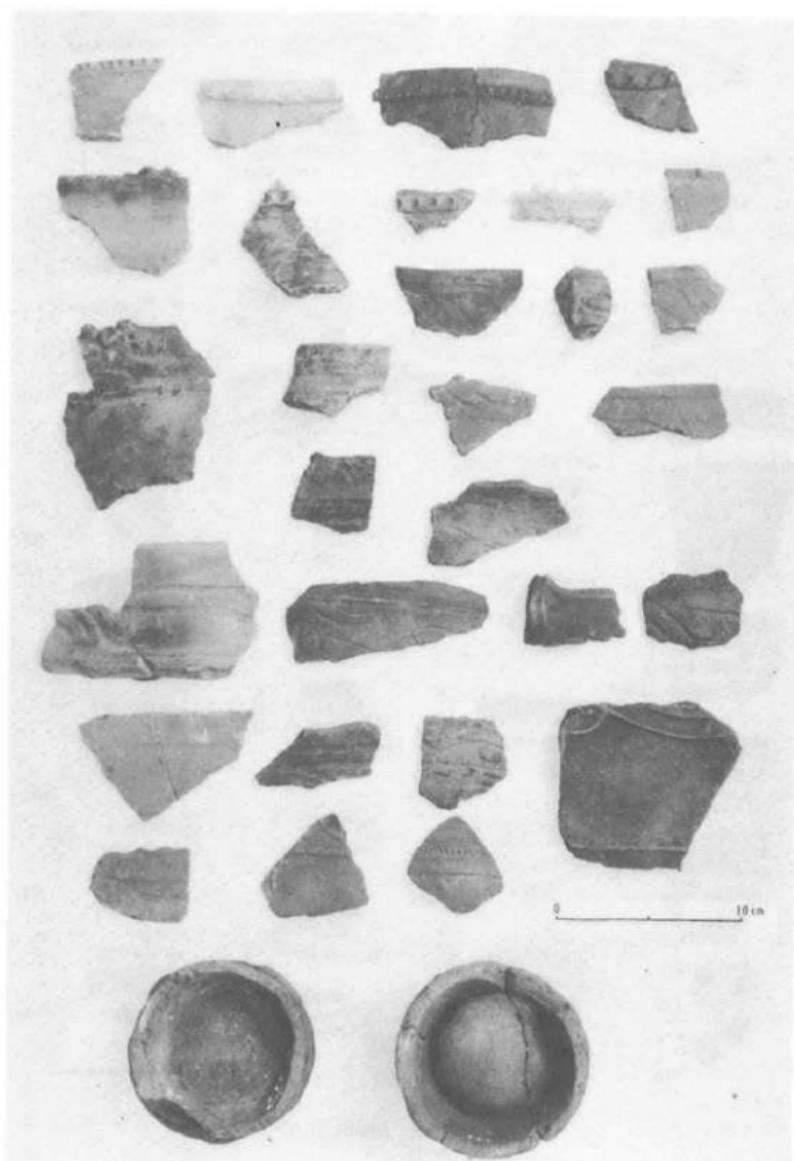
第27図の61 土器拓影図(C)



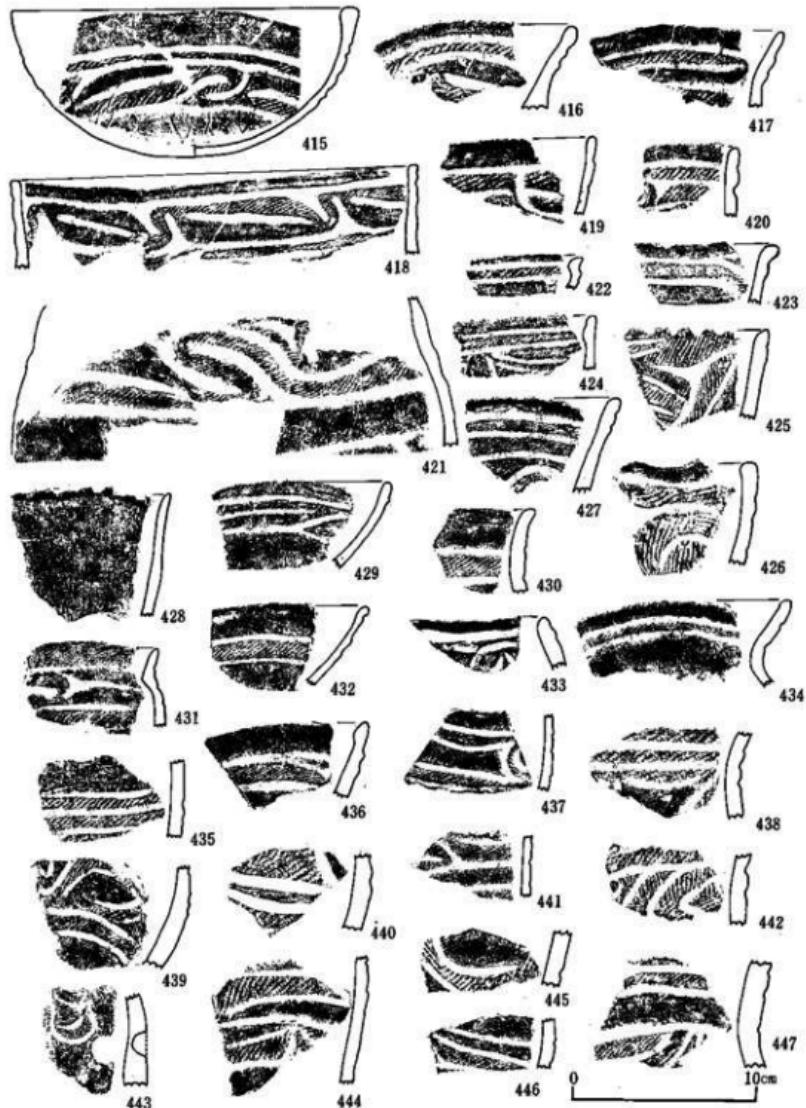
第27図の62 土器写真(C)



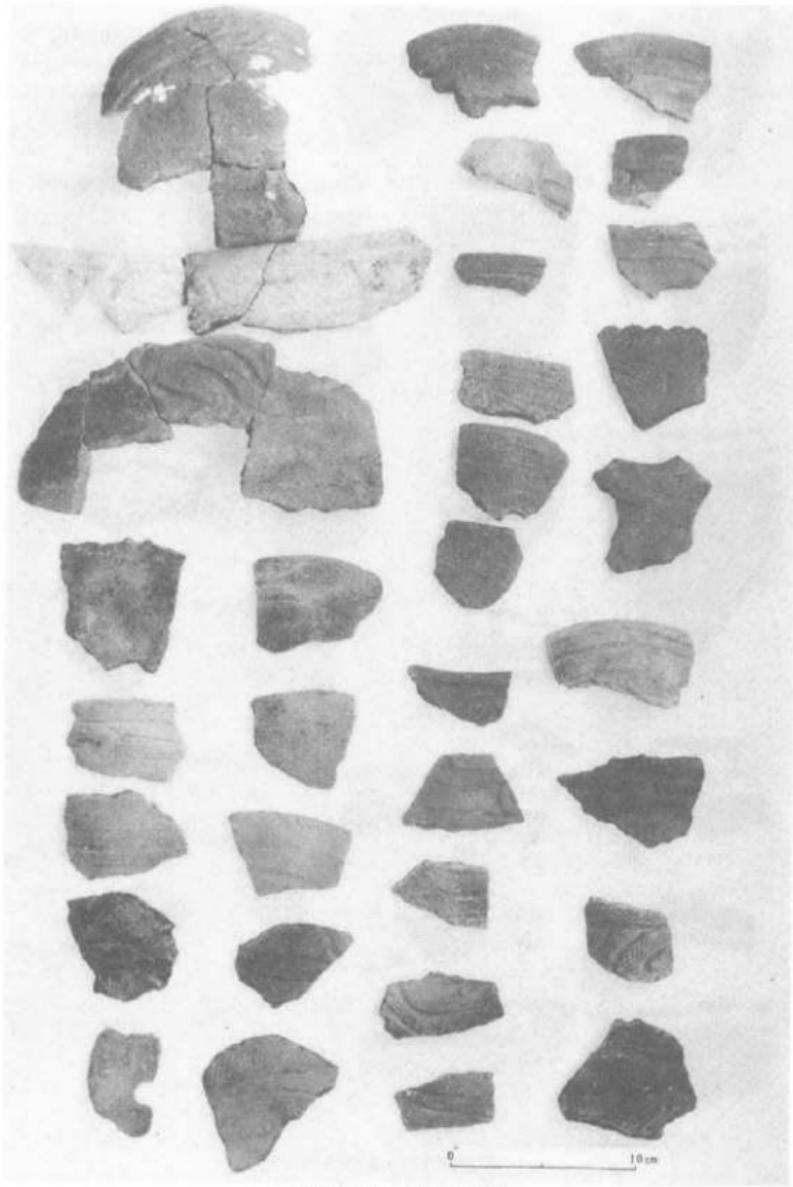
第27図の63 土壠拓影図(C)



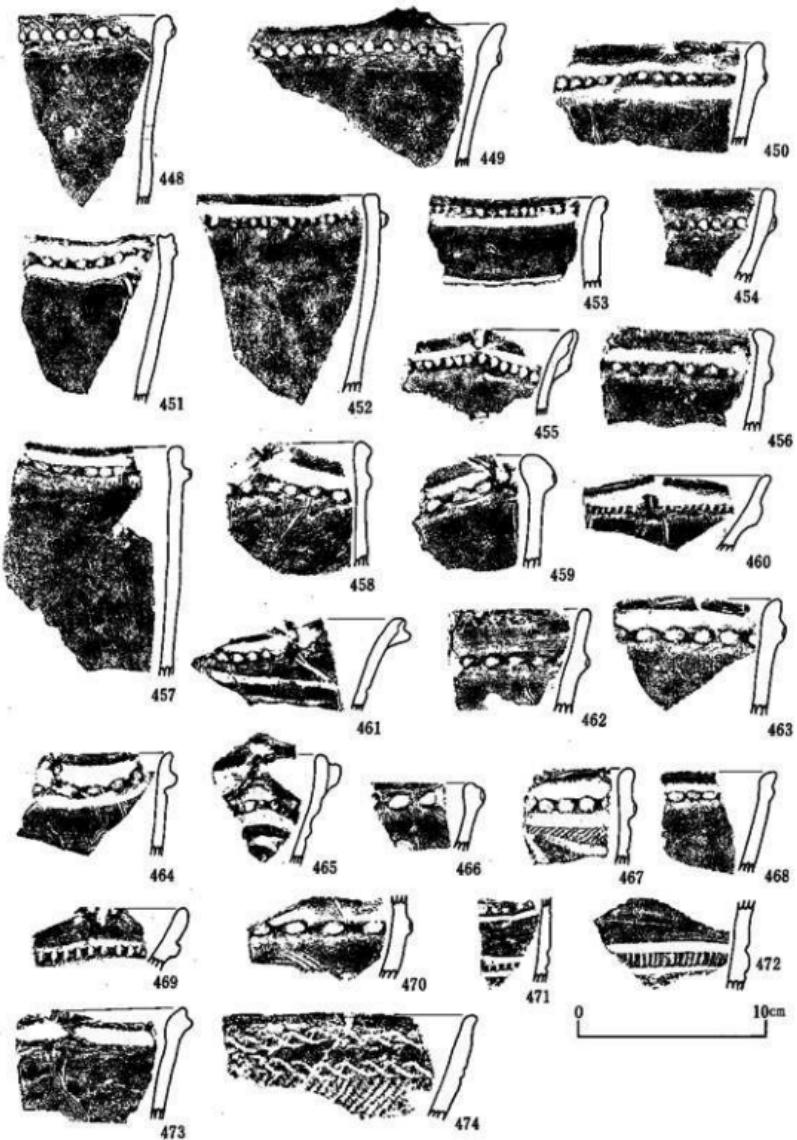
第27図の64 土器写真(C)



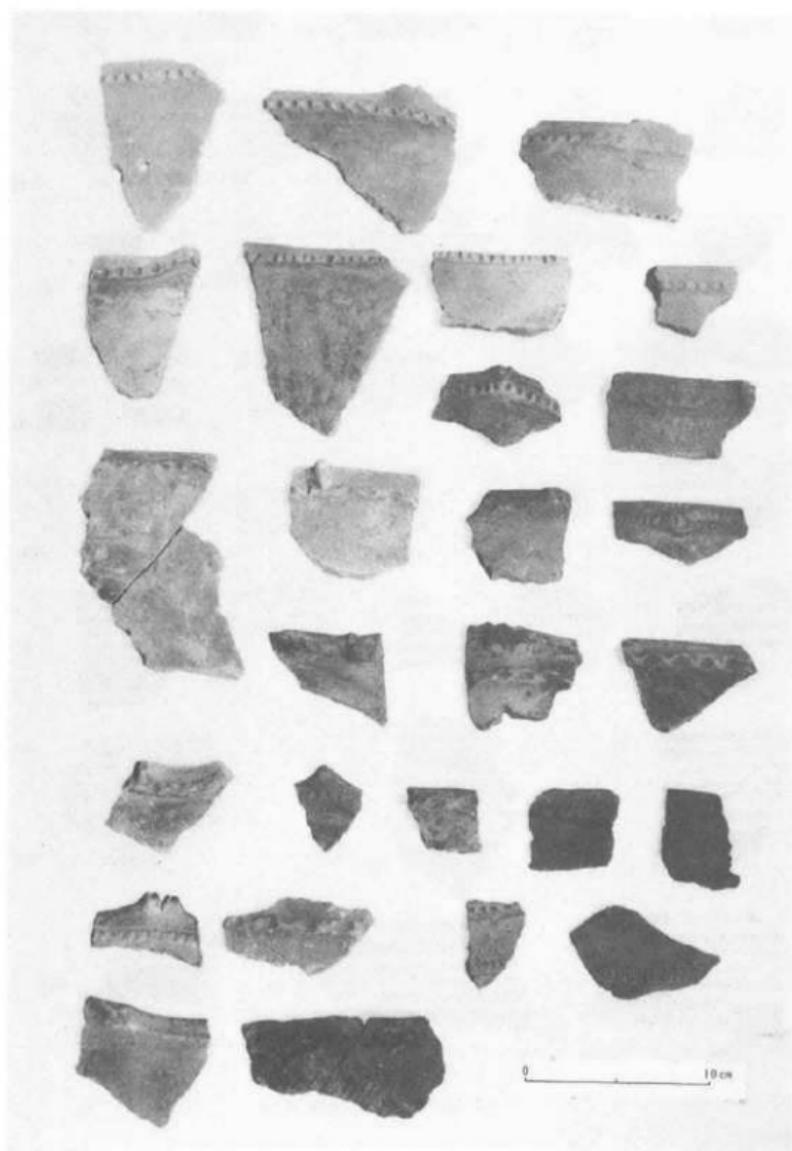
第27図の65 土器拓影図(C)



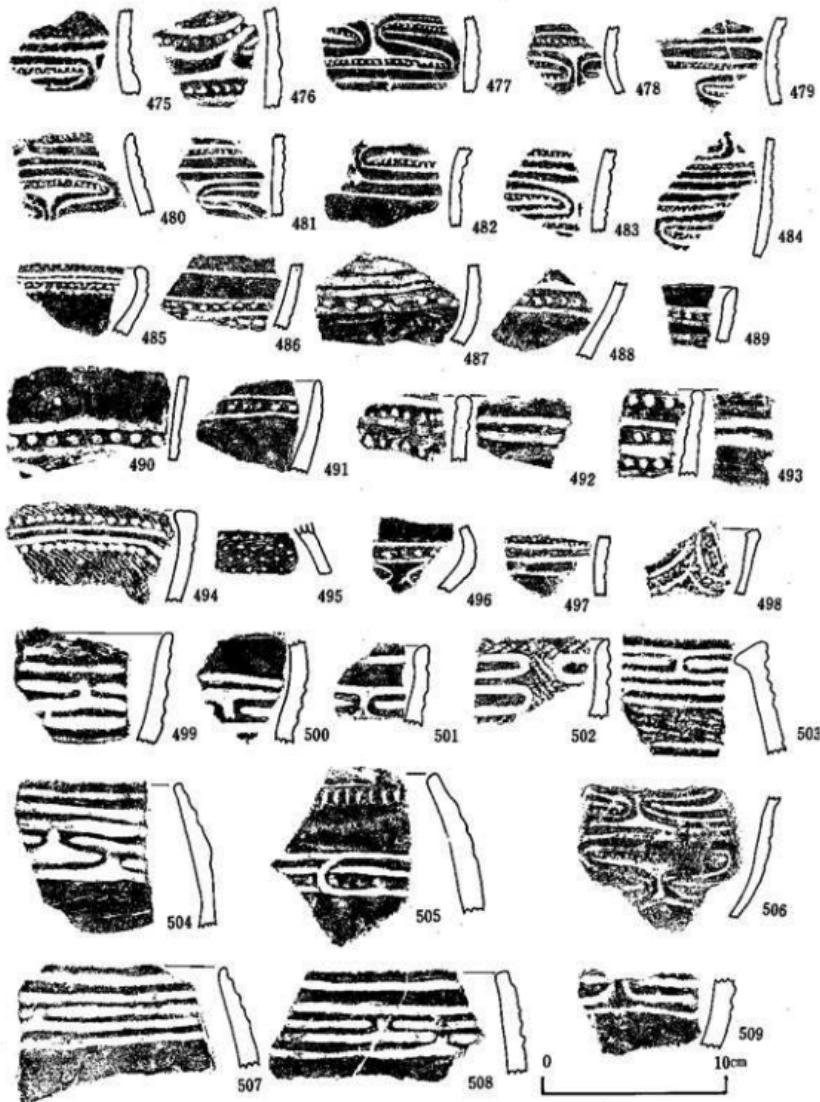
第27図の66 土器写真(C)



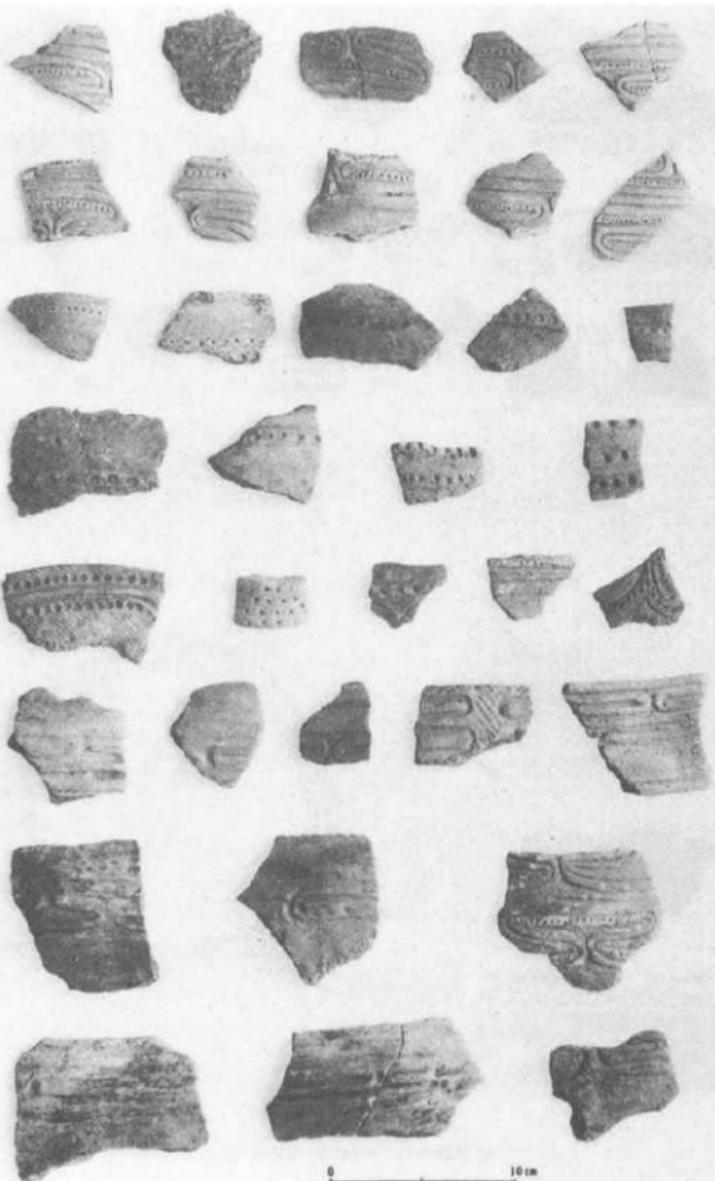
第27図の67 土器拓影図(C)



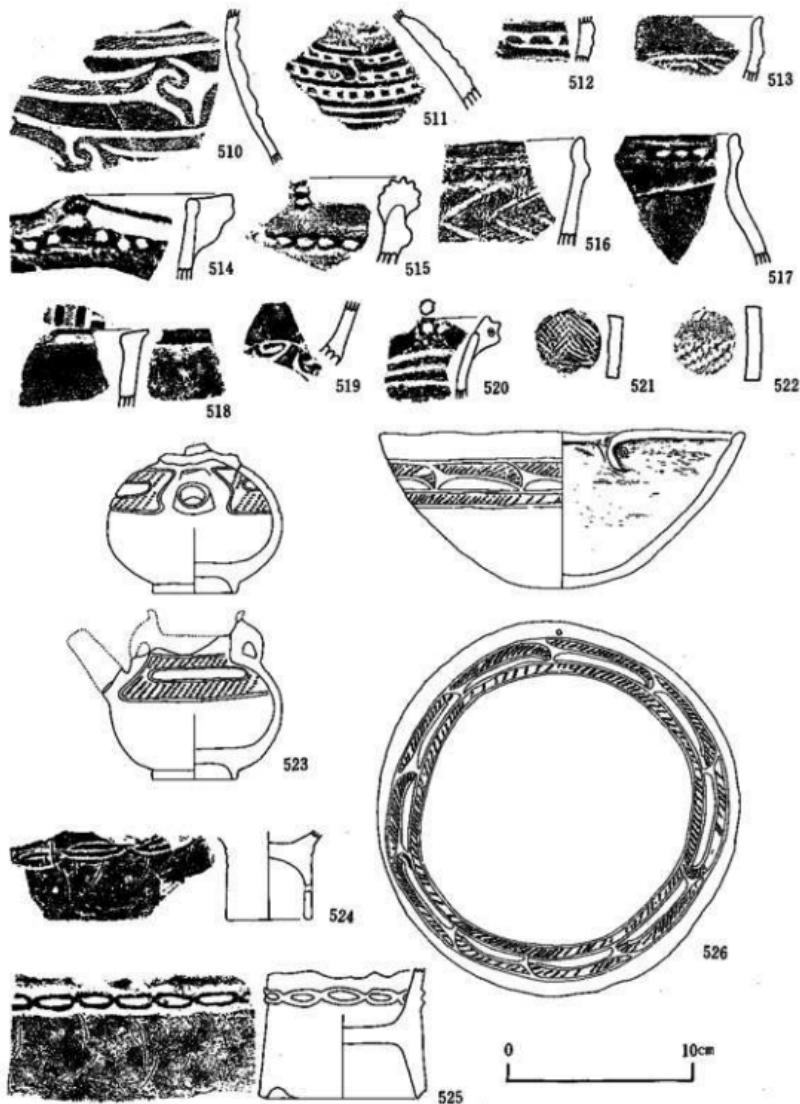
第27図の68 土器写真(C)



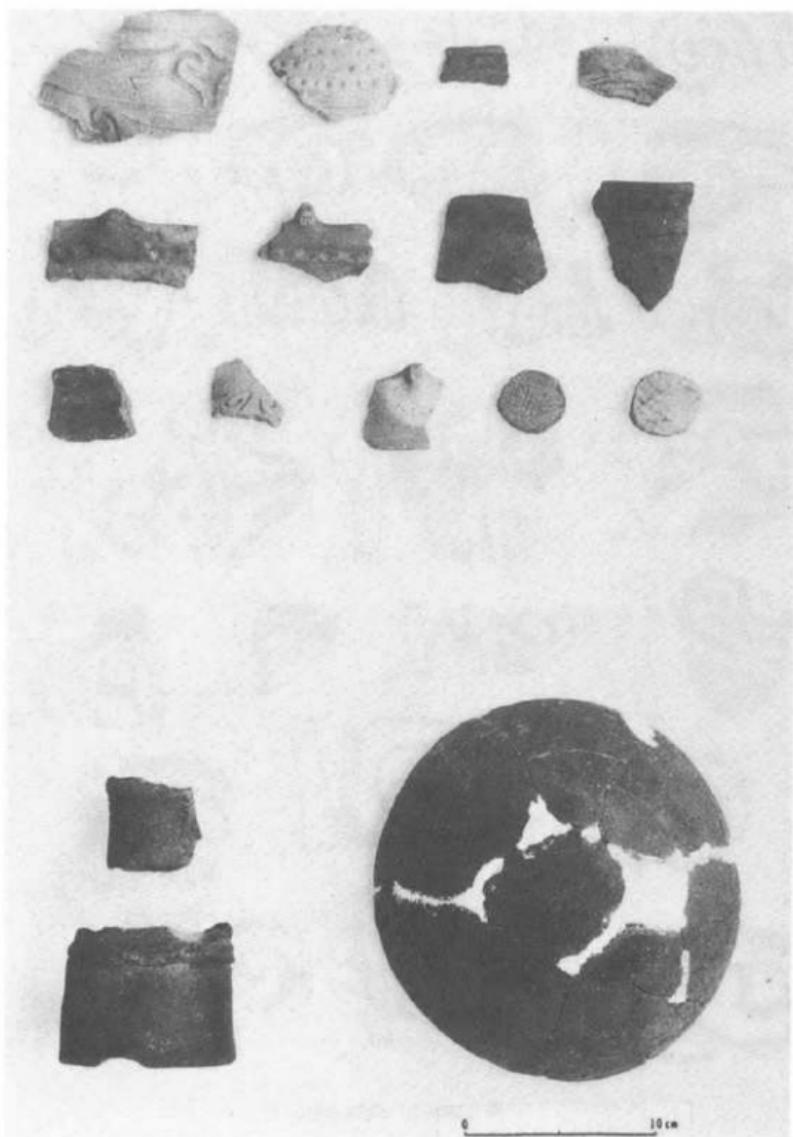
第27図の69 土器拓影図(C)



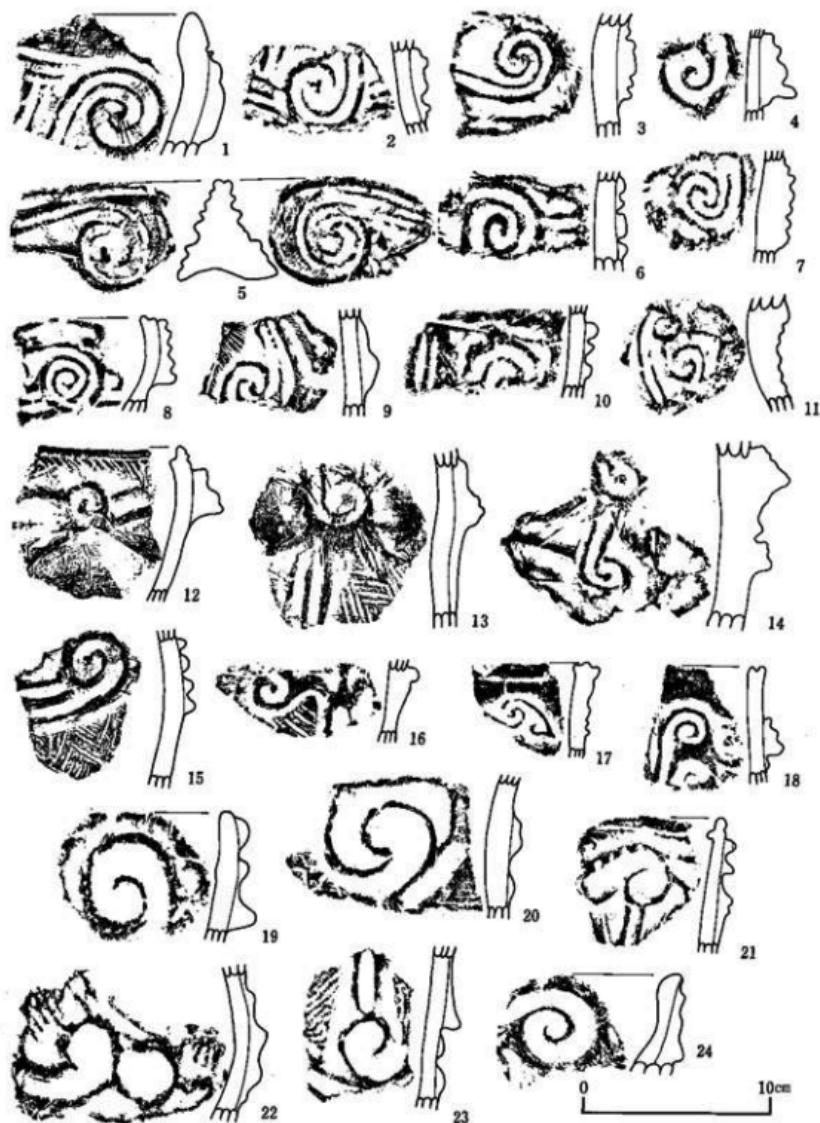
第27図の70 土器写真(C)



第27図の71 土器拓影・実測図 (C)



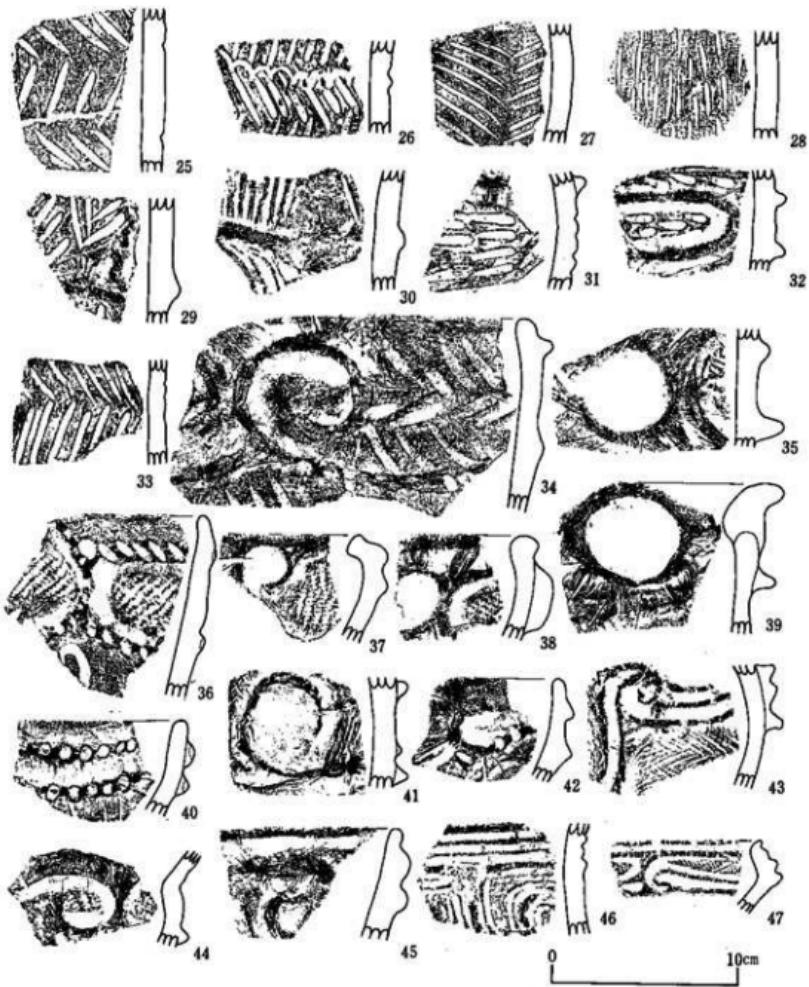
第27図の72 土器写真(C)



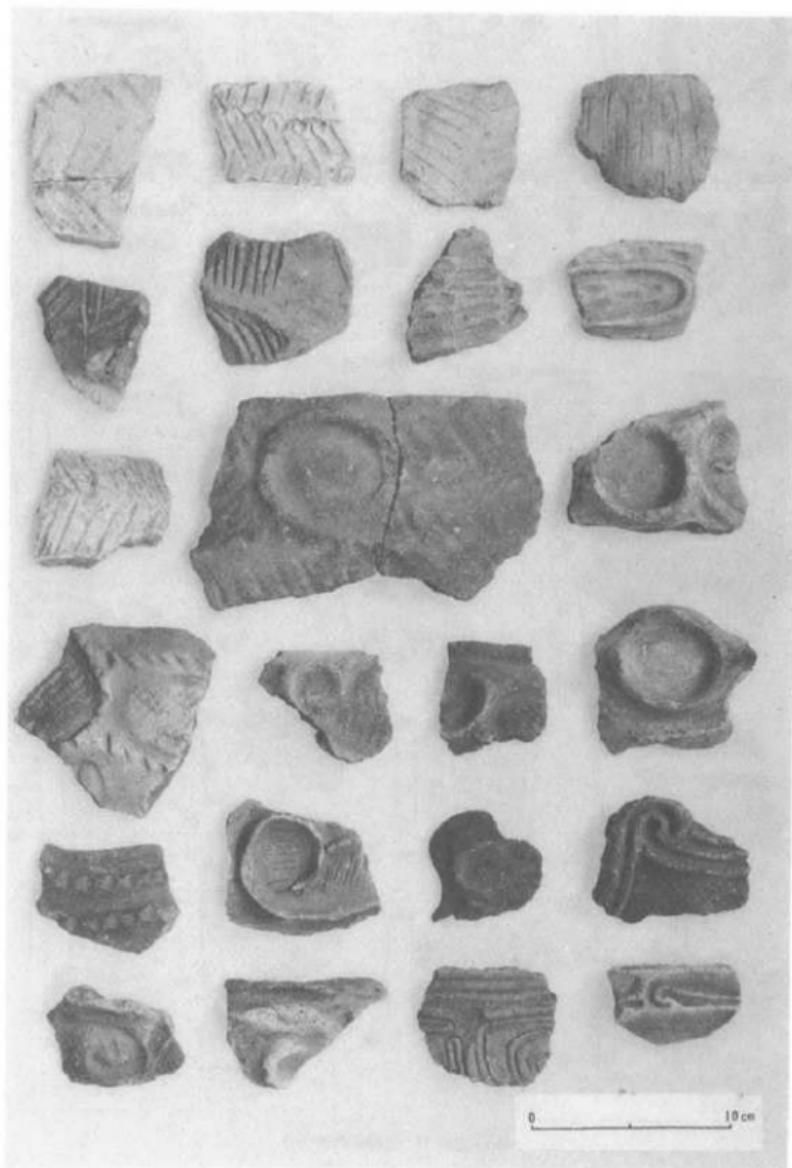
第27図の73 土器拓影図(E)



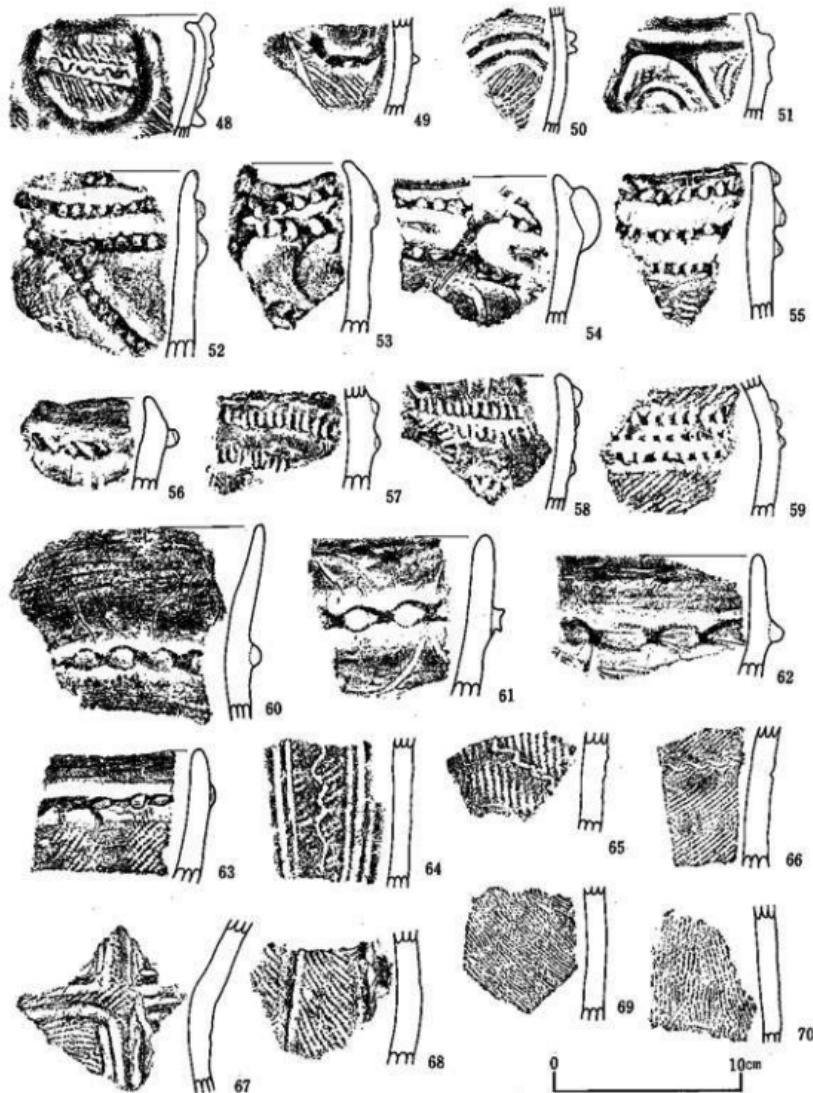
第27図の74 土器写真(E)



第27図の75 土器拓影図(E)



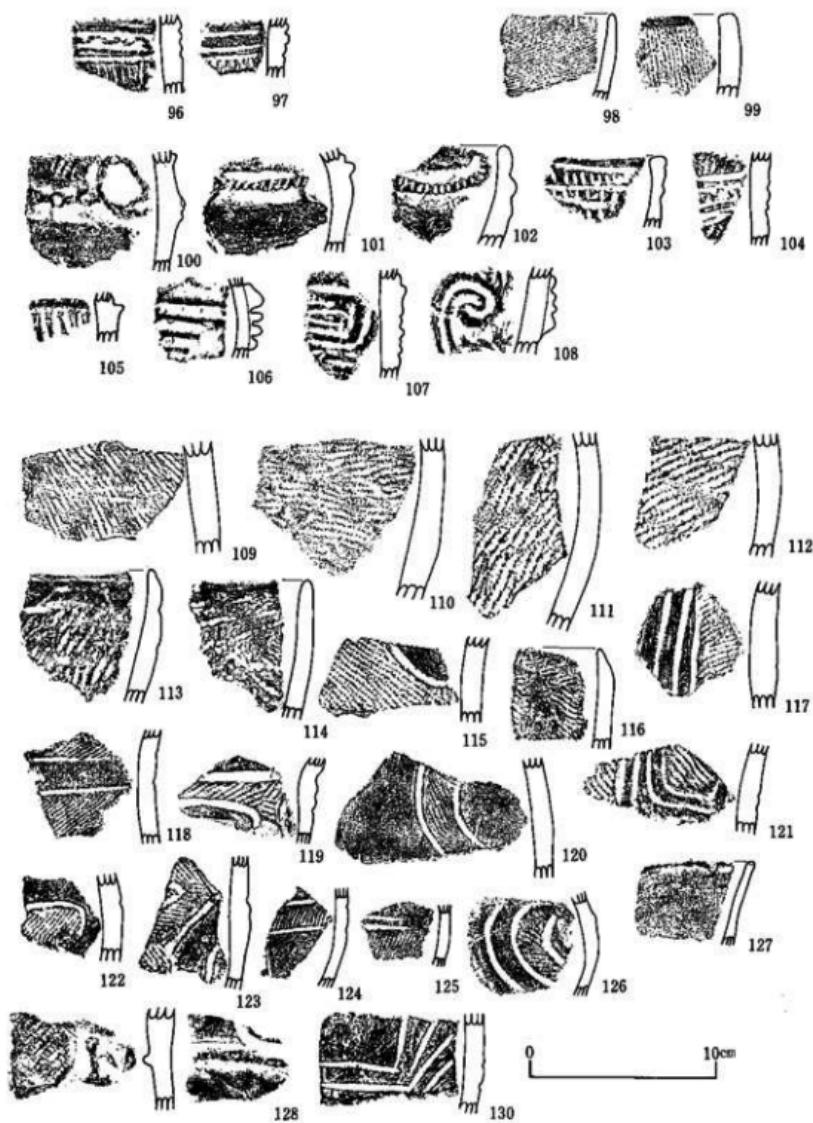
第27図の76 土器写真(E)



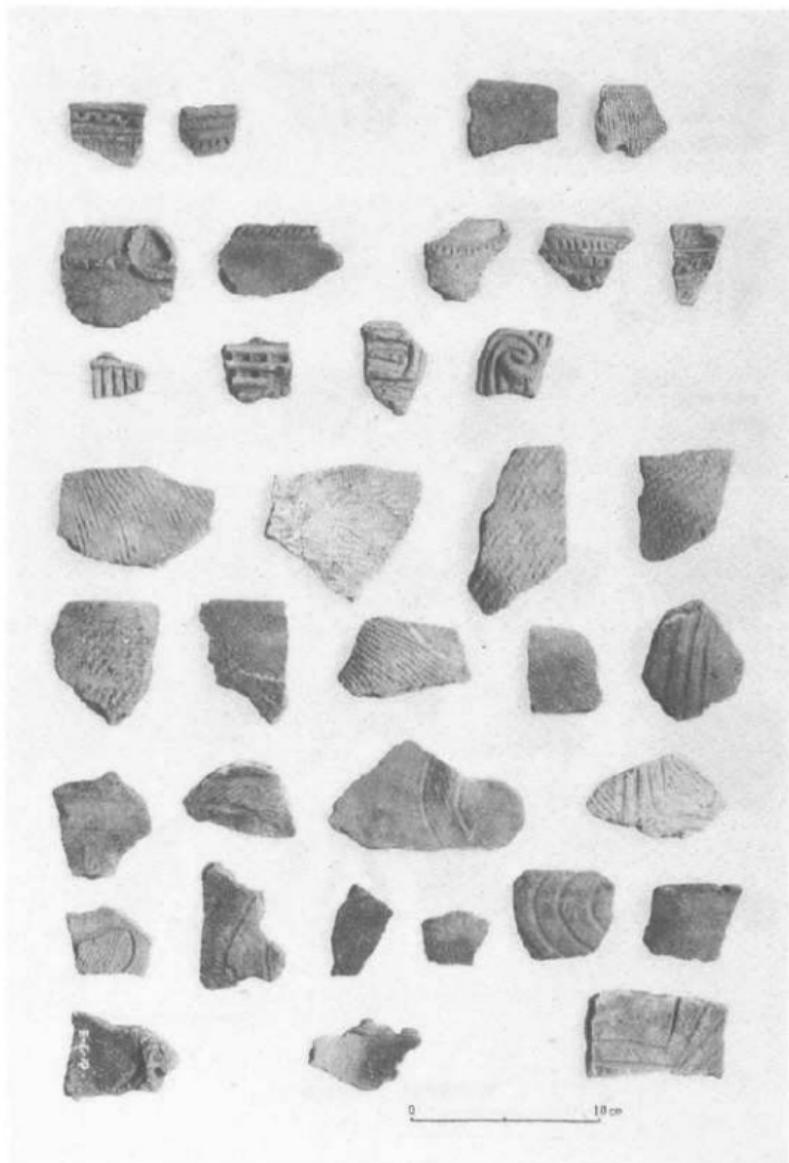
第27図の77 土器拓影図(E)



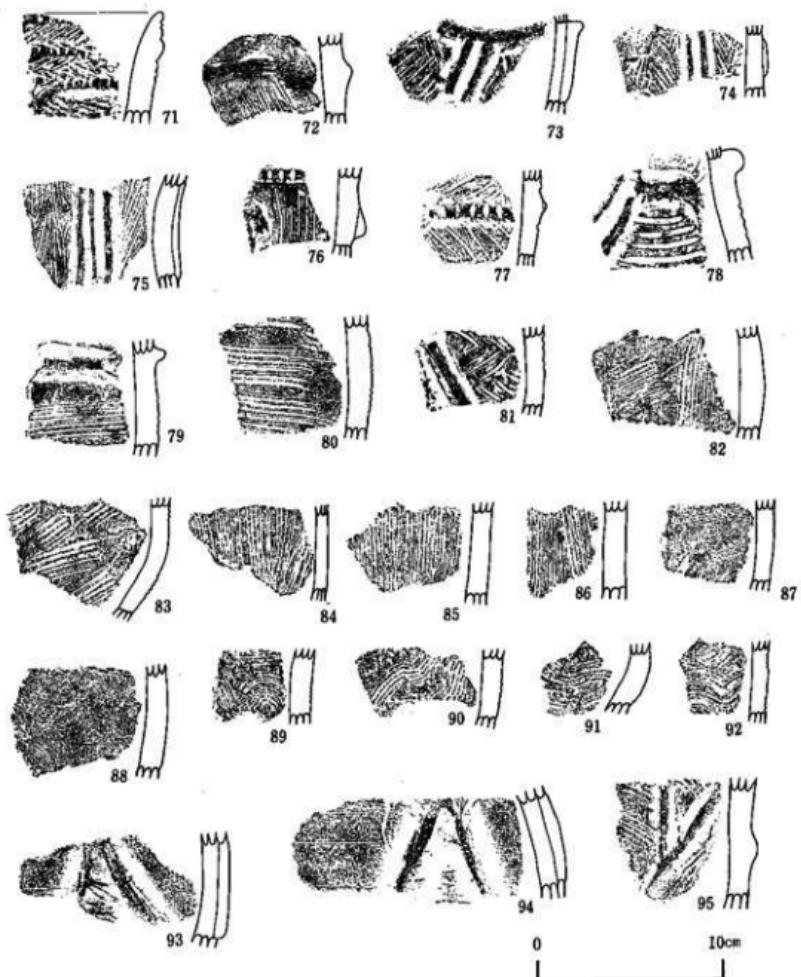
第27図の78 土器写真(E)



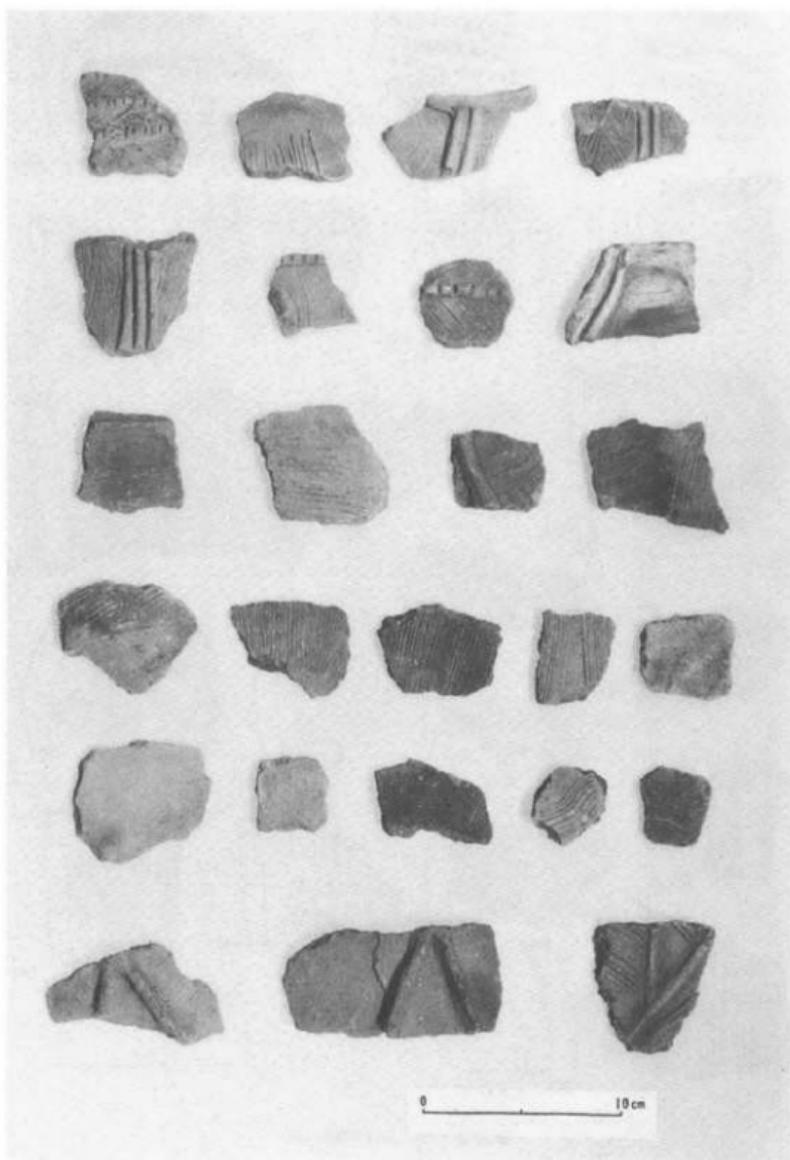
第27図の79 土器拓影図(E)



第27図の80 土器写真(E)

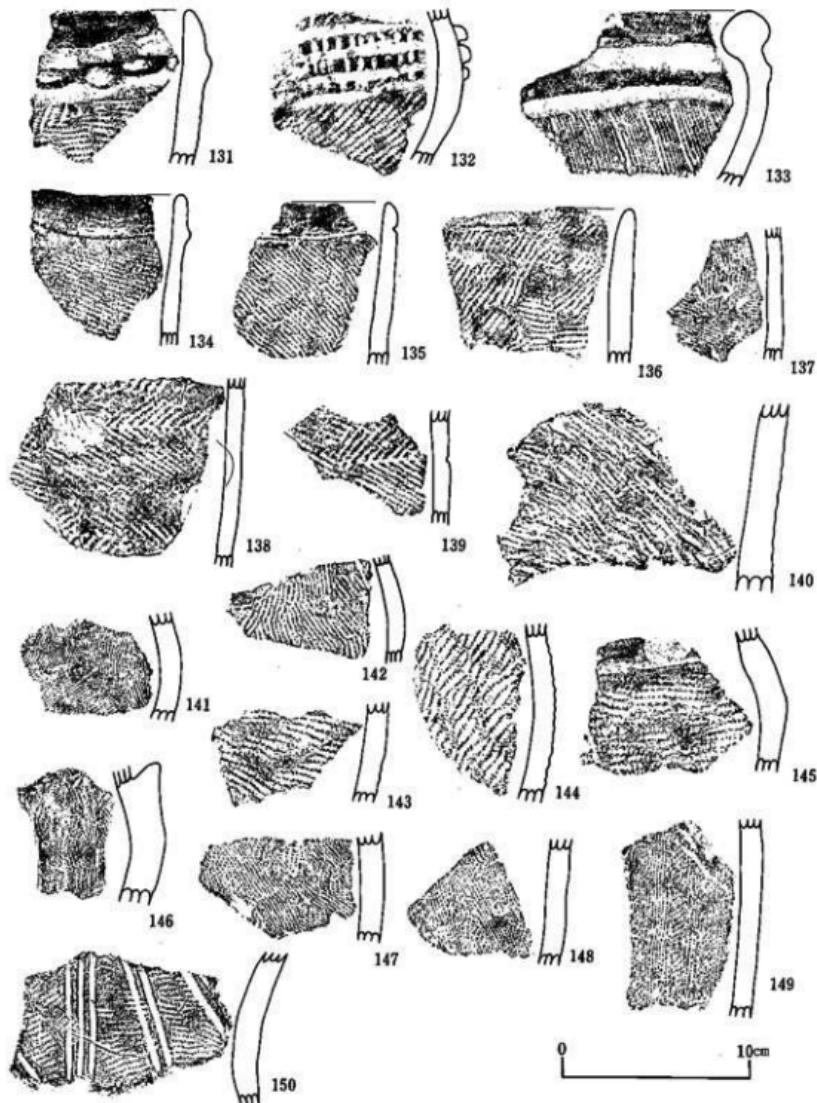


第27図の81 土器拓影図(E)

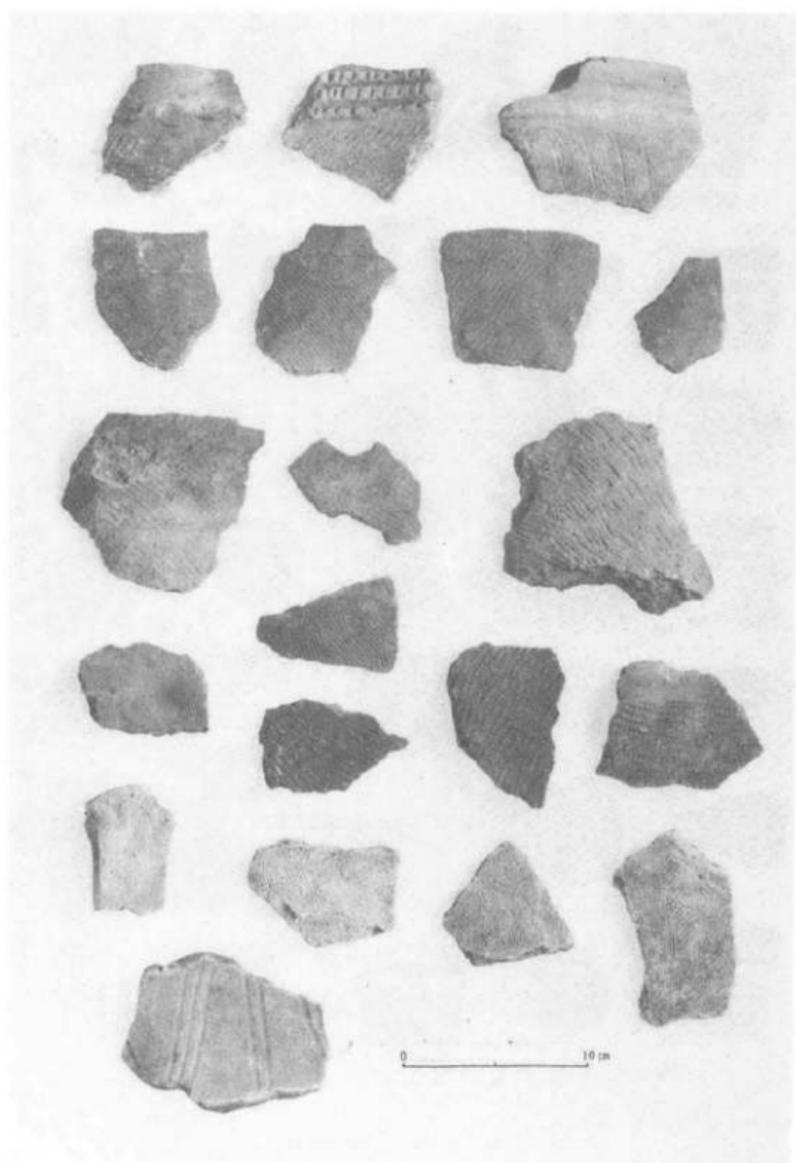


第27図の82 土器写真(E)

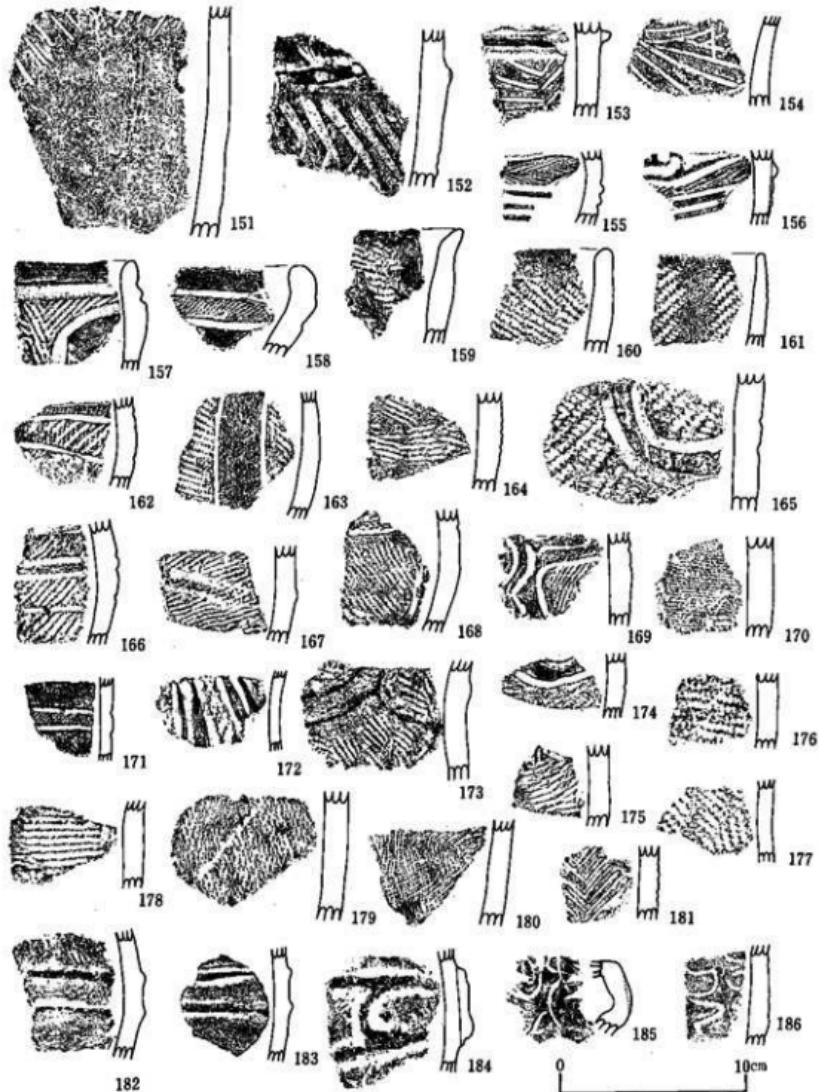
(第27図の83・84次)



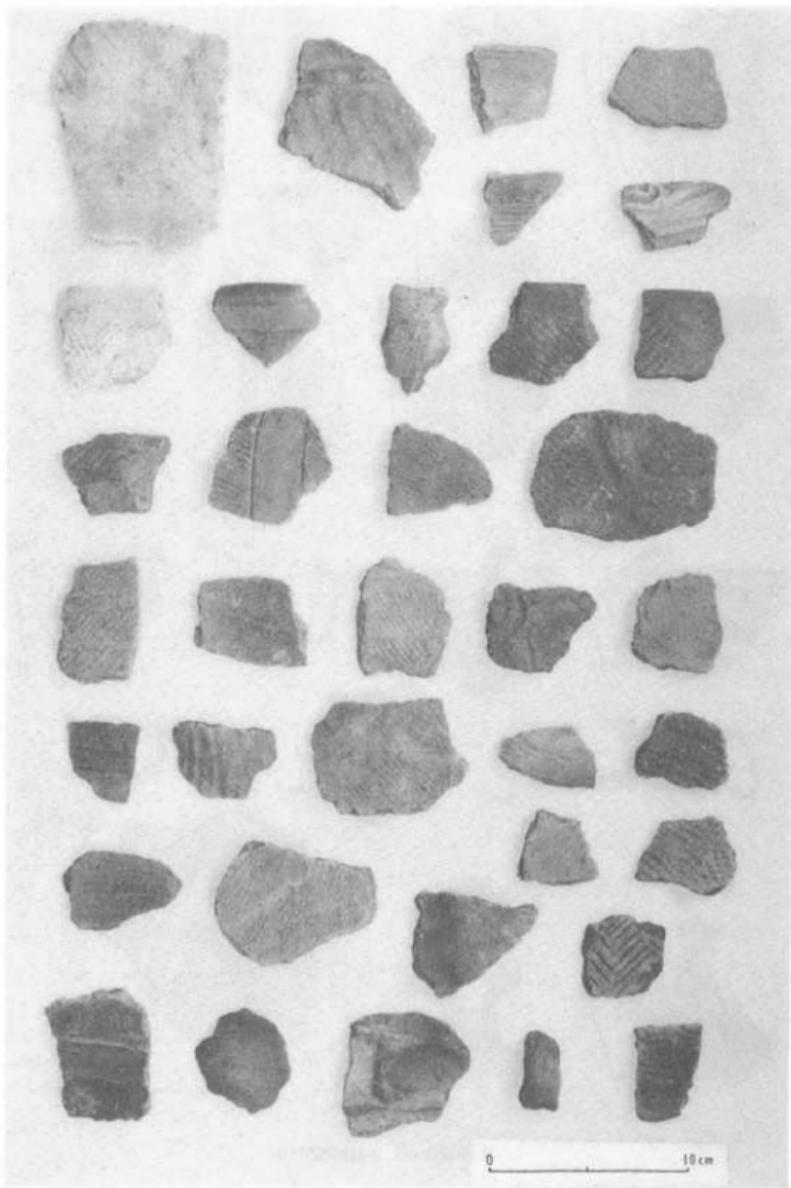
第27図の85 土器拓影図(E)



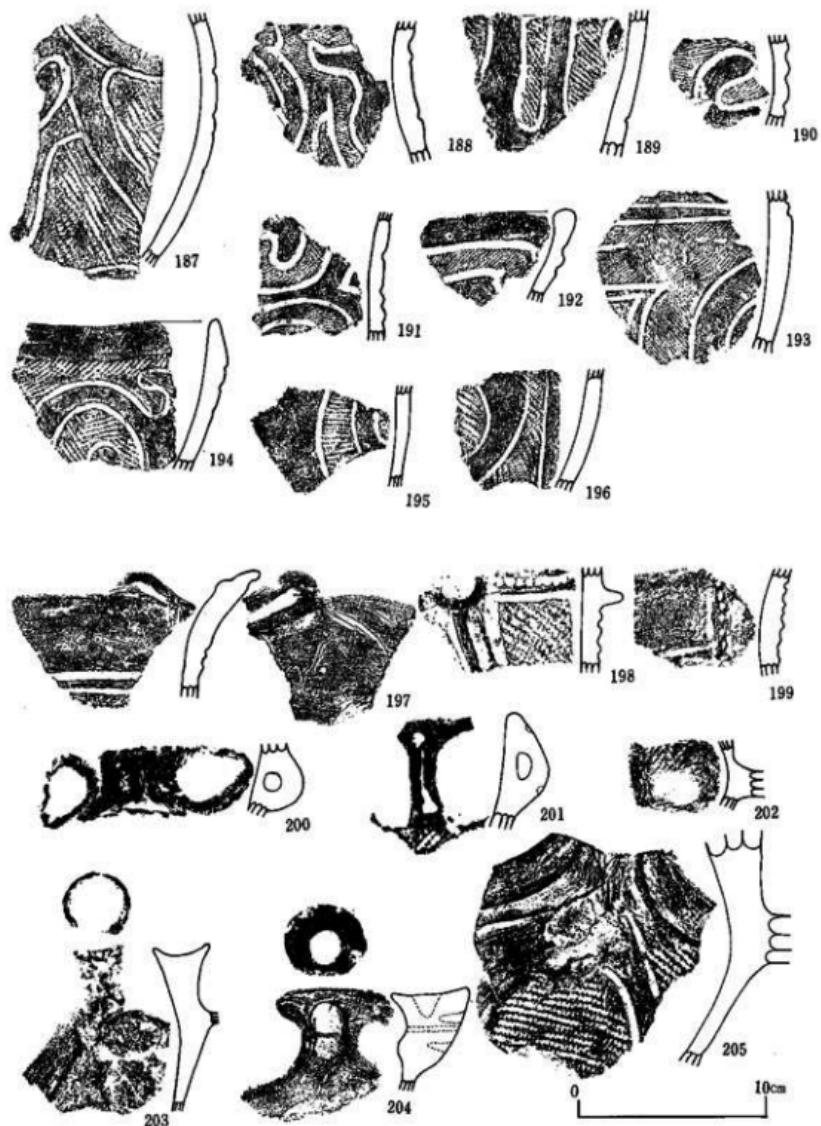
第27図の86 土器写真(E)



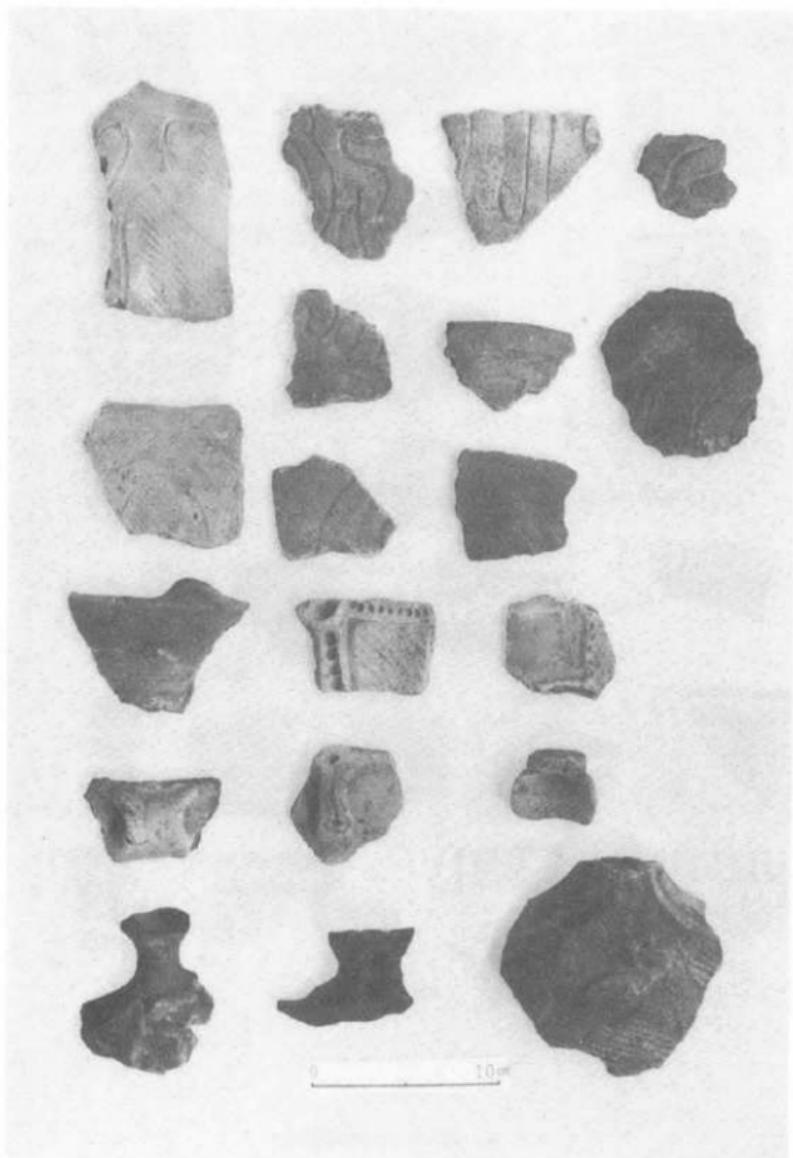
第27図の87 土器拓影図(E)



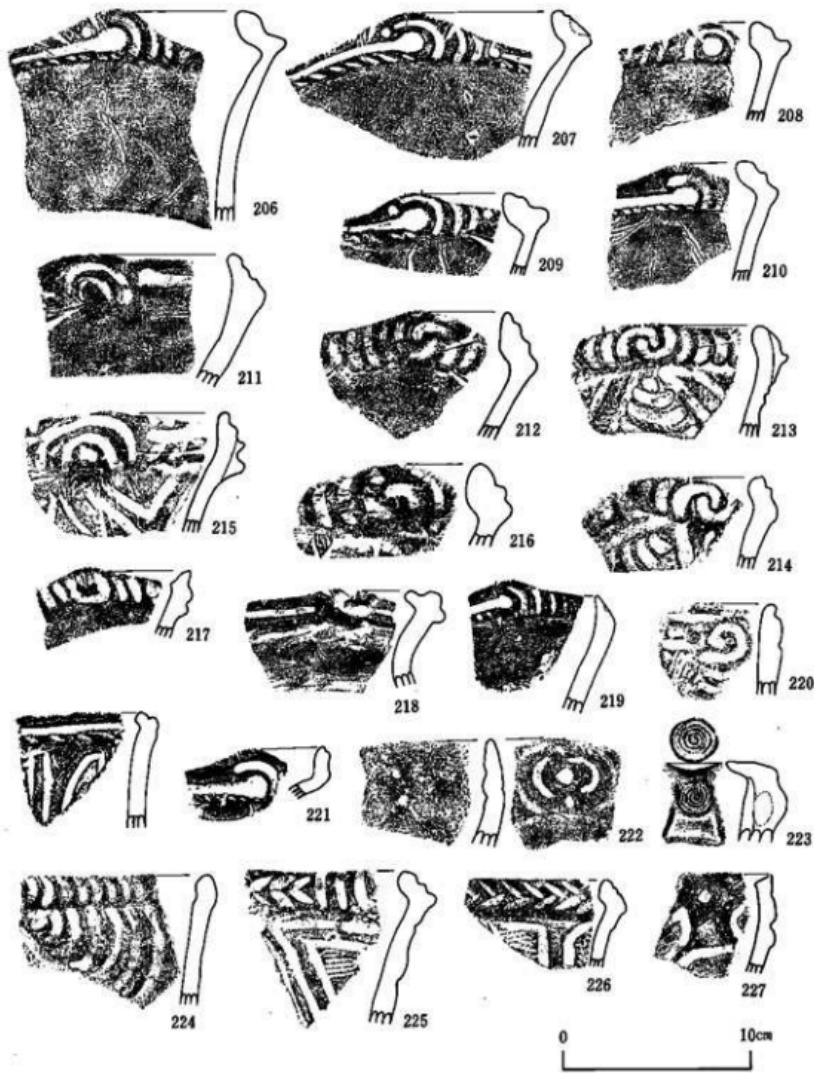
第27図の88 土器写真(E)



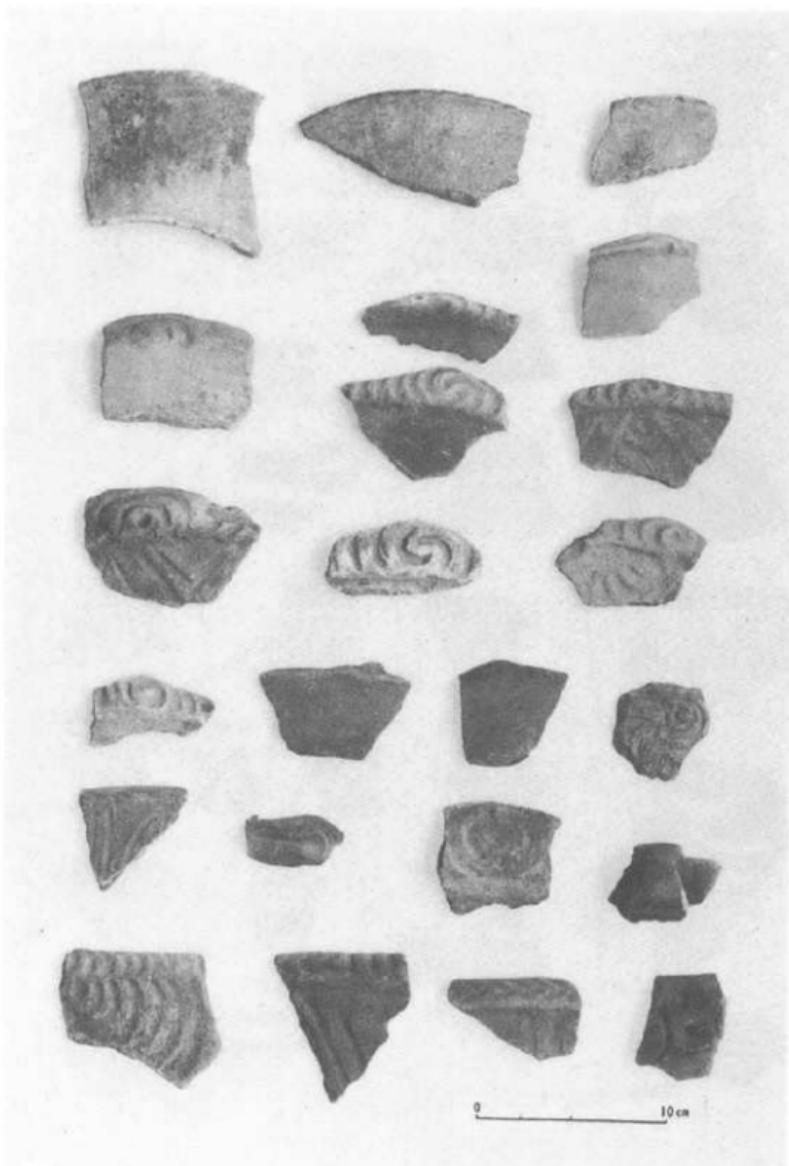
第27図の89 土器拓影図(E)



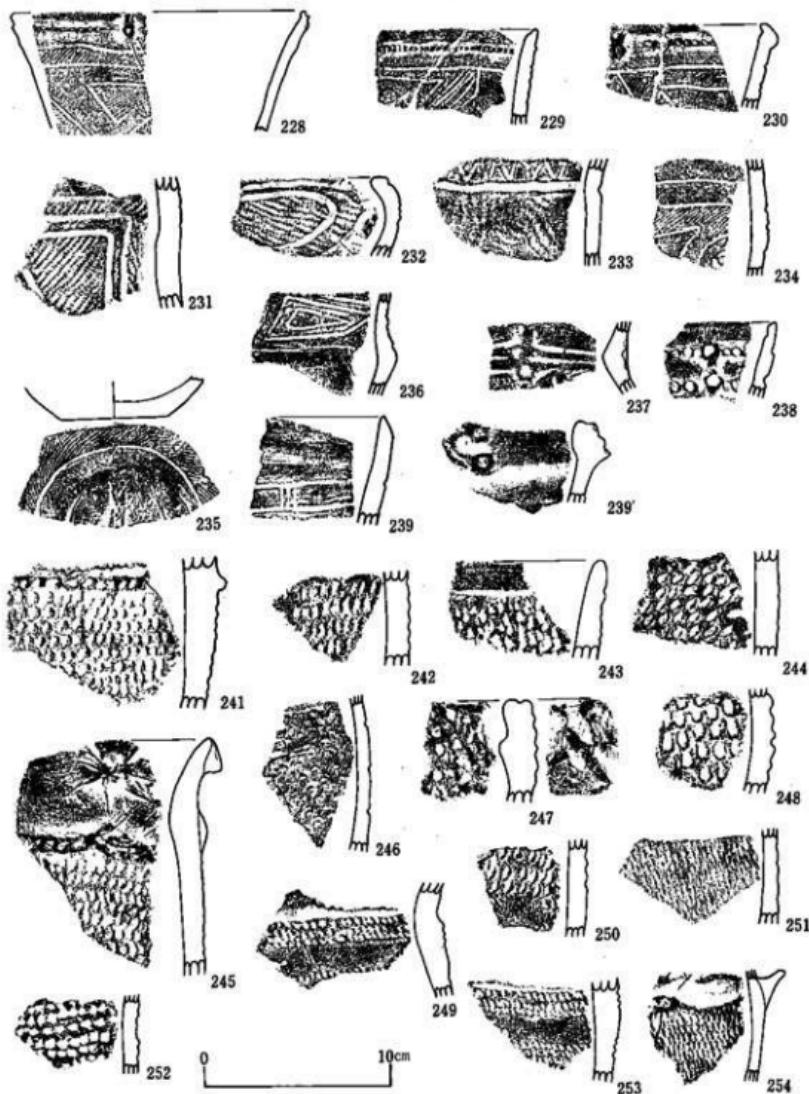
第27図の90 土器写真(E)



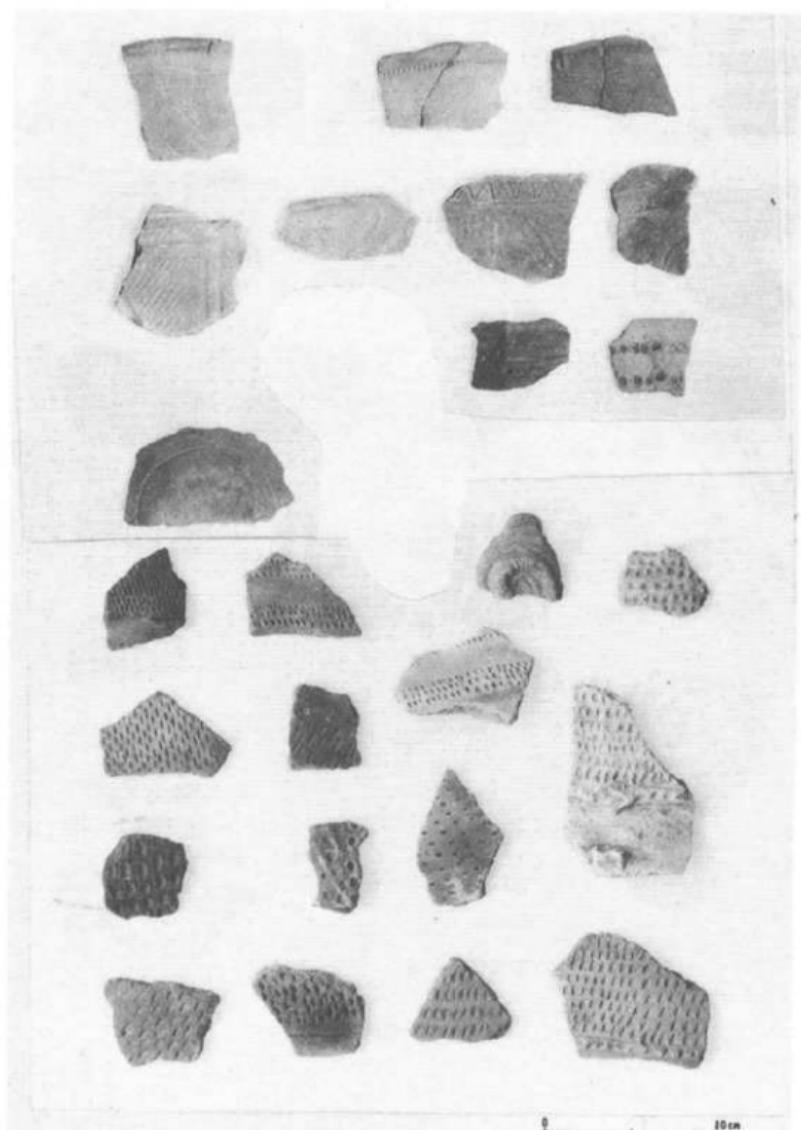
第27図の91 土器拓影図(E)



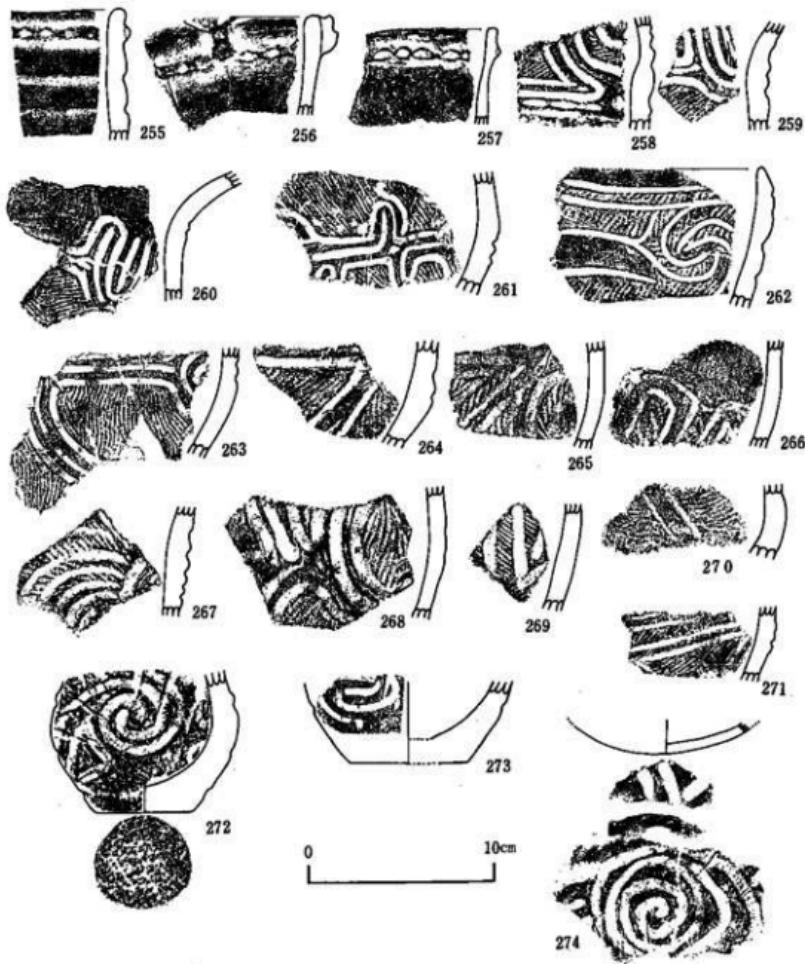
第27図の92 土器写真(E)



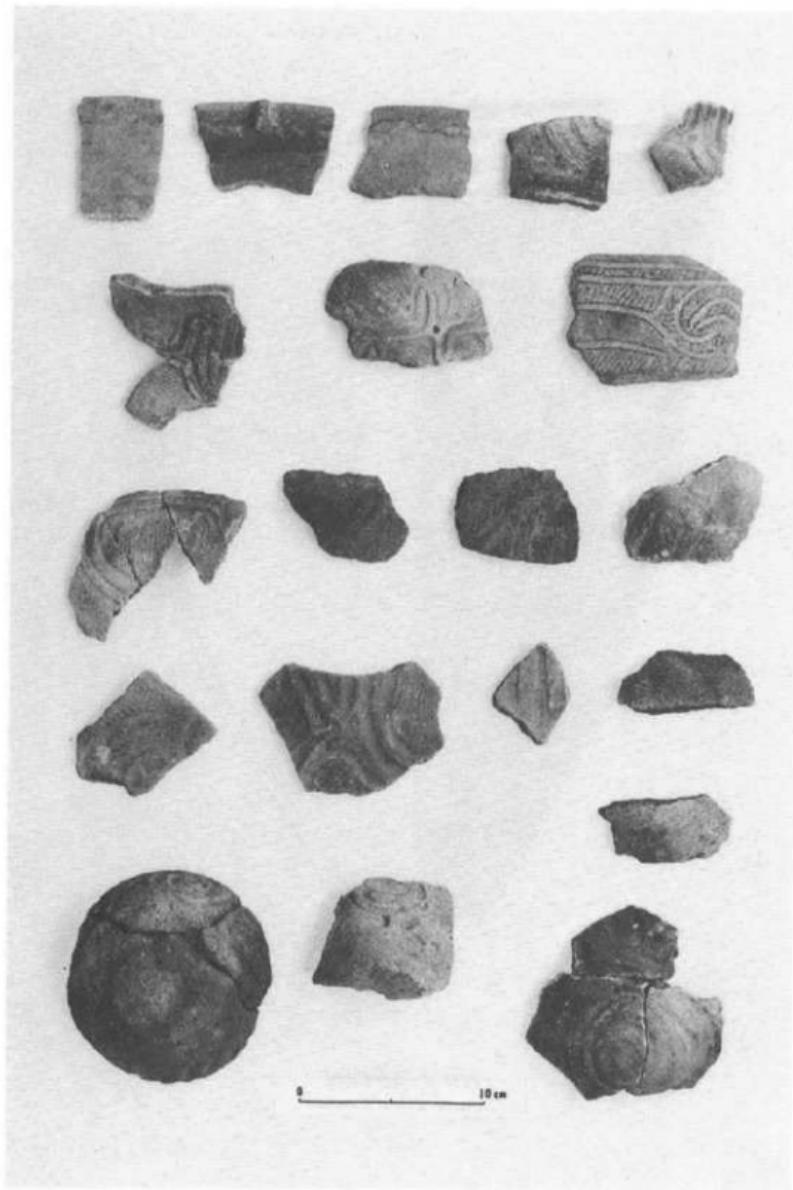
第27図の93 土器拓影図(E)



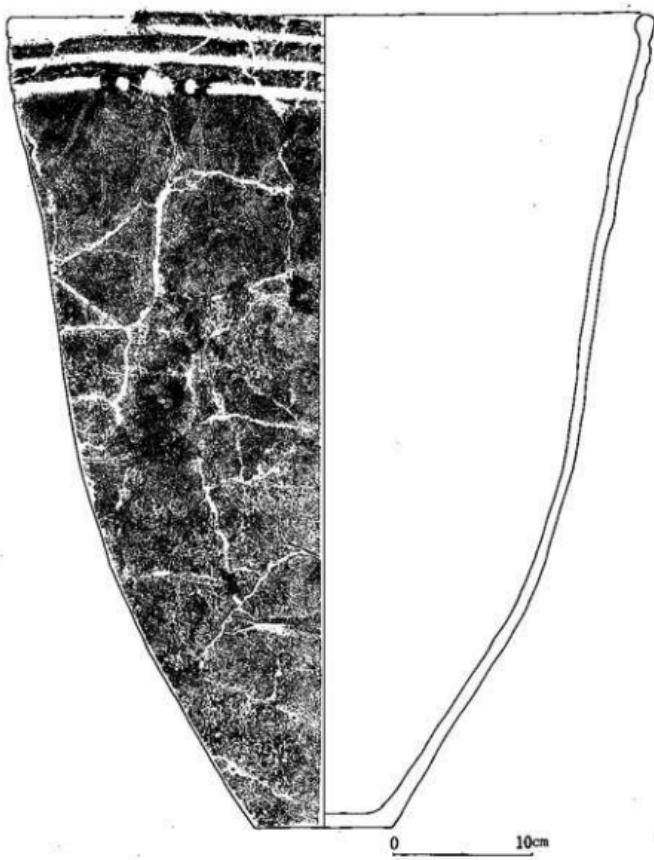
第27図の94 土器写真(E)



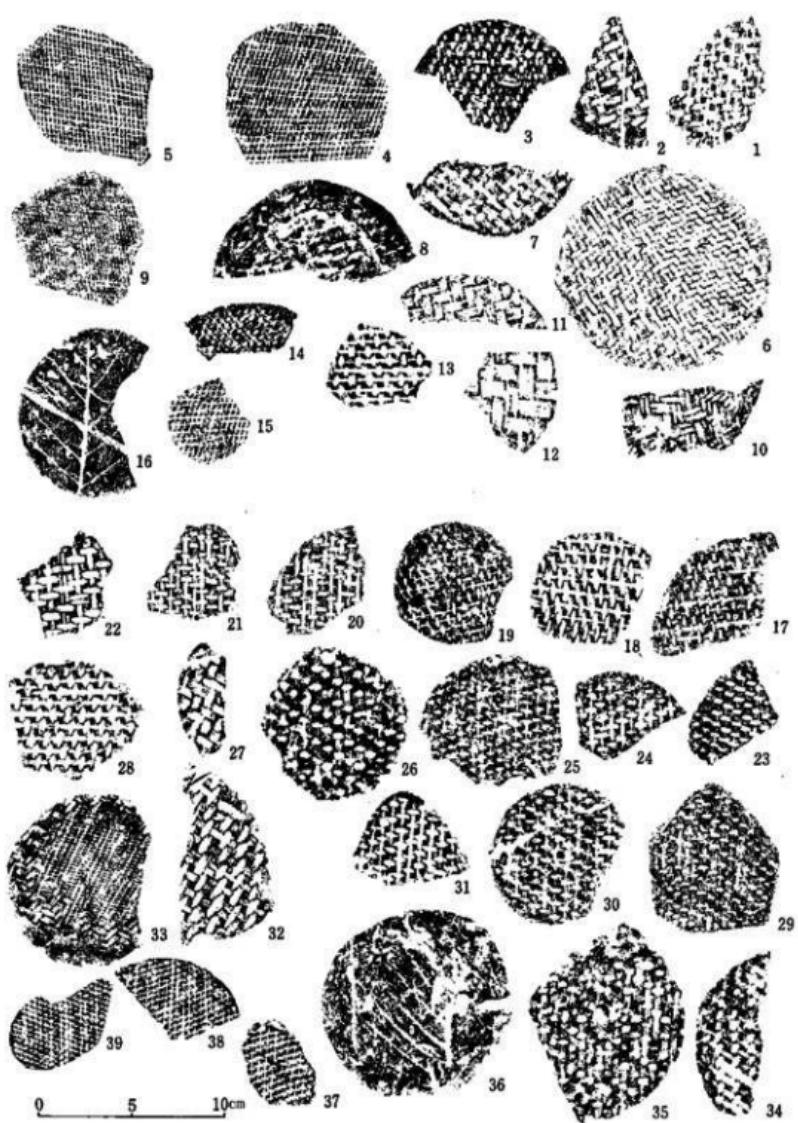
第27図の95 土器拓影図(E)



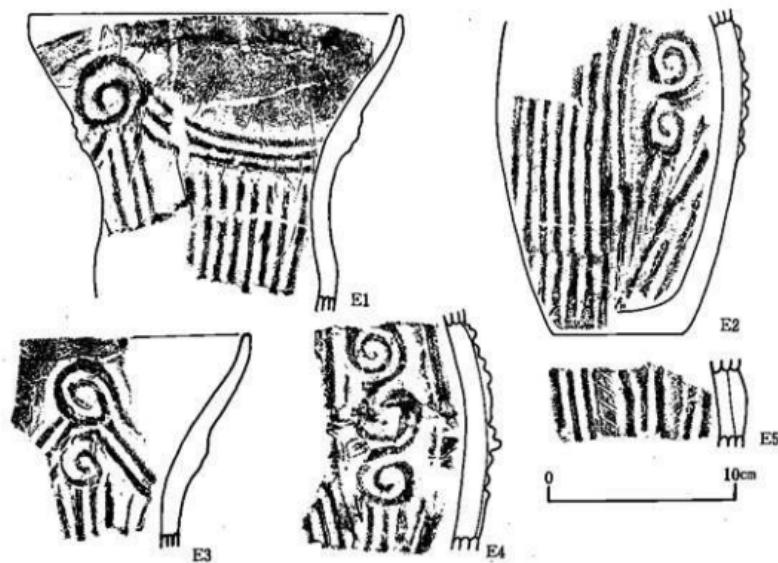
第27図の96 土器写真(E)



第28圖 埋藏実測図



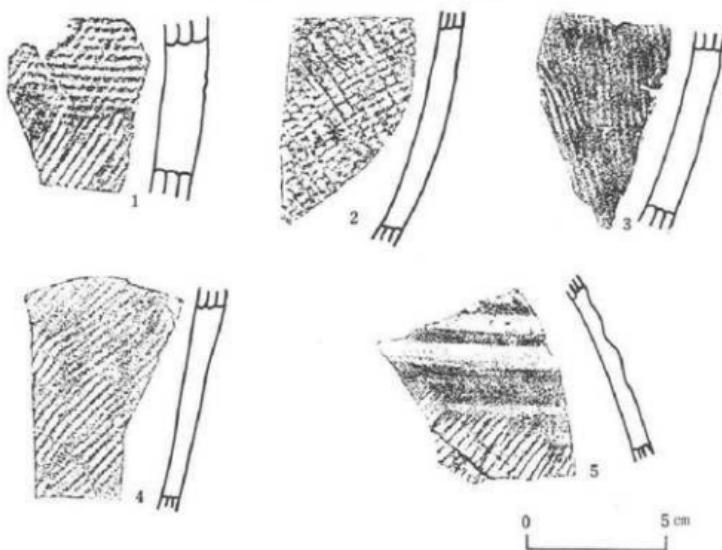
第29図 土基底部拓影図



第30図 土器（ガシリI式）拓影・実測図



第30図のI 土器(加曾利I式)写真



第31図 總合器拓影図

2 土製品

(1) 土製耳飾・耳栓 (第32図・第33図)

○土製耳飾

土製耳飾は、完形・破片合計C地区35個、A地区7個、8号石棺墓2の合計44個、耳栓状のもの2個、その他類形品1が、今回の岡ノ峯遺跡の発掘で、検出されている。

これらをまず形状から分類すると、

A類 白形状を呈するもの

- ① 無孔のもの (4、6、7、14)
- ② 有孔のもの (8~13)

B類 環状 (リング状) もの

- ① 内外面平滑に作られたもの (15~21)
- ② 内外面や、平滑に作られたもの (28、30、44、45)
- ③ 内面に段状の部分の有するもの (22~24、40)
- ④ 内面が三角形状を呈するもの (31、33~38、40'、42)
- ⑤ 内面が凸状を呈するもの (32)
- ⑥ 断面がU形 (蕨状)、T形を呈するもの (25、26、41)

C類 滑車形で、「アリッジ」状のもの

- ① 透し彫の施されたもの (42、43)

次に文様から分類すると

I類 ① 白形で無文のもの (4、6、7、13) ② 白形で有文 (突刺文) のもの (5) ③ 環状で無文のもの (破片のため、不確定の面あり) (14~19、24)

II類 有文のもの

- ① 刻目文のもの a 白形の円周部にみられ、歯車状の文様となるもの (8~12、11') b₁環状の円周部につけられるもの (40) b₂円周部と他の文様の組合されるもの (22、23、30、31、36、39) C₁内面三角形状の隆帯上につけられたもの (35、40') C₂ C₁と文様の組合されるもの (29、33、36)
- ② 列点状の突刺文のみられるもの
a 白形で円孔の周囲にみられるもの (9) b 環状の表面上端にみられるもの (20、21)
③ 環状で刻み目の入ったB突起のみられるもので、これは、他の文様と組合されて施されている。a 刻目の隆線が連結しているもの (25、26) b 三叉文で囲まれたもの
④ 環状で、表面上に段状の突起のみられるもの ⑦
⑤ 環状で、三叉文のみられるもの (22、23、29、30、31、41、44、45)
⑥ 環状で、雲形文ふうのものの ⑩
⑦ 環状で、長楕円状の文様のもの ⑪

⑧ 環状で、意匠文のもの

以上のように2類型に分類され、白形状のものは概して小形品（表面径1~3.5cm）が多く、環状のものが、最大のもの6.8cmと大形品が多い。次に代表的なものを選んで、略述する。

1) (25、26)は同体とも推定されるもので、黒褐色の堅緻な焼成で、赤彩の痕が認められ、表面に4分割（推定）に直径0.5cm、高さ0.15cmの隆起させ、中心に円点を刺突し、ここより2条の隆線を平行から、左右に内面端に開かせている。分割間は、刻目の隆線で、連結させている。復原直徑6.8cmを計測する。文様は、新地1式以来の瘤付土器からの影響下の安行式系統の強い影響下に生じた文様と考えられる。

2) (4) B類(4)に形状が似て、外面（着表面）のくびれが明瞭で、上下端部がリング状に付加されている。黒褐色と白褐色の色調で、焼成は堅緻である。最大径2.3cm、厚さ1.6cm、やや裏面が小さく作られている。いわゆる「ブリッジ」形の一様で、外周部の隆帯上に、B突起（瘤状直徑0.3cm）がつくられ、左右は、三叉文を陰刻し4分割されている。中の文様は、繊細な刻目に入った浮文で「X」字状につくり、交点にB突起を於し、左右にC字状の隆帯を配し隣接部を削去している。(1)のB突起の耳飾と比べて、後出的な要素のみられるものである。

3) (2) 赤褐色の色調の堅緻な焼成で、赤彩も認められる。形状は(4)と類似し、直徑3cm、厚さ1.7cm程度である。内面形状は、鈍角の三角形の頂点面を割んでいる。表面の外周部上にも刻目を入れ、それと連結して内面に「S」字状の浮文をつくり孤状の浮文と接し、その下に連続の三叉文を陰刻している。この「S」字状のモチーフは、(230)の耳飾にも看取される。また、C地区D₄グリット出土の宝の肩部破片の文様（図C510）も同様なモチーフでこの地方が、亀ヶ岡文化圏の傘下に入りつつある、大洞B式から大洞BC式の古い時期に相当するものと思われる。

(4) 赤褐色の色調に赤彩も認められ、直徑3cm、厚さ1.7cm、の法量で、列点のある「の」字状の浮文を左右から、三叉文を陰刻し、玉抱き三叉文様で、このモチーフは、8号石棺墓副葬の耳飾

(4)と類似し、本例は内面三角形状上に刻目文がみられるので、前者より、1段階古い様相をもっていると考えられる。

(5) 黒褐色の色調の破片で、断面三角形の表面側につけられた文様で、陰刻部が、大洞C₁式にみられる雲形文に似ているが、これは三叉文の類形のひとつとして考え、工字文に発展する要因を秘めていると思われる。

(6) 直径約5cm、厚さ1.6cmの大きさで、主に赤褐色の堅緻な焼成で、赤彩が僅かに残っている。滑車形のブリッジ形状のもので、文様は円周部に刻目を入れ、表面内側に、人或いは蛙の意匠文を隆帯で陽刻し、胴部左右は、透し彫している。頭部上には「八」字状の隆帯が、左右の間節部位に連結させている。頭上、胴部上、手先、足先などに刻目がみられる。

また陰刻部を見ると、頭部左右は、三叉文様、胴部には擬工字状の陰刻を於しているのが、注目される。裏面は荒く整形されているのみである。この様な意匠文の耳飾は、この時期としては、類例に乏しいが形状や使われている文様から後期末の所産と考えている。

岡ノ峯遺跡での耳飾と他の遺物の相関関係は、8号石棺墓例を除いて、A地区、C地区とも、後期から晩期に亘る土器が、混在し、集石状造構ともからめて、層位的な把握は不可能であった。C地区からは、約20m²の狭い範囲内から集中して検出されたもので、これらをどの時期に該当させるのか、今後の検討課題だが、ここでは、現時点での見解を述べておく。

〈I期A〉 (4~7、13、14)

臼形状の無文のもの、あっても5の如き突刺文程度のもので、13は、魚の稚骨状、14は表面側の凹部が、盛りあがっており、次の段階への前兆の形状と思われる。

〈II期B〉 (15~18、19)

一応無文の環状の耳飾と考えられるが、これらと、臼形状のものが、併存したかは不明である。時期は晩期中葉の所産と考えている。

〈II期A〉 (8~12、11')

10~12の形態が、I期Aより引続く形で8、9が、後続の形であると考えられる。

〈II期B〉 (20、21、25、26、43)

耳飾は、環状形に大形化し文様も多彩となってくる。25、26のテラス状の張り出しのある大形品も生れてくる。前述の如く25の瘤付のものは、安行2式土器などにみられる（埼玉県雅楽谷遺跡など）瘤付土器の影響を多分にうけた文様で、20、21の耳飾と同じく、安行3a式以前の所産と考えられる。また43の人或いは蛙の意匠文の耳飾も同時期のものと推定している。

〈IIc〉 (2)

42は瘤は、三叉文紐線文が繊細の手法で、作られたブリッジ形で、IIbと同時期、或いは後続の所産と考えられる。

〈IIIa〉 (29、30、33)

三叉文が、主文様になってくる時期で、この地方の晩期が、亀ヶ岡様式の流入をもって開始されたとすれば、その転換期に当ると考えられる。玉抱き風三叉文、入組三叉文、連結三叉文が施文され、安行3a式一大洞B式に併行すると考えられる。

〈IIIb〉 (8号石棺墓の耳飾)

8号石棺墓Aの耳飾は、文様から33の耳飾の後出的のもので、大洞B式の影響が強くみられ当地方が、晩期の時代に入ったことを示している。

〈IV〉 (34、39)

その他の三叉文のみられるものの時期は34が、雲形状の三叉文で、大洞C₁式期、39は、長横円状の連結の文様は大洞A式にみられるもので長横円は、上からの籠押えによって施文されており、大洞C₂式、即ち佐野2式頃に相当すると思われる。

この様に岡ノ峯遺跡の耳飾は、最盛期に入る直前から、終末段階まで、類型がそろっており、今後、更に、遺構との関連や土器の詳細な分析を通して、究明されるように願っている。

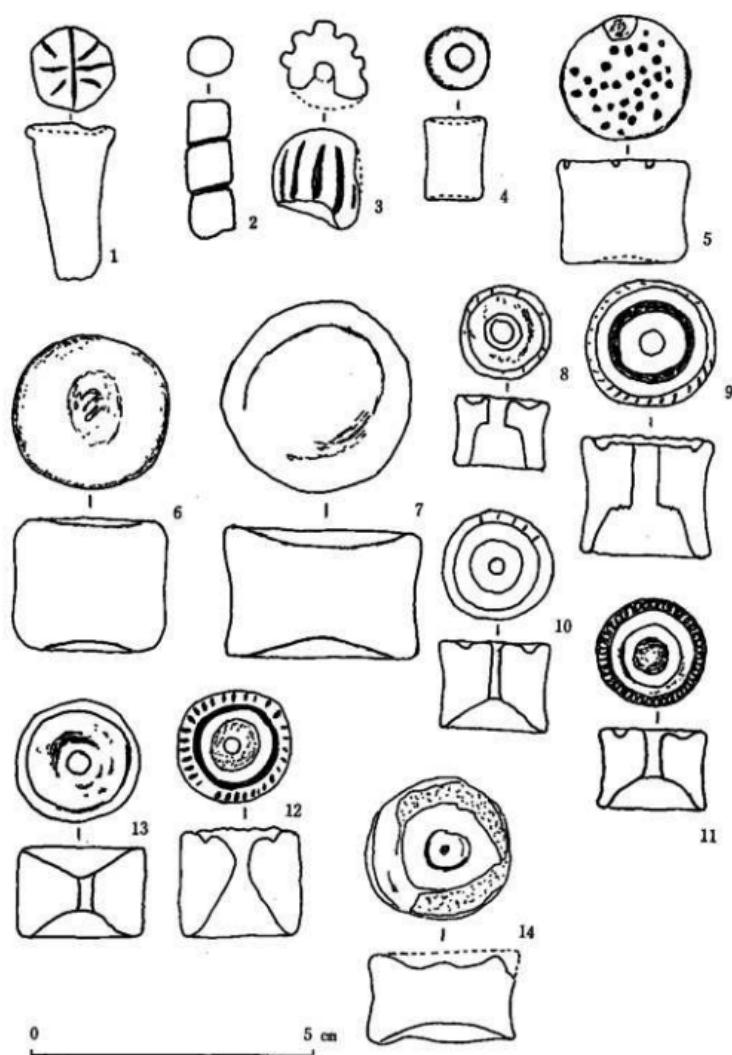
○耳栓

- 1) 傘釘状の形で、黄黒褐色の堅緻な焼成で、表面は、僅かに凹み中に「米」字状の沈線がみられる。
- 2) 赤褐色の色調の棒状形で、横位に三分割に沈線をめぐらせている。
- 3) 黒褐色の色調で、破片のため、元の器形は定かでないが、長楕円の球形であったと思われる。中央に貫通孔がみられ、沈線を等間隔に施す土製の垂飾と考えられるものである。

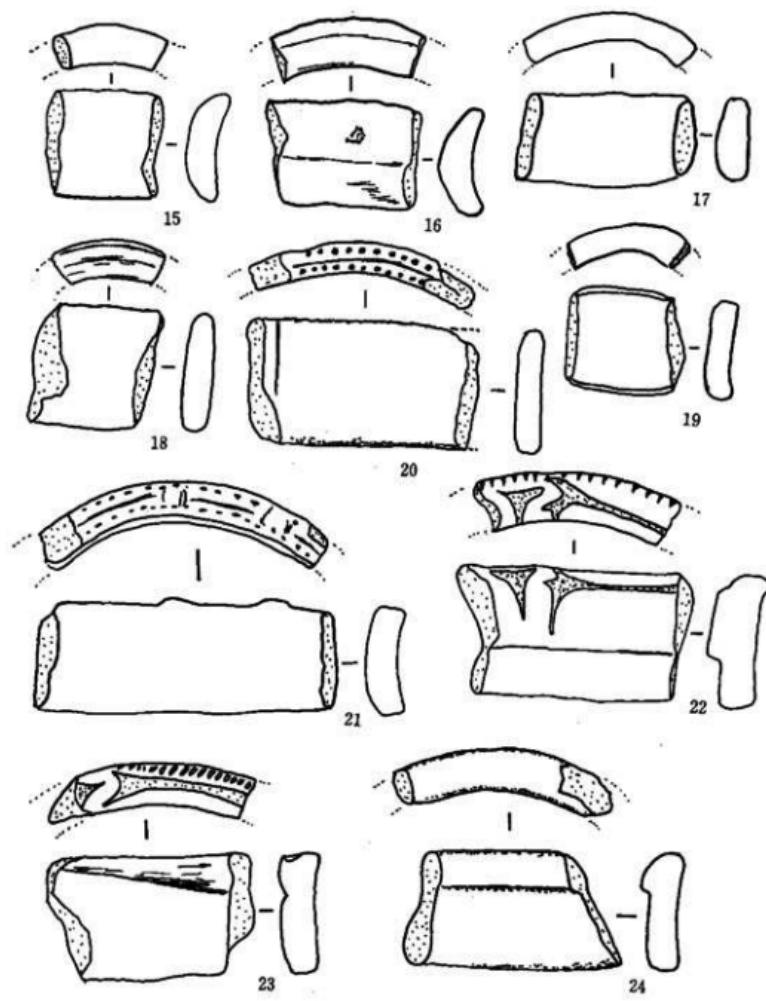
(榎原長則)

- (2) 土偶・スタンプ状土製品
- 土偶 (第34図)
- (1) 中期に属する。大形土偶の脚部の破片で、破損部に2次的に粘土を貼付けた痕跡が残っている。
 - (2) 黒色磨研の晩期に属する土偶の脚部と思われる。
 - (3) 中期に属する土偶の脚部の破片である。
 - (4) 中期後半に属する土偶で、腕の部分と腹部の破片である。肩の部分に棒状の痕跡あり、棒が埋めこまれていたか、穿孔されていたと思われる。また腹部のへその部分は誇張され周囲に刻目が、入れられている。
 - (5) 中期前葉の北陸文化圏に属する立体土偶の脚部の破片である。この種の土偶は、飯山市深沢遺跡、中野市姥ヶ沢遺跡や、新潟県津南町上野^{じょうの}遺跡に同例がある。
- スタンプ土製品 (C 521, 522)
- C 521 は C 地区より検出されたもので、節の細かい羽状繩文が施されている。C 522 は E 地区より検出された節の荒い繩文が施されている。両者とも後期の所産と思われる。
- 附 実測図 A 地区 No 14 は、287, 288 が C 地区の検出の外は、A 地区より出土したもので、285 及び 287 は壠之内式に併う大形の注口土器で 286 は、加曾利 B 式に併う大形注口土器と考えられる。288 の蓋形土器は、壠之内式に併うもの、287 の袖珍土器は、後期に併うものとされている。290 は、壠之内式の深鉢の把手で、291 は、加曾利 B 式の大形深鉢形土器の把手と考えられる。
- 引用文献、参考文献
- (1) 板詰秀一他 野沢温泉村史 昭49
 - (2) 田川幸生他「伊勢宮」山ノ内町教委 昭56
 - (3) 繩文土器大成 (後期) 48P 講談社 昭56
 - (4) 千曲川水系古代文化研究所「編年」昭55
 - (5) 中川成夫他「僅生遺跡」立教大学博物学講座 昭42
 - (6) 神村透「結節繩文をつけた一群の土器(飯田地方繩文中期終末)中部高地の考古学1長野県考古学会昭53
 - (7) 水峯光一他「佐野」山ノ内教委 昭42

- 百瀬長秀 羽状沈線をもつ土器の系統と展開 長野県考古学会誌昭49 昭59
- 大原正義 「山の神遺跡」「佐野遺跡」 長野県史 考古資料編 主要遺跡 北東信 昭57
- 百瀬長秀 「エリ穴遺跡」 " 中南信 昭58
- 福島邦男他「竹之城原・淨永坊・浦谷B遺跡」望月町教委 昭59
- 拙稿 岡ノ峯遺跡の石棺状遺構群と土製耳飾について 高井70号 昭60

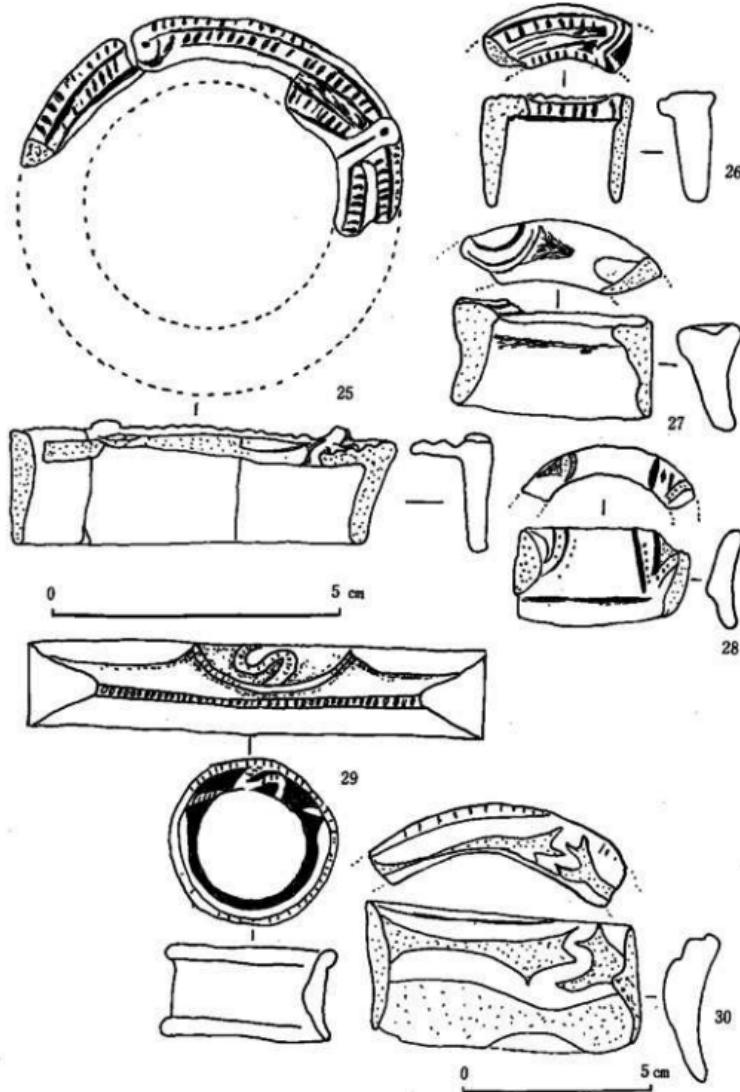


第32図 土製耳栓

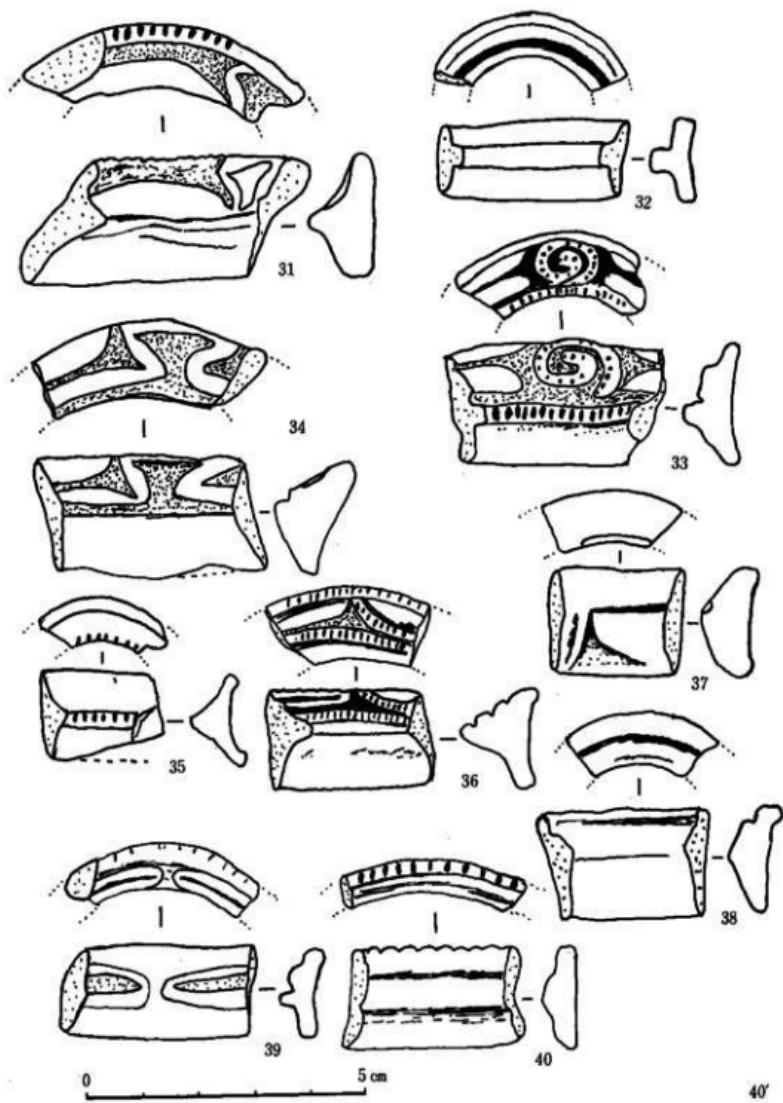


0 5 cm

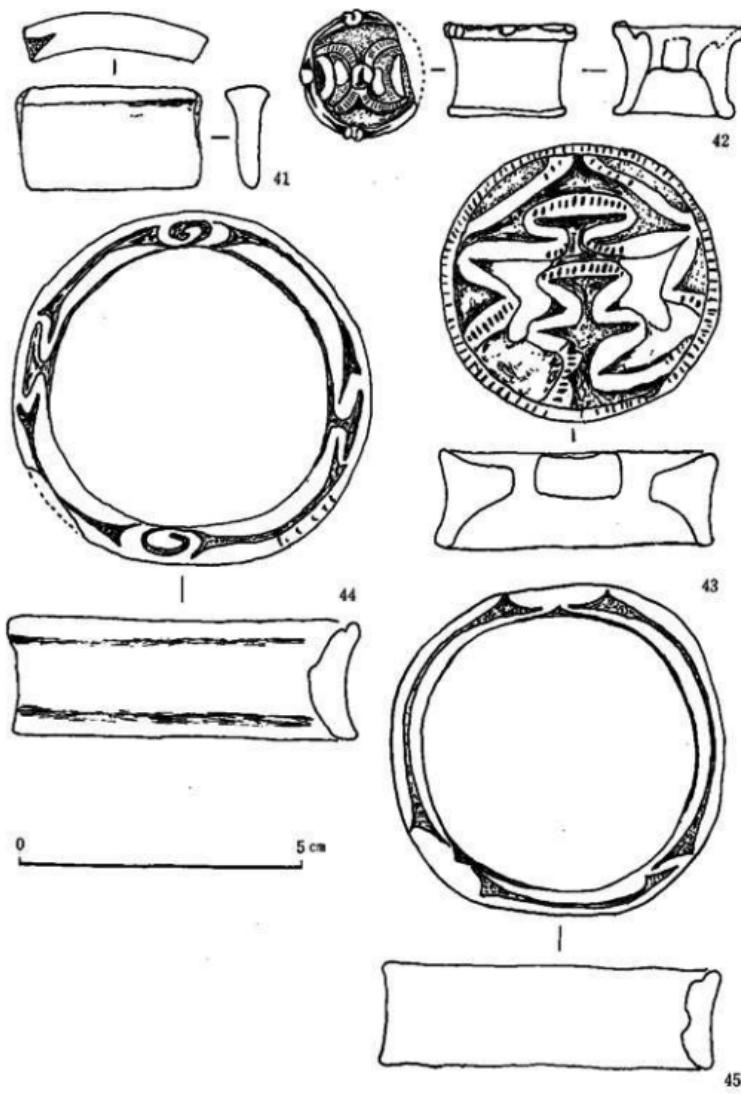
第33図のI 土製耳飾



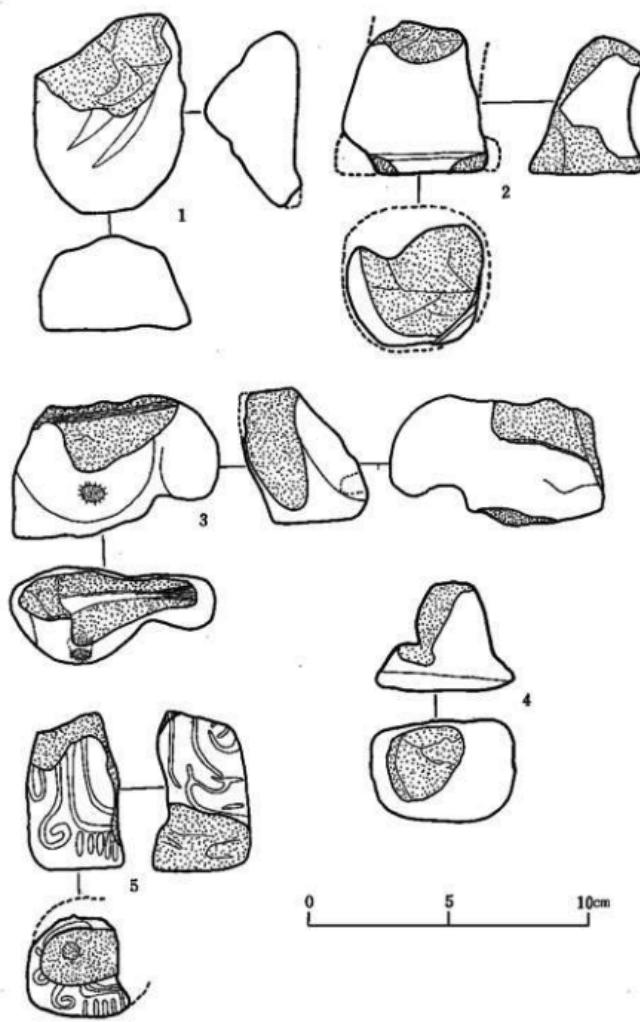
第33図の2 土製耳飾



第33図の3 土製耳飾



第33図の4 土製耳鉢



第34図 土偶片実測図

第7節 石棺墓址の復原と保存



①石の目地を掘りだし、水洗いのあと画仙紙をハケで、はりつける。

② 石棺墓址の周囲の整地を行い、囲りに型枠をつける。型枠の剥離剤に石鹼水を塗りつける。

③インサルパックの吹きつけ、A・B液の混合状態と発泡の様子をかげんしつつ、厚さ20-25cmとする。



④インサルパックの発泡が硬化したら型枠をはずし、周囲の土砂を取りのぞいていく。

⑤型と石材を同時に反転する。この時、石がはずれたら型と石に符号をつける。

⑥型を平地におき、水洗い後、乾燥した石材をはめ込む。



⑦ファイター5（ポリエステル系樹脂）の充填を行い金網でおおう。枠などもこの時に入れ、固定する。

⑧復原地に穴を掘り反転して掘える。方向、水平を修正して土を入れて完成。

⑨復原直前に5・7号石棺墓2基を移転し、保存する。

(島田博文)

第8節 むすび

第3次発掘調査はA～F地区に、トレンチ・グリッド方式を併用して行った。A地区は立石状遺構、炉址や集石遺構と共に多量の遺物を得、土器は堀之内II～佐野I式にわたっていた。B地区においては縄文晩期の石棺墓址10基を検出し、7号址からは硬玉を、また8号址から2個の土製滑車形耳飾（晩期初頭）が頭部と推定する位置から発見した。また埋甕2個も発掘した。C地区からは集石遺構のなかに、いくつかの配石遺構がみられ、後・晩期の土器とともに土製耳飾類が多く、葬送祭祀の跡と推定してよい遺構であった。E地区は中期末を主体とする土器片の包含であった。検出した土器の編年は第3表を参照していただきたい。D・F地区をのぞく各地区には、石器・石製品等が多く、石錐は303点に及んだ。

望外の成果をあげることができたが、限定された期間内の報告書刊行のため、きわめて杜撰な上梓となつたが先学諸賢の御叱正をたまわりたいと存する次第である。

末尾にて大変失礼であるが調査中に御指導・御教示をいただいた、岡本東三（文化庁文化財調査官）戸沢充則（考古学）水峯光一（佐野考古文化財）小林学（考古学）大田喜幸（同）伝田和良（同）宮下健二（佐野考古文化財調査委員）森鴎穂（手曲川水系古代）高橋桂（根山考古）笠沢治（校教諭）関孝一（根山考古）郷道哲章（中野高）松沢芳宏（日本考古学会）氏等に、心からお礼を申し上げる次第である。物心両面にわたり御援助・御協力を賜わった調査団員と地域の方々に深甚なる謝意を申しあげるものである。（金井汲次）



第3次(昭59)調査団



1 立石状遺構



2 炉址遺構